

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (228)

主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)

# 立塚遺跡 2

(鹿屋市吾平町)

古墳時代以降編

2025年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター





遺跡遠景 高隈山・鹿屋市街地方方向を望む（南東から北西方向へ向け撮影）





古代の遺物



## 序 文

この報告書は、主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴って、令和2年度から4年度までに実施した立塚遺跡の発掘調査の記録です。

立塚遺跡は、鹿屋市吾平町に所在する縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡です。令和5年度に、縄文時代早期に関する調査成果をまとめた報告書を、隣接する久保田牧遺跡とともに刊行しました。今回の報告書は、古墳時代から近世における調査成果をまとめています。

古墳時代では、土器の底部が入ったピットが検出され、甕や高坏、鉢等の遺物が出土しました。古代では、古道や溝状遺構、掘立柱建物跡、畝間状遺構等の遺構が検出され、多量の土師器の坏や椀、甕や須恵器等が出土しました。近世においては、薩摩焼や肥前系の陶磁器が出土しました。

吾平道路改築事業に伴う近隣遺跡や本遺跡の調査が進み、遺跡が所在する旧吾平町だけでなく、大隅半島の歴史を考える上で、貴重な成果となりました。

本報告書が当時の遺跡周辺の生活環境や社会活動を知ることのできる資料として、県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財保護に関する理解を広め、保護思想の普及・啓発の一助となれば幸いです。

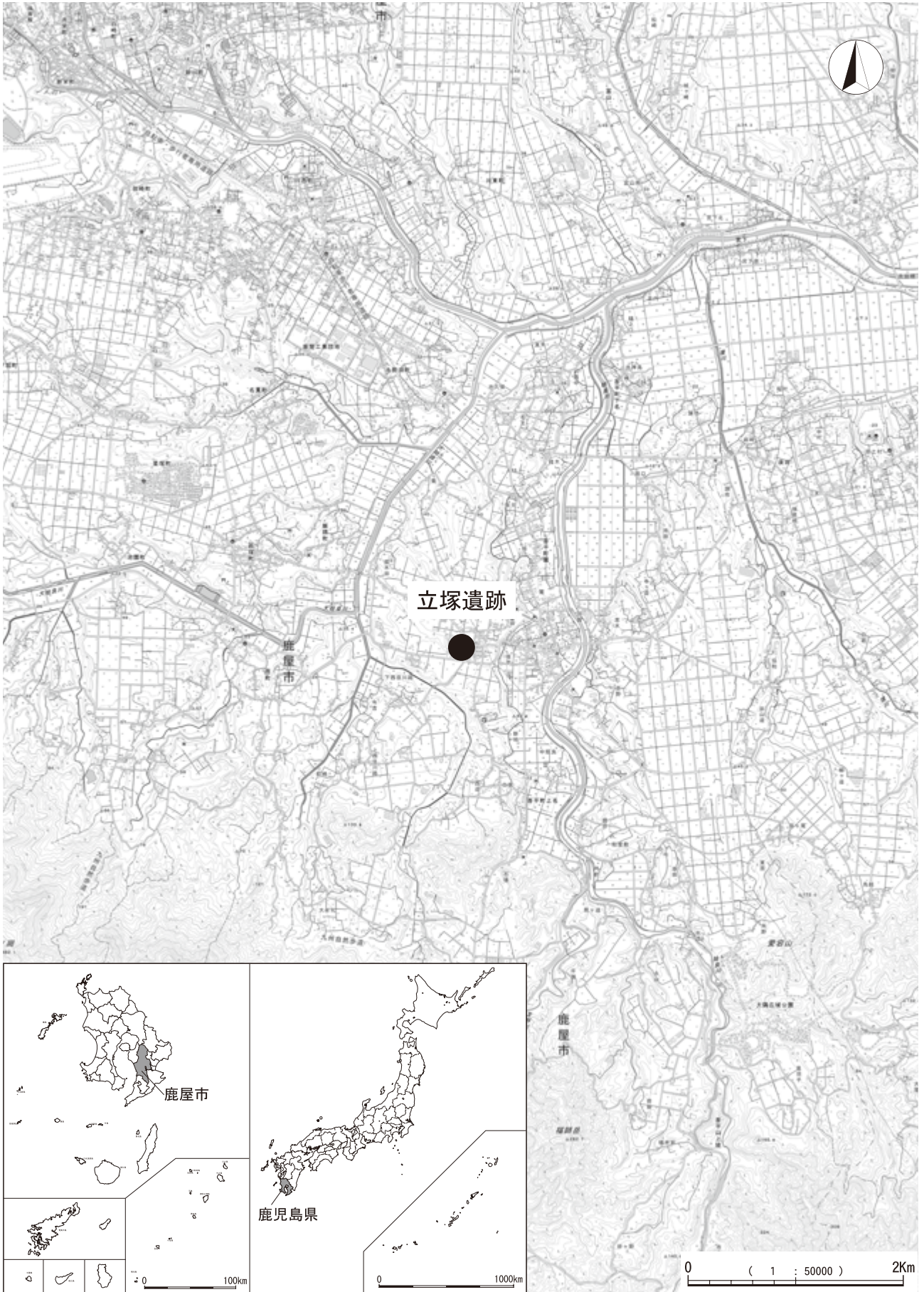
最後に、調査にあたって御協力をいただいた鹿児島県土木部道路建設課（大隅地域振興局建設部土木建築課）、鹿屋市教育委員会ほか、各関係機関並びに発掘調査に御協力いただいた地域の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和7年2月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 中村 和美

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たちづかいせき に こふんじだいいこうへん							
書名	立塚遺跡 2 古墳時代以降編							
副書名	主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	228							
編集者名	藤島 伸一郎 山下 智沙子							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821							
発行年月日	2025年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m <sup>2</sup> )	発掘 起因
		市町村	遺跡 番号					
たちづかいせき 立塚遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 あいらちよう 吾平町 かもとたちづか 麓立塚	46203	203 — 528	31° 19’ 42”	130° 53’ 23”	試掘調査 ①2019. 11. 11 ②2020. 2. 10～ 2. 21 確認調査 ①2020. 12. 1～12. 24 本調査 ①2020. 6. 8～2021. 2. 10 ②2021. 6. 7～2022. 2. 10 ③2022. 5. 16～2023. 2. 10	34,610	主要地方道 鹿屋吾平佐 多線（吾平 道路） 改築事業に 伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
立塚遺跡	散布地	縄文時代 早期	なし		石坂式土器, 打製石鏃, 使用痕剥片			
		縄文時代 晩期～ 弥生時代	環状配列土坑群, 土坑, 柱穴・ピット, 遺物集中		黒川式土器, 突帯文土器, 山ノ口式土器, 石鏃（打製・磨製）, 石鏃, 石包丁, 石斧 （打製・磨製）, 磨・敲石, 石皿, 砥石, 軽石製品, 管玉			
		古墳時代	ピット		中津野・東原・辻堂原・笹貫式土器, 須 恵器(坏蓋)			
		古代	掘立柱建物, 土 坑, 古道, 畝間状 遺構, 溝状遺構, ピット		土師器(坏・碗・皿・甕・鉢)土製品(紡錘 車), 墨書土器, 須恵器(坏・甕・壺・蓋)			
		近世	なし		薩摩焼(龍門司・苗代川等), 肥前系陶磁 器			
遺跡の概要	<p>立塚遺跡は、大隅半島のほぼ中央部、鹿屋市吾平町にあり、肝属川の支流である始良川と大始良川に挟まれた標高40m程度のシラス台地上に位置する、縄文時代早期から近世にかけての複合遺跡である。本報告書では、古墳時代以降について報告する。</p> <p>古墳時代では、前期～中期を中心とした遺物が多数出土しており、同じ台地上に集落跡等がみられる遺跡が立地することから、集落と関連する場所であったと推定される。古代では、8世紀後半から9世紀代の遺物が出土し、掘立柱建物跡や多数の畝間状遺構が検出されており、近隣遺跡と合わせ、古代において同台地上が集落や畠として広く利用されたと考えられる。近世では、台地上で近世から耕地開発が行われていたことや、薩摩焼や肥前系の陶磁器が出土していることから、畑地として利用されたと考えられる。</p>							



立塚遺跡位置図

## 例 言

- 1 本書は、主要地方道鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う立塚遺跡発掘調査報告書の古墳時代以降編である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿屋市吾平町麓に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課(大隅地域振興局建設局土木建築課)から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下、「埋蔵文化財センター」)が担当した。
- 4 発掘調査(本調査)は、令和2年度から令和4年度まで、埋蔵文化財センターが株式会社島田組に業務を委託して実施した。
- 5 整理・報告書作成作業は、令和4年度から令和6年度まで埋蔵文化財センターで実施した。
- 6 掲載遺構番号は遺構の種類毎に番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
- 7 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 8 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 9 本書で使用した方位は、すべて座標北(G. N.)であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 10 遺構の埋土や土器の色調等は『新版標準土色帖』(2013年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づく。
- 11 発掘調査における実測図作成は調査担当者の指示・確認のもと、株式会社島田組が実施した。写真撮影は主として調査担当者が、空中写真の撮影は株式会社ふじたが行った。
- 12 遺構図・遺構配置図・遺物出土状況図の作成及びトレースは、山下勘郎・倉元良文・藤島伸一郎が担当し、整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の実測・トレース・拓本は、廣栄次・藤島伸一郎が担当し、整理作業員の協力を得て行った。
- 14 出土遺物の写真撮影は、埋蔵文化財センターの写場にて、西園勝彦・宮崎大和が行った。
- 15 本報告に係る自然科学分析は火山灰分析をパリノ・サーヴェイ株式会社が、土器付着炭化物の放

射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体分析及び植物珪酸体分析を株式会社古環境研究センターに委託した。

16 本書の編集・執筆は、藤島伸一郎が担当した。

17 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図る予定である。なお、遺物注記で用いた遺跡記号は「TTD」である。

# 凡 例

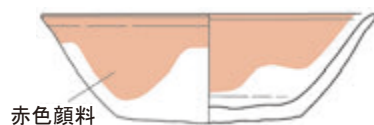
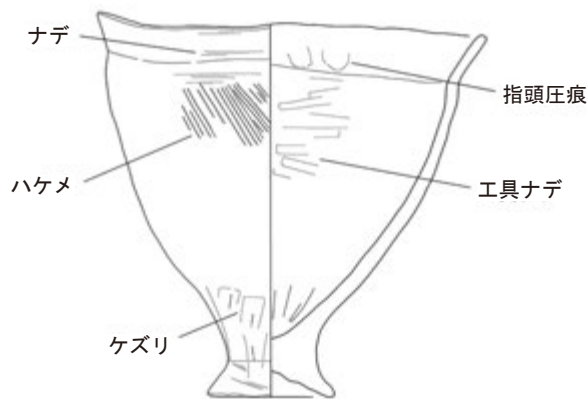
1 遺構種ごとに略記号を付して調査を行った。よって旧遺構名は遺構の略記号を以下に示す。

SH：掘立柱建物跡 SK：土坑 SN：畝間状遺構

SX：時期不明遺構 SP：柱穴

2 遺構番号については、調査時に付されたものから報告書掲載順に付け替えた（第13表 遺構番号新旧対応表参照）。

3 遺構配置図・遺物出土状況図は1グリッド(1マス)が10m×10mの大きさである。なお、各図中に縮尺を示してある。



4 遺構実測図の縮尺は以下を基本とし、各図に縮尺を示した。古道は個別で異なるため、各図のスケールを参照されたい。

(1) 遺構及び遺物分布図：1 / 1000・1 / 500

(2) 掘立柱建物跡：1 / 60

(3) ピット：1 / 20

(4) 土坑：1 / 20

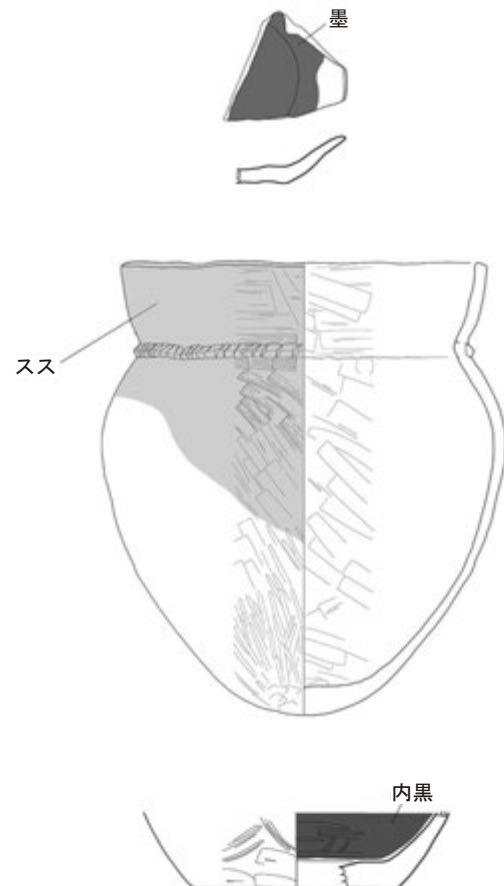
(5) 溝状遺構・紫コラ集中域：1 / 40

(6) 埋設土坑 1 / 10

5 遺物の縮尺は石鏃が1 / 1，他は全て1 / 3である。

6 観察表のうち、括弧書きのものは推定で復元した径である。

7 遺物の実測図で用いた表現は下記のとおりである。



# 本文目次

巻頭図版 1・2

序文

報告書抄録

遺跡位置図

例言

凡例

本文目次

挿図目次

表目次・図版目次

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経緯

- 1 主要地方道鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業と埋蔵文化財保護に関わる調整…………… 1
- 2 立塚遺跡の本調査に至る経緯…………… 1

### 第2節 本調査

- 1 本調査の概要…………… 2
- 2 本調査の体制…………… 2
- 3 本調査の経過…………… 4

### 第3節 整理作業・報告書作成

- 1 整理作業・報告書作成作業の概要…………… 7
- 2 整理作業・報告書作成作業体制…………… 7
- 3 整理作業及び報告書作成業務の経過…………… 7

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境…………… 9

### 第2節 歴史的環境…………… 10

### 第3節 鹿屋吾平佐多線(吾平道路)改築事業に伴う遺跡…………… 15

## 第3章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

- 1 発掘調査の方法…………… 17
- 2 遺構の認定と調査方法…………… 17
- 3 整理作業・報告書作成作業の方法…………… 17

### 第2節 層序…………… 18

## 第4章 調査の成果

### 第1節 古墳時代の調査成果

- 1 調査の概要…………… 27
- 2 遺構…………… 28
- 3 遺物…………… 28

### 第2節 古代の調査成果

- 1 調査の概要…………… 33
- 2 遺構…………… 33
- 3 遺物…………… 63

### 第3節 近世の調査成果

- 1 調査の概要…………… 80
- 2 遺構…………… 80
- 3 遺物…………… 80

## 第4節 時代不明の遺構

- 1 調査の概要…………… 82
- 2 遺構…………… 84

## 第5章 自然科学分析

### はじめに

#### 第1節 火山灰分析

- 1 はじめに…………… 87
- 2 試料…………… 87
- 3 分析方法…………… 87
- 4 結果…………… 87
- 5 考察…………… 88

#### 第2節 土器付着炭化物の放射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体比分析

##### 分析の概要

##### I 放射性炭素年代測定

- 1 はじめに…………… 89
- 2 試料…………… 89
- 3 方法…………… 89
- 4 測定結果…………… 89
- 5 所見…………… 90

##### II 土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析

- 1 はじめに…………… 90
- 2 試料…………… 90
- 3 測定方法…………… 90
- 4 結果…………… 91
- 5 考察…………… 91

#### 第3節 植物珪酸体分析

- 1 はじめに…………… 91
- 2 試料…………… 91
- 3 分析法…………… 93
- 4 分析結果…………… 93
- 5 考察…………… 93
- 6 まとめ…………… 94

## 第6章 総括

### 第1節 古墳時代

- 1 遺構…………… 95
- 2 遺物…………… 95
- 3 西原台地における様相…………… 95

### 第2節 古代

- 1 遺構の時期区分及び年代…………… 96
- 2 遺物…………… 101
- 3 畝間状遺構…………… 102
- 4 古代における西原台地上の様相…………… 102

### 第3節 近世

- 1 遺構…………… 102
- 2 遺物…………… 104

写真図版…………… 105

## 挿 図 目 次

第1図 トレンチ配置図及び年度別調査範囲図…………… 3	第42図 溝状遺構 2・3号……………58
第2図 明治35年 立塚遺跡周辺の地形図…………… 9	第43図 畝間状遺構断面図及び出土遺物……………59
第3図 周辺遺跡図……………14	第44図 畝間状遺構図 1……………60
第4図 吾平道路改築事業に係る遺跡位置図……………16	第45図 畝間状遺構図 2 (埋設土坑含む)……………61
第5図 立塚遺跡土層断面位置図……………19	第46図 埋設土坑及び出土遺物……………62
第6図 土層断面図①……………20	第47図 土師器坏 1～3類……………64
第7図 土層断面図②……………21	第48図 土師器坏 4～6類……………65
第8図 土層断面図③……………22	第49図 土師器坏 (未分類)……………66
第9図 土層断面図④……………23	第50図 土師器碗・皿・黒色土器・墨書土器……………67
第10図 土層断面図⑤⑥……………24	第51図 土師器甕 1類……………68
第11図 土層断面図⑦⑧……………25	第52図 土師器甕 2類……………69
第12図 土層断面図⑨⑩……………26	第53図 土師器甕 3類……………70
第13図 古墳時代遺構配置・遺物出土状況図……………27	第54図 土師器甕 (未分類)・鉢・紡錘車……………71
第14図 ピット 1号・遺構内出土遺物……………28	第55図 須恵器坏・蓋……………72
第15図 古墳時代出土土器 1……………29	第56図 須恵器甕……………73
第16図 古墳時代出土土器 2……………30	第57図 須恵器壺……………74
第17図 古墳時代出土土器 3……………31	第58図 近世遺物分布図……………80
第18図 古代遺構配置図 1 (畝間状遺構等以外)……………34	第59図 近世遺物……………81
第19図 古代遺構配置図 2 (畝間状遺構等以外)……………35	第60図 時代不明の遺構配置図 1……………82
第20図 古代遺物出土状況図 1……………36	第61図 時代不明の遺構配置図 2……………83
第21図 古代遺物出土状況図 2……………37	第62図 土坑15～18号……………84
第22図 掘立柱建物跡 1号及び出土遺物……………38	第63図 土坑19号・ピット23～25号……………85
第23図 掘立柱建物跡 1号出土遺物……………39	第64図 重鉍物組成および火山ガラス比……………87
第24図 掘立柱建物跡 2号及び出土遺物……………40	第65図 火山ガラスの屈折率……………88
第25図 掘立柱建物跡 3号……………41	第66図 斜方輝石の屈折率……………88
第26図 掘立柱建物跡 4号及び出土遺物……………42	第67図 重鉍物・火山ガラス……………88
第27図 掘立柱建物跡 5号……………43	第68図 スコリア……………89
第28図 ピット 2～4号……………44	第69図 試料……………89
第29図 ピット 5～7号……………45	第70図 暦年較正結果……………90
第30図 ピット 8～11号……………46	第71図 炭素・窒素安定同位体比……………91
第31図 ピット12～14号……………47	第72図 炭素安定同位体比とC/N比の関係……………91
第32図 ピット15～19号……………48	第73図 試料採集箇所……………91
第33図 ピット20～22号……………49	第74図 植物珪酸体分析結果……………92
第34図 土坑 1～5号……………50	第75図 植物珪酸体(プラント・オパール)……………94
第35図 土坑 6～8号……………51	第76図 西原台地における古墳時代調査部分と主な遺 構・時期……………96
第36図 土坑 9～11号……………52	第77図 古代 1・2期……………98
第37図 土坑12～14号……………53	第78図 古代 3・4期……………99
第38図 古道 1……………54	第79図 建物跡付近の遺物分布・器種・類……………101
第39図 古道 2・3……………55	第80図 古代における西原台地の利用……………103
第40図 古道 5～9……………56	
第41図 紫コラ集中域・溝状遺構 1号……………57	

## 表 目 次

第1表	トレンチ調査結果……………	2	第11表	古代遺物観察表 4……………	79
第2表	周辺遺跡一覧表……………	12	第12表	近世遺物観察表……………	80
第3表	鹿屋吾平佐多線(吾平道路) 改築事業に伴い発掘調査を実施した遺跡(市町村調査含む)……………	15	第13表	時代不明遺構計測表……………	85
第4表	基本層序……………	18	第14表	遺構番号新旧対応表……………	86
第5表	古墳時代遺物観察表……………	32	第15表	重鉍物・火山ガラス比分析結果……………	87
第6表	古代遺構内遺物観察表……………	74	第16表	放射性炭素年代測定結果……………	89
第7表	古代遺構計測表……………	75	第17表	炭素・窒素安定同位体比分析結果……………	90
第8表	古代遺物観察表 1……………	76	第18表	植物珪酸体分析結果……………	92
第9表	古代遺物観察表 2……………	77	第19表	古代遺構の推定時期……………	97
第10表	古代遺物観察表 3……………	78	第20表	各期の年代案……………	100
			第21表	出土遺物累計……………	104

## 図 版 目 次

巻頭図版 1	遺跡遠景 高隈山・鹿屋市街地方向を望む		図版14	古代 畝間状遺構……………	118
巻頭図版 2	古代の遺物		図版15	時期不明遺構……………	119
写真 1	表土からVI層間の土層……………	19	図版16	古墳時代 遺物集合……………	120
写真 2	表土からXV層間の土層……………	19	図版17	古墳時代の遺物(甕)……………	121
図版 1	古墳時代 遺構・遺物出土状況……………	105	図版18	古墳時代の遺物(甕)……………	122
図版 2	古代 掘立柱建物跡 1号……………	106	図版19	古墳時代の遺物(高坏・蓋・鉢等)……………	123
図版 3	古代 掘立柱建物跡 2号……………	107	図版20	古代 遺構内遺物……………	124
図版 4	古代 掘立柱建物跡 3号……………	108	図版21	古代の遺物(坏)……………	125
図版 5	古代 掘立柱建物跡 4号……………	109	図版22	古代の遺物(坏)……………	126
図版 6	古代 掘立柱建物跡 5号……………	110	図版23	古代の遺物(坏)……………	127
図版 7	古代 ピット(埋土断面)……………	111	図版24	古代の遺物(坏・皿)……………	128
図版 8	古代 ピット(埋土断面)……………	112	図版25	古代の遺物(黒色土器・墨書土器)……………	129
図版 9	古代 ピット(埋土断面)・土坑 1～6号……………	113	図版26	古代の遺物(甕)……………	130
図版10	古代 土坑 7～14号……………	114	図版27	古代の遺物(甕)……………	131
図版11	古代 古道 1・2……………	115	図版28	古代の遺物(甕・鉢等)……………	132
図版12	古代 古道 5～9……………	116	図版29	古代の遺物(須恵器坏・碗・蓋)……………	133
図版13	古代 紫コラ集中域・溝状遺構・埋設土坑……………	117	図版30	古代の遺物(須恵器甕)……………	134
			図版31	古代の遺物(須恵器壺)……………	135
			図版32	近世の遺物……………	136

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経緯

### 1 主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業と埋蔵文化財保護に関わる調整

#### (1) 事業照会

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、調整を行ってきた。鹿児島県土木部道路建設課（以下、「道路建設課」）は、平成27年5月に「大隅縦貫道路」のうち「主要県道鹿屋吾平佐多線吾平道路工区」（以下、「吾平道路工区」）の施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」）に照会した。文化財課は、県が作成する遺跡地図により吾平道路の事業区内に6か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認した。

#### (2) 事前調査

文化財課は未発見の遺跡が所在する可能性があること及び周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲等の確認の必要性があることから、鹿屋市教育委員会の協力を得て、平成27年度に「道路建設課所管事業に係る埋蔵文化財分布調査」として吾平道路工区に係る埋蔵文化財分布調査を実施した。分布調査の結果、遺跡の新発見はなかったが、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲をそれぞれ変更する必要があることを確認した。また、文化財課は平成28年度に吾平道路工区を含む範囲を対象とした「農業農村整備事業に伴う分布調査」を実施した。2回の分布調査において、隣接する久保田牧遺跡等は確認されたが、立塚遺跡に関しては確認できなかった。

## 2 立塚遺跡の本調査に至る経緯

### (1) 近隣遺跡の試掘・確認調査

文化財課は分布調査の結果に基づき、埋蔵文化財センター、道路建設課及び大隅地域振興局建設部土木建築課（以下、大隅地域振興局）と四者で協議し、吾平道路の事業区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地及び試掘調査が必要と判断された箇所について、遺跡の残存状況・範囲等を把握するために試掘調査又は確認調査を実施することとした。

令和元年9月2日から26日の期間、久保田牧遺跡の確認調査を実施したところ、遺跡の北側の境界付近で遺構・遺物が良好な状態で検出されたことから、遺跡の範囲が北側へ広がる可能性が想定された。文化財課は道路建設課及び大隅地域振興局と協議し、久保田牧遺跡と廣牧遺跡に挟まれた事業対象地の約17,800㎡に対して試掘

調査を実施することとした。

### (2) 試掘調査及び協議・調整

試掘調査は令和元年11月11日と令和2年2月10日から21日の2回にわたって、文化財課と埋蔵文化財センターが鹿屋市教育委員会の協力を得て実施した。2回合わせて19か所のトレンチを設定し調査を行ったところ、多くのトレンチから遺物等が出土し、遺跡間の事業対象地全体に遺跡が広がることが確認された（第1表及び第1図参照）。これを受け、文化財課は鹿屋市教育委員会と協議し、遺跡名称を「立塚遺跡（たちづかいせき）」とし、周辺の地形の状況から埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に記載することとした。

これらの試掘調査の結果に基づき、文化財課は道路建設課、大隅地域振興局及び埋蔵文化財センターと四者での協議を行い、路線変更や設計変更等による遺跡の現状保存が困難であることから、吾平道路工区内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地の記録保存調査（以下、本調査）を実施することとなった。なお、調査体制については以下のとおりである。

#### 調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課大隅地域振興局
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長	前迫 亮一
調査企画	次長兼総務課長 野間口 誠
調査課長兼	南の縄文調査室長 中村 和美
調査担当	第二調査係長 三垣 恵一
文化財主事	限元 俊一
文化財専門員	加世田 尊
鹿児島県教育庁文化財課	
文化財主事	森 幸一郎
調査協力者	鹿屋市教育委員会生涯学習課
文化財主任主事	河野賢太郎
	（限元・加世田は2月のみ）

### (3) 確認調査

埋蔵文化財センターは、試掘調査において不十分であった縄文時代早期以前の調査や、調査対象地内のより詳細な範囲確定及び大規模攪乱の部分把握するため、立塚遺跡の南側及び西側部分について、9か所のトレンチを設定し、確認調査を実施した。調査期間は令和2年12月1日から24日である。

調査の結果、調査対象地の西側で大規模な攪乱を受けている範囲を確認し、本調査の対象としないこととした。

それ以外の部分については、縄文時代晩期から弥生時代、古代の遺物や遺構を中心に、多数の遺物や遺構が確認された。なお、7か所のトレンチで縄文時代早期を対象とした調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。調査体制については、以下のとおりである。

#### 調査体制

事業主体 鹿児島県  
 調査主体 鹿児島県教育委員会  
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
 調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 所 長 前迫 亮一  
 調査企画 次長兼総務課長 野間口 誠  
 調査課長兼 南の縄文調査室長 中村 和美  
 第一調査係長 三垣 恵一  
 調査担当 調査課第二調査係  
 文化財主事 湯場崎辰巳  
 事務担当 総務課主査 新穂 秀貴

#### (4) 確認調査後の協議・調整

確認調査の結果に基づき、文化財課は埋蔵文化財センター及び道路建設課並びに大隅地域振興局と、立塚遺跡の取扱いについて協議を行い、令和2年度より記録保存のための本調査を実施することとなった。これを受けて大隅地域振興局は文化財保護法第94条の規定に基づき、鹿児島県教育委員会に対し通知を行い、鹿児島県教育委員会は大隅地域振興局へ発掘調査の勧告を行った。

## 第2節 本調査

### 1 本調査の概要

本調査は鹿児島県埋蔵文化財発掘調査基準及び鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱に基づき、鹿児島県教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財センターが株式会社島田組へ発掘調査業務を委託し、令和2年度から令和4年度の3か年において実施した。

発掘調査の適切な実施のため、本調査実施の期間中は埋蔵文化財センターの職員が監督職員として常駐し、調査方法及び業務内容に係る統括・指揮・調整を行った。

各年度の調査体制等については、以下のとおりである。なお、調査区については、遺跡中央を東西方向に横切る農道より北側をA～H区に、南側をイ～ニ区に大別した呼称を用いて調査を実施しており、ここでもその名称を用いる（第1図参照）。

### 2 本調査の体制

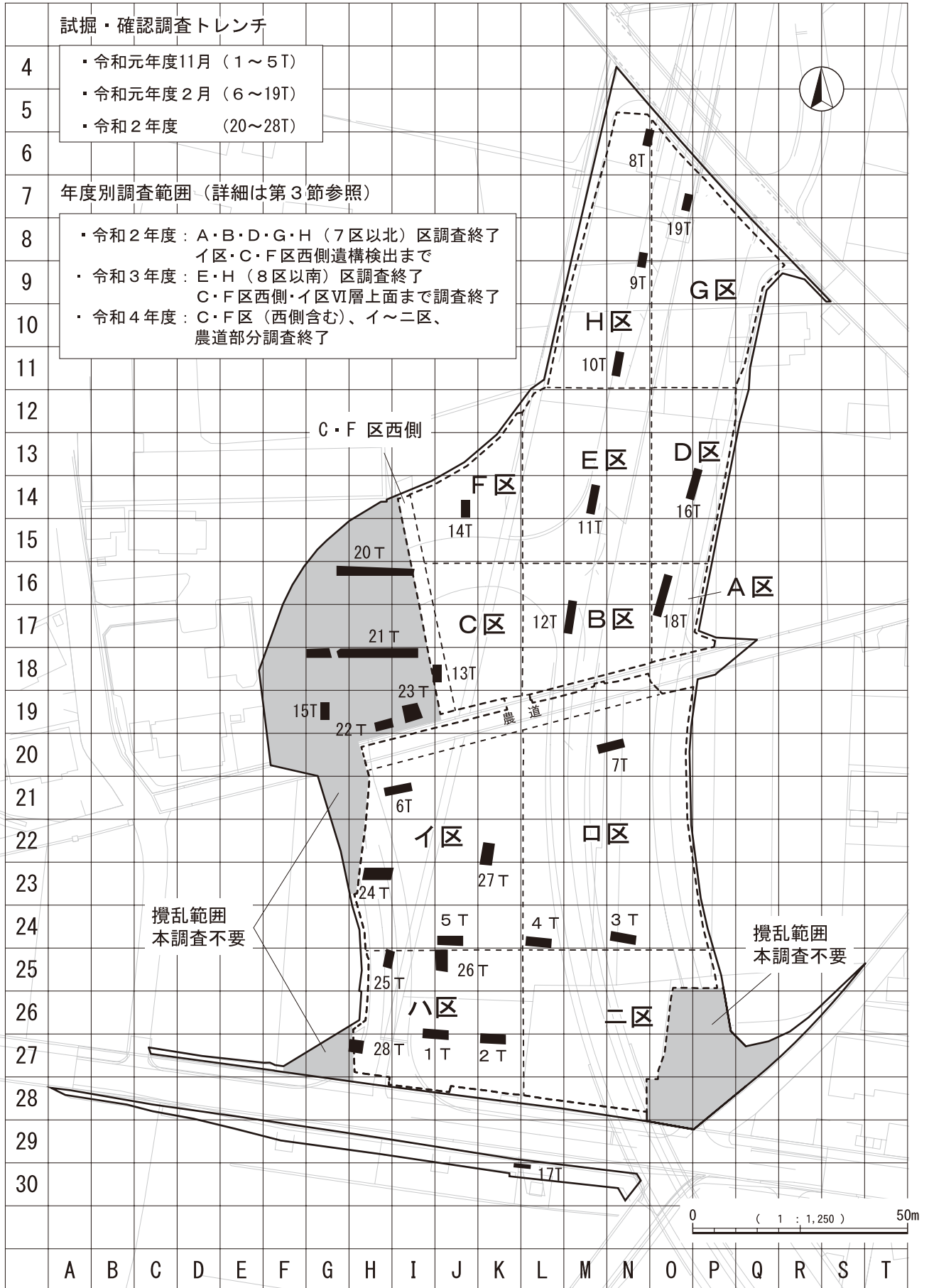
#### 令和2年度

調査期間は令和2年6月8日から令和3年2月10日（実働141日）で、調査表面積3,230㎡について調査が完

第1表 トレンチ調査結果

トレンチ名	IV・V層		IX・X層		備考
	遺構	遺物	遺構	遺物	
1T	×	×	—	—	
2T	○	○	—	—	
3T	×	×	—	—	
4T	×	○	×	×	
5T	×	○	—	—	
6T	×	○	—	—	
7T	×	○	—	—	
8T	×	×	×	×	
9T	×	○	—	—	
10T	×	○	—	—	
11T	×	○	—	—	
12T	×	○	×	×	
13T	×	○	×	×	
14T	○	○	—	—	
15T	×	×	—	—	IV・V層は攪乱
16T	○	○	—	—	
17T	×	×	—	—	
18T	×	○	—	—	
19T	×	×	—	—	
20T	×	○	—	—	東端のみ残存，他攪乱
21T	×	×	×	×	攪乱
22T	×	×	×	×	攪乱
23T	×	×	×	×	攪乱
24T	×	○	×	×	
25T	×	○	×	×	XIV層まで×
26T	○	○	×	×	XII層まで×
27T	○	○	—	—	
28T	○	○	×	×	

※ ○は有り，×は無し，—は未調査



第1図 トレンチ配置図及び年度別調査範囲図

了した。最終的な調査延面積は、IV層が約3,720㎡、V層が約3,200㎡、VII層が約480㎡、IX～X層が約400㎡の合計約7,800㎡である。

主に20区より北側のA～H区の調査を行い、A・B・D・G区及びH区の7区以北は調査を完了し、E区・H区は表土掘削を実施した。C・F区西側部分及びI区は、IV層又はVa層上面（縄文時代晩期から古代まで）の遺構検出（一部遺構調査・記録）を実施して、調査を終了した。

#### 調査体制

事業主体 鹿児島県  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 前迫 亮一  
調査企画 次長兼総務課長 野間口 誠  
調査課長兼  
南の縄文調査室長 中村 和美  
第二調査係長 横手浩二郎  
調査担当 文化財主事 森 幸一郎  
事務担当 主幹兼総務係長 山下 勝史  
委託先 株式会社島田組  
委託期間 令和2年5月18日～令和3年3月12日  
委託内容 発掘調査業務・測量業務・土工業務

#### 令和3年度

調査期間は令和3年6月7日から令和4年2月10日（実働141日）で、調査表面積は3,870㎡、延べ面積は11,930㎡である。

本年度はE区・H区（8区以南）の調査を完了し、I区及びC・F区西側は一部遺構（縄文時代晩期から弥生時代前期）を残し、VI層上面まで調査を完了した。その他、ハ区・ニ区の表土掘削及び一部遺構検出（古代）まで実施して、調査を終了した。

#### 調査体制

事業主体 鹿児島県  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
調査企画 所 長 中原 一成  
次長兼総務課長 大口 浩嗣  
調査課長兼  
南の縄文調査室長 寺原 徹  
文化財主事兼  
第二調査係長 西園 勝彦  
調査担当 文化財主事 森 幸一郎  
文化財主事 山下 勘郎  
事務担当 主幹兼総務係長 山下 勝史  
委託先 株式会社島田組

委託期間 令和3年5月14日～令和4年3月11日  
委託内容 発掘調査業務・測量業務・土工業務

#### 令和4年度

調査期間は令和4年5月16日から令和5年2月10日（実働157日）で、表面積8,470㎡（延面積14,880㎡）について調査を完了した。

調査範囲は調査区の主に農道以南で、C・F区（西側部分含む）・イ～ニ区及び農道部分の調査を完了した。

#### 調査体制

事業主体 鹿児島県  
調査主体 鹿児島県教育委員会  
企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課  
調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 中原 一成  
調査企画 次長兼総務課長 大口 浩嗣  
調査課長兼  
南の縄文調査室長 寺原 徹  
文化財主事兼  
第二調査係長 西園 勝彦  
調査担当 文化財主事 山下 勘郎  
文化財主事 湯場崎辰巳  
（令和4年5月16日～10月1日）  
文化財主事 廣 栄次  
（令和4年5月16日～8月5日）  
文化財研究員 倉元 良文  
（令和4年10月17日～令和5年3月24日）  
文化財主事 隈元 俊一  
（令和4年10月17日～令和5年3月24日）  
文化財主事 野間口 勇  
（令和4年10月17日～令和5年3月24日）  
事務担当 総務係長 白坂 由香  
委託先 株式会社島田組  
委託期間 令和4年4月19日～令和5年3月24日  
委託内容 発掘調査業務・測量業務・土工業務

### 3 本調査の経過

発掘調査の経過について、日誌抄を月ごとに集約して記載する。なお、出土遺物の洗浄及び注記・接合については、一部本調査において実施したため、以下の本調査の経過に含めて記載してある。

#### 令和2年度

6月 準備工，調査開始，N-5・6区南北トレンチ調査，  
L～P-16～18区：機械掘削  
7月 A・B・G区：表土掘削，遺構検出状況写真撮影，  
遺構検出作業  
8月 A・B区：遺構調査，IV～V層掘下げ，遺物取上げ  
G区：表土掘削，V層掘下げ，遺構検出

整理作業：遺物洗浄，注記作業

9月 A・B区：遺構調査，IV～V層掘下げ，遺物取上げ，G区：表土掘削，V層掘下げ，遺構検出，遺物取上げ  
整理作業：遺物洗浄，注記作業

10月 A・B区：遺構調査，IV・V層掘下げ，G区：表土掘削，遺構検出，D区：表土掘削  
整理作業：遺物洗浄，注記作業

11月 A・B区：遺構調査，IV・V層掘下げ，V層遺構検出，遺物取上げ，遺構実測，地形測量，D区：IV・V層遺構検出，掘下げ，遺構調査，遺物取上げ，G区：V層掘下げ，遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，地形測量，H区：遺構調査，遺物取上げ，空撮：D・G区の古代遺構  
整理作業：遺物洗浄，注記作業

12月 A・B区：遺構調査，V層掘削，VI層上面遺構検出，遺物取上げ，D区：IV・V層遺構検出，掘下げ，遺構調査，遺物取上げ，G区：V層掘下げ，遺構検出・遺構調査，VI層上面遺構検出，遺物取上げ，H区：遺構調査，遺物取上げ，V層掘削，遺物取上げ，VI層上面遺構検出  
整理作業：遺物洗浄，注記作業，収納作業，

1月 A・B・D・G・H区：V層掘削，VI層上面遺構検出・遺構調査，空撮（VI層上面完掘），縄文時代前期以前（VII・IX層以下）の確認，C・F西側・I区：表土掘削，IV層掘削，遺構検出  
整理作業：遺物洗浄，注記作業，収納作業

2月 A・B・D・G区：VII・IX層の掘削，埋戻し，E・H区：表土掘削，調査区整形，シート養生，C・F区：IV層掘削，遺構検出，シート養生，I区：IV層掘削・V層上面遺構検出，シート養生，調査終了  
整理作業：遺物洗浄，注記作業，収納作業

現地指導

12月9日 本田道輝氏（鹿児島考古学会長）  
12月14日 成尾英仁氏（鹿児島考古学会）

### 令和3年度

6月 E区：IV層上面遺構検出・遺構略測図作成・遺構調査，遺物取上げ，攪乱除去，高所作業車による遺構検出状況撮影，H区：IV層又はV a層上面遺構検出・遺構略測図作成，掘下げ，遺物取上げ，攪乱除去，C・F区トレンチ：遺構調査・遺構実測図作成，C・F区V a層掘下げ，遺物取上げ，高所作業車による遺構完掘状況写真撮影

7月 E区：遺構調査・実測図作成，遺物取上げ，攪乱掘削，H区：IV層掘削，遺物取上げ，遺構調査，遺構実測図作成，攪乱掘削，同区：V a層上面地形測量，C・F区トレンチ：V a～V c層掘削，遺物取上げ，管玉出土地点周辺土壌篩がけ，遺構調査・遺

構実測図作成，V a層上面地形測量，I区：表土掘削，パミス含む黒色土（II層か）掘削，IV層掘削，先行トレンチ掘削，E・H区：古代遺構の高所作業車による全景写真撮影

整理作業：遺物洗浄，注記作業

8月 長期休工開けの現場内環境整備，H区：遺構埋土堆積状況写真撮影，土層断面図作成，E区：遺構埋土堆積状況写真撮影，土層断面図作成，遺構内遺物取上げ，畝間状遺構群完掘写真撮影，C・F区トレンチ：土層堆積状況写真撮影，北壁土層断面図作成，I区：IV層上面遺構検出，遺構検出状況写真撮影，磨製石斧出土状況写真撮影，調査区全体空撮

整理作業：遺物洗浄，注記作業

9月 H区：IV・IV a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測図作成，E区：IV層遺構再精査・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測図作成，IV層掘下げ，I区：畝間状遺構群調査，IV層上面遺構検出，攪乱掘削，遺物取上げ，遺構略測図・平面図作成

整理作業：遺物洗浄，注記作業

10月 H区：V a層掘下げ，遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測，E区：V a層掘下げ，遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測，I区：遺構調査（畝間状遺構群他），攪乱掘削，IV層遺物取上げ，遺構実測

整理作業：遺物洗浄，注記作業

11月 H区：V a・V b層掘下げ，遺構検出・遺構調査，V a・V b層遺物取上げ，遺構実測，E区：V a層遺構検出・遺構調査，V a層遺物取上げ，遺構実測，I区：IV層・V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測，高所作業車による写真撮影：E・H区（突帯文期の遺構配置状況）並びにI区（古代遺構完掘状況），現地説明会実施（6日）

整理作業：遺物洗浄，注記作業

12月 H区：VI層遺構検出・遺構調査，VI層遺物取上げ，遺構図作成，遺構完掘全景写真撮影（高所作業車使用），遺構切り取り，下層（VII層以下）確認，E区：V a・V b層掘下げ，遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，遺構実測，突帯文期の遺構配置状況写真撮影（高所作業車使用），I区：IV層・V a層遺構検出・遺構調査，IV・V a層遺物取上げ，遺構実測，年末養生

整理作業：遺物洗浄，注記作業

1月 E区：VI層遺構検出・遺構調査，VII層・IX層以下の下層確認，I区：V a・V b層掘下げ，遺構検出・遺構調査・遺構平面図作成，遺物取上げ，ハ・ニ区：準備工，表土掘削，空撮：E区（VI層上面遺構完掘）・I区（突帯文期の遺構配置状況）

整理作業：遺物洗浄，注記作業，収納作業

2月 E区：IX層以下下層確認，調査区埋戻し，イ区：V a・V b層遺構調査，VI層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，VII層～IX層下層確認，ハ・ニ区：表土掘削，IV・V層上面遺構検出，遺物取上げ，全体養生保護，全体撤収養生，10日調査終了  
整理作業：遺物洗浄，注記作業，収納作業  
遺物指導（管玉）  
10月14日 大賀克彦氏（奈良女子大学特任講師）  
米田克彦氏（岡山県古代吉備文化財センター総括主管）

#### 令和4年度

5月 周辺環境整備，イ区：VI層上面検出遺構調査，遺構内遺物取上げ，ロ区：表土掘削，IV層遺構検出，攪乱掘削，ハ区：IV層遺構検出・遺構調査，攪乱掘削，ニ区：IV層遺構検出，土壌分析試料抽出（畝間状遺構：IV層上面，土坑：VI層上面）  
6月 イ区：VI層上面遺構調査，埋土自然科学分析用サンプリング，ロ区：IV層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上，ハ区：IV層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上，ニ区：IV層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上，遺構群検出状況写真撮影  
7月 イ区：VI層遺構調査，遺構内遺物取上げ，ロ区：IV層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，ハ区：IV層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，ニ区：IV層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，畝間状遺構群完掘状況写真撮影（高所作業車使用）  
整理作業：遺物洗浄，注記，イ区遺構埋土水洗  
8月 イ区：VI層上面検出遺構調査，遺構内遺物取上げ，同区：VI層上面検出遺構完掘状況空撮，ロ区：IV・V a層遺構検出・ピット群遺構調査，遺物取上げ，ハ区：IV・V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，掘立柱建物跡検出状況空撮，ニ区：IV・V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ  
整理作業：遺物洗浄，注記，イ区遺構埋土水洗  
9月 イ区：ハ区・ロ区に拡がる遺構部分を残し埋戻し作業，ロ区：V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，無遺物層機械掘削，ハ区：V層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，ニ区：V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，無遺物層機械掘削，F区：表土掘削，IV層遺構検出  
整理作業：遺物洗浄，注記，イ区遺構埋土水洗  
10月 ロ区：無遺物層機械掘削，VI層上面検出遺構調査，北側表土掘削，遺物取上げ，VI層上面遺構検出状況空撮，ハ区：V a・VI層遺構検出・遺構調査，無遺物層機械掘削，遺物取上げ，ニ区：VI層上面遺構検出・遺構調査（ピット群），遺物取上げ，F区：表土掘削，IV層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，C

区：表土掘削，IV層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ  
整理作業：遺物洗浄，注記，イ区検出遺構埋土水洗

11月 ロ区：IV層検出遺構調査，IV層掘下げ，V a層遺構検出，遺物取上げ，空撮（土坑群完掘状況），ハ区：VI層上面遺構調査，遺構内遺物取上げ，空撮（土坑群検出状況），F区：IV層遺構検出・遺構調査（畝間状遺構群，古道他），遺物取上げ，C区：V層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，無遺物層機械掘削，農道：表土掘削，遺構検出，遺物取上げ，無遺物層機械掘削，現地説明会実施（11日）

25日自然科学分析（植物珪酸体分析，リン・カルシウム分析）委託結果納品（古環境研究センター）

整理作業：遺物洗浄，注記，イ区遺構埋土水洗

12月 ロ区：V a層掘下げ，遺構調査，遺物取上げ，ハ区：VI層上面遺構調査（土坑群，ピット群他），遺構内遺物取上げ，空撮（完掘状況），F区：V a層掘下げ，遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，無遺物層掘削，C区：V a層遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，無遺物層機械掘削，農道部分：VI層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上げ

23日自然科学分析（植物珪酸体分析）委託結果納品（古環境研究センター）

整理作業：遺物洗浄，注記，収納

1月 ロ区：遺構調査，遺物取上げ，ハ区：埋戻し，F区：VI層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，C区：VI層上面遺構検出・遺構調査，遺物取上げ，農道部分：VI層上面遺構調査，遺物取上げ

整理作業：遺物洗浄，注記，収納

2月 ロ区：遺構調査，遺物取上げ，土坑群埋戻し，完掘状況空撮（2日撮影），ハ区：下層確認，埋戻し，F区：ピット群遺構調査，下層確認，遺物取上げ，C区：ピット群遺構調査，下層確認，遺物取上げ，農道：VI層上面遺構調査，遺物取上げ，土坑群埋戻し，10日調査終了

3月 24日自然科学分析（年代測定・安定同位体）委託結果納品（古環境研究センター）

整理作業：水洗い，注記，土壌篩掛け，遺物収納，納品準備

#### 現地指導

6月20日 中村 大介氏（埼玉大学准教授）

7月11日 藤尾慎一郎氏（国立歴史民俗博物館教授）  
堂込 秀人氏（上野原縄文の森園長）

### 第3節 整理作業・報告書作成

#### 1 整理作業・報告書作成作業の概要

立塚遺跡の整理作業・報告書作成作業は、令和4年度から行っている。令和5年度には「立塚遺跡1 縄文時代早期編」として、「久保田牧遺跡2」と合冊で刊行した。令和6年度は古墳時代以降編として本報告書の刊行となり、令和7年度以降も刊行予定である。

出土遺物の洗浄及び注記・接合については、一部本調査において実施し、「第2節 3 本調査の経過」に含めて記載してある。

整理作業・報告書作成作業は、令和4年度は埋蔵文化財センター第二整理作業所（旧福山中学校）、令和5年度は埋蔵文化財センターと埋蔵文化財センター第二整理作業所（旧福山中学校）の二か所に分かれて実施し、令和6年度以降は埋蔵文化財センターで実施した。

整理作業・報告書作成作業の内容は、以下のとおりである。

- ① 遺構実測図と図面台帳の照合、遺構ごとに実測図の仕分け、注記、トレース原図作成及びトレース
- ② 遺構内出土遺物と包含層出土遺物の仕分け、遺物と遺物台帳との照合、遺構内出土遺物と遺構実測図との照合、分類
- ③ 写真整理及び選別、遺物の写真撮影
- ④ 出土遺物の注記、選別、接合・復元、分類、掲載資料の選別、実測、トレース、土器の拓本
- ⑤ 石器実測委託、自然科学分析（年代測定・安定同位体・種実同定・植物珪酸体分析・リン・カルシウム分析・テフラ分析）業務委託
- ⑥ レイアウト、原稿執筆
- ⑦ 遺物や図面等の整理・収納

#### 2 整理作業・報告書作成作業体制

整理・報告書作成作業に関する体制は、以下のとおりである。

##### 令和4年度

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 中原 一成
作成企画	次長兼総務課長 大口 浩嗣
	調査課長兼南の縄文調査室長 寺原 徹
	第二調査係長 西園 勝彦
作成担当	文化財主事 廣 栄次
	文化財研究員 倉元 良文
事務担当	総務係長 白坂 由香

##### 令和5年度

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 中村 和美
作成企画	総務課長 荒瀬 勝己
	調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広
	文化財主事兼第二調査係長 楸田 岳志
作成担当	文化財主事 廣 栄次
	文化財主事 山下 勘郎
	文化財研究員 倉元 良文
事務担当	総務係長 白坂 由香

##### 令和6年度

事業主体	鹿児島県
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所 長 中村 和美
作成企画	次長兼総務課長 南 安洋
	調査課長兼南の縄文調査室長 黒川 忠広
	文化財主事兼第二調査係長 楸田 岳志
作成担当	文化財主事 藤島伸一郎
	文化財主事 山下智沙子
	文化財研究員 倉元 良文
事務担当	主幹兼総務係長 白坂 由香

#### 3 整理作業及び報告書作成業務の経過

整理作業については、日誌抄を月ごとに集約して記した。なお、令和5年度からはその年度の報告書刊行分と次年度以降刊行分の整理作業を並行して実施している。

##### 令和4年度

- |     |  |
|-----|--|
| 5月  | オリエンテーション、図面確認、遺物確認・遺物水洗・注記、器種分類・接合（土器）      |
| 6月  | 図面確認、遺物確認・注記・器種及び型式分類・接合（土器）                 |
| 7月  | 図面確認、図面修正、遺物器種及び型式分類・接合（土器）、圧痕土器抽出           |
| 8月  | 遺物器種及び型式分類・接合（土器）、器種分類・接合（石器）、遺構等写真整理        |
| 9月  | 器種分類・接合（石器）、遺構等写真整理、接合（土器）・器種分類（土器）、器種分類（石器） |
| 10月 | 器種・型式等分類、土器・石器実測、土器接合、                       |

器種・石材分類（石器），実測委託の準備（石器抽出）

- 11月 土器・石器実測，石器データ（重量，長軸長）計測，土器接合（縄文時代早期，古墳時代～近世），遺物データ（出土区，層，遺物番号，器種等）確認・修正，器種・型式等分類，石器実測委託（株式会社島田組）
- 12月 器種・型式等分類，土器・石器実測，拓本，遺物データ入力，土器の炭化物付着確認・自然科学分析（炭化物年代測定等）委託試料抽出（古環境研究センター）
- 1月 土器・石器実測，土器拓本，石器実測委託図面の確認・修正，遺物データ入力
- 2月 土器・石器実測，遺物データ入力，土器分類（一括資料，小片等），石器実測委託・図面の確認・修正，土器復元，次年度に向けて準備（作業の経過状況の記録・添付）
- 3月 土器・石器実測図確認・修正，石器実測委託図面の確認・修正，21日自然科学分析（炭化物年代測定等）委託結果納品（株式会社古環境研究センター），24日石器実測委託図面納品（株式会社島田組）

#### 報告書作成指導委員会

令和4年6月8日・8月2日・10月5日・11月8日・11月28日 調査課長ほか7名

#### 令和5年度

- 4月 オリエンテーション，水洗・注記・遺物確認・分類，図面確認・地形図・遺構配置図修正・土層断面図修正，原稿執筆，土器分類
- 5月 土器実測図トレース，水洗・注記・石器実測，図面確認，地形図・遺構配置図修正・土層断面図修正，原稿執筆，土器分類
- 6月 土層断面図修正，遺物データ入力，計測表作成，遺物分類，石器実測，原稿執筆
- 7月 土器接合，土層断面図修正，遺物データ入力，計測表作成，個別遺構図修正，石器実測委託図面の確認・修正，原稿執筆，遺構図作成
- 8月 土器接合，土器実測図・トレース修正，石器実測委託図面の確認・修正，遺物データ修正，原稿執筆・編集，個別遺構図作成
- 9月 土器接合，石器分類，遺構配置図修正，自然科学分析委託資料抽出，遺物写真撮影準備，本文・図面レイアウト，原稿執筆，編集
- 10月 土器接合，石器分類，石器実測委託，遺構配置図修正，自然科学分析（年代測定）委託，原稿執筆，本文・図面レイアウト，編集，遺物写真撮影
- 11月 土器分類・接合，石器分類・接合・一覧表作成，

原稿執筆・編集・入稿，自然科学分析（土壌分析）委託

- 12月 石器分類・接合・一覧表作成，土器接合，校正
- 1月 石器分類・接合・一覧表作成，土器接合，注記
- 2月 石器実測委託準備，土層断面図修正，校正，収納作業，第二整理作業所閉所に伴いセンターでの作業へ移行
- 3月 土層断面図修正，収納作業，報告書納品  
遺物指導  
9月15日 大坪志子氏（熊本大学埋蔵文化財調査センター准教授）  
12月14日 森 貴教氏（新潟大学准教授）

#### 報告書作成指導委員会

令和5年6月14日・8月8日・10月3日・10月30日  
調査課長ほか7名

#### 報告書作成検討委員会

令和5年10月31日 所長ほか5名

#### 令和6年度（報告書刊行に関わる作業のみ記載）

- 4月 オリエンテーション，遺構内遺物確認・分類，写真整理・地形図・土層断面図修正，原稿執筆
- 5月 遺物実測・トレース，図面確認，地形図・土層断面図修正，遺物分類，原稿執筆
- 6月 遺物実測・トレース，遺物計測表作成，遺物復元，遺構図修正，原稿執筆
- 7月 遺物実測・トレース，遺物計測表作成，遺物データ入力，計測表作成，原稿執筆
- 8月 遺物実測・トレース，遺物計測表作成，本文・写真レイアウト，遺物写真撮影準備，原稿執筆・編集
- 9月 遺物写真撮影，遺構写真選択・レイアウト，本文・図面レイアウト，原稿執筆，編集
- 10月 原稿修正・編集・入稿
- 11～12月 校正
- 1月 校正，収納作業
- 2月 収納作業，報告書納品

#### 報告書作成指導委員会

令和6年6月5日・8月9日・10月2日 調査課長ほか7名

#### 報告書作成検討委員会

令和6年10月4日 所長ほか6名

※調査体制・調査経過においては、「立塚遺跡1」の報告書より一部修正。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

立塚遺跡が所在する鹿屋市吾平町は、鹿児島県本土の東部に位置し、南方向に伸びる大隅半島のほぼ中央部に位置する。吾平町は、平成18年1月1日に旧鹿屋市と肝属郡の串良町、曾於郡の輝北町と合併し、新「鹿屋市」の一部となった。東側は肝属郡東串良町と肝付町（旧高山町）に、南西側は同郡錦江町（旧大根占町）に接している。

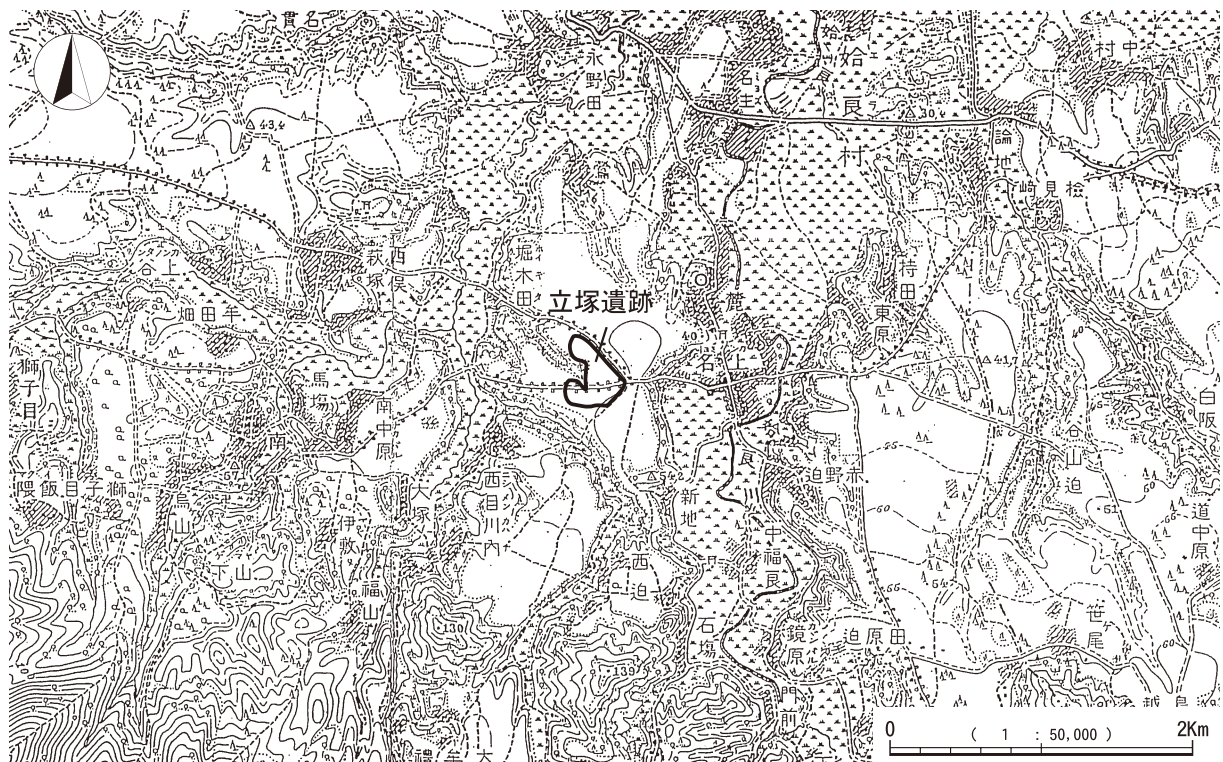
吾平町は、南部の肝属山地（国見山地）、中部のシラス台地、北部の肝属川やその支流により形成された河岸段丘及び沖積平野に区分される。大別すると南部一帯は山林、台地上には畑、河川流域には水田地帯、河川と台地の間には住居地が広がっている。地質は南部の肝属山地が花崗岩及び周辺のホルンフェルス、台地上が入戸火砕流とその二次堆積物（シラス等）で、台地は肝属川水系の河川による浸食を受けている。

立塚遺跡は南側の肝属山地を水源とし、北流する始良川と大始良川が合流し、志布志湾に注ぐ肝属川に挟まれた標高41～43m前後の舌状に残るシラス台地上に位置し、この台地を通称「西原台地」という。西原台地上はとても平坦であり、北側へ少しずつ低くなる。遺跡の中央西側は西北方向へ細長い谷が、東側では広く開口する谷部がみられる。

現在までに残る最も古い明治35年測量の地形図においては（第2図参照）、遺跡がある台地上は白ヌキの部分が多く用途不明であるが、東側に用水路を示す実線が扇状に見られることや、取水が困難な地形上の理由から畑地であったと考えられるが原野の可能性もある。台地上の開発は吾平町誌（以下、「町誌」）によると、藩政時代や明治時代より行われており、肥料等の運搬の困難さから、低地からの道路に近い部分の開発が早かったようである。河川を見ると現在より蛇行しており、急峻な南部の肝属山地から流れるため洪水被害が多く、河川沿いの水田や市街地は被害が頻発した。昭和15年に河川改修が行われてからは減少したが、大雨の際など、現在も道路や住居の冠水が起こることがある。

低地の利用は町誌によると、台地と接するところは湧水が得られ、これを利用して早くから水田が作られていたが、河川沿いは自然堤防など微高地であり、水が得にくいため古来は畑か原野で、用水路が近世に作られて以後水田化したようである。

遺跡中央を東西に横切る並木道は、東側の吾平町中心市街地と繋がっており、台地上の重要な交通路であったようだ。この道路は現在の農道部分に比定され、主要道路は遺跡南側に付け替えられている。



第2図 明治35年 立塚遺跡周辺の地形図

## 第2節 歴史的環境

鹿屋市吾平町においては、北部から中部にかけてのシラス台地上から河岸段丘や沖積地にかけて多くの遺跡が分布しており、近年では吾平道路建設に伴う発掘調査によって多くの調査成果が上がっている。ここでは、鹿屋市吾平町内の主な遺跡を時代ごとに紹介する。

### 旧石器時代

旧鹿屋市の榎崎A・B遺跡で細石刃文化期のブロックが3か所検出されているなど数遺跡みられるが、吾平町内では未確認である。

### 縄文時代早期

早期の遺跡は数多く検出されている。池山B遺跡では円筒状の口縁部が直行する塞ノ神式土器が出土している。四方高迫遺跡では集石1基が検出され、前平式・石坂式土器、打製石鏃・打製石斧・磨石・石皿等が出土している。荷掛原遺跡では集石1基が検出され、打製石鏃・磨石・剥片石器等が出土している。水流遺跡では集石1基が検出され、前平式・吉田式・石坂式・山形押型土器が出土している。原口岡遺跡では集石6基が検出され、前平式・吉田式・石坂式土器や磨製石鏃等の石器が出土している。諏訪の尾遺跡では、集石10基や吉田式・石坂式・下剥峯式・手向山式・平椀式・塞ノ神式土器が出土している。中尾遺跡では吉田式・下剥峯式・石坂式土器及び石鏃・石斧・礫器・磨石・石皿等が出土し、集石が8基検出されている。和田遺跡では集石28基、連穴土坑2基が検出され、加栗山式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・中原式系土器及び磨製石鏃・打製石鏃・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・砥石等が出土している。川上遺跡では石坂式・塞ノ神式・苦浜式土器等が出土し、特に西之菌式土器は、アカホヤ火山灰下位層から出土している。鶯原遺跡では下剥峯式・押型文・手向山式・妙見・天道ヶ尾式・平椀式・塞ノ神A・B式・苦浜式・轟A式土器及び打製石鏃・石匙・石斧・礫器・磨石・石皿が出土し、集石が6基、石器製作跡が5か所検出されている。猫塚遺跡では石坂式・下剥峯式・平椀式土器、打製石鏃等が出土し、集石が1基検出されている。

### 縄文時代前期

前木場遺跡・簀原遺跡・新地上遺跡で曾畑式土器が出土し、中尾遺跡では深浦式土器が出土している。猫塚遺跡では、轟B式土器が県内2例目となる池田降下軽石層とアカホヤ火山灰下位層に挟まれた地層から出土している。

### 縄文時代中期

簀原遺跡・鏡原遺跡において阿高式土器が出土している。

### 縄文時代後期

四方高迫遺跡で指宿式土器が出土し、菌入寺跡・立

元・鏡原・苦野原遺跡で指宿式土器・市来式土器が出土している。後・晩期については、近年編年上で再検討が行われつつあり、上加世田式・入佐式土器等は後期とするべき考えが多く見られるようになっており、本稿でもそのように記載する。榎崎B遺跡・飯盛ヶ岡遺跡では上加世田式土器、山内原遺跡では入佐式土器が出土している。

### 縄文時代晩期

内原遺跡で夜臼式土器が、四方高迫遺跡では黒色研磨土器が出土している。

### 弥生時代

早期では中尾遺跡や菖蒲遺跡で刻目突帯文土器が出土している。前期においては立元・鏡原遺跡、中期では完形の壺形土器が出土した町頭遺跡、石包丁が出土した新地上遺跡、山ノ口式土器が出土した角野原Ⅱ遺跡・中尾遺跡・下牧遺跡、竪穴建物跡が検出された中牧遺跡等がある。名主原遺跡では、終末頃の花弁状住居跡をはじめとする竪穴建物跡群が多数検出されている。遺物では肩部から胴部にかけて同心円文や綾杉状・重弧文等幾何学的な沈線文様を施し、「く」の字に大きく屈曲する肩部を有する、施文・器形共に特異な小型壺が出土している。立塚遺跡北西側に隣接する鹿児島部品吾平工場敷地では、六篠原A遺跡として調査が行われ、弥生時代と考えられる土器が数点出土している。ただし胴部のみであり、古墳時代の可能性もある。

### 古墳時代

本時代の遺跡は極めて多く、始良川沿岸の台地縁辺部等において、筒ヶ迫・軍宮下・角野原・猫塚・廣牧・鶯原遺跡、大始良川沿岸ではモタイ坂・山内原・児玉渡・中原・前木原・島元・上原・飯隈・菖蒲・吉國遺跡等で甕や壺、高坏等の遺物の出土がみられる。いずれもトレンチによる調査のため、遺構は未検出が多い。遺構としては、宮ノ上地下式横穴墓群で地下式横穴墓15基が検出され、小型の平入りのタイプや妻入りの大型の墓が共存し、軽石製組合石棺を有するものが2基（いずれも妻入り）確認されている。天神原地下式横穴墓群では地下式横穴墓が4基検出され、1号地下式横穴墓では人骨一体と軽石製石棺、2号地下式横穴墓では粘土床や軽石板とともに、副葬品として、直刀・鉄刀・刀子・鉄斧等が出土している。堀木田原地下式横穴墓では全長5.2mの県内最大級の規模の地下式横穴墓が検出され、玄室内に粘土床を有する。副葬品には、鞘と思われる木質が残存する直刀、柄の一部を伴う鉄剣、刀子が出土している。中尾地下式横穴墓群では地下式横穴墓8基が検出され、副葬品として鐔や鏹等が残存した刀剣や馬具を転用した鈴が出土している。墓域に隣接する集落跡として、中尾地下式横穴墓群に隣接する中尾遺跡や名主原遺跡で竪穴建物跡が多数検出されており、墓との関連が指摘されてい

る。立塚遺跡と同台地上では、前述の名主原遺跡の他に久保田牧遺跡でも後期を中心に、多数の遺物とともに堅穴建物跡が検出されている。他に鶯原遺跡では古道跡が約80mに及ぶものを含め5条が、猫塚遺跡では土坑が検出されている。隣接する廣牧遺跡では東西に伸びる帯状硬化面が検出され、東原式段階と考えられる甕及び壺・鉢・小型丸底壺が出土している。

#### 古代

吾平町内では河川沿いの台地縁辺部において、古代の遺跡が多数みられる。黒羽子遺跡や軍宮下遺跡では土師器の坏や甕、須恵器等、角野原Ⅱ遺跡では土師器の甕・坏・椀・紡錘車や須恵器の甕が出土している。いずれもトレンチ調査であり、遺構は未検出である。立塚遺跡に隣接する廣牧遺跡や久保田牧遺跡では、畝間状遺構が多数検出されており、立塚遺跡を含め大規模な畝としての利用が考えられる。久保田牧遺跡では掘立柱建物跡が8棟検出されており、また土師器の刻書土器や墨書土器も多数出土していることから、郡衙等の公的施設の可能性が指摘されている。また他の建物跡よりやや離れた地点に南北方向に軸が揃う、50㎡を超える床面積の掘立柱建物跡が検出されており、「倉」の想定もされている。遺物では、土師器の他に甑（1点）や土錘（21点報告）、製塩土器（1点）、鉄製の方頭鏃（2点）などが特筆される。

#### 中世

前期においては、始良荘があったことが文献・記録等に記されているが、古代を含めて当該期の水田遺構等は確認されていない。後期については、中世城館等の存在が挙げられる。旧吾平町域では、井上城跡（井神島遺跡）・末次城跡・繁昌城跡等がある。山古城跡では、『始良名勝志』『三國名勝図会』等で、「平判官」（平良宗）が居城したと伝えられている。

隣接する久保田牧遺跡では、側柱建物跡が13棟、総柱建物跡が5棟検出されている。また完形の土師器の坏が1点出土し、土坑墓の可能性が指摘されている。南北もしくは東西方向に伸びる溝状遺構及び古道も多数検出されている。

#### 近世

近世における調査報告は遺物等が少量出土しているのみで、極めて少ない。町誌において、外城制度の下で地頭仮屋などの諸役所が置かれる麓が形成されたとの記述があり、立塚遺跡東側の台地下の麓地区もその一つである。麓では地域の役人等が居住し集落を形成しており、現在でも地頭館仮屋跡として埋蔵文化財包含地になっている。

中期になると台地上の開発が進み、麓の郷士を中心として畑地の開拓が行われたようだ。立塚遺跡が所在する西原台地においても他の近隣の台地と同様に開発が行わ

れ、郷士の抱地となった。その際には開発の労力として藩下でも多くの人の移動があったようである。

#### 【引用・参考文献（第3節含む）】

鹿児島県

1971 鹿児島県『土地分類基本調査 鹿屋 志布志』

1974 鹿児島県『土地分類基本調査 大根占』

大日本帝国陸地測量部

1904 5万分の1地形図『鹿屋』『城元』

吾平町教育委員会

1985『大牟礼遺跡ほか3遺跡』(1)

1987『宮ノ上地地下式横穴群・松ノ下遺跡・大牟礼遺跡』(2)

1988『前木場遺跡』(3)

1989『前木場遺跡・モタイ坂遺跡・菌入寺跡遺跡』(4)

1989『天神原地下式横穴群』(5)

1989『六篠原A遺跡』(6)

1990『名主原遺跡・荷掛原遺跡』(7)

1990『水流遺跡・横井坂遺跡』(8)

1992『筒ヶ迫遺跡・荷掛原遺跡』(10)

1994『原口岡遺跡』(11)

2000『出水遺跡 軍宮下遺跡』(13)

1994『中尾Ⅲ遺跡』(14)

1998『中尾地下式横穴群』(15)

2002『角野原Ⅱ遺跡』(16)

2004『和田遺跡』(17)

2005『諏訪の尾遺跡』(18)

2005『中尾遺跡Ⅳ』(19)

吾平町誌編纂委員会『吾平町誌上巻・下巻』1991

鹿屋市教育委員会

2004『下牧遺跡』(72)

2005『吉國遺跡』(75)

2005『菖蒲遺跡』(77)

2007『中牧遺跡』(82)

2008『名主原遺跡』(84)

鹿児島県教育委員会

2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

県埋蔵文化財調査報告書

1978『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』(9)

1980『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』(13)

1983『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』(25)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2005『中尾遺跡』(87)

2022『川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡』(213)

2023『久保田牧遺跡1』(221)

2024『廣牧遺跡』(223)

2024『久保田牧遺跡2 立塚遺跡1』(224)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地(鹿屋市内)	地形	種類	時代	主な遺構・遺物	備考
1	203-528	立塚	吾平町麓立塚	台地	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・近世	第2章第3節参照	県埋セ発掘調査報告書(224)『久保田牧遺跡2 立塚遺跡1』 県埋セ発掘調査報告書(228)『立塚遺跡2』
2	203-156	中牧	川西町	台地	散布地	弥生(中)・古墳		
3	203-155	吉國	川西町境目	台地	散布地	縄文・弥生・古墳	堅穴状遺構・土坑・溝状遺構, 成川式土器	鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(75)『吉國遺跡』
4	203-21	笹ヶ尾	名貫町笹ヶ尾	台地	散布地	弥生(中)		
5	203-24	中牧	川西町中牧	台地	散布地	弥生(中)・古墳	堅穴住居跡・土坑, 山ノ口式土器・高付式土器・石鎌・石皿・磨石・蔽石	鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(82)『中牧遺跡』
6	203-121	繁昌城跡	永野田町	台地	城館跡	南北朝・室町・戦国		
7	203-154	下牧	永野田町	台地	散布地	弥生・南北朝・近世	弥生土器(山ノ口式等)・陶磁器(薩摩焼等)	鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(72)『下牧遺跡』
8	203-50	早馬原B	永野田町早馬原	台地	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世		
9	203-20	湯穴ノ上	名貫町湯穴ノ上	台地	散布地	弥生(中)・古墳	弥生土器・成川式土器	県埋蔵文化財調査報告書(13)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
10	203-392	井神島	吾平町下名川東井神島	独立丘陵	散布地	弥生(中・後~終末)	土器片	
11	203-448	末次城跡	吾平町下名川東井神島	丘陵	城館跡	鎌倉・南北朝		
12	203-157	新橋	川西町	台地	散布地	古墳		
13	203-207	薬師寺跡	永野田町	台地	社寺跡	—		
14	203-524	大堀	名貫町	平地	散布地	—		
15	203-463	原口岡	吾平町下名東	平地	散布地	縄文(早)	集石遺構, 前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・下剥峰式土器, 石斧・磨製石鎌・石皿・砥石・剥片石器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)『原口岡遺跡』
16	203-525	鼻切	名貫町	平地	散布地	—		
17	203-397	名主原	吾平町下名川西名主	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	第2章第3節参照	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)『名主原遺跡・荷掛原遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(84)『名主原遺跡』
18	203-8	菖蒲	飯隈町菖蒲	台地	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	弥生土器(刻目突帯文・山ノ口式)・成川式土器(辻堂原・笹貫)・須恵器・土師器・青磁・陶器・磁器・薩摩焼	鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(77)『菖蒲遺跡』
19	203-526	牧	萩塚町	平地	散布地	—		
20	203-527	菖蒲ヶ迫	飯隈町	平地	散布地	—		
21	203-521	井牟田原	吾平町下名	平地	散布地	弥生		
22	203-398	川上	吾平町麓川上	台地	散布地	縄文(早)・弥生	第2章第3節参照	県埋セ発掘調査報告書(213)『川上遺跡 鶯原遺跡 猫塚遺跡』
23	203-401	堀木田	吾平町麓堀木田	平地	散布地	弥生(中・後~終末)	甕棺・弥生土器・打製石斧	
24	203-399	鶯原	吾平町麓鶯原	台地	散布地	縄文(早)・弥生・古墳・古代	第2章第3節参照	県埋セ発掘調査報告書(213)『川上遺跡 鶯原遺跡 猫塚遺跡』
25	203-400	和泉田原	吾平町麓和泉田原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	
26	203-6	飯隈	飯隈町飯隈牧	台地	散布地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器・須恵器	県埋蔵文化財調査報告書(13)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
27	203-479	八万里	吾平町麓	平地	散布地	—		
28	203-405	梶の下	吾平町麓梶下	平地	散布地	弥生(中)・古墳	成川式櫛目文壺	
29	203-412	霧島原	吾平町麓霧島原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	
30	203-29	池ノ迫	飯隈町池ノ迫上	台地	散布地	弥生・古墳		
31	203-402	堀木田原	吾平町麓堀木田	台地	散布地	弥生・奈良・平安	土器片	
32	203-457	堀木田原地下式横穴	吾平町麓堀木田原	台地	散布地	古墳	地下式横穴, 直刀・剣・刀子	県埋蔵文化財調査報告書(25)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
33	203-447	山古城跡	吾平町麓城ヶ迫原城山	丘陵	城館跡	平安・室町	上古平判官と申人数代居住, 近世初頭島津氏支配, 回り八町, 高さ十間	「始良名勝志」 「三國名勝図絵」
34	203-406	城ヶ迫原	吾平町麓城ヶ迫原	台地	散布地	弥生	土器	
35	203-7	小牧	萩塚町小牧	台地	散布地	弥生	弥生土器	県埋蔵文化財調査報告書(13)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
36	203-480	八反田	吾平町麓	平地	散布地	—		
37	203-465	廣牧	吾平町麓宇廣牧	台地	散布地	縄文(後)・弥生・古墳・古代	第2章第3節参照	県埋セ発掘調査報告書(223)『廣牧遺跡』
38	203-452	地頭館仮屋跡	吾平町麓山古城南山麓	平地	散布地	平安・室町・近世	上古平判官居館跡, 島津の地頭初代以降(天正から)	
39	203-233	諏訪神社跡	萩塚町	台地	社寺跡	—		
40	203-411	寺ヶ迫古墳群	吾平町麓寺ヶ迫	台地	散布地	弥生(中)・古墳	円墳, 須恵器	
41	203-410	三角原	吾平町麓三角原	台地	散布地	弥生・奈良・平安	土器片・土師器・須恵器	
42	203-407	千手院(坂)	吾平町麓千手院	台地	散布地	弥生(後~終末)・古墳・奈良・平安	土器	
43	203-408	宮ノ上地下式横穴	吾平町麓宮ノ上吾平小校庭	台地	散布地	古墳	地下式横穴(軽石石棺), 土器・直刀・刀子	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)宮ノ上地下式横穴群-附 松下城跡・大牟礼遺跡-
44	203-241	石佛	飯隈町	台地	散布地	中世		
45	203-403	六条原	吾平町麓六条原	台地	散布地	弥生・古墳	土器片・土師器・須恵器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)『六條原A遺跡』

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地 (鹿屋市内)	地形	種類	時代	主な遺構・遺物	備考
46	203-120	年貴城跡	南町年貴	台地	城館跡	中世・近世・近現代		
47	203-198	柘原軽砂切目王寺跡	南町	台地	社寺跡	戦国		
48	203-3	上原	南町上原	台地	散布地	縄文(後)・弥生・古墳	縄文土器(後期)・弥生土器・成川式土器(高坏・鉢等)・須恵器(坏)・鉄族・刀子・紡錘車	県埋蔵文化財調査報告書(13)(25)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
49	203-409	宮ノ前(鶴戸神社脇)	吾平町麓宮ノ前鶴戸神社脇	平地	散布地	弥生(中)	弥生壺形土器	
50	203-109	西俣城跡	南町	台地	城館跡	鎌倉・南北朝・戦国		
51	203-86	牧ノ原	南町牧ノ原	台地	散布地	縄文(晩)・弥生・中世	縄文土器・弥生土器・青磁等	県埋蔵文化財調査報告書(9)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
52	203-1	本坊	南町本坊六ノ里	台地	散布地	縄文(後・晩)・弥生・古墳		
53	203-41	町頭	吾平町麓町頭	平地	散布地	弥生(中)	弥生壺形土器	
54	203-415	反田原	吾平町麓反田原	台地	散布地	縄文・弥生・奈良・平安	土器・土師器・須恵器	
55	203-203	本房寺跡	南町	台地	社寺跡			
56	203-416	赤野原	吾平町麓赤野原	台地	散布地	弥生(中)	弥生土器・石斧	
57	203-506	山野原	吾平町麓	台地	散布地	弥生・古墳・近世		
58	203-423	モタイ坂	吾平町上名モタイ坂	台地	散布地	弥生(中)・古墳	弥生土器・成川式土器・打製石斧	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)『前木場遺跡・モタイ坂遺跡・菌入寺跡遺跡』
59	203-414	久保田牧	吾平町麓道脇・久保田牧	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	第2章第3節参照	県埋蔵文化財調査報告書(221)『久保田牧遺跡1』 県埋蔵文化財調査報告書(224)『久保田牧遺跡2 立塚遺跡1』
60	203-418	猫塚	吾平町麓猫尾	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	第2章第3節参照	県埋蔵文化財調査報告書(213)『川上遺跡 篤原遺跡 猫塚遺跡』
61	203-417	境原	吾平町麓境原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	阿高式土器・市来式土器・石器	
62	203-472	住吉	南町	台地	散布地	古墳		
63	203-2	島元	南町島元	台地	散布地	弥生・古墳	弥生土器・成川式土器	県埋蔵文化財調査報告書(13)『大隅地区埋蔵文化財分布調査外報』
64	203-464	打越	吾平町赤野字打越	台地	散布地	古墳		
65	203-424	新地上	吾平町上名新地上	台地	散布地	縄文(前)・弥生(初頭～前・中)	曾畑式土器・弥生土器・石匙・石包丁	
66	203-435	大久保迫	吾平町上名大久保迫	台地	散布地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	
67	203-436	中尾	吾平町上名中尾	台地	散布地	縄文・弥生・古墳	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・円形周溝状遺構・溝状遺構・地下式横穴墓・縄文土器(早・晩)・弥生土器(山ノ口Ⅱ式・須玖Ⅱ式)・石包丁・磨製石剣・磨製石鎌・石包丁・成川式土器(東原式・笹貫式)・須恵器・土製品・円筒太刀・鉄刀・鉄剣・刀子・銅製鈴	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)『中尾Ⅲ遺跡』(15)『中尾地卜式横穴群』(19)『中尾遺跡Ⅳ』 県埋蔵文化財調査報告書(87)『中尾遺跡』
68	203-468	菌入寺跡	吾平町上名西目川路養損原	平地	社寺跡	縄文(後)・鎌倉	指宿式土器・市来式土器・成川式土器・石斧・石皿	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)『前木場遺跡・モタイ坂遺跡・菌入寺跡遺跡』
69	203-453	上名西目川路の逆修塔群	吾平町上名西目川路	平地	散布地	鎌倉・南北朝・室町・戦国		
70	203-422	前木場	吾平町上名前木場	台地	散布地	縄文・弥生(中・後期～終末)・古墳・古代	縄文土器・弥生土器・成川式土器・土師器・須恵器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)『前木場遺跡』 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)『前木場遺跡・モタイ坂遺跡・菌入寺跡遺跡』
71	203-425	西迫	吾平町上名西迫	台地	散布地	弥生(中)	土器片・石斧	
72	203-204	浄光寺跡	南町	台地	社寺跡	—		
73	203-426	白坂原	吾平町上名白坂原	台地	散布地	弥生・古墳・奈良・平安	弥生土器・成川式土器・土師器	鹿屋市埋蔵文化財調査報告書(89)
74	203-507	田原上	吾平町上名	台地	散布地	弥生・古墳		
75	203-419	養損原	吾平町上名西目川路養損原	台地	散布地	縄文・弥生・古墳	曾畑式土器・阿高式土器・石斧	
76	203-438	鏡原上	吾平町上名鏡原	台地	散布地	弥生(中・後～終末)	弥生土器・片石斧	
77	203-439	諏訪尾	吾平町上名諏訪尾	台地	散布地	縄文早期	集石・縄文土器(吉田・石坂・下剥峯・桑ノ丸・手向山・平栴・塞ノ神式)・石鎌・石斧・石皿・磨石・敲石	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(18)『諏訪の尾遺跡』
78	203-466	軍宮下	吾平町上名	平地	散布地	弥生・古墳・古代	弥生土器(刻目突帯文・山ノ口式)・成川式土器(辻堂原・笹貫)・須恵器・土師器・墨書土器・紡錘車	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)『出水遺跡 軍宮下遺跡』
79	203-437	鏡原	吾平町上名鏡原	台地	散布地	縄文(中・後)・弥生・古墳	市来式土器・阿高式土器・弥生土器・成川式土器・土師器・磨製石斧	
80	203-427	榎ヶ尾	吾平町上名榎ヶ尾	山地	散布地	弥生	石斧	
81	203-450	松下城跡	吾平町上名西栴	台地	城館跡	室町～江戸	郭 筒ヶ迫城跡の前哨陣地としての役割	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)宮ノ上地下式横穴群-附 松下城跡・大牟礼遺跡-
82	203-455	児玉渡	吾平町上名児玉渡	台地	散布地	縄文(晩)・古墳	縄文式土器・土師器	吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)『大牟礼遺跡ほか3遺跡』
83	203-441	渡迫	吾平町上名渡迫(車田)	台地	散布地	弥生(初頭～前・中)	弥生土器・打製石斧	
84	203-449	筒ヶ迫城跡	吾平町上名迫門前	丘陵	城館跡	室町	天文天正の頃地頭居住回り十二町、高さ十五間・肝属伊勢守の城跡という	「始良名勝志」 「三國名勝図絵」
85	203-431	下小原	吾平町上名下小原	台地	散布地	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	
86	203-482	間庭	吾平町上名	台地	散布地	古墳		



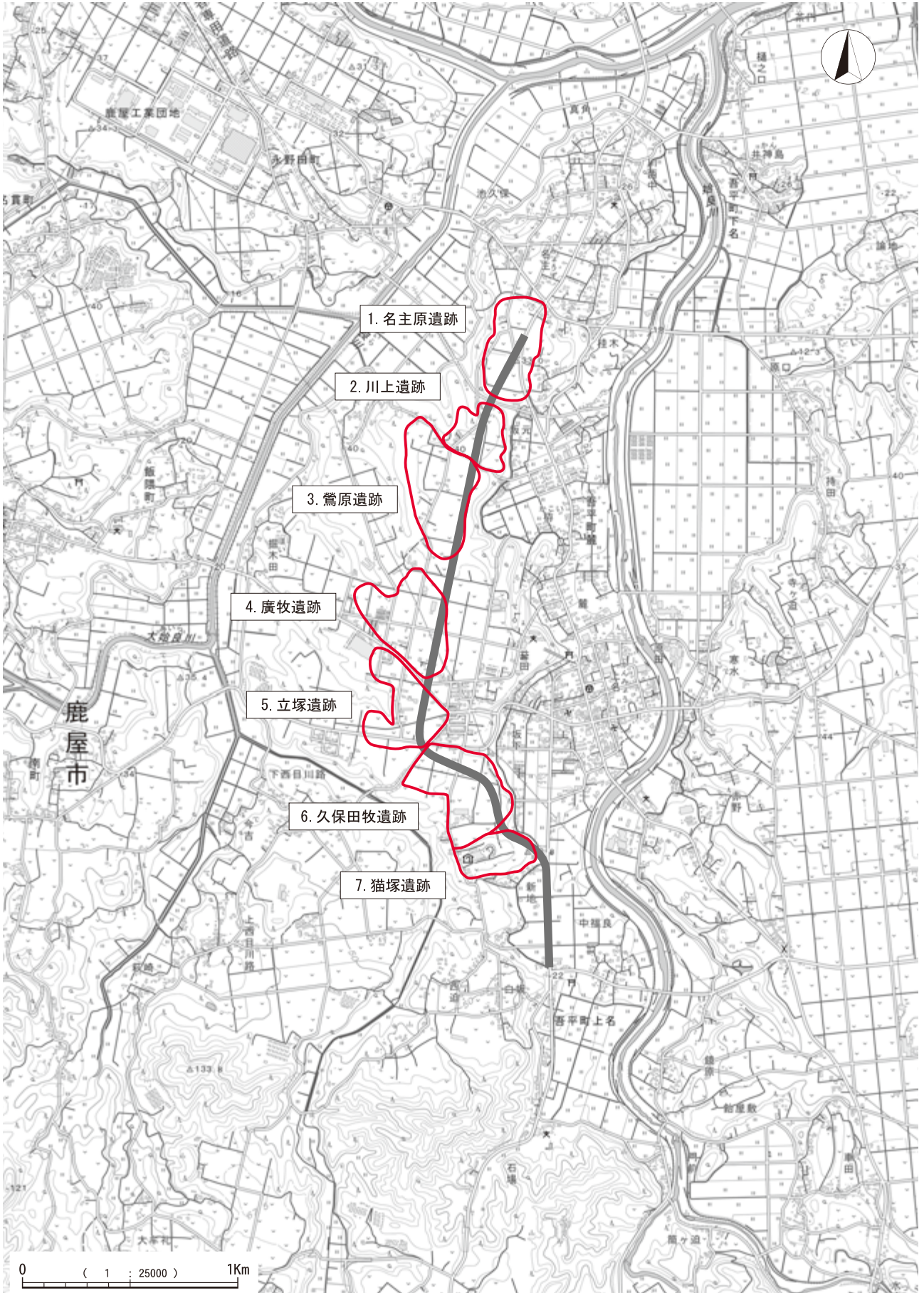
第3図 周辺遺跡図

### 第3節 鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴う遺跡

鹿屋吾平佐多線（以下、「吾平道路」）には、第3表に ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を下の表に、示すとおり7か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する。 位置を第4図に示す。

第3表 鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築事業に伴い発掘調査を実施した遺跡（市町村調査含む）

番号	遺跡名	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
				時代	主な遺構	主な遺物
1	主原	昭和63年度 平成元年度 ※吾平町実施分	吾平町埋蔵文化財発掘 調査報告書(7)『名主 原遺跡・荷掛原遺跡』	弥生中期	—	山ノ口式土器
				古墳	—	成川式土器
		平成16～18年度 ※鹿屋市実施分	鹿屋市埋蔵文化財発掘 調査報告書(84) 『名主原遺跡』	古墳	竪穴建物跡, 土坑, 土器溜, 地下式横穴墓	中津野式土器, 須恵器, 石包丁, 砥石, ガラス玉, 鉄刀, 鉄 剣, 刀子
				弥生中期	—	山ノ口式土器
				弥生後期～ 古墳前期	竪穴建物跡, 溝状遺構, 道路状 遺構, 埋設土器, 土器集中, 土 坑, 掘立柱竪穴建物跡, ビット 群, ビット, 墓, 埋設施設	土器(高付式・免田式・中津野・東原), 土製品(丸玉・勾 玉・紡錘車) 石器・石製品(石包丁・砥石・磨石・敲石・台石・軽石製品 ・打製石鏃・磨製石鏃・磨製石斧) 鉄器・鉄製品(鉄鏃・鉄斧・鉄錐・鉄針・鉄鑿・鉋・鍛造剥片) その他(ガラス玉・ガラス勾玉)
古墳後期	溝状遺構, 道路状遺構	須恵器				
古墳	溝状遺構, 道路状遺構	—				
2	川上	平成30年度	令和元年度 令和3年度刊行 『川上遺跡 鶯原遺跡 猫塚遺跡』(213)	縄文早期	—	土器(石坂式・塞ノ神(A・B)式・苦浜式・西之蘭式), 石鏃, 石皿(台石), 敲石, 二次加工剥片, 剥片, チップ
				弥生	円形周溝	—
3	鶯原	平成30年度	令和元年度 令和3年度刊行 『川上遺跡 鶯原遺跡 猫塚遺跡』(213)	縄文早期	集石, 石器集中(石器製作跡)	土器(下剥峯式・押型文・手向山式・妙見・天道ヶ尾式・平 楯式・塞ノ神(A・B)式, 苦浜式, 轟A式) 石鏃, 石匙, スクレイバー, 石皿, 磨石, 磨製石斧, 礫器, 石核, 剥片, チップ
				弥生	—	山ノ口式土器
				古墳	古道跡	成川式土器
				古代	古道跡	—
4	廣牧	平成30年度～令 和2年度	令和3・4年度 令和5年度刊行 『廣牧遺跡』(223)	縄文後期	—	市来式土器
				弥生～古墳	石器集積, 溝状遺構, 竪穴建 物跡, 大型土坑, 土坑, 柱穴 帯状硬化面	土器(刻目突帯文・山ノ口式・東原式), 土製勾玉, 打製石鏃, 磨製石鏃, 打製石斧, 横刃形石器, 磨石, 敲石, 石皿, 台石類
				古代～近代	土坑, 溝状遺構, 柱穴, 畝間 状遺構, 帯状硬化面	土師器, 須恵器, 青花, 薩摩焼
5	立塚	令和2～4年度	令和4～6年度 令和5年度刊行 『久保田牧遺跡2・ 立塚遺跡1』(224) ※縄文早期 令和6年度刊行 『立塚遺跡2』(228) 本報告書 ※古墳時代以降	縄文早期	—	石坂式土器, 打製石鏃
				縄文晩期～ 弥生	環状配列土坑群, 土坑, 柱穴 ビット, 遺物集中	土器(黒川式・突帯文・山ノ口式), 石鏃(打製・磨製), 石鏃, 石包丁, 石斧(打製・磨製), 磨石, 敲石, 石皿, 砥石 軽石製品, 管玉
				古墳	柱穴, ビット	成川式土器(中津野式・東原式・辻堂原式・笹貫式), 須恵 器坏蓋
				古代	掘立柱建物跡, 土坑, 古道, 畝 間状遺構, 溝状遺構, 柱穴, ビット	土師器(坏・椀・皿・甕・鉢・紡錘車), 墨書土器(坏), 須恵器(坏・壺・壺・蓋)
				近世	—	薩摩焼(苗代川・龍門司), 肥前系陶磁器
6	久保田牧	令和元～3年度	令和3～6年度 令和4年度刊行『久 保田牧遺跡1』(221) ※古代以降 令和5年度刊行 『久保田牧遺跡2・ 立塚遺跡1』(224) ※縄文早期 令和6年度報告書刊行 予定	縄文早期 ～前期前葉	炭化物集中域, 集石	土器(前平式・条痕文・押型文・平楯式・塞ノ神A式・苦 浜式・轟B式), 石鏃(打製・磨製), 石錐, 尖頭状石器, 石匙 石核, 石斧(打製・磨製), 磨石, 礫器, 磨石, 敲石, 石皿
				縄文前期中 葉～中期	土坑, 落とし穴, 集石, 土器 集中	土器(曾畑式, 条痕文, 野久尾式, 船元式, 春日式), 打製 石鏃, 石匙, 磨製石斧, 打製石斧, 磨石, 敲石, 環石, 石錐
				縄文晩期～ 弥生	土坑	土器(黒川式, 刻目突帯文, 組織痕), 打製石斧, 紡錘車
				古墳	竪穴建物跡, 土器棺, 土坑, 土器集中	成川式土器, 赤色土器, 須恵器, 紡錘車, 鉄製品, 棒状礫, 炭化材, 杓子型土製品
				古代	掘立柱建物跡, 土坑, 畝間状 遺構, 柱穴	土師器, 黒色土器, 墨書土器, 須恵器, 土錘, 鉄製品
				中世	掘立柱建物跡, 土坑, 溝状遺 構, 古道	土師器, 須恵器, 瓦室土器, 青磁, 白磁, 染付, 陶器, 滑石 製石鍋, 古銭(洪武通宝), 鉄製品
7	猫塚	令和元年度	令和元年度 令和3年度刊行 『川上遺跡 鶯原遺跡 猫塚遺跡』(213)	縄文早期	集石	土器(石坂式, 下剥峯式, 塞ノ神A式, 鎌石橋式), 石鏃, スクレイパー
				縄文前期	—	轟B式土器
				古墳	土坑	成川式土器



第4図 吾平道路改築事業に係る遺跡位置図

## 第3章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法

##### (1) 試掘及び確認調査

試掘及び確認調査においては調査対象区域内にトレンチを設定し、地層の残存状況及び遺跡の範囲を把握することに努めた。トレンチは任意の大きさと設定し、必要に応じて拡張を行った。重機により表土を除去後、鋤簾や手鎌等による人力掘削を基本として、遺構・遺物の有無の確認を行った。遺構は各層の上面で検出を行い、出土遺物はトレンチ内の層ごとに分け、一括で取上げを行った。

##### (2) 本調査

本遺跡の調査区割(グリッド)は、令和元年度の試掘調査で設定世界測地系に基づき座標 $X = -185230.000$ 、 $Y = -10540.000$ の交点を基準として、座標値の1の位が0となる地点に、北側から南側に向かって1・2・3…、西側から東側に向かってA・B・C…と番号を付与し、その南北10m×東西10mの区画を1グリッドの単位とし、「M-13区」のように呼称することとした。また、調査区が広大なため、本調査における便宜上の調査区画として、土層観察ベルトで区画された範囲ごとに第1章内の第1図に示した呼称(A～H区、イ～ニ区)を用いた。なお、本文中では1グリッドごとの区画と便宜上の調査区呼称の両方を使用する。

調査は安全上の措置として、用地境界等では境界から約1～2m程度内側に控えて調査範囲を設定し、重機で表土を除去した。表土下では、一部Ⅲ層及びⅣ層で古代以降を中心とした遺構の調査を行い、終了した箇所からⅣ層及びⅤ層の人力による掘下げを行った。並行して縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構検出及び調査・Ⅴa層上面での地形測量を実施した。無遺物層であるⅤc層は重機で掘削を行い、Ⅵ層上面で縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構検出・調査・地形測量を行った。調査後、縄文時代前期以前の遺構・遺物の状況把握のため、トレンチ調査を行い、一部トレンチ内で縄文時代早期の遺物が確認された。なお、遺物包含層は人力で掘り下げを行い、遺物はトータルステーションで出土位置を記録した後、番号を付して取上げを行った。

農道部分の調査については、水道管などの地下埋設物がⅤb層下層付近まで及び包含層が残存しないため、Ⅵ層上面の遺構検出・調査及び地形測量を行った。調査完了後は重機により埋戻しを行った。農道南側のⅥ層上面で検出した2群の環状配列土坑群については、関係機関と協議の上、検出面から約30cm付近をビニールシートで覆い、当該遺構を保護した。

#### 2 遺構の認定と調査方法

遺構の認定は、埋土や検出面・形状等を考慮し行った。特に表土下におけるⅢ～Ⅴa層上面での遺構検出では、紫コラ(西暦874年開聞岳噴火物)が埋土に含まれるものは古代以降の遺構(ピット(柱穴)や溝状遺構等)として認定した。整理作業においても実測図や写真等を用いて再検討を行い確定したものもある。

遺構の調査方法は土色や質感、遺物出土状況等に注意して検出を試み、埋土と包含層等の区別が困難な場合は任意にトレンチを設定し、土層断面による確認を行いながら慎重に検討しつつ調査を行った。遺構によっては、一部掘り込みの上端・下端を記録できなかったものもある。検出時及び検出中は写真撮影・埋土堆積状況の実測を行い、完掘状況の写真撮影後、遺構の規模に応じた縮尺で実測を行った。遺構内から遺物が出土した場合はその状況に応じて撮影・取上げ・出土状況の実測を行った。遺構番号は、検出された順に全遺構共通の番号を付与し、遺構の種別ごとに略号を付けて管理を行った。調査により遺構の種別が変更になった場合は、番号の変更は行わず略号のみ新たなものへと変更した。また調査の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。

#### 3 整理作業・報告書作成作業の方法

整理作業は令和4年度以降、報告書作成作業は縄文時代早期編を令和5年度に、古墳時代以降編を令和6年度に実施している。

出土遺物は水洗後、注記作業を行い、注記記号は遺跡名を「TTD」とし、グリッド・層・取上番号を記入した。遺構内出土遺物は、遺跡名の次に遺構名、取上番号を記入した。また注記作業の効率化を図るため、ジェットマーカーも使用した。遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、土器等は形態的特徴や施文等から時期ごとに分類・接合を行った。石器は剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。石器は作業の効率化を図るため、一部実測委託を行った。

遺物は掲載スケールを決定し点検・修正後、土層断面図・遺構配置図・地形図は点検・修正後、デジタルトレースを行った。なお、遺構の認定・分類を整理作業において再度行ったことに伴い、報告書に掲載する際には、発掘調査時の遺構番号と異なる新たな遺構番号を付した。

遺物出土分布図はトータルステーションで取り上げたデータを統合し、図化ソフトを使用して作成した。

炭化物等は科学分析(年代測定、炭素・窒素安定同位体分析)委託を行った。令和5年度からは刊行する年度分の原稿執筆、観察表の作成、埋蔵文化財センターの写

場にて遺物写真撮影を行い、終了後、印刷・製本を行った。

## 第2節 層序

基本層序は以下のとおりである。確認・本調査や近隣遺跡の層序及び自然科学分析（第5章第1節参照）の情報をもとに作成した。一部にのみ残るⅢ層は紫コラ（西暦874年）を多く含んでいる。本遺跡の調査で主体となるⅣ層とⅤa層は紫コラと青コラ（7世紀末）に由来する碎屑物が混在しており、遺物出土状況からも層序による明確な時代の分別は困難であった。これは後述のような古代における耕作地化などの影響が考えられる。

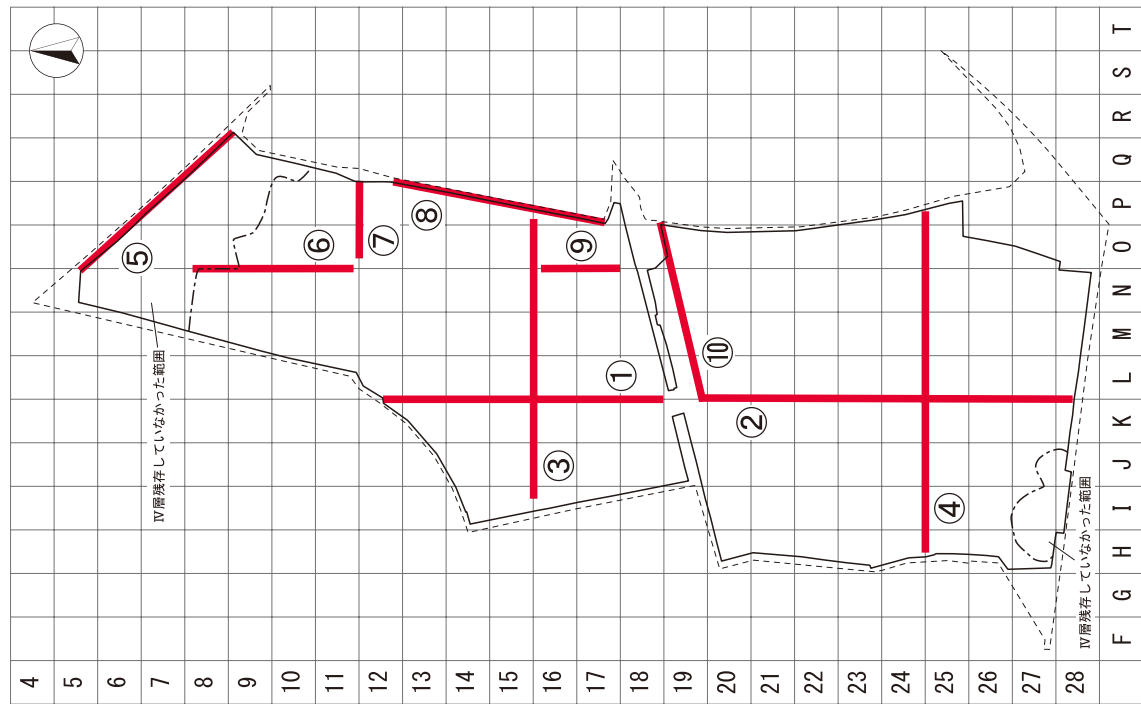
Ⅰ層の表土下は耕地整理の影響もあり、Ⅱ層は皆無、Ⅲ層は25区以南の一部の凹地とP-12区にわずかに残存するのみで、ほとんどはⅣ層であった。また、遺跡の北東側と南西側ではⅣ層が残存していない部分もあり（第5図参照）。一部では、農業機械による掘削がⅣ層まで及んでいた。Ⅷa層のアカホヤ火山灰は35cmの層厚をもつが、層中に鬼界カルデラ噴火に伴う地震による液状化現象の痕跡が確認された部分もみられた。なお、遺物包含層は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴa・Ⅴb（一部）・Ⅸ・Ⅹa層である。

※コラは開闢岳噴出物である。

土層断面図①～④は「立塚遺跡1」より一部修正。

第4表 基本層序

層位	色調・特徴等	備考	平均層厚 (cm)
I a	表土 (造成土)	少なくとも近代以降に2回の大規模な造成が行われている。	10
I b	造成土		0～20
I c	造成土 (旧表土)		20
Ⅱ		中世に相当する層で、隣接する廣牧・久保田牧遺跡に残存する。本遺跡では確認されない。	—
Ⅲ	灰黄褐色土 紫コラを含む	弥生時代中期～古代の遺物包含層。古代・古墳の中心層と想定されるが、25区以南などの一部にしか残存していない。	—
Ⅳ	暗褐色土 黄橙色パミスを含む	縄文時代晩期から古代の遺物包含層。Ⅳ層は古代、Ⅴa層は縄文時代晩期～弥生時代前期の遺物を多く含む。	20
Ⅴ a	黒褐色土 黄橙色パミスを含む		25
Ⅴ b	黒色土	縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が、自然の窪地などにわずかに含まれる。	0～25
Ⅴ c	黒色土	池田軽石を多く含む。全く存在していない箇所もある。	0～30
Ⅵ a	黄色砂質土	池田湖火山灰 (二次堆積)	0～10
Ⅵ b	黄白色硬質土	池田湖火山灰 (一次堆積)	0～10
Ⅵ c	黄色軽石層	池田降下軽石	15
Ⅶ	黒色土		10
Ⅷ a	褐色土	アカホヤ火山灰	35
Ⅷ b	白色砂質土	鬼界カルデラ噴火に伴う地震による液状化	0～40
Ⅷ c	赤褐色砂粒層	幸屋降下軽石	30
Ⅸ	黒褐色土	縄文時代早期の遺物包含層	30
Ⅹ a	黒褐色土		30
Ⅹ b	暗褐色土		40
Ⅹ I	黄褐色土	黄色パミス (P14: 薩摩火山灰) を含む。	50
Ⅹ II	褐色土		20
Ⅹ III	暗褐色土		25
Ⅹ IV	にぶい黄褐色土		30
Ⅹ V	A T	いわゆるシラス層	—



第5図 立塚遺跡土層断面位置図

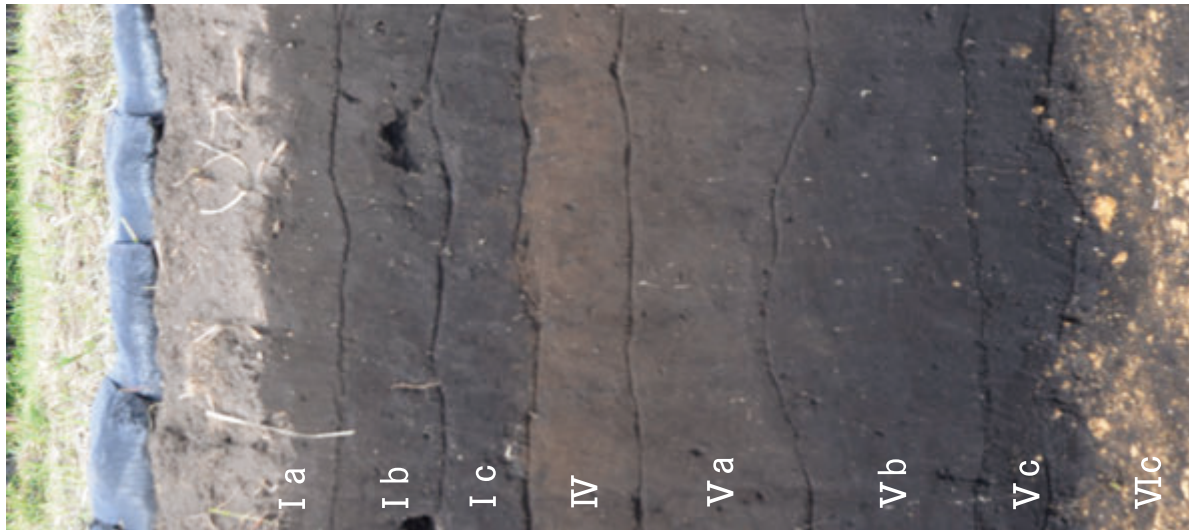
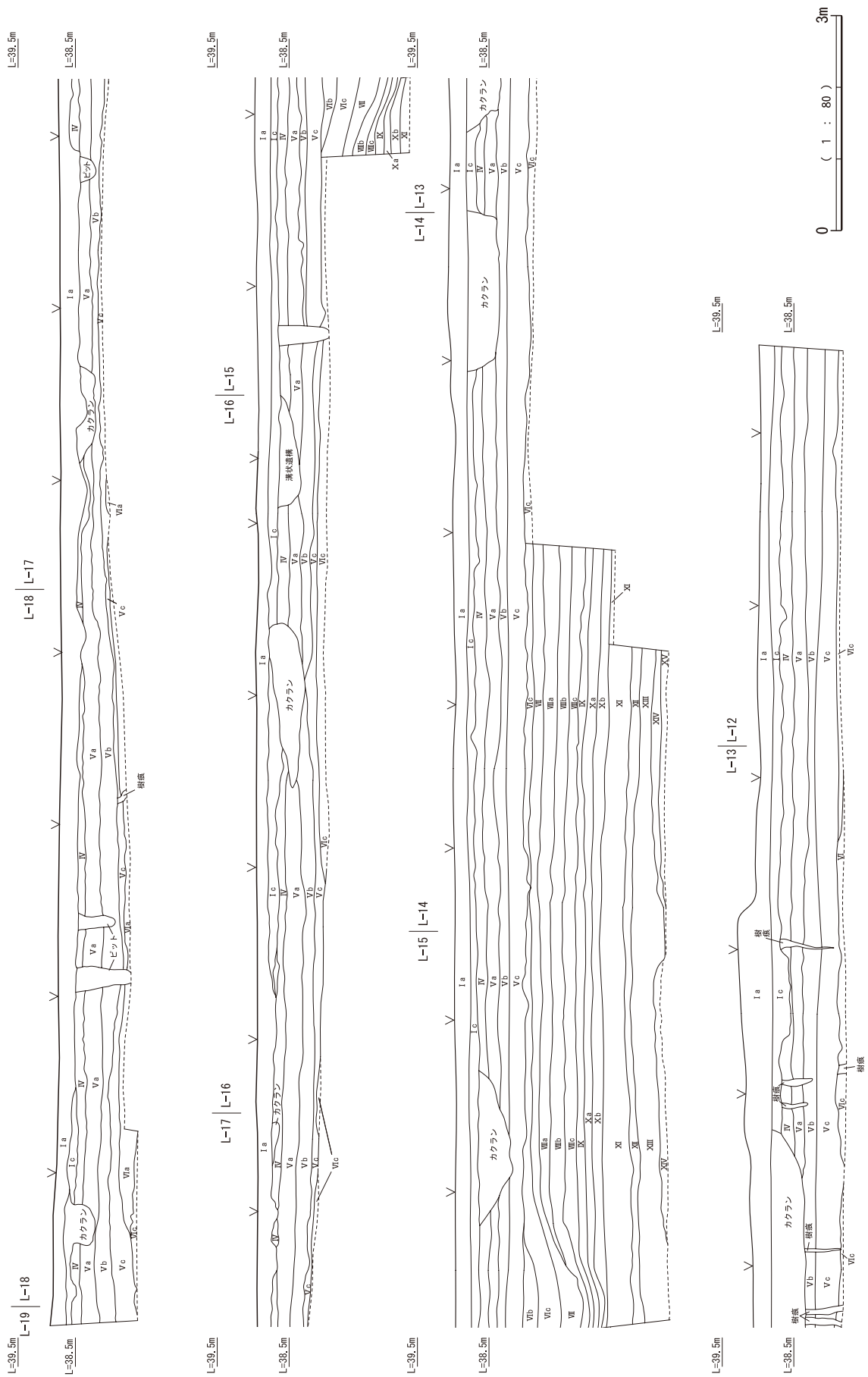


写真1 表土からVI層間の土層（I-14区）



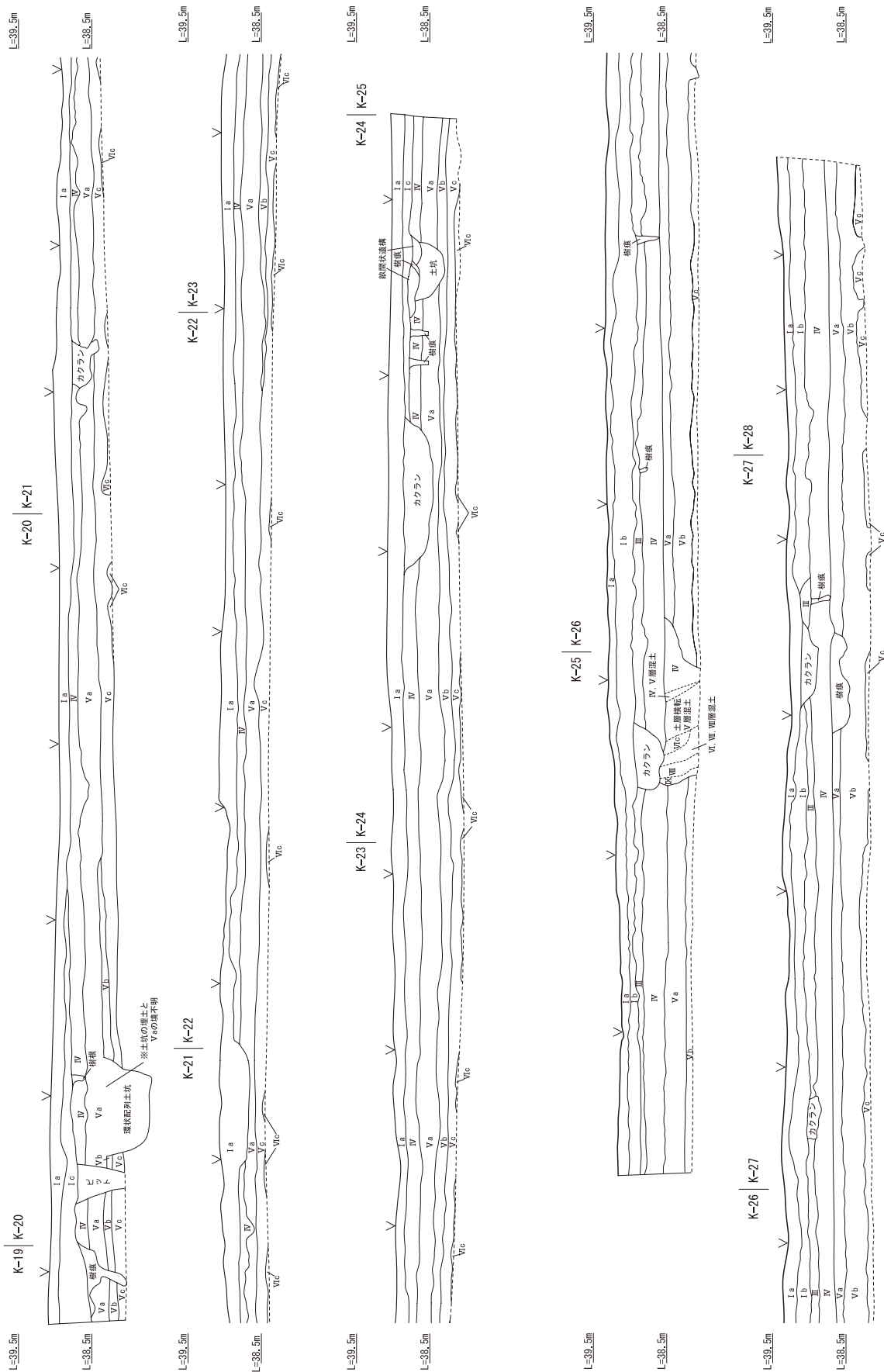
写真2 表土からXV層間の土層（L-15区）

① L-19~12区 西壁



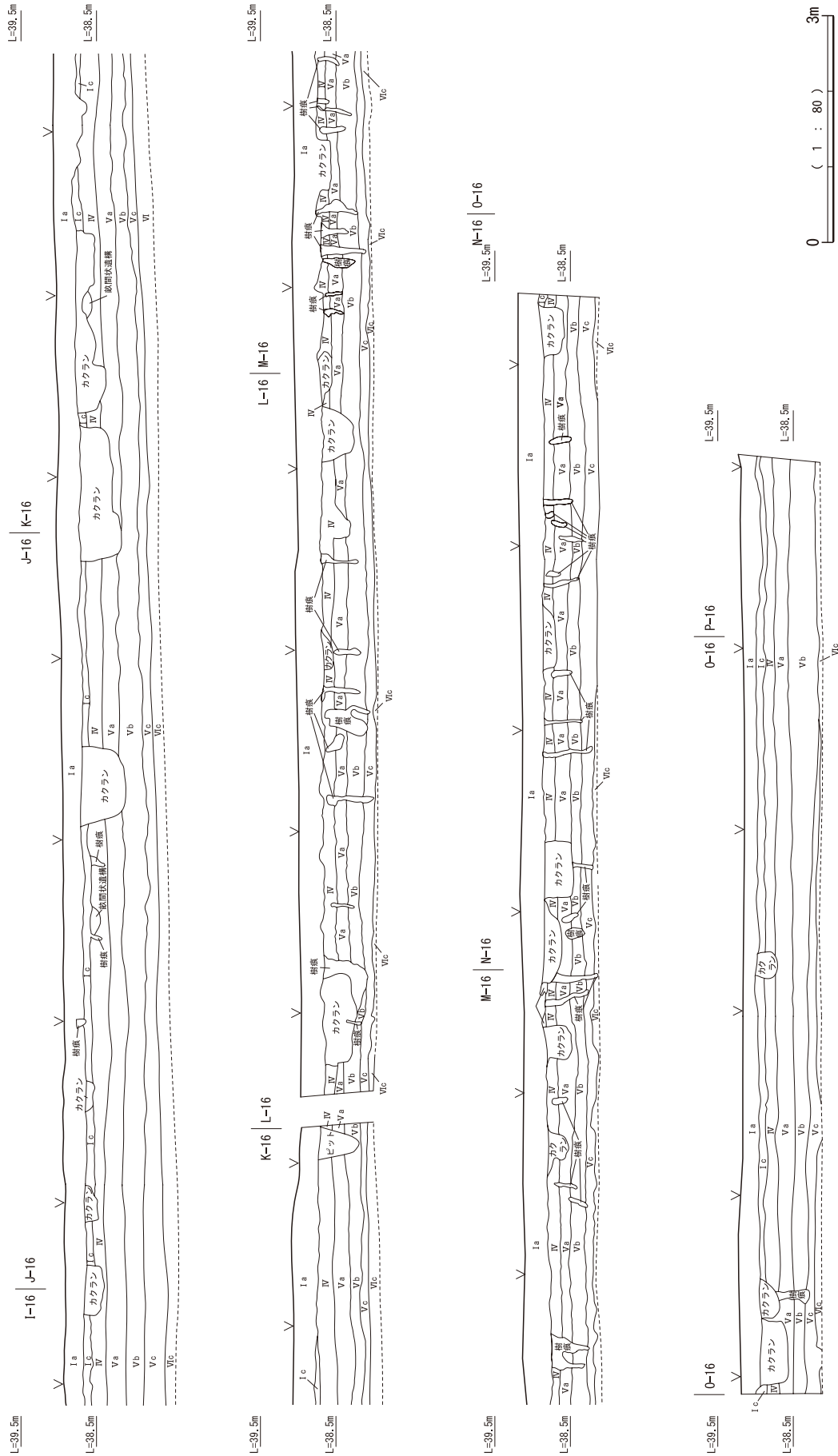
第6図 土層断面図①

## ② K-19～28区 東壁



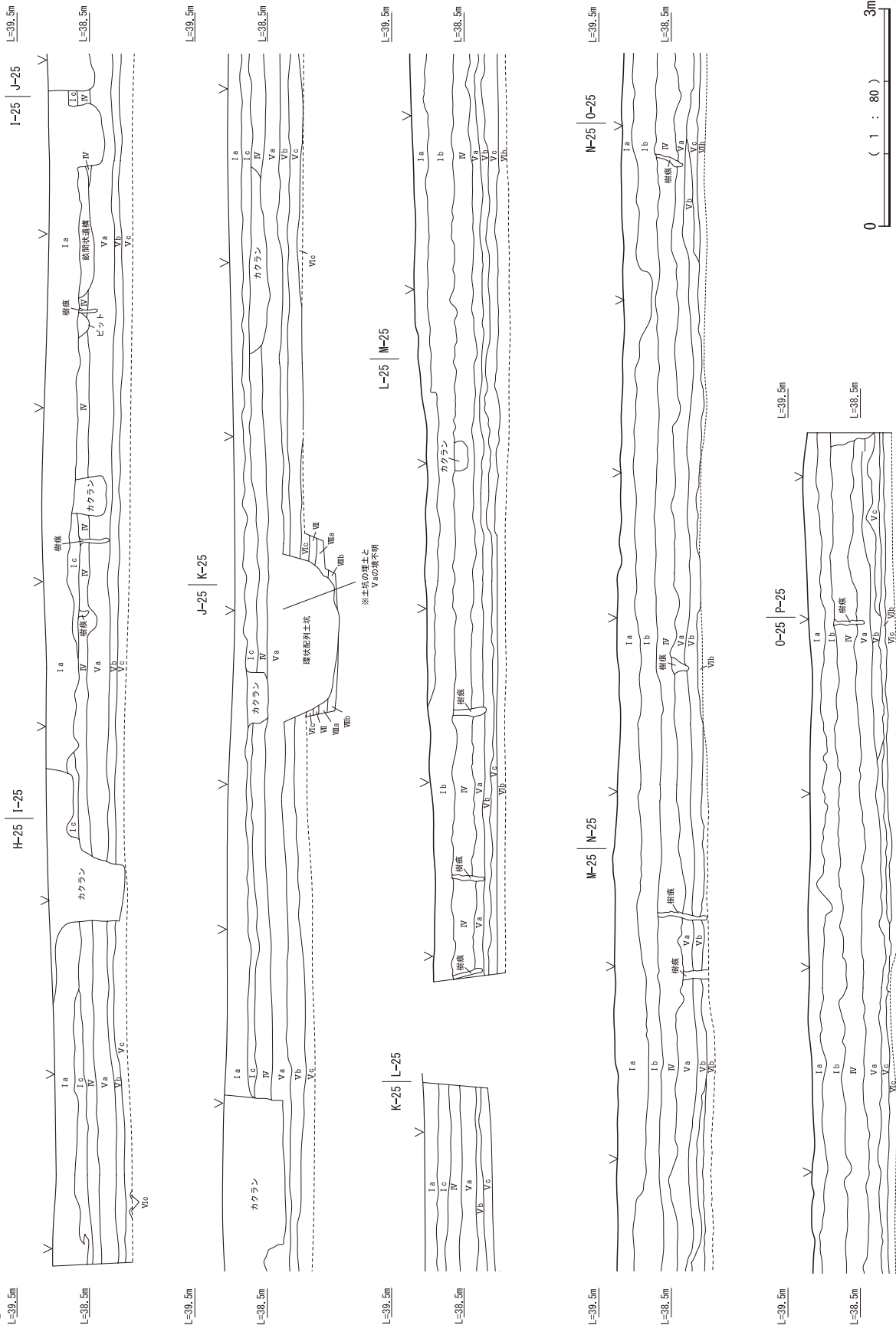
第7図 土層断面図②

③ I~P-16区 北壁



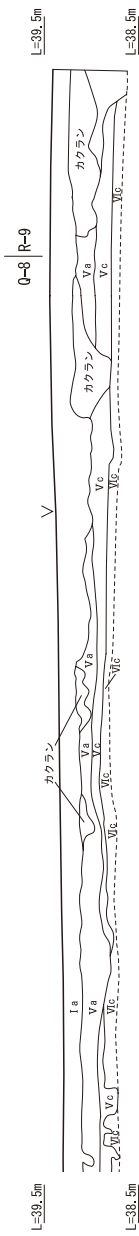
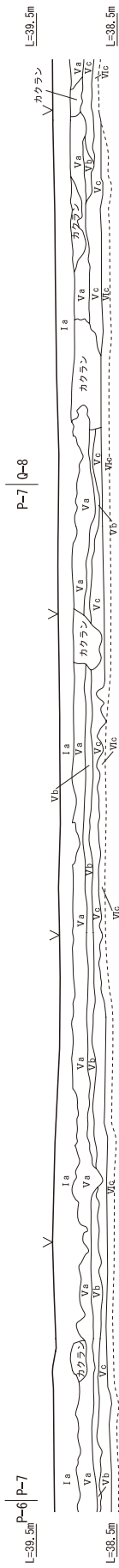
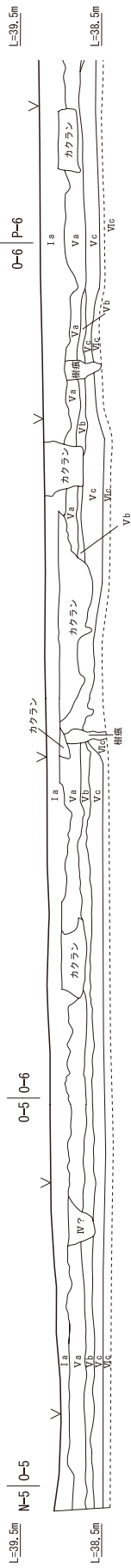
第8図 土層断面図③

# ④ H~P-25区 北壁

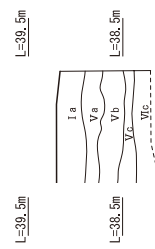
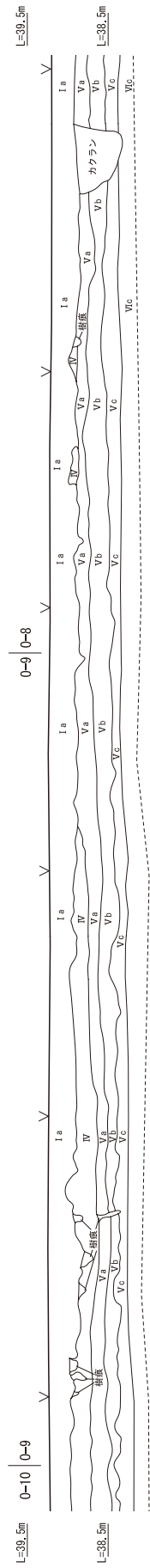
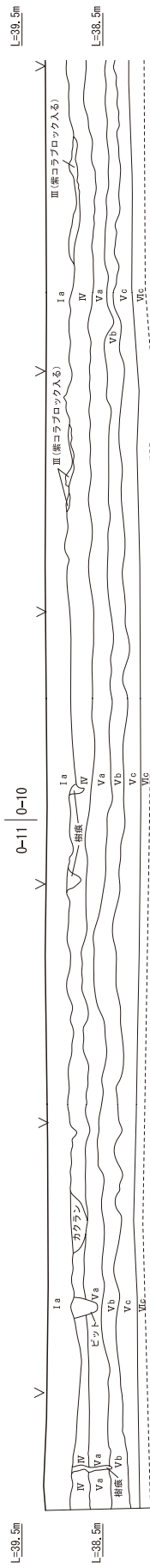


第9図 土層断面図④

⑤ N-5~R-9区 北壁

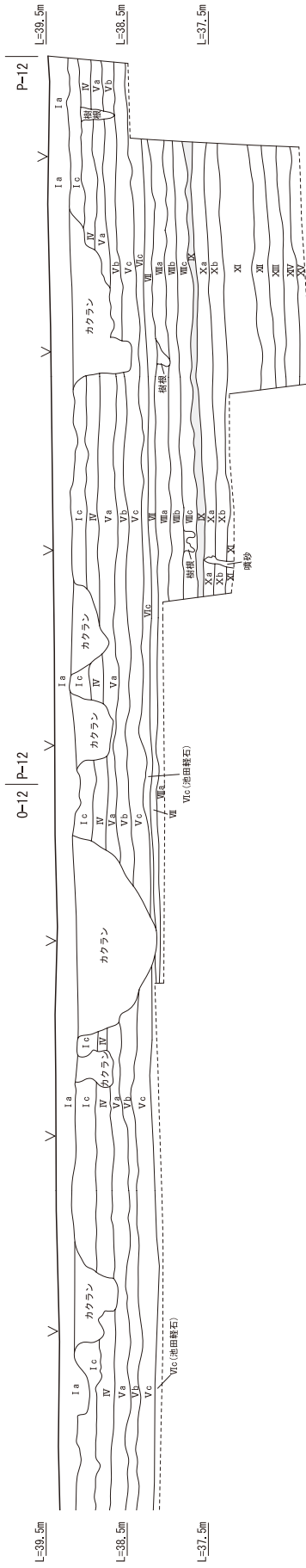


⑥ 0-11~8区 西壁

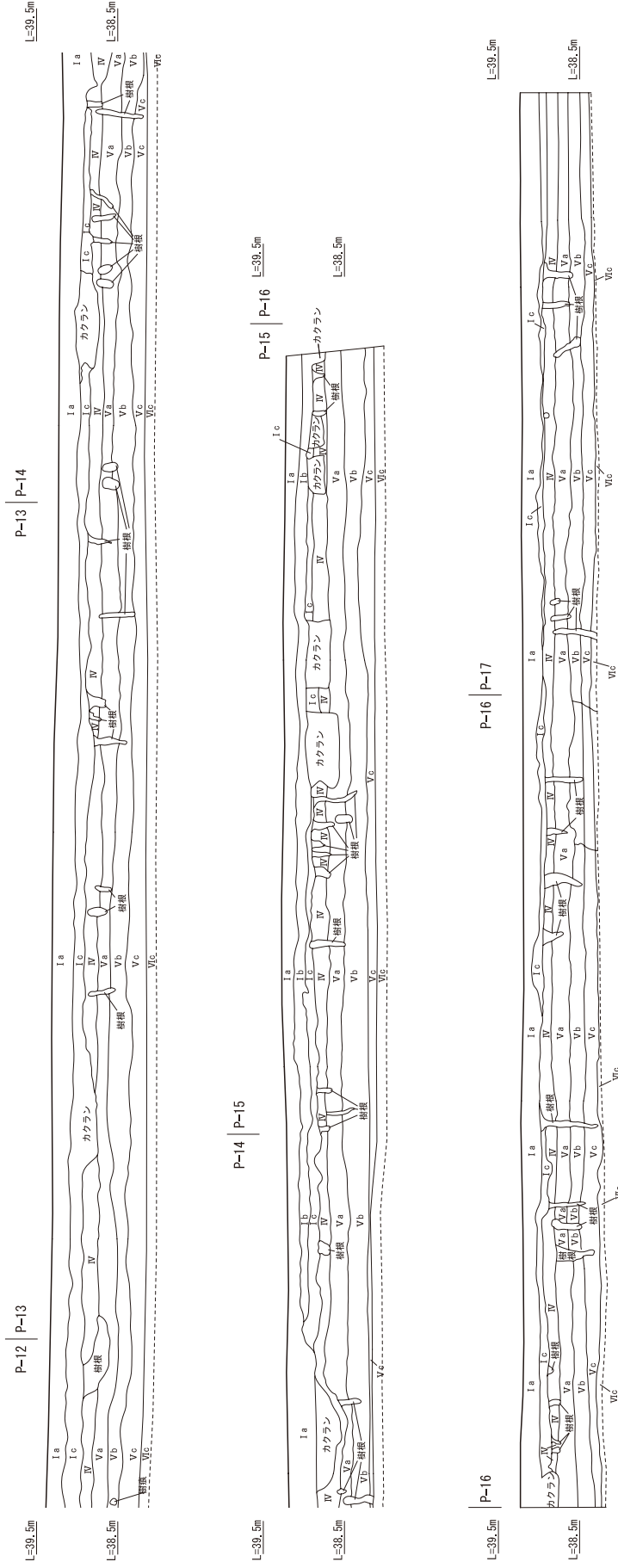


第10図 土層断面図⑤⑥

⑦ 0・P-12区 北壁

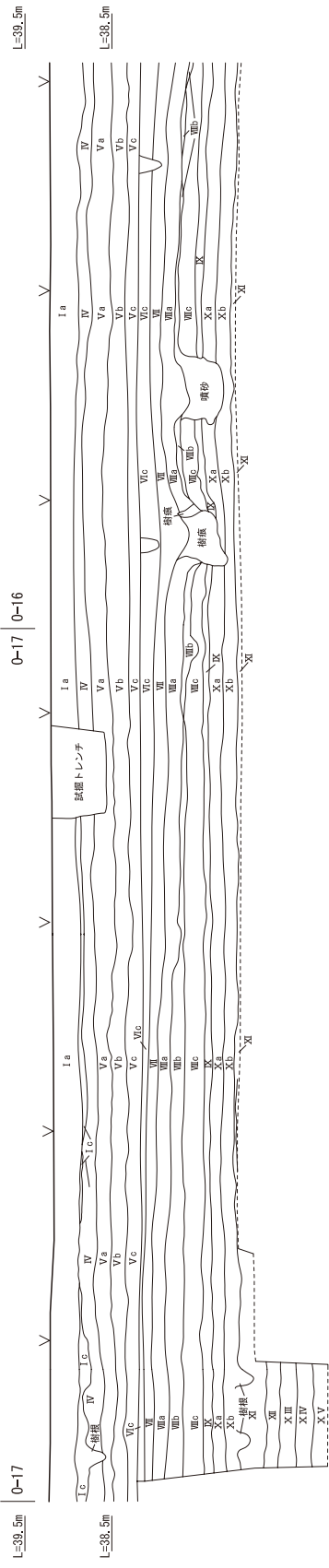


⑧ P-12~17区 東壁

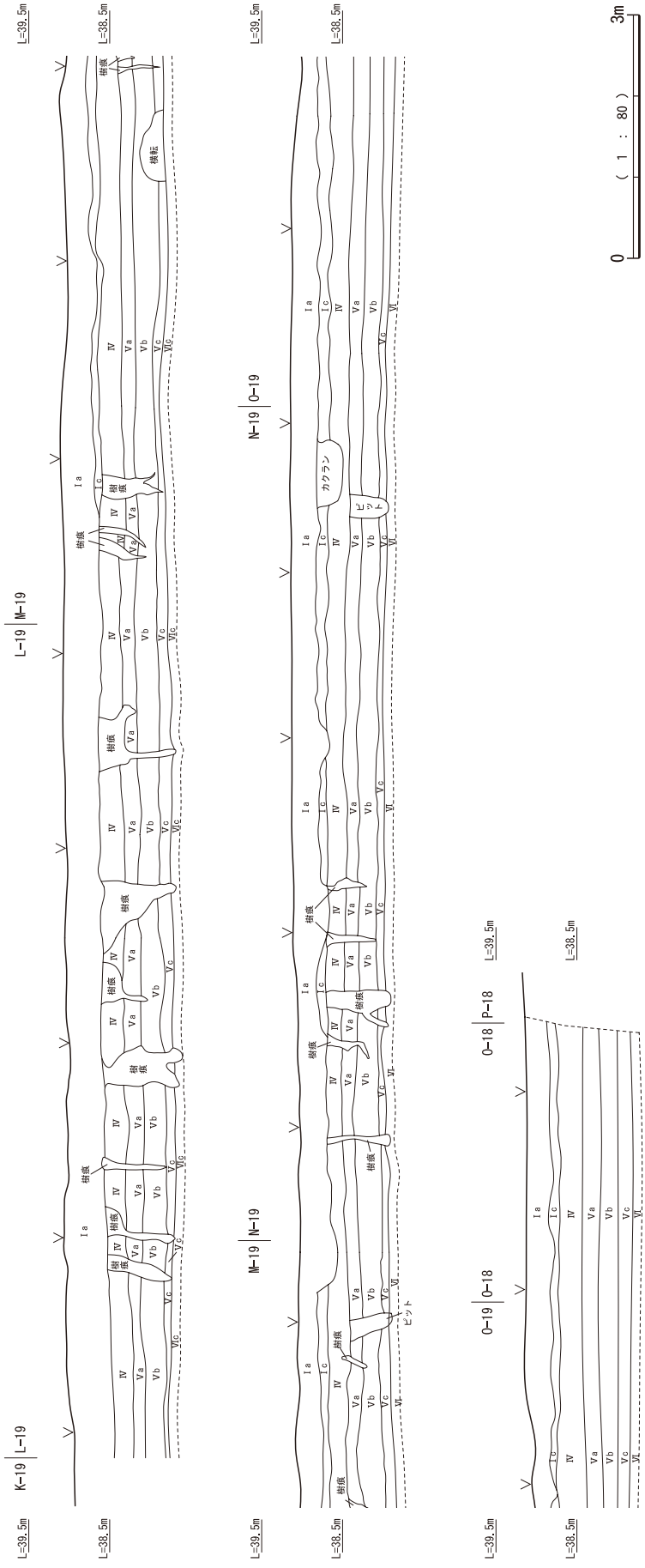


第11図 土層断面図⑦⑧

⑨ 0-17・16区 西壁



⑩ L-19~0-18区 北壁



第12図 土層断面図⑨⑩

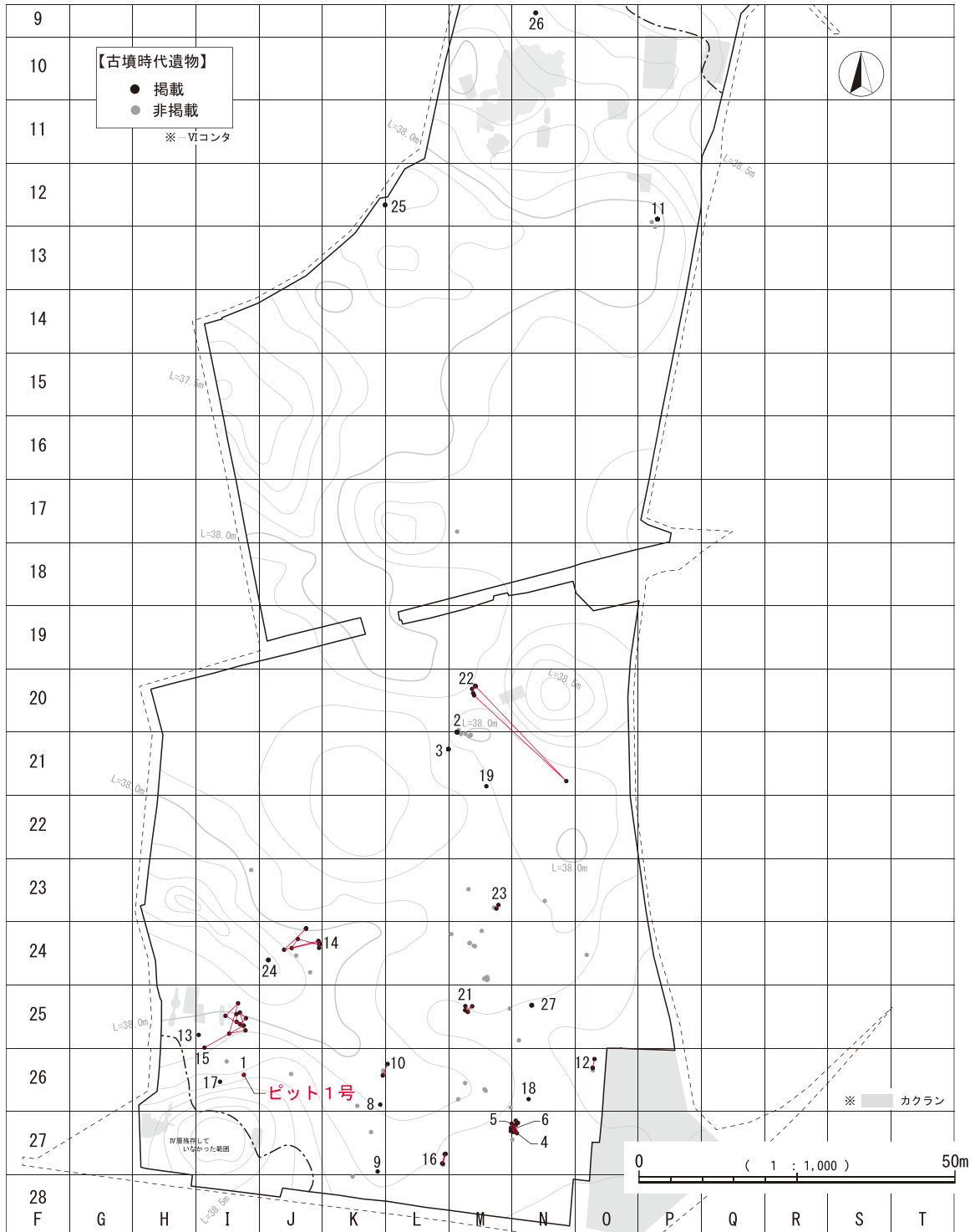
## 第4章 調査の成果

### 第1節 古墳時代の調査成果

#### 1 調査の概要

古墳時代の包含層はⅢ層と考えられるが、ごく一部の窪地を除き削平を受けており残存していない。よってⅣ層上面で遺構の検出を行い、紫コラを含まず当時代の遺物を含むものを古墳時代の遺構とした。24区以南のⅣ・Ⅴ層で遺物が多く出土する箇所ではミニトレンチを設定するなどして遺構の検出に努めたが、地層の乱れがみら

れたことや、遺構埋土の可能性が高い黒褐色土がⅤa層土とほぼ同じ色調であることなどから、Ⅴa層での検出も困難であった。結果、遺構は1基のみしか検出できなかったが、他にもあった可能性がある。遺物は計144点を確認した。ただし、胴部小片などの区別は困難であり、弥生時代とした遺物の中にも本時代の遺物が含まれている可能性がある。



第13図 古墳時代遺構配置・遺物出土状況図

## 2 遺構

### ピット1号 (第14図)

I-26区において、IV層の調査中に検出された。検出面における平面形は円形に近く、直径は約30cm、深さ11cmである。北側壁面は立ち上がり急で、底面は緩やかなボール状をなしている。埋土は全て同じ少量のパミスを含む黒褐色土であり、II・III層土の一部と考えられる。内部からは土器の胴部から底部が、逆さまの状態で見出された。口縁部等の上部片は周辺の包含層を精査したが確認できなかった。

遺構内出土の1について、形状や周辺から出土した遺物から、東原式段階の大甕か壺と考えられる。底面は径約7cmで平坦であるが、中央部がやや上げ底で、底部から胴部へ直線的に広がる。底部外面は横方向に、胴部は上部斜め方向に向け工具でナデ調整を施している。焼成が甘く、表面にやや剥離がみられる。

### 3 遺物 (第15～17図)

遺構外で出土した遺物のうち、26点を図化した。2～10は甕であり、2・3は中津野式、4～6は東原式、7は辻堂原式と考えられる。2と3は頸部が「く」の字に屈曲し、胴部中位から上部外面にかけて煤が付着する。2は内面下部にも煤が付着する。3は2と比較し頸部の屈曲が弱く、ゆがみが大きく器面調整が雑である。

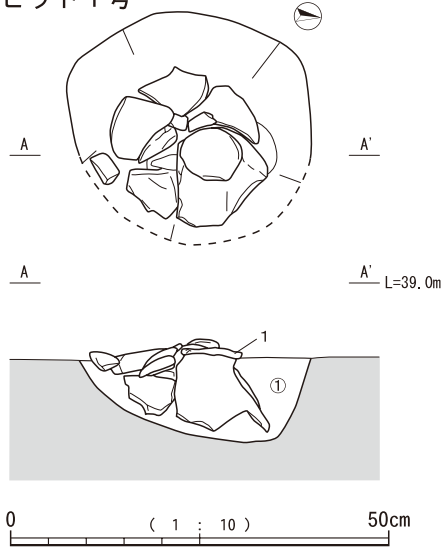
4～6は頸部が弱く屈曲し上方向に立ち上がり、外面に煤が付着し、内外面とも板状の工具と思われるナデ調整が施される。5は脚部が直線的に開き、脚部内面上部は平坦である。6は外面に付着する炭化物の科学分析を行い、放射性炭素年代測定では西暦3世紀頃、窒素安定

同位体分析ではC<sub>3</sub>植物(稲・小麦・大豆・菜種等)か草食動物に由来する可能性が考えられるとの結果が出ている(P89～91第5章第2節参照)。7は口縁部が直線的に立ち上がり、口唇部付近でやや外反する。頸部に1条の突帯を貼り付け、布目の刻みを施す。8～10は底部で、脚部は短く「ハ」の字に開く。8は外面の凹凸が多く、粘土の輪積みや指押さえの痕が残る、脚部は厚い。9は脚部内外面に丁寧な横ナデが施され、胎土に金雲母が多く入る。10は脚部内面上部にミガキが施されている。

11～14は丸底の甕で、中期から後期頃と推定される。11は壺と形状が似ており、底部から上部へ向けて膨らみながら立ち上がり、底面から高さ約20cmで最大径となる。頸部に1条の突帯が付き、約1cm程度の間隔で刻み目が入る。口縁部は外反しつつ、端部はやや内側に立ち上がり屈曲する。胴部底面近くはミガキが施され、頸部から口縁部外面に煤が多く付着し、頸部内面には粘土の輪積み痕が残る。12は頸部で、口縁部方向へやや外反して立ち上がり、外面に工具ナデの痕が残る。13は底部で、内面は黒褐色で底はやや平坦となり、外面上部に荒いハケメの痕跡が残る。14は胴部外面の中位より上に煤が付着している。頸部の突帯より上の口縁部が無く、割れ目がほぼ平行になることから、甕等を上に乗せ何らかの道具等で固定し、周囲より火を焚いて調理を行った可能性がある。

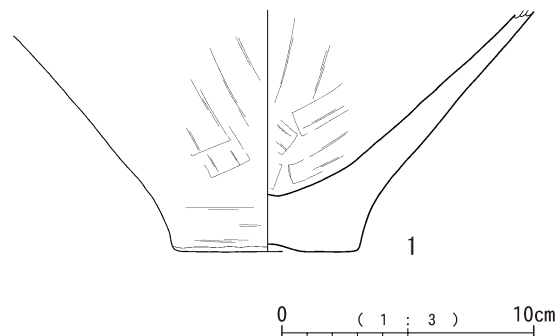
15～20は高坏で前期から中期頃のものと考えられる。15・16は茶褐色を呈しており、赤色土を被せたと考えられる。15は坏部・脚部共に段を有し、口縁部はやや外反する。脚部内面にはへら状の工具で下方向へナデ付けた痕跡が明瞭に残る。16は坏部のみで、平坦な底面から高くほぼ垂直に立ち上がり、中段より口縁部に向けて外反する。17・18は坏部の底面で、脚部との接合に粘土紐を用いた痕跡が残る。17は外面、18は内面が茶褐色を呈しており、化粧土を用いたと考えられる。19・20は脚部の筒状部分で、19は内面を幅4mm程度の工具で下方向に撫でつけた痕跡が残る。20は内外面ともに丹塗りが施され、坏部と裾部がわずかに残っており、筒状部の高さは4.5cm程度と想定される。

ピット1号

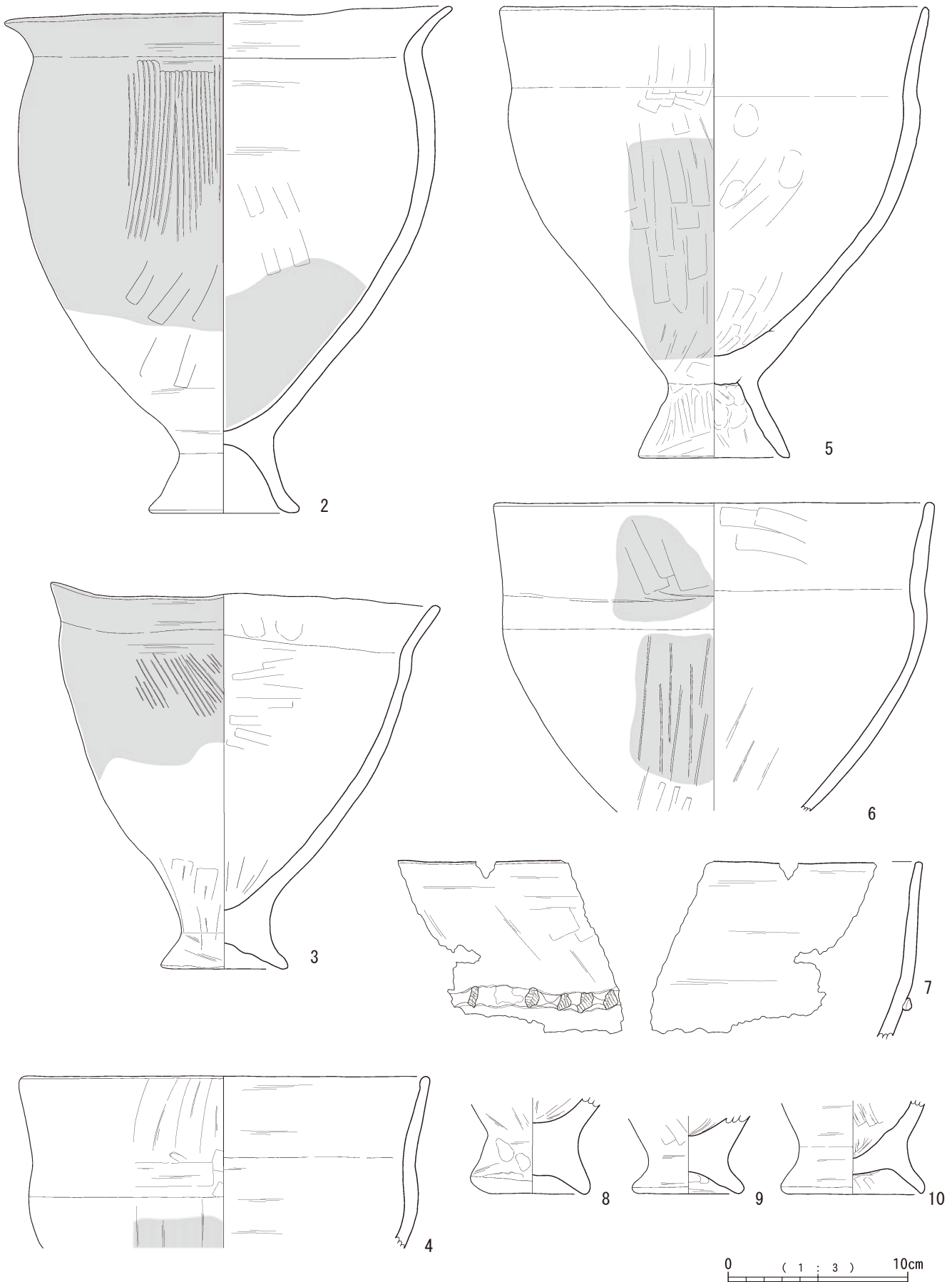


#### 埋土注記

①黒褐色土(Hue 10YR2/3) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスをわずかに含む シルト質



第14図 ピット1号・遺構内出土遺物

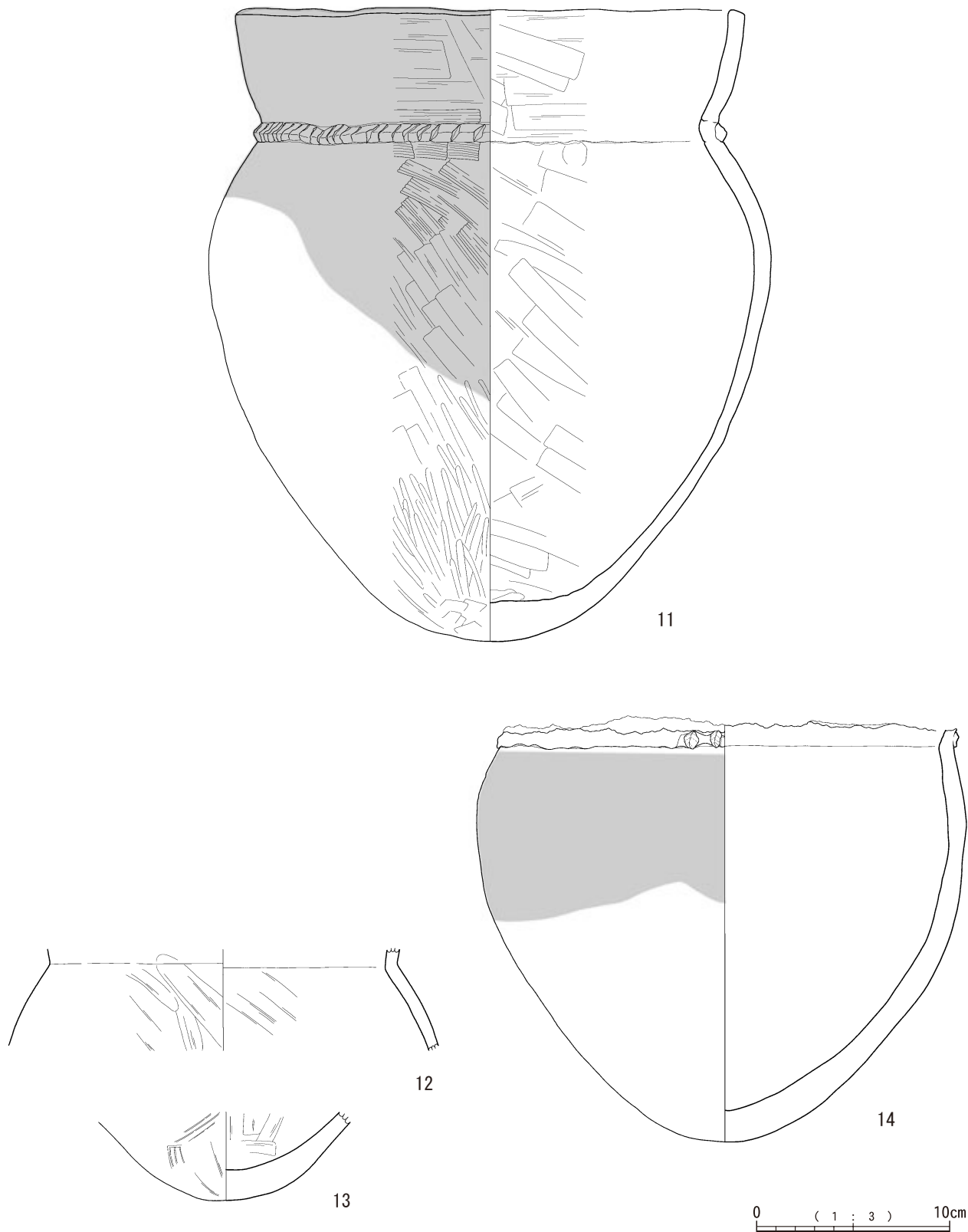


第 15 图 古墳時代出土土器 1

21・22は蓋である。どちらも頂部がやや肥厚し、縁部で「く」の字に外側へ屈曲する。21は外面にヘラと思われる工具の痕が明瞭に残り、内面は丁寧なナデが施される。22は縁部内面に煤が残り、内側表面に円状の剥離が

多くみられる。

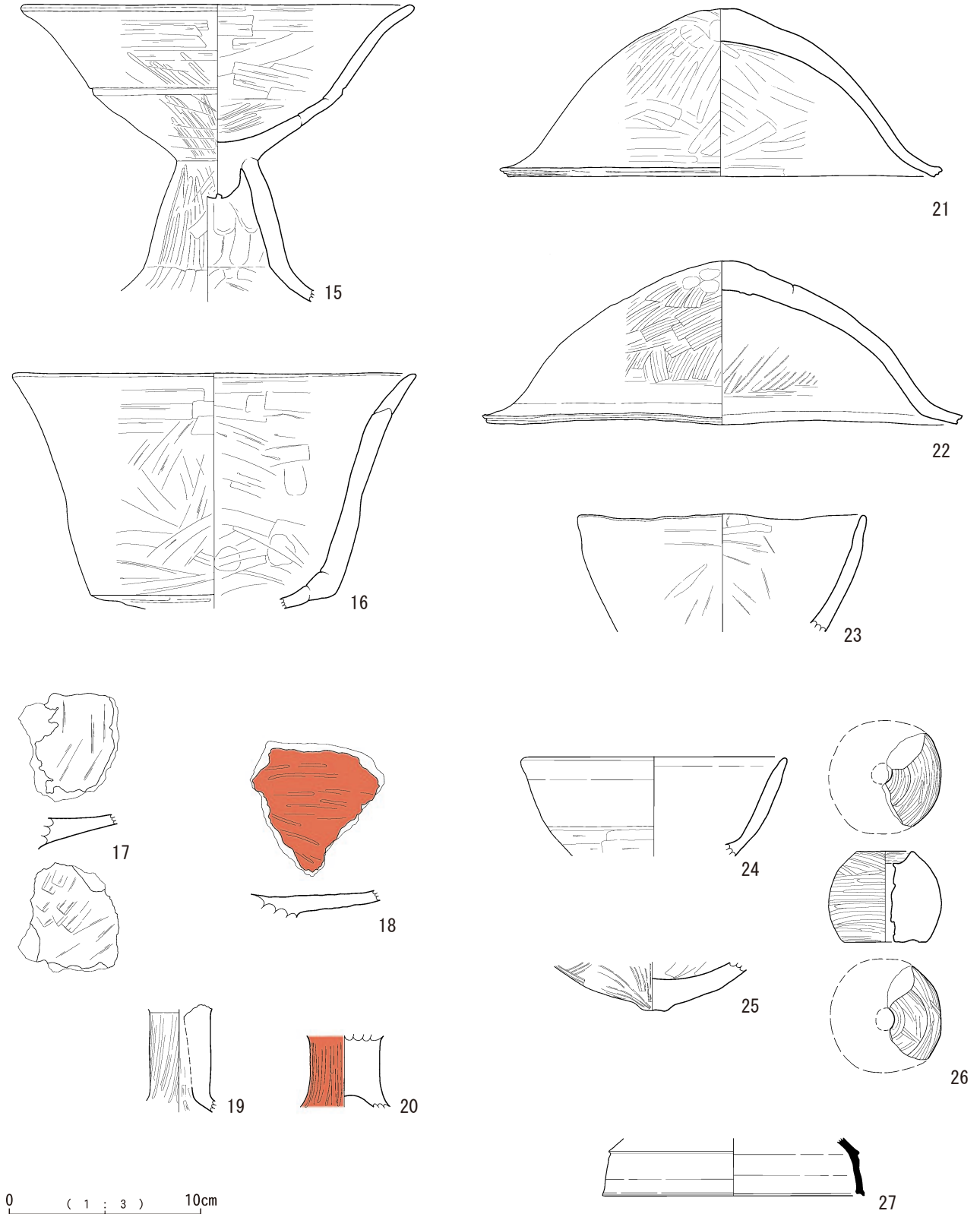
23・24は鉢である。23は口縁部がやや波状となり、ケズリの後、工具でやや雑にナデて調整している。24は外面赤褐色を呈し胴部は少し膨らみながら立ち上がる。胴



第16図 古墳時代出土土器2

部下部はケズリが残り、回転ナデ調整を施している。25は壺の底部で、底面に乳状の突起が残る。26は用途不明の土製品で、茶褐色を呈し、外面は丁寧なミガキが施される。中心部に粗雑に整形された穴がみられ、紡錘車の

可能性がある。27は須恵器の坏蓋の口縁部で、口径が約14cmでやや外反し、灰褐色を呈する。古墳時代中期頃のものと考えられる。



第17図 古墳時代出土土器3

第5表 古墳時代遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎土	備考
14	1	I-26	-	SP2293-1	大甕 か壺	胴 ~ 底部	-	7.0	-	工具ナデ	工具ナデ	Hue7.5YR 浅黄橙8/4	Hue7.5YR にぶい橙7/4	白色砂礫、赤色砂 礫、石英、角閃石	ビット 内
15	2	M-20 ・21	V a	SU4009-1 ~ 3・8・ 9・14 ~ 20	壺	口縁 ~ 底部	24.5	8.5	28.1	ハケメ・工具ナ デ・ヨコナデ・ ナデ	工具ナデ・ヨ コナデ	Hue7.5YR 褐4/4	Hue7.5YR にぶい褐5/4	白色砂礫、石英、 長石	内外煤 付着
	3	L・M -21	V a	SU4033-1・2・3・4・5・6	壺	口縁 ~ 底部	21.6	7.0	21.4	ハケメ・ケズ リ・ヨコナデ	工具ナデ・ナ デ・指頭圧痕	Hue7.5YR 褐4/3	Hue10YR 明黄褐7/6	白色砂礫、石英、長石、 角閃石	煤付着
	4	N-27	IV	22178・21888・21897・218 94・22180・22178	壺	口縁 ~ 胸部	(22.8)	-	-	工具ナデ・ ナデ	工具ナデ・ ナデ	Hue7.5YR 褐灰4/1	Hue7.5YR 褐灰4/1	白色砂礫、石英、長石、 角閃石	煤付着
	5	M-27	IV	22643	壺	口縁 ~ 底部	(23.8)	(8.4)	25.0	工具ナデ・ハケ メ・ナデ	工具ナデ・ ナデ・指頭圧 痕	Hue5YR 橙6/6	Hue10YR にぶい黄橙6/4	白色砂礫、石英、長石、 角閃石	煤付着
	6	N-27	IV	21887・22178・21899	壺	口縁 ~ 胸部	(24.4)	-	-	工具ナデ	工具ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue7.5YR 褐灰4/1	白色砂礫、赤色砂 礫、石英、長石、角閃 石	煤付着 ・年代 測定
	7	N-24	IV	一括	壺	口縁 ~ 胸部	-	-	-	工具ナデ・ナ デ	工具ナデ・ナ デ	Hue7.5YR にぶい橙7/3	Hue5YR 橙6/6	白色砂礫、石英、長石、 角閃石	
	8	K-26	V	23685	壺	底部	-	(6.5)	-	指頭圧痕・工 具ナデ	工具ナデ	Hue7.5YR にぶい橙7/4	Hue7.5YR にぶい褐5/3	白色砂、石英、長石、 角閃石	
	9	K-27	V	23422	壺	底部	-	(6.2)	-	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	Hue5YR 赤褐4/6	Hue7.5YR 褐灰4/1	白色砂、石英、長石、 角閃石、金雲 母	
	10	L-26	IV	23293・20639	壺	底部	-	8.0	-	工具ナデ	工具ナデ・ミ ガキ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue5YR 明赤褐5/6	白色砂礫、石英、長石、 角閃石	
	16	11	P-12	IV	SU131-1・6 ~ 8・12 ~ 16・19 ~ 21・24・26・28・30 ~ 33・37・39	壺	口縁 ~ 底部	26.2	-	32.3	ハケメ・工具ナ デ・ミガキ	工具ナデ・指頭圧 痕・ナデ	Hue10YR 赤5/8	Hue2.5YR 明赤褐5/6	白色砂礫、赤色砂礫、 石英、長石、角閃石
12		O-26	IV	21431・21435	壺	頸部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	Hue7.5YR 黒褐3/1	Hue5YR 明赤褐5/6	白色砂、石英、長石、 角閃石	
13		I-25	V a	26847	壺	底部	-	-	-	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue5YR 黒褐3/1	白色砂礫、石英、 角閃石	
14		J-24	IV V a V a	5598・7408・7417・11619・SU821- 2・3・4・5・SD1534一括 16335・16336・16337 SU1872-4 ~ 13・15 ~ 18	壺	胴 ~ 底部	-	-	-	ナデ	ナデ	Hue5YR にぶい赤褐5/4	Hue7.5YR にぶい褐5/4	白・赤色砂礫、石 英、角閃石、長石	煤付着
17	15	I-25	V a IV	20200・23768・28730・23785・ 27648・24755一括 20973・20473・22837・20741・22908一括	高坏	口縁 ~ 脚部	(10.4)	-	-	ハケメ 工具ナデ ナデ ヘラミガキ	ハケメ 工具ナデ ナデ 指ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/8	白色砂、石英、長石、 角閃石	
	16	L-27	IV	20584・20919・20905・20250	高坏	口縁 ~ 底部	(21.0)	-	-	ケズリ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・ハケ メ・ナデ・指 頭圧痕	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue7.5YR 褐灰6/1	白色砂礫、赤色砂 礫、石英、角閃石	
	17	I-26	IV	20717	高坏	底部	-	-	-	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue7.5YR にぶい橙7/3	白色砂、赤色砂、石英、 角閃石	
	18	N-26	IV	22728	高坏	胸部	-	-	-	ミガキ	ナデ	Hue7.5YR にぶい橙7/3	Hue5YR 橙6/6	白・赤色砂、石英、 角閃石、長石	
	19	M-21	IV	29651	高坏	脚部	-	-	-	ミガキ	工具ナデ・ナ デ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue7.5YR 褐灰5/1	白色砂、赤色砂、 石英	
	20	O-28	カクラン	一括	高坏	脚部	-	-	-	ミガキ	ナデ	Hue2.5YR 赤褐4/8	Hue2.5YR 赤褐4/8	白色砂、赤色砂、石英、 角閃石	丹塗
	21	M-25	V a IV	23137・24495・24423 22704	蓋	頂部 ~ 端部	(23.0)	-	8.7	工具ナデ・ナ デ・指頭圧痕	ハケメ・工具ナ デ・ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	白色砂、赤色砂、 石英、長石、角閃 石、金雲母	
	22	N-21 M-20	IV IV V a	31302 30747・30749・30751・30748 32849	蓋	頂部 ~ 端部	24.4	-	8.5	ハケメ・工具 ナデ・ 指頭圧痕	ハケメ・工具 ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR にぶい橙7/4	白色砂礫、赤色砂礫、 石英、長石、角閃石	
	23	M-23	IV カクラン	21978・21977一括 一括	鉢	口縁 ~ 胸部	(7.5)	-	-	ケズリ・工具ナ デ・ナデ	ケズリ・工具 ナデ・指頭圧 痕	Hue7.5YR 黒褐3/1	Hue5YR 褐灰4/1	白色砂礫、赤色砂 礫、石英、長石	
	24	J-24	IV	SU820-1・2・3・4・5一括	鉢	口縁 ~ 胸部	13.8	-	-	回転ナデ・ ケズリ	回転ナデ・ナ デ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue7.5YR 橙7/6	白・黒色砂礫、石英、 角閃石	
	25	K-12	V a	31692	壺	底部	-	-	-	ハケメ・ナデ	工具ナデ・ナ デ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙6/6	白色砂礫、赤色砂、 石英、角閃石、長 石	
	26	N-9	V a	6976	不明	-	-	-	4.8	ミガキ	ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	白色砂礫、赤色砂、 石英、角閃石、長 石	紡錘 車?
	27	N-25	IV	22845	須恵器 坏壺	口縁部	(13.7)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue5Y 灰オリーフ6/2	Hue5Y 灰オリーフ5/2	-	

## 第2節 古代の調査成果

### 1 調査の概要

古代の遺物包含層と考えられるⅡ・Ⅲ層のうち、Ⅱ層は全て削平を受け、Ⅲ層も25区以南などのごく一部にしか残存していない。よって遺構の検出はⅣ層上面（Ⅳ層が削平されている箇所ではⅤa層）で行い、9世紀代とされる開聞岳由来の火山灰である紫コラを埋土に含む遺構を古代と認定した。紫コラ降下前の8世紀以前の遺構は、Ⅱ・Ⅲ層土主体で紫コラを含まない埋土のものと考えられるが、縄文時代や近世等の遺構との区別が困難であり、時期判定が可能な遺物等を含まない遺構は時期不明としている。

遺構は、掘立柱建物跡5棟、ピット1358基、土坑14基、古道9条、溝状遺構3条、畝間状遺構622条、埋設土坑1基が検出された。他に、古道であった可能性がある紫コラ集中域が1か所確認されている。古道と溝状遺構の違いは、埋土の硬化がみられるものを古道、そうでないものを溝状遺構と判断した。

遺構の時期は大別して畝間状遺構の構築以前と以後に分けられるため、その前後に分けて遺構配置図に示す。しかし、古道に関しては畝間状遺構構築後のものもあるが、まとめて畝間状遺構前の遺構配置図に入れている。遺物については、Ⅲ～Ⅴa層より出土した土師器及び須恵器等を、形状や調整・色調を見て古代と認定した。およそ、I・J-16・17区、K～M-25～27区に集中してみられる（第20・21図参照）。

### 2 遺構

#### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、全部で5棟検出された。柱痕跡が確認できたものは平面図に赤線で、埋土断面図に色付で示している。全て桁行3間・梁行2間で、1棟のみ北側に庇を持つ。主軸は主に南北方向が4棟、東西方向が1棟である。時期については、柱の抜き取り痕（柱痕跡とピット穴間の埋土。以下同じ）に紫コラが含まれていれば、紫コラ降下後の建物跡と推測される。また柱痕跡内の埋土は、紫コラの量が多ければ紫コラ降下からの時期が短く、少なれば長いと考えられる。特に紫コラが層序を保った状態の塊か、埋土のほとんどとなる場合は、紫コラが降下してすぐに柱穴に入ったと考えられ、紫コラの降下後から短い期間で建物の廃棄や移動等がなされた可能性が高い。

時期を区別すると1・4・5号は紫コラ降下前に建築され、降下後に廃棄・移動等、2・3号は紫コラ降下後の建築と考えられる。遺物分布は、1・4・5号の周辺は多く、2・3号の周辺は少なくなっており、これらの違いは居住期間の長短や居住する建物であったか否かなどに関係すると考えられる。また、2・3号の柱痕跡は1号に比べ細いという違いがある。

#### 掘立柱建物跡1号（第22・23図）

I・J-15・16区のⅤa層で検出された。規格は桁行3間、梁行2間、大きさは約5.7m×3.5mで、主軸は北北東-南南西方向である。柱痕跡に紫コラが多量に含まれており、建物（柱）の除去は降下から間もない時期と考えられる。P4は焼土の混入がみられる。柱痕跡はP1・5・7の3基のみ確認でき、P3・4は柱の抜き取り痕と考えられる埋土が側面にみられる。古道4を切っており、これより新しいと考えられる。

遺物は柱穴内より18点出土しており、そのうち土師器が7点含まれ、他は縄文～弥生時代のものか時代不明遺物であった。出土した土師器のうち4点を掲載した。なお、28・29はP3、30はP4、31はP7から出土した。28は坏、29～31は甕である。28は底部が無調整でヘラ切りの際の粘土がはみ出している。外面は、柁目がはっきりしたハケ状の工具で回転ナデを行った痕跡が残る。口唇部内面に墨が明瞭に付着しており、墨入れに使用した可能性がある。29・30は胴部がやや張り出し、頸部が厚く、口縁部は斜め上方に外反するなど形状は近い。調整は29の外面胴部にハケメを縦方向に全面、横方向に間隔を空けて施している。内面はケズリ後にナデを施しており、他の甕と比較し丁寧な作りである。30は縦方向のハケメの後、間隔を空けて横方向にナデ調整を施している。31は胴部が張り出さず直線的で、表面にやや凹凸がみられる。

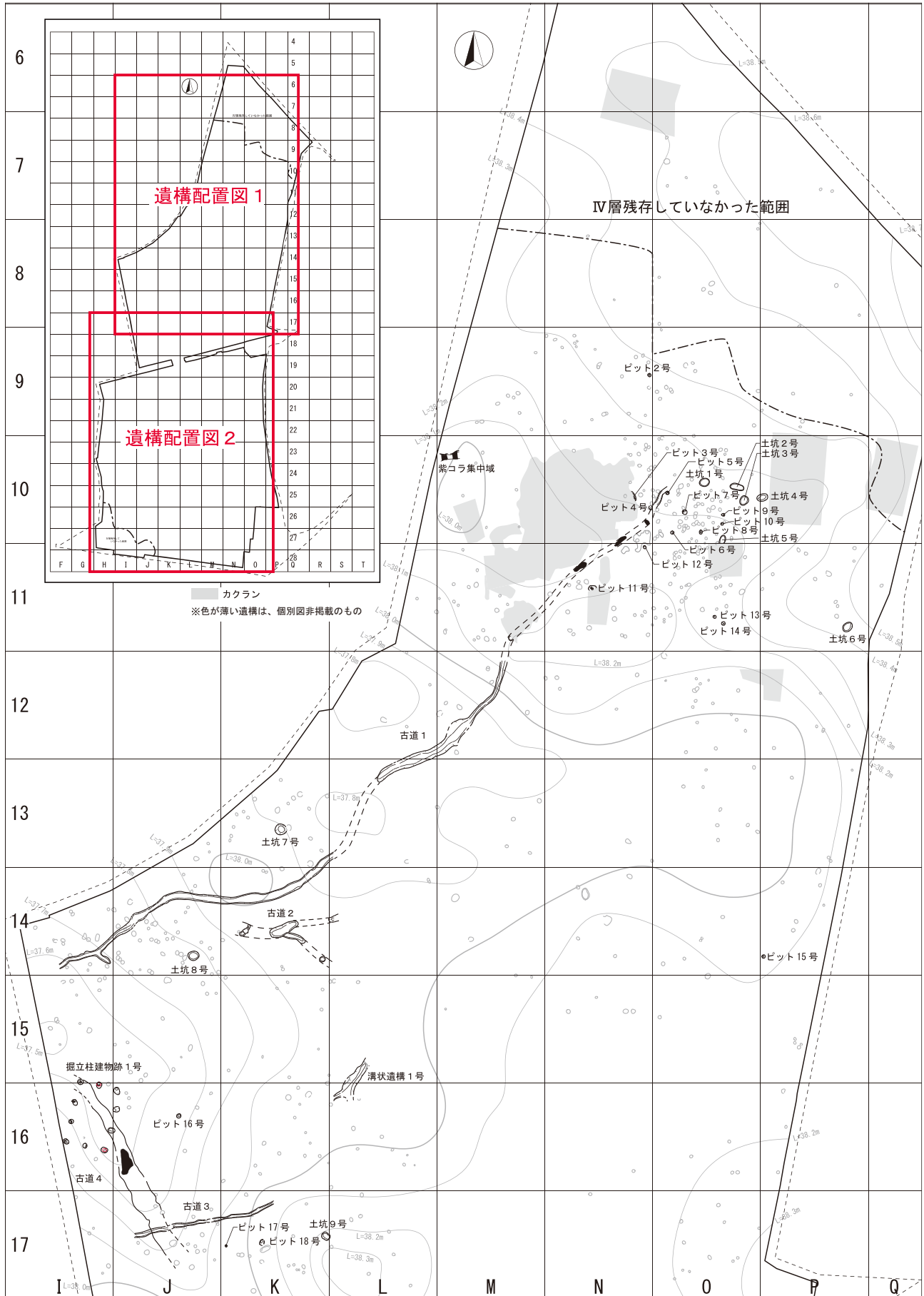
#### 掘立柱建物跡2号（第24図）

J-23区のⅣ層で検出された。規格は桁行3間、梁行2間、大きさは約5.4m×4mで、主軸は東北東-西南西方向である。柱穴はおおよそⅥc層（池田降下軽石）上面まで掘り込まれ、全ての柱穴において柱痕跡が確認された。柱の抜き取り痕に紫コラが含まれており、柱痕跡には含まれていないため、紫コラの降下後に建築されたと考えられる。柱痕跡の平面径は約15～20cmである。

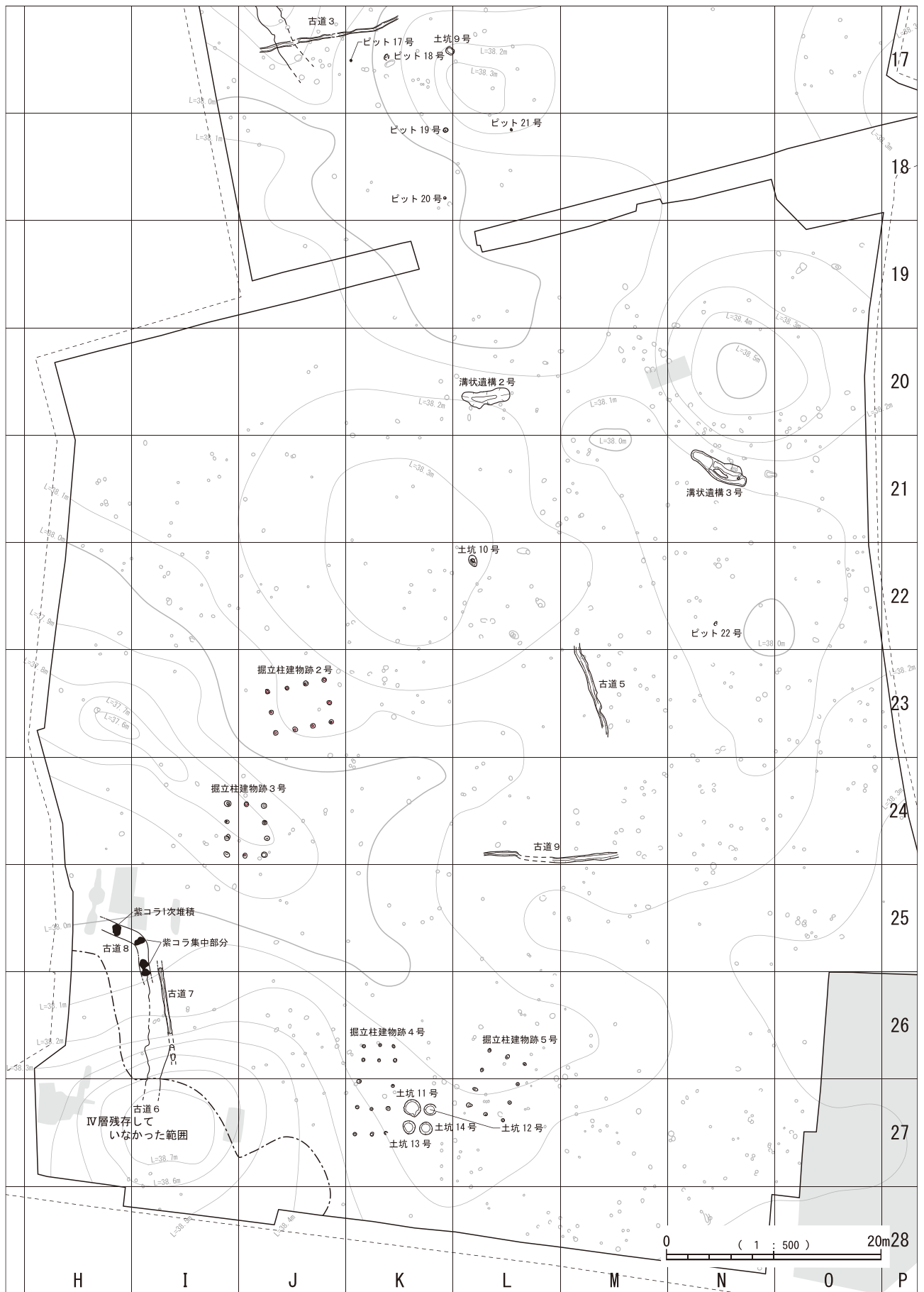
遺物は土器小片31点（うち土師器6点）、石器片3点が出土し、そのうち石器1点を掲載した。32は石鏃で、P3より検出された。黒曜石製であり、内部が黒色及び透明で、最大長1.75cm、最大幅1.35cmである。尖端等に欠損部がみられる。

#### 掘立柱建物跡3号（第25図）

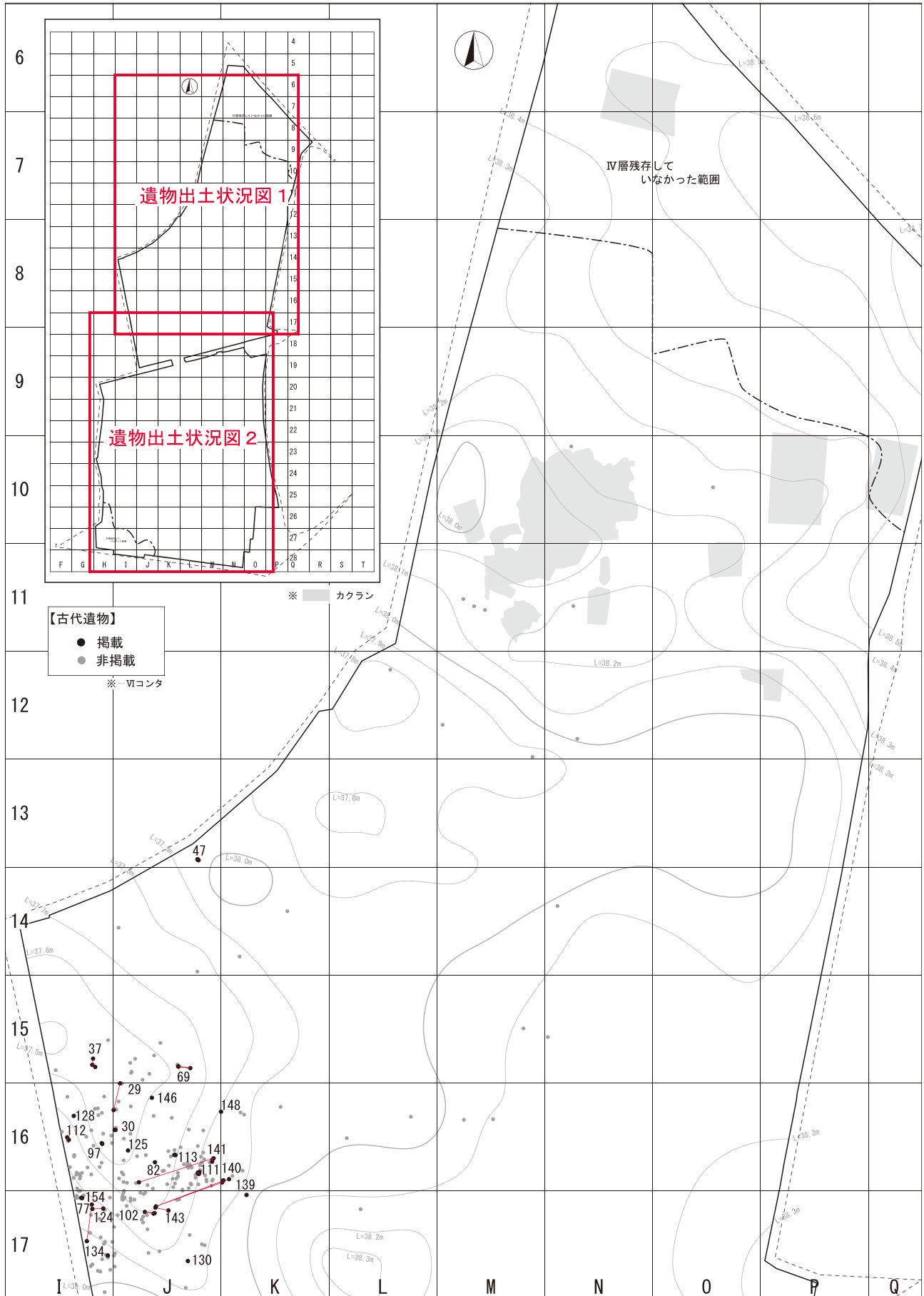
I・J-24区のⅣ層下部～Ⅴa層上面付近で検出された。規格は桁行3間、梁行2間、大きさは約4.7m×3.5mで、主軸は南北方向である。柱痕跡は3基の柱穴で確認され、柱痕跡の平面径は15～20cm程度である。埋土の状態をみると、柱の抜き取り痕やそれに近いと思われる埋土に紫コラが含まれている場合が多いことから、紫コラが降下した後に作られたものと考えられる。遺物は時代不明のもの10点、古代の土師器4点が出土したが、いずれも小片のため掲載しなかった。

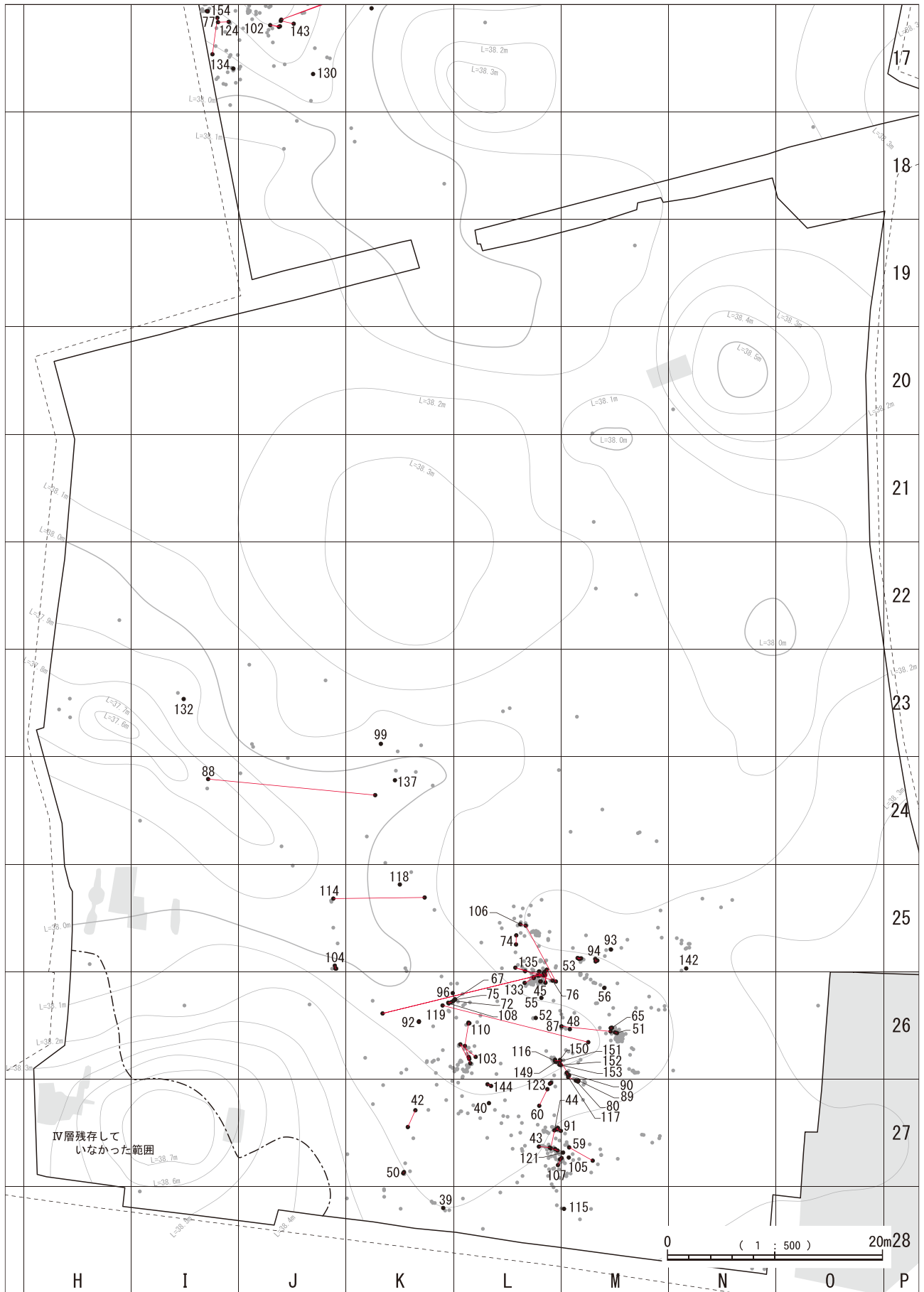


第18図 古代遺構配置図1（畝間状遺構等以外）

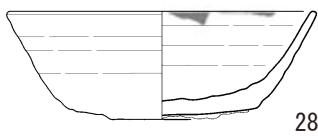
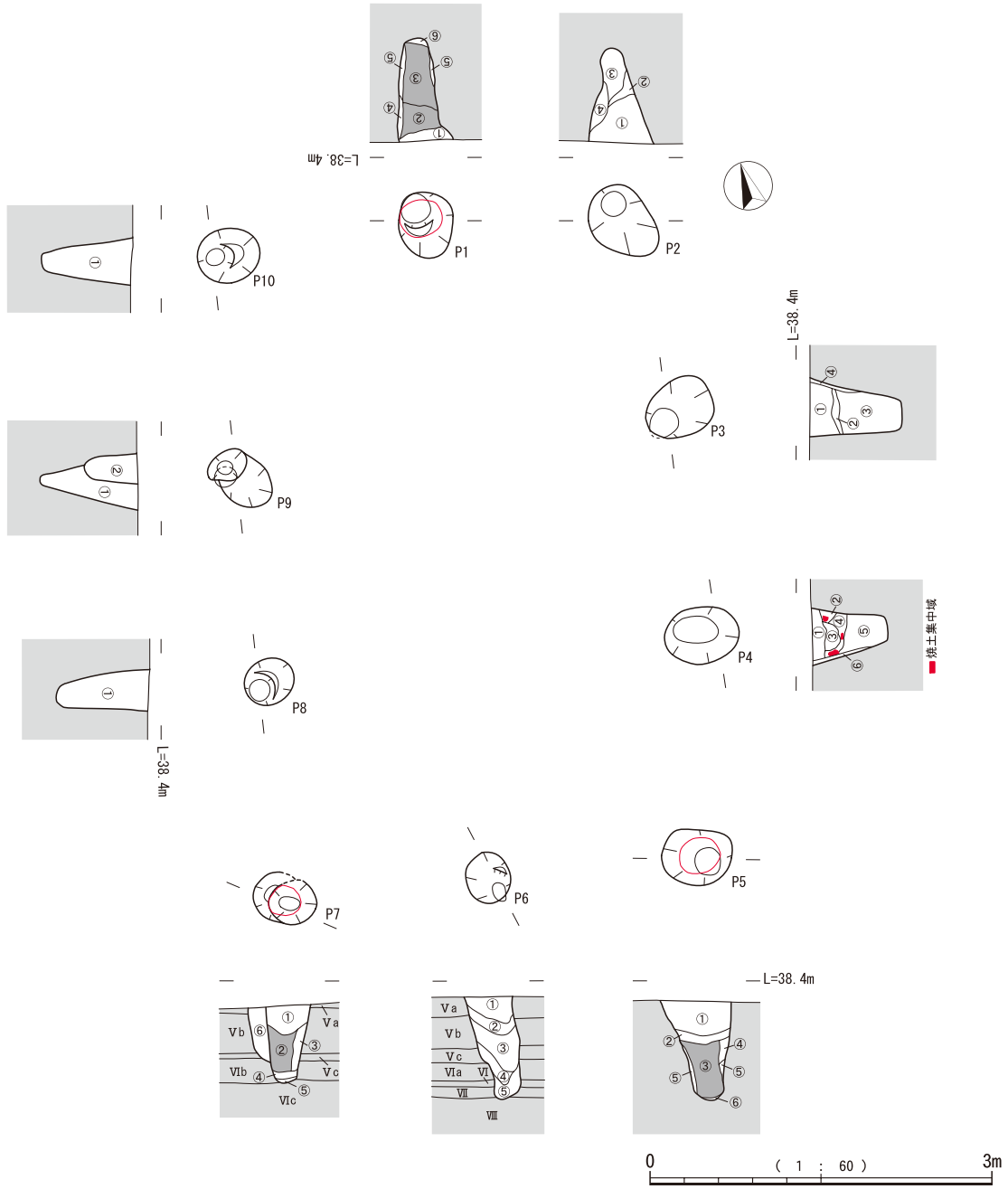


第19図 古代遺構配置図2（畝間状遺構等以外）

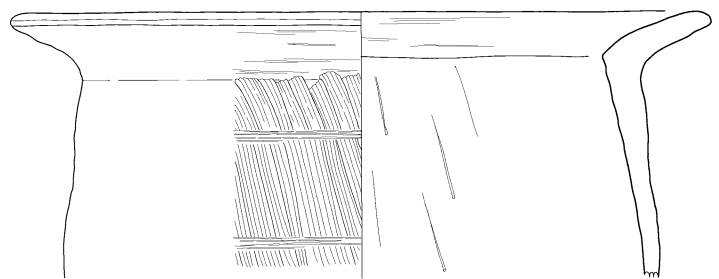




第 21 図 古代遺物出土状況図 2



0 ( 1 : 3 ) 10cm

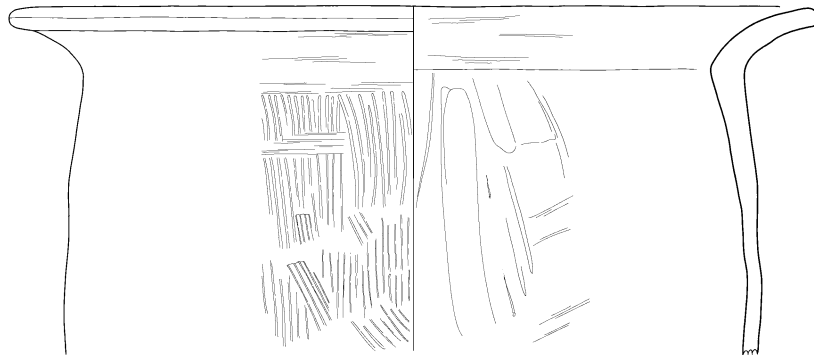


第 22 図 掘立柱建物跡 1 号及び出土遺物

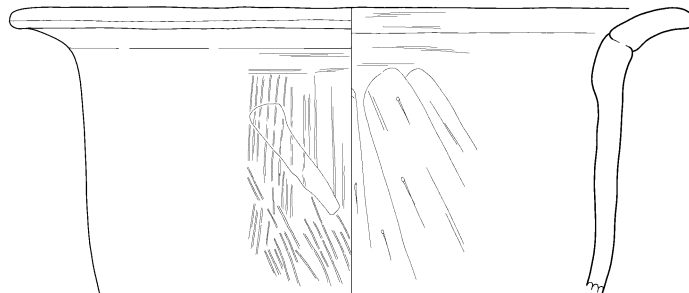
掘立柱建物跡1号 埋土注記（全てシルト質）

P1	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む 径3cm以下の紫コラのブロックを数個含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3)	しまる	粘性なし	径3cm以下の紫コラのブロックを数個含む
	④ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまる	粘性あり	
	⑤ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む
	⑥ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまる	粘性なし	
P2	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む
	② 黒褐色土 (Hue 10YR2/3)	しまる	粘性あり	暗褐色土 (Hue 10YR3/4) を60%程度含む 径3cm以下の紫コラのブロックを数個含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2)	しまる	粘性あり	黄橙色バミスを1%程度含む
	④ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2)	しまる	粘性あり	
P3	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む 径1cm大の池田降下軽石を含む 径3cm以下の紫コラのブロックを数個含む
	② 黒褐色土 (Hue 10YR2/2)	しまりが弱い	粘性なし	黄橙色バミスをわずかに含む 径1cm大の池田降下軽石を含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスをわずかに含む
	④ にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを30%程度含む 粒子状の紫コラを3%程度含む
P4	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまりが弱い	粘性なし	径1cm大の明赤褐色 (Hue 2.5YR5/8) の焼土を含む 径1cm以下の紫コラのブロックを含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2)	しまりが弱い	粘性なし	明赤褐色 (Hue 2.5YR5/8) の焼土を10%程度含む
	④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまりが弱い	粘性なし	黒褐色土 (Hue 10YR2/2) を40%程度含む
	⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3)	しまる	粘性あり	黄橙色バミスを1%程度含む
	⑥ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを3%程度含む 粒子状の紫コラを5%程度含む
P5	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを2%程度含む 径3cm以下の紫コラを数個含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む 径3cm以下の紫コラを数個含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスをわずかに含む 粒子状の紫コラを含む
	④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/4)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを1%程度含む
	⑤ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまる	粘性あり	黄橙色バミスをわずかに含む
	⑥ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまりが弱い	粘性あり	
P6	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	粘性なし	黄橙色バミスを3%程度含む 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 黒褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる	やや粘性あり	黄橙色バミスを3%程度含む 池田降下軽石、尾下スコリア、黒色土をわずかに含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1)	しまりが弱い	粘性あり	尾下スコリアをわずかに含む
	④ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1)	しまりが弱い	粘性あり	黒色土 (Hue 10YR2/1) を含む
	⑤ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまりが弱い	粘性あり	池田降下軽石をわずかに含む
P7	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを2%程度含む 紫コラを1~2%程度含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	やや粘性あり	黄橙色バミスをわずかに含む 径3cm以下の黒色土のブロック及び紫コラのブロックを含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/1)	しまる	粘性あり	黄橙色バミスを2%程度含む 径1cm大の池田降下軽石を2%程度含む
	④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性あり	
	⑤ 黒色土 (Hue 10YR2/1)	しまる	粘性あり	
	⑥ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性あり	黄橙色バミスを1%程度含む
P8	① 灰褐色土 (Hue 10YR4/2)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを少量含む 黒色土のブロックを含む
P9	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを含む
	② 灰褐色土 (Hue 10YR4/2)	しまる	粘性なし	黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを少量含む
P10	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる	粘性なし	紫コラのブロックを少量含む

※P8~10はトレンチ先行調査のため未分層



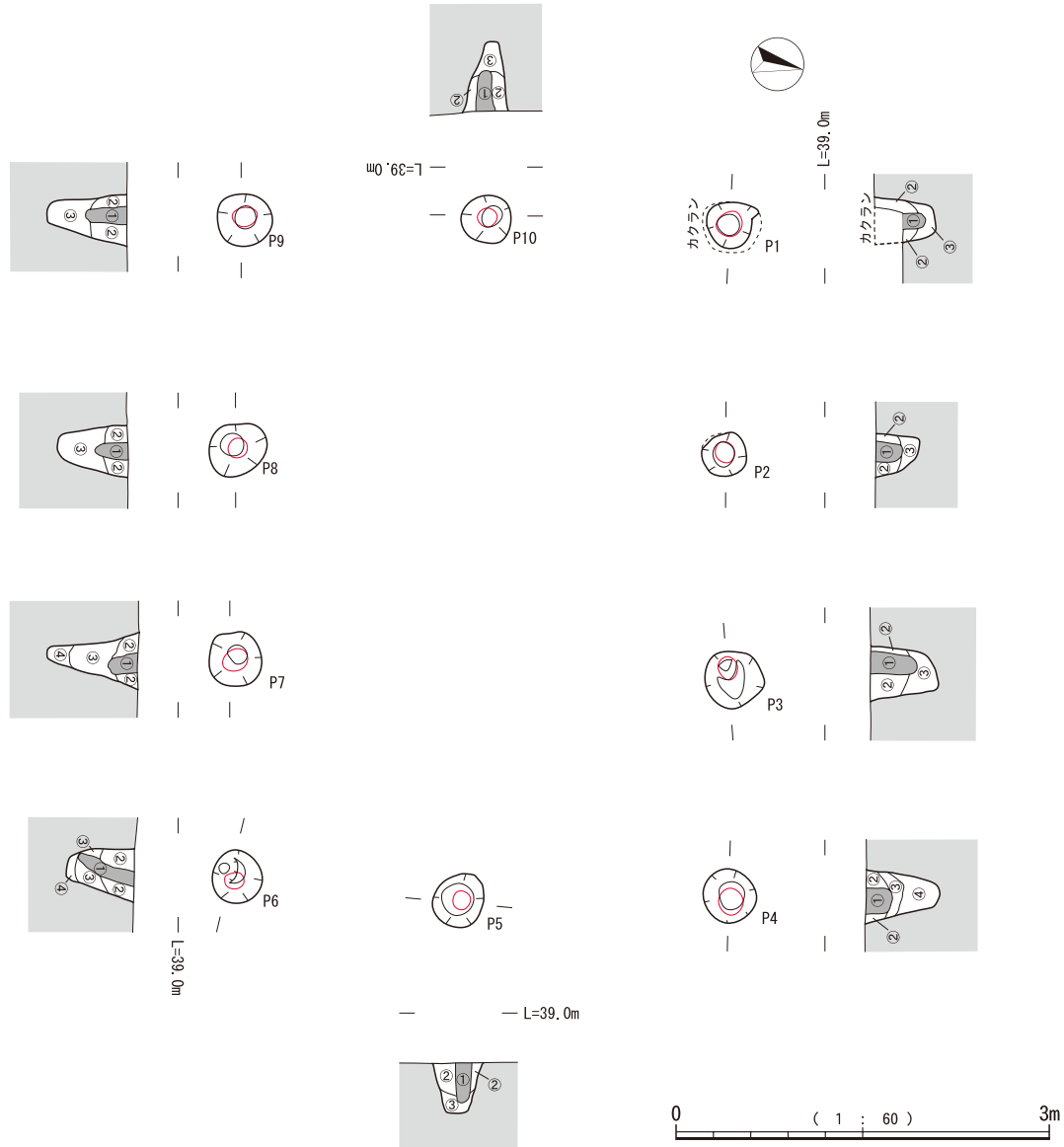
30



31

0 ( 1 : 3 ) 10cm

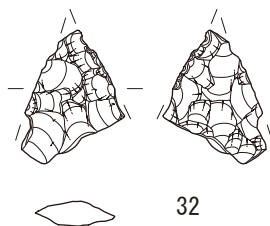
第 23 図 掘立柱建物跡 1 号出土遺物



掘立柱建物跡2号 埋土注記 (全てシルト質)

P6・7以外共通

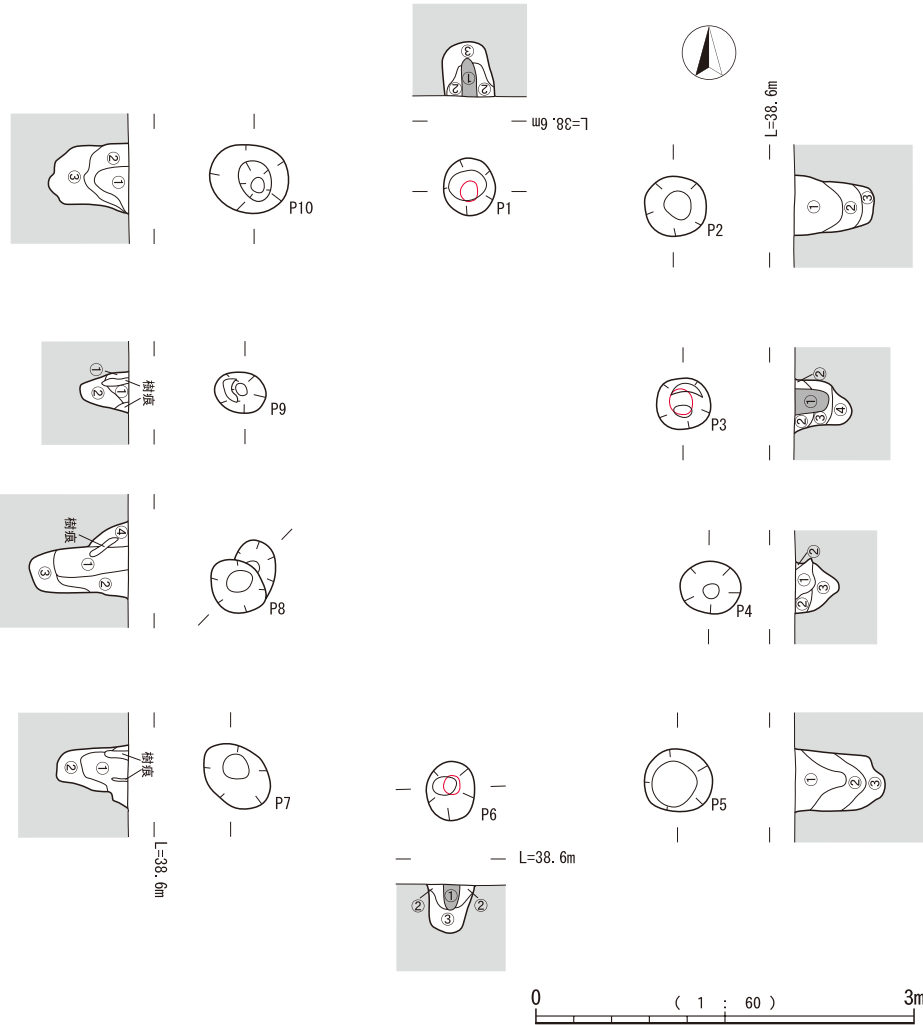
①	暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	やや粘性あり	黄橙色パミスをわずかに含む	径1.5~3cm大の池田降下軽石をわずかに含む	
②	灰黄褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	粘性なし	紫コラを含む		
③	黒褐色土 (Hue 10YR2/2)	強くしまる	粘性なし			
P6	①	暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	やや粘性あり	黄橙色パミスをわずかに含む	径1.5~3cm大の池田降下軽石をわずかに含む
	②	灰黄褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	粘性なし	紫コラを含む	
	③	黒褐色土 (Hue 10YR2/2)	強くしまる	粘性なし		
	④	黒色土 (Hue 10YR1.7/1)	強くしまる	粘性あり		
P7	①	暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	やや粘性あり	黄橙色パミスをわずかに含む	径1.5~3cm大の池田降下軽石をわずかに含む
	②	灰黄褐色土 (Hue 10YR3/3)	強くしまる	粘性なし	紫コラを含む	
	③	黒色土 (Hue 10YR2/2)	強くしまる	やや粘性あり	紫コラをわずかに含む	
	④	黒色土 (Hue 10YR2/2)	しまる	粘性なし	紫コラをわずかに含む	



32

0 ( 1 : 1 ) 3cm

第24図 掘立柱建物跡2号及び出土遺物



掘立柱建物跡3号 埋土注記 (全てシルト質)

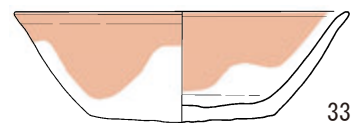
P 1	① 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2)	しまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む
	② 黒褐色土 (Hue 10YR3/2)	強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックをわずかに含む 白色砂粒を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
P 2	① 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土をわずかに含む
P 3	① 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2)	しまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを含む Va層土を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土をわずかに含む
	④ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を多く含む
P 4	① 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土をわずかに含む
P 5	① 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を多く含む
P 6	① 灰黄褐色 (Hue 10YR4/2)	しまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
P 7	① 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
P 8	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2)	強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土をわずかに含む
	④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3)	しまる 粘性なし
P 9	① 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土をわずかに含む
P 10	① 黒褐色土 (Hue 10YR3/2)	強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックをわずかに含む 白色砂粒を含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR5/3)	強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3)	強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む Va層土を含む

第 25 図 掘立柱建物跡 3 号



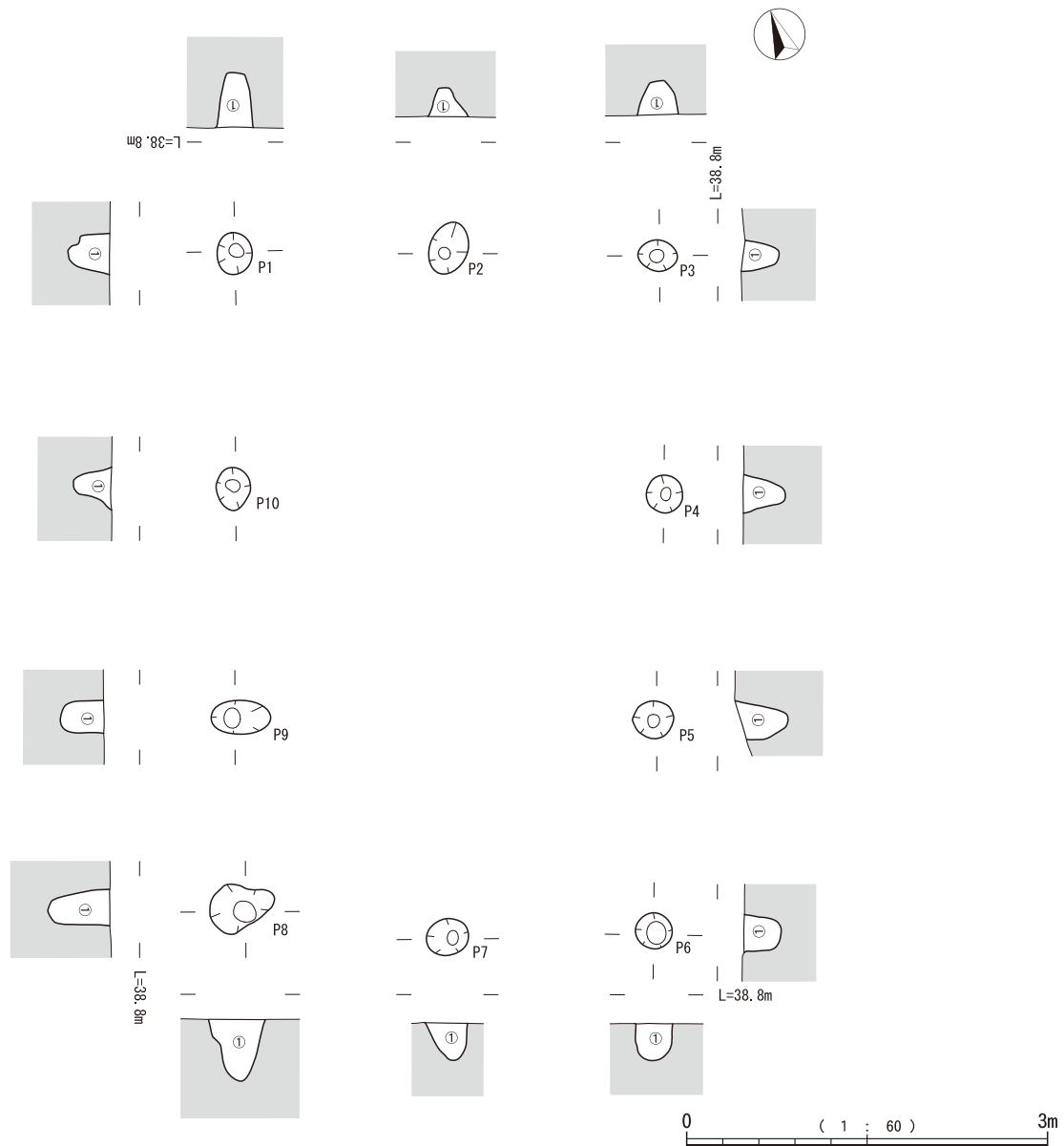
掘立柱建物跡 4号 埋土注記（全ての柱穴に共通，全てシルト質）

- ① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを多く含む
- ② 黒褐色土 (Hue 7.5YR3/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラのブロックをわずかに含む



0 ( 1 : 3 ) 10cm

第 26 図 掘立柱建物跡 4号及び出土遺物



掘立柱建物跡 5号 埋土注記（全ての柱穴に共通、全てシルト質）

① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) しまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む 紫コラのブロックを多く含む

第 27 図 掘立柱建物跡 5号

#### 掘立柱建物跡 4号（第26図）

K-26・27区のV a層で検出された。規格は桁行3間、梁行2間で北側に庇をもつ。大きさは底部分を含めて約8.2m×2.9mで、主軸は南北方向である。北側の柱穴は他と比較し小さく、柱穴間の距離が短いため庇とした。また南側の柱穴については、柱間の距離と埋土のしまりが他のピットと同じであったため庇ではないと判断した。埋土は全て紫コラブロックを多く含んでいるため、建物（柱）の除去は降下から間もない頃と考えられる。

遺物は土器7点が出土し、ほぼ完形に復元できた土師器1点を掲載した。33は坏で、P 6・8・12・14内に分散し

て出土した。時期は9世紀前半のものと考えられる。口縁部は斜め上方にほぼまっすぐに立ち上がり、口唇部がやや外反する。内外面に赤色顔料と思われる顔料が付着している。

#### 掘立柱建物跡 5号（第27図）

L-26・27区のV a層で検出された。規格は桁行3間、梁行2間、大きさは約5.5m×3.5mで、主軸は北北東-南南西方向である。埋土は全ての柱穴で紫コラブロックを多く含んでおり、4号とほぼ同じ時期に建物（柱）が除去されたと考えられる。

遺物は土器7点が出土したが、いずれも小片であり、

掲載しなかった。

(2) ピット

埋土に紫コラを含むものを古代のピットとして認定した。総数は1358基であり、その配置図は第18・19図に示し、そのうち21基を図化し、第28～33図に示した。ほとんどのピットは畝間状遺構の調査後に検出されたか畝間状遺構に切られており、畑地となる前に作られたものと考えられる。図化した21基の内訳は、柱穴と考えられるものが15基で、そのうち柱抜き取り痕があるものが5基(ピット2・5・6・13・14号)、柱穴かどうかは不明で、紫コラを表土から取り除いて埋めた穴と考えられるものが6基(ピット4・7・16・18・19・22号)であった。

埋土の入り方は、紫コラを層序(堆積順)を保った状態(塊)で入れているものが6基(ピット4・7・16・18・19・22号)、層序が崩れ、まとまった状態や他の土と混合されて入っているものが11基(ピット2・5・6・8・11～15・20・21

号)、紫コラ降下時に穴が開いており、中で堆積したと考えられるもの2基(ピット3・10号)、不明が2基(ピット9・17号)であった。遺物は3基から出土しているが、全て小片のみであったため掲載していない。

ピット2号(第28図)

N-9区のVa層で検出された。平面約30cmの円形で、検出面からの深さ45cmでVI層まで掘り込まれている。埋土④は柱の抜き取り痕、埋土①・②は柱跡に入り込んだ埋土とみられる。上部の埋土①は多くの紫コラを含んでいる。

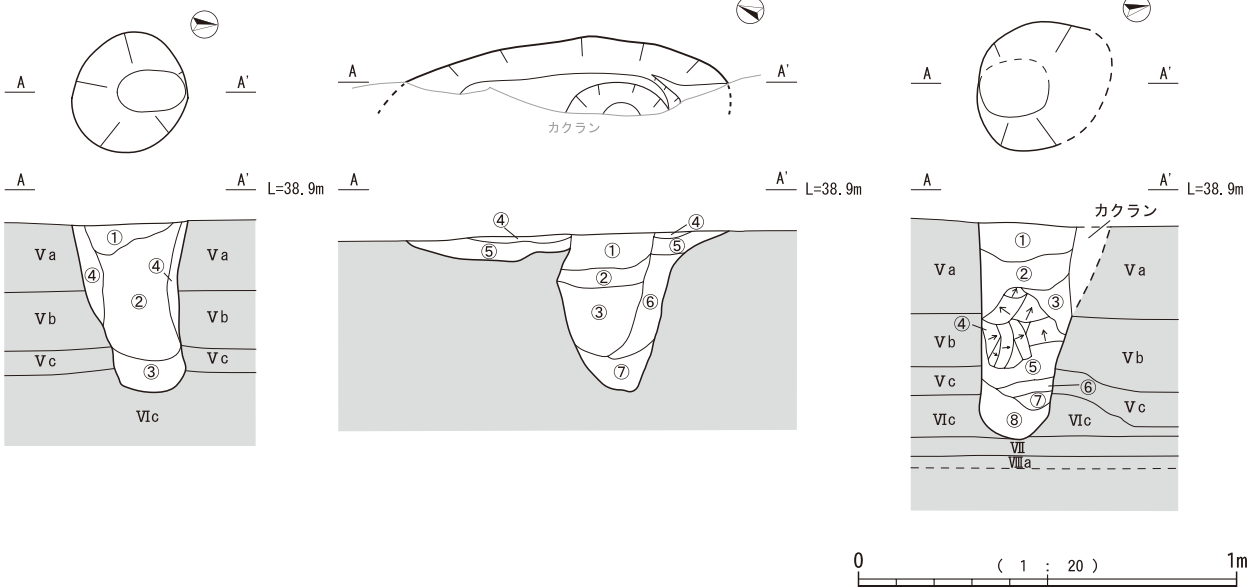
ピット3号(第28図)

N-10区のIV層で検出された。埋土断面より、2基のピットが重なったものと考えられる。西側に攪乱を受け、半分以上を消失している。検出面での平面は長径1m程度で、検出面から5cm下より直径30cm程度の円形となる。深さは約40cmである。埋土状況より、1回目のピットの掘り込み後に埋土⑥・⑦が入り込み、その後、紫コラが

ピット2号

ピット3号

ピット4号



埋土注記

ピット2号	① 灰黄褐色土(Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む 紫コラのブロックを含む シルト質 ② 暗褐色土(Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスを含む シルト質 ③ 黒色土(Hue 10YR3/3) しまりが弱い やや粘性あり 径2cm以下の池田降下軽石を含む シルト質 ④ 暗褐色土(Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスを含む 黒色土がわずかに混入する シルト質
ピット3号	① にぶい黄褐色土(Hue 10YR4/3) しまる 粘性なし 紫コラを含む ② 暗褐色土(Hue 10YR3/3) しまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む 紫コラブロックを含む ③ 暗褐色土(Hue 10YR3/3) しまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む ④ 褐灰色土(Hue 10YR4/1) 硬化している 粘性なし 紫コラ一次堆積(火山灰) ⑤ 暗褐色土(Hue 10YR3/3) しまる 粘性なし 紫コラ一次堆積(火山砂礫) ⑥ 黒褐色土(Hue 10YR3/1) しまる やや粘性あり 黄橙色バミスを少量含む ⑦ 黒褐色土(Hue 10YR2/2) しまる やや粘性あり 黄橙色バミスを少量含む
ピット4号	① 暗褐色土(Hue 10YR3/4) 強くしまる 粘性なし 黄橙色バミスをわずかに含む 紫コラを含む ② 黒褐色土(Hue 10YR2/3) しまる やや粘性あり 黄橙色バミスを含む 径5mm以下の小礫を含む ③ にぶい黄褐色土(Hue 10YR3/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラ火山灰を含む ④ 紫コラ火山灰の堆積の単位が縦横に入る ※矢印の上が自然堆積時の上方向 ⑤ 黒色土(Hue 10YR2/3) ややしまる やや粘性あり 紫コラをわずかに含む ⑥ 紫コラ一次堆積(火山灰) 硬化している 粘性なし ⑦ 紫コラ一次堆積(火山砂礫) 硬化している 粘性なし ⑧ 黒褐色土(Hue 10YR2/3) しまりが弱い 粘性あり

第28図 ピット2～4号

降下し埋土④・⑤が入り、2回目のピットの掘り込み後に紫コラを多く含む埋土①～③が入ったものと考えられる。

**ピット4号 (第28図)**

N-10区のV a層において、別遺構のトレンチ調査時に検出されたため、北側を欠いている。推定での平面形は円形で、検出面からの深さは56cmでVII層上面まで掘り込まれている。埋土状況より、埋土⑥・⑦は紫コラ降下時の一次堆積で、その後表土であった紫コラを割って人為的に入れたものが埋土④と推測される。

**ピット5号 (第29図)**

0-10区のV a層で検出された。平面は円形で、深さは検出面から40cmで、VI層まで掘り込まれている。埋土⑥

が柱の抜き取り跡、埋土①～⑤が柱跡に入った埋土と考えられ、紫コラブロックを多く含んでいる。

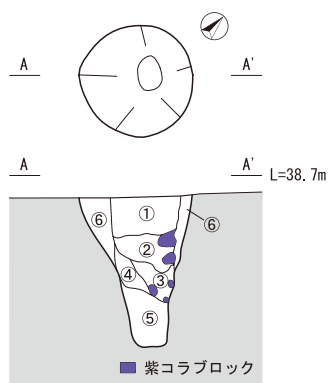
**ピット6号 (第29図)**

0-10区のV a層で検出された。平面はほぼ円形、深さは検出面から45cmで、埋土④・⑤が柱の抜き取り跡、埋土①～③が柱跡に入った埋土と考えられ、紫コラが混合されている。柱下の埋土⑥も紫コラを含んでおり、紫コラ降下後に作られたと考えられる。

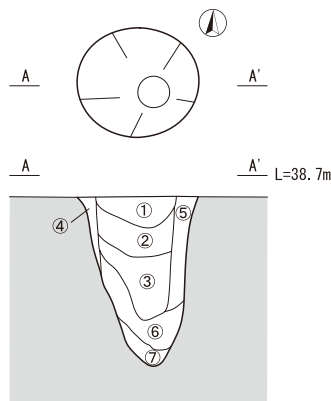
**ピット7号 (第29図)**

0-10区のV a層で検出された。埋土④・⑤は紫コラの一次・二次堆積で傾斜して入っており、その上面の埋土を含め、人為的に入れられたと推測される。埋土⑧・⑨は別のピットの可能性がある。

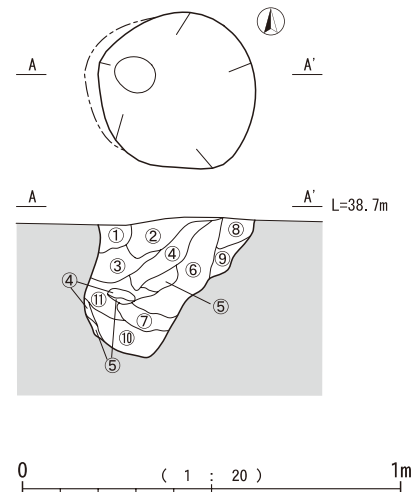
ピット5号



ピット6号



ピット7号



**埋土注記**

ピット5号	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質</li> <li>② 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラのブロックが①よりも多く含む 砂質</li> <li>③ ②をベースに④が混じる</li> <li>④ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 池田降下軽石を含む</li> <li>⑤ 紫コラをベースに暗褐色土が混じる</li> <li>⑥ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い 粘性あり シルト質</li> </ul>
ピット6号	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 紫コラを含む 砂質</li> <li>② 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる やや粘性あり 砂質</li> <li>③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる やや粘性あり 紫コラのブロックを20～30%程度含む 砂質</li> <li>④ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む シルト質</li> <li>⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) しまりが弱い 粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む ①②③が混ざる</li> <li>⑥ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) しまりが弱い 粘性あり 紫コラのブロックをわずかに含む 砂質</li> <li>⑦ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) しまりが弱い 粘性あり 砂質</li> </ul>
ピット7号	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 褐灰色土 (Hue 10YR4/1) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む Va層が少量混じる 砂質</li> <li>② 暗褐色土 (Hue 10YR6/1) 強くしまる 粘性なし ①よりも多く紫コラを含む Va層が少量混じる 砂質</li> <li>③ 灰黄褐色土 (Hue 10YR5/2) 強くしまる 粘性なし ①②より紫コラを多く含む 砂質</li> <li>④ 紫コラ一次堆積 (火山灰) 硬化している 粘性なし</li> <li>⑤ 紫コラ二次堆積 (火山砂礫) 硬化している 粘性なし</li> <li>⑥ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 強くしまる やや粘性あり 紫コラのブロックを多く含む</li> <li>⑦ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 強くしまる やや粘性あり ⑥より紫コラのブロックを多く含む</li> <li>⑧ 褐灰色土 (Hue 10YR6/1) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラを含む 砂質</li> <li>⑨ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) 強くしまる やや粘性あり</li> <li>⑩ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) 強くしまる やや粘性なし 紫コラの砂礫を含む</li> <li>⑪ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 紫コラの砂礫を含む 砂質</li> </ul>

第29図 ピット5～7号

**ピット8号 (第30図)**

0-10区のV a層で検出された。平面は楕円形で、検出面からの深さは57cmでVI層上面まで掘り込まれている。埋土①・③に紫コラが多量に入っており、埋土①～③の部分が柱穴であった可能性がある。

**ピット9号 (第30図)**

0-10区のV a層で検出された。平面はほぼ円形、検出面からの深さ58cmでほぼ垂直に掘り込まれている。紫コラの一次・二次堆積や火山灰、砂礫層が交互にみられ、紫コラ降下前後に埋土が流入したと考えられるが、全てが自然堆積かどうかは不明である。

**ピット10号 (第30図)**

0-10区のV a層で検出された。平面は円形で、検出面からの深さは41cmである。埋土①～⑤まで紫コラが含まれており、その中の埋土④・⑤は、紫コラが穴の中で一次堆積したものである可能性がある。

**ピット11号 (第30図)**

N-11区のIV層で検出された。埋土断面より、2基のピットの重なりと考えられる。南側は攪乱を受けている。検出面からの最深部は74cmである。埋土状況より、はじめにV c層まで掘り込まれた後、埋土⑦・⑧が入り込み、その後VIII層まで掘り込まれ、紫コラ降下後に紫コラ主体の埋土①～⑤が入りこんだと考えられる。

**ピット12号 (第31図)**

N-11区のIV層で検出された。時代不明のピットに北側を切られている。平面は円形で、検出面から66cmの深さがある。埋土①に紫コラのブロックが多く含まれている。

**ピット13号 (第31図)**

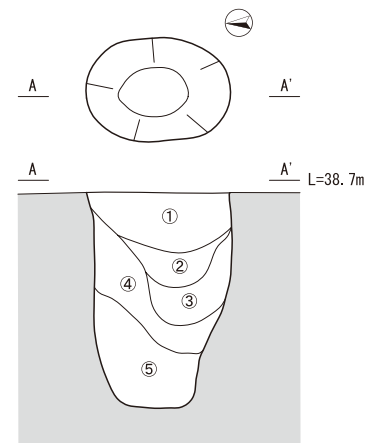
0-11区のV a層で検出された。平面はほぼ円形、検出

面からの深さは約50cmで、埋土①・②に紫コラが多く入る。埋土④・⑤が柱の抜き取り跡、埋土①～③が柱跡に入った埋土と考えられる。埋土の紫コラは塊の形状ではなく他の土と混合しているため、柱痕跡に自然堆積した可能性がある。

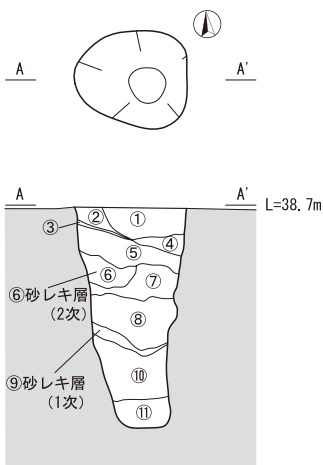
**ピット14号 (第31図)**

0-11区のV a層で検出された。平面はほぼ円形、検出面からの深さは46cmである。埋土③・④が柱の抜き取り跡、埋土①・②が柱跡に入った埋土と考えられる。埋土の入り方はピット13号と同様であり、柱が抜き取られた後に周囲の表土中の紫コラが入ったと推測される。

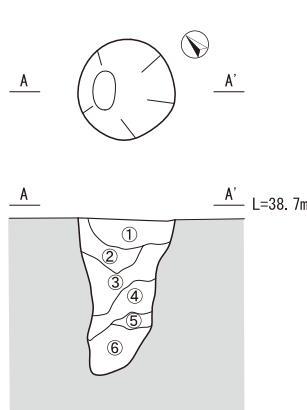
**ピット8号**



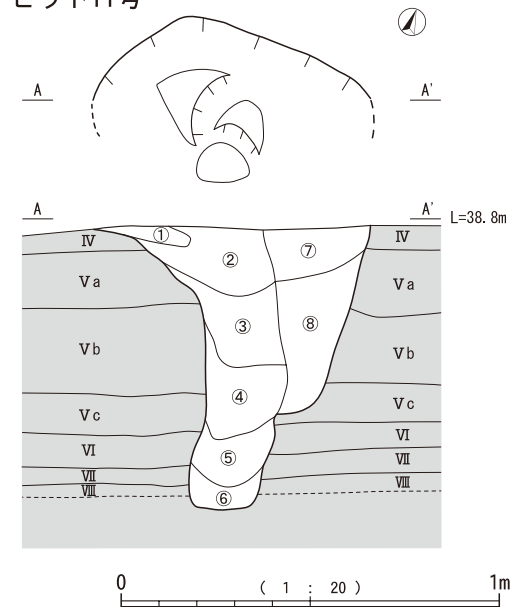
**ピット9号**



**ピット10号**

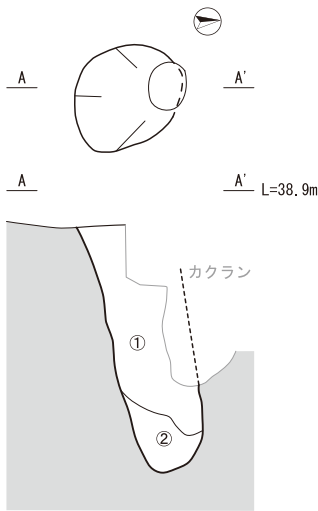


**ピット11号**

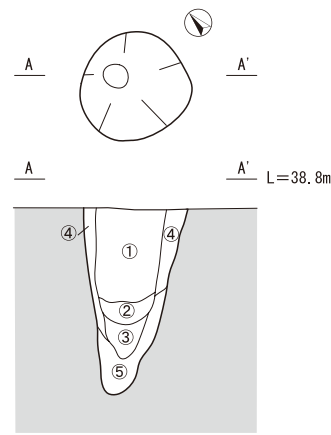


**第30図 ピット8～11号**

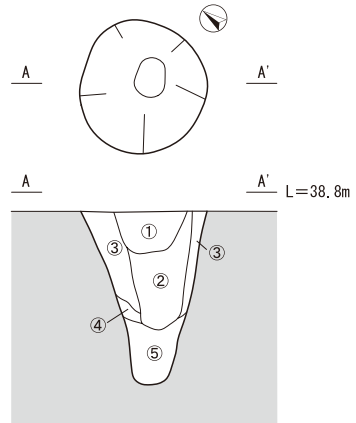
ピット12号



ピット13号



ピット14号



埋土注記

ピット8号	<p>① 褐灰色土 (Hue 5YR5/1) 硬化している 粘性なし 径1~0.5cm大の黄橙色パミスを含む 径1~2cm大の紫コラのブロックを少量含む 砂質</p> <p>② 黒褐色土 (Hue 5YR3/1) 強くしまる 粘性なし 砂質</p> <p>③ 褐灰色土 (Hue 10YR6/1) 硬化している 粘性なし 径2~5cm大の紫コラのブロックを多く含む 砂質</p> <p>④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性あり 径1~2mm大の黄橙色パミスを少量含む</p> <p>⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い 粘性あり 池田降下軽石をごく少量含む</p>
ピット9号	<p>① 灰褐色土 (Hue 5YR6/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質</p> <p>② ①に灰褐色土がわずかに混入する</p> <p>③ 紫コラと灰褐色土の混土が筋状に堆積する</p> <p>④ 紫コラ火山灰と黒褐色土の混土 シルト質</p> <p>⑤ 紫コラ火山灰</p> <p>⑥ 砂礫</p> <p>⑦ 暗赤褐色土 (Hue 5YR3/2) 強くしまる やや粘性あり 径1mm大の明赤褐色パミスをわずかに含む 径2mm大の池田降下軽石を含む</p> <p>⑧ 褐灰色土 (Hue 5YR4/1) 硬化している 粘性なし 紫コラ一次堆積 砂質</p> <p>⑨ 砂礫</p> <p>⑩ 黒褐色土 (Hue 5YR2/1) しまりが弱い やや粘性あり 径1mm大の黄橙色パミスをわずかに含む</p> <p>⑪ 黒褐色土 (Hue 5YR3/1) しまりが弱い やや粘性あり 径1~2mm大の黄橙色パミス⑩より多く含む</p>
ピット10号	<p>① 褐灰色土 (Hue 10YR5/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを含む 黒褐色土が混じる 砂質</p> <p>② 褐灰色土 (Hue 10YR4/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを含む 黒褐色土が①より多い 砂質</p> <p>③ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 強くしまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む</p> <p>④ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) 強くしまる 粘性なし 径5~10cm大の紫コラのブロックを含む</p> <p>⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い 粘性なし 紫コラを多量に含む 砂礫を多量に含む</p> <p>⑥ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い 粘性あり 径1~2cm大の池田降下軽石を含む</p>
ピット11号	<p>① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロックを多量に含む</p> <p>② にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロックを含む</p> <p>③ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロックを含む</p> <p>④ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラを少量含む</p> <p>⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR2/1) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロックを少量含む</p> <p>⑥ 黒色土 (Hue 10YR2/1) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む</p> <p>⑦ 黒褐色 (Hue 10YR3/2) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む</p> <p>⑧ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む</p>
ピット12号	<p>① にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロックを多量に含む</p> <p>② 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミス・紫コラを少量、池田降下軽石をわずかに含む</p>
ピット13号	<p>① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質</p> <p>② 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む ①よりも粒子が粗い</p> <p>③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる やや粘性あり 径3mm以下の池田降下軽石を含む</p> <p>④ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 池田降下軽石をわずかに含む砂質</p> <p>⑤ 黒色土 (Hue 10YR2/1) しまる 粘性あり シルト質</p>
ピット14号	<p>① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質</p> <p>② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む 砂質</p> <p>③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/1) しまる やや粘性あり</p> <p>④ ②と③の混土</p> <p>⑤ 黒色土 (Hue 10YR2/1) しまりが弱い 粘性あり 黄橙色パミスをわずかに含む 池田降下軽石をわずかに含むシルト質</p>

第31図 ピット12~14号

**ピット15号 (第32図)**

P-14区のV a層調査時に検出された。平面はほぼ直径30cmの円形で、深さが約130cmあり、深く細長い形状となっており、他と深さがかなり異なる。埋土①～③は紫コラ主体で他の土も混合されており、紫コラ降下後に表土等から流入したと考えられる。柱穴かどうかは不明である。

**ピット16号 (第32図)**

J-16区のIV層で検出された。平面は直径約40cmの円形で、検出面からV a層まで36cm掘り込まれている。埋土①～③は紫コラの一次堆積の層が塊となっており、人為的に入れられたと考えられる。

**ピット17号 (第32図)**

K-17区の畝間状遺構の調査後に検出された。平面で直径約20cmの円形、検出面からの深さ約50cmと細長い形状である。埋土①はほぼ紫コラ土であり、その下の埋土②は混合されて入っている。紫コラ降下後に自然堆積したか人為的に入れたかは不明である。形状から柱穴と推測される。

**ピット18号 (第32図)**

K-17区のIV層で検出された。北側に攪乱、南側を畝間

状遺構に切られ残存度が悪いが、推定で平面約60×40cmの楕円形である。上部の埋土②・③は紫コラの一次堆積の塊であり、それを挟む埋土①・④が紫コラ混じりのIV層土である。埋土②・③は降下後、表土に堆積した紫コラを剥がして入れたと考えられる。

**ピット19号 (第32図)**

K-18区のIV層で検出された。平面は直径約40cmの円形、深さ約50cmで断面V字状となる。埋土②は紫コラの一次堆積であり、人為的に入れたと考えられる。

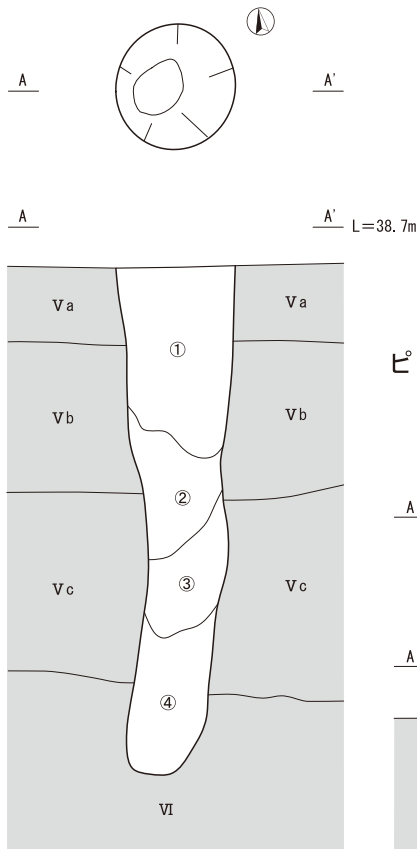
**ピット20号 (第33図)**

K-18区のIV層で検出された。平面の直径約25cmの円形で、深さは検出面から約50cmと細長い形状である。埋土①はほぼ紫コラ土である。自然に入ったかは不明である。

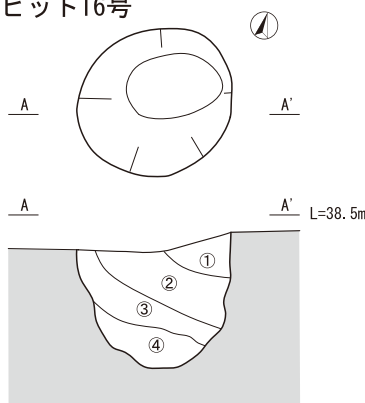
**ピット21号 (第33図)**

L-18区のV a層で検出された。平面は直径約25×20cmの楕円形で、深さ約40cmと細長い形状である。埋土①～③はほぼ紫コラである。埋土⑩は柱の抜き取り痕とみられ、柱跡に埋土⑤～⑨が入り込んだ後、紫コラ主体の埋土①～④が入ったと考えられる。

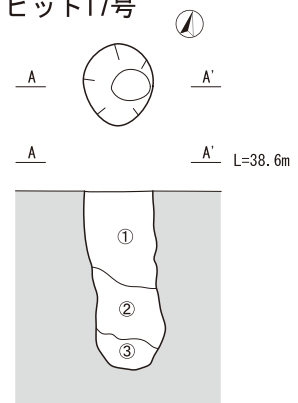
**ピット15号**



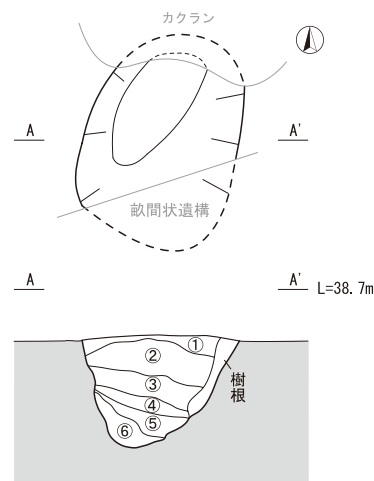
**ピット16号**



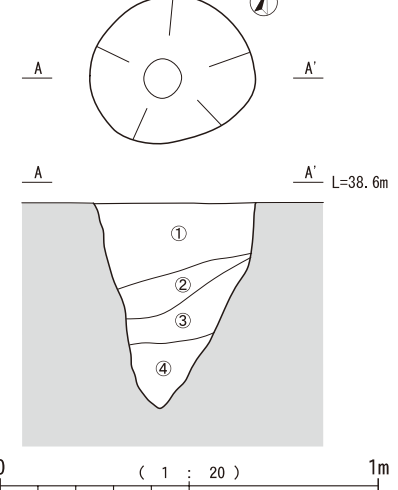
**ピット17号**



**ピット18号**



**ピット19号**

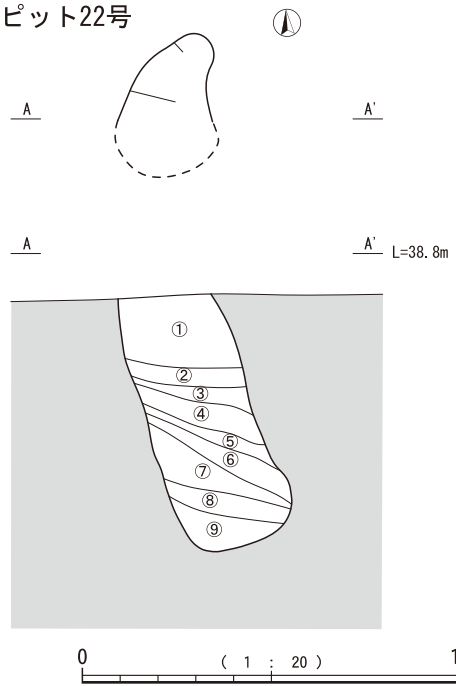


第 32 図 ピット 15 ～ 19 号

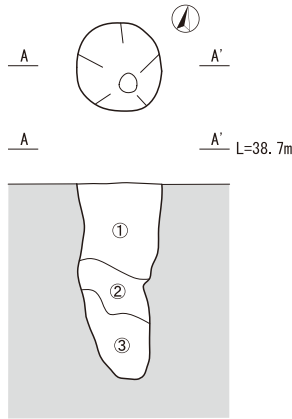
ピット22号 (第33図)

N-22区のIV層で検出された。平面形は不定形で、検出面からの深さが約70cmあり、VI層上面までやや斜めに掘り込まれている。埋土②～⑦は、紫コラが塊の状態が入っており、当時の表土であった紫コラを剥ぎ取って人為的に入れたと考えられる。

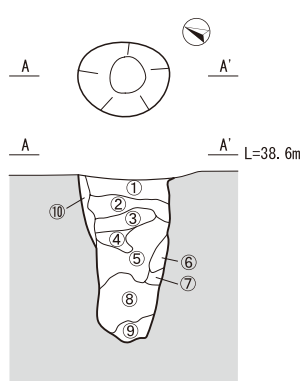
ピット22号



ピット20号



ピット21号



埋土注記

ピット15号	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) 強くしまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質 ② 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) と黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性なし 紫コラを含む 砂質 ③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまりが弱い やや粘性あり 紫コラを含む 砂質 ④ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまりが弱い 粘性あり 黄橙色パミスを含む
ピット16号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) に褐灰色 (Hue 10YR5/1) の紫コラが混ざる 硬化している 粘りなし ② 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ③ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまりが弱い 粘性あり 黄橙色パミスを含む
ピット17号	① 褐灰色土 (Hue 10YR5/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを多量に含む ② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラを含む ③ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりが弱い 粘性あり 黄橙色パミスを含む
ピット18号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性あり 紫コラを含む ② 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘りなし ③ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘りなし ④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) 硬化している 粘性なし 紫コラを含む ⑤ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む ⑥ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりが弱い 粘性あり 黄橙色パミスを少し含む
ピット19号	① 褐灰色土 (Hue 10YR5/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを多量に含む ② 褐灰色土 (Hue 7.5YR6/1) 硬化している 粘性なし 紫コラ一次堆積 ③ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) ややしまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む ④ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスが③より少ない
ピット20号	① 褐灰色土 (Hue 10YR6/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを多量に含む ② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む ③ 暗褐色土 (Hue 10YR2/3) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスをわずかに含む
ピット21号	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 紫コラを含む ② 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 紫コラを①よりも多く含む ③ 紫コラ一次堆積 (火山灰) 硬化している 粘性なし ④ 紫コラ一次堆積 (火山灰砂礫) 硬化している 粘性なし 黄色の砂礫をわずかに含む ⑤ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまりが弱い やや粘性あり 黄橙色パミスを含む ⑧が混ざる ⑥ ⑤に褐色土が混ざる ⑦ 褐色土に⑤が混ざる ⑧ 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまりが弱い やや粘性あり 砂質 ⑨ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い やや粘性あり 池田火山灰が混ざる シルト質
ピット22号	① 黄灰色土 (Hue 2.5YR5/1) 硬化している 粘性なし 紫コラを多量に含む ② 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ③ にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) しまる 粘性なし 紫コラを少量含む ④ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ⑤ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ⑥ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ⑦ 紫コラ一次堆積の塊 硬化している 粘性なし ⑧ にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) しまる 粘性なし 紫コラを少量含む ⑨ 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) しまりが弱い 粘性あり

第33図 ピット20～22号

### (3) 土坑 (第34～37図)

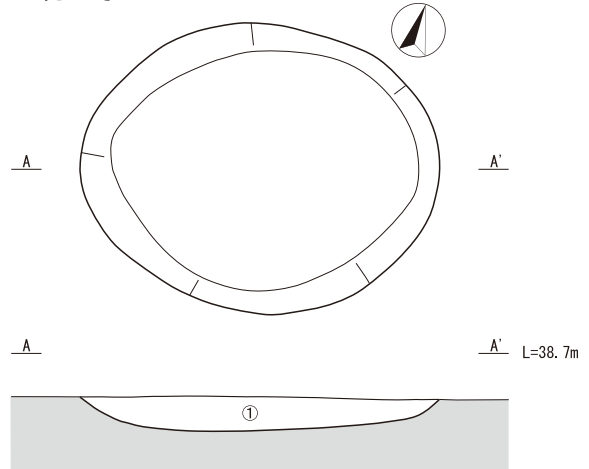
埋土に紫コラを含み、ピットより大きくすり鉢状のものを古代の土坑と判断した。畝間状遺構の下層で検出されたものもあるが、畝間状遺構や他の遺構との切り合いがほとんど見られず、遺構間での時期差の判定は困難であった。全て遺物は検出されていない。検出された区や層、大きさ及び深さは第7表(P75)を参照されたい。

土坑1～5号は0-10区を中心にまとまって検出されており、ほぼ楕円形で、検出面からの深さや埋土が同じである。土坑7号は円形で中央部の埋土が固くしまる。土坑8号は埋土中に炭化物が散在し、中央に集中する箇所がみられる。土坑10号は中心部が直径30cm程度で深くなっており、その部分に紫コラが多く入ることから、柱穴だった場所に土坑が作られた可能性がある。土坑11～14号はK-27区でまとまって検出されており、深さは約20cmで埋土もほぼ共通するため、同時期に作られたものと考えられる。

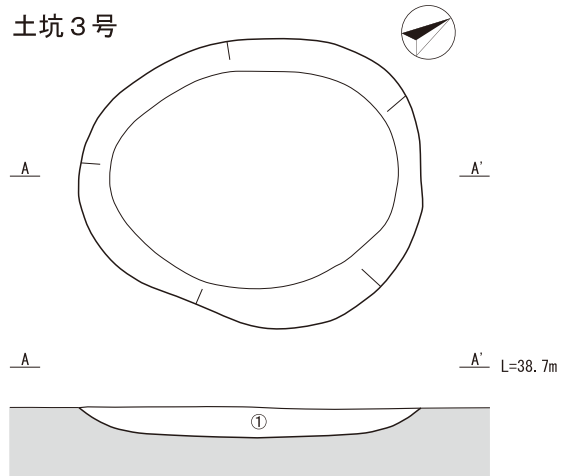
#### 土坑 2号



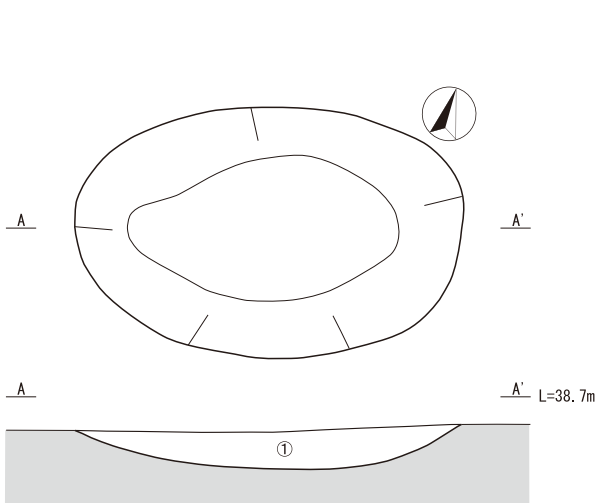
#### 土坑 1号



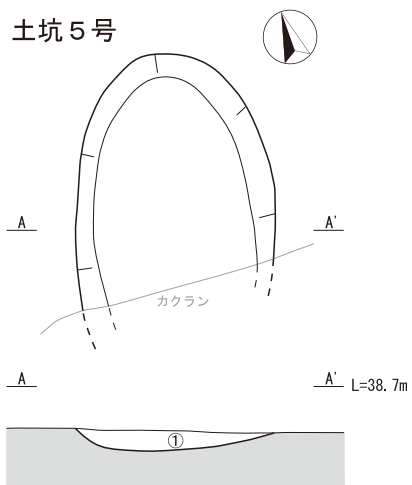
#### 土坑 3号



#### 土坑 4号



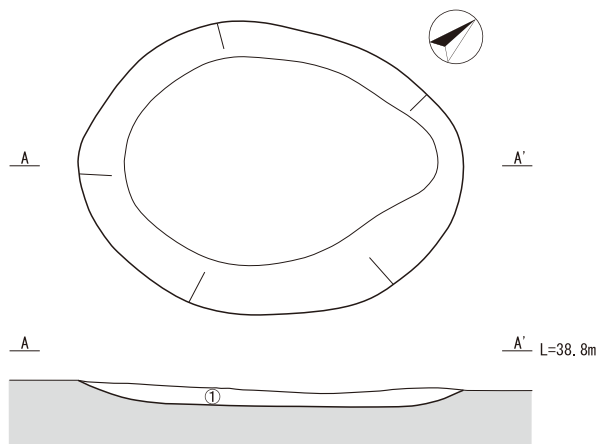
#### 土坑 5号



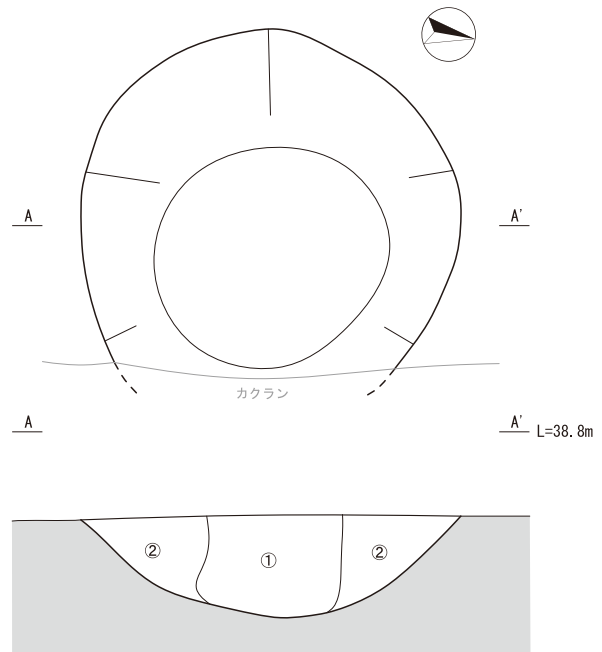
0 ( 1 : 20 ) 1m

第34図 土坑1～5号

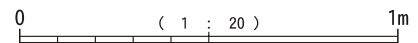
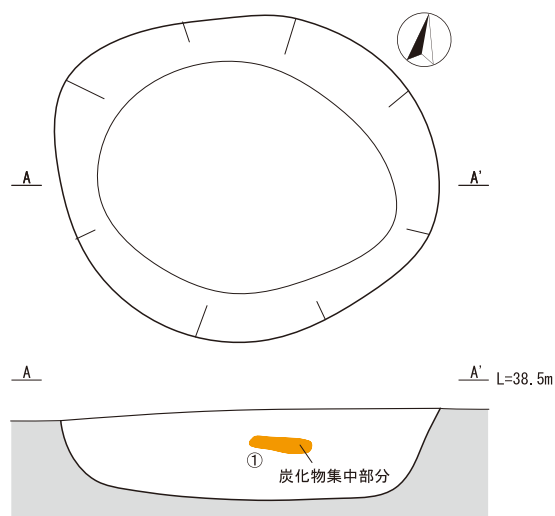
土坑 6 号



土坑 7 号



土坑 8 号

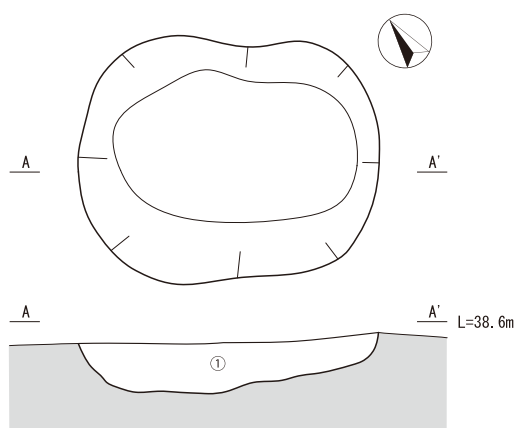


埋土注記

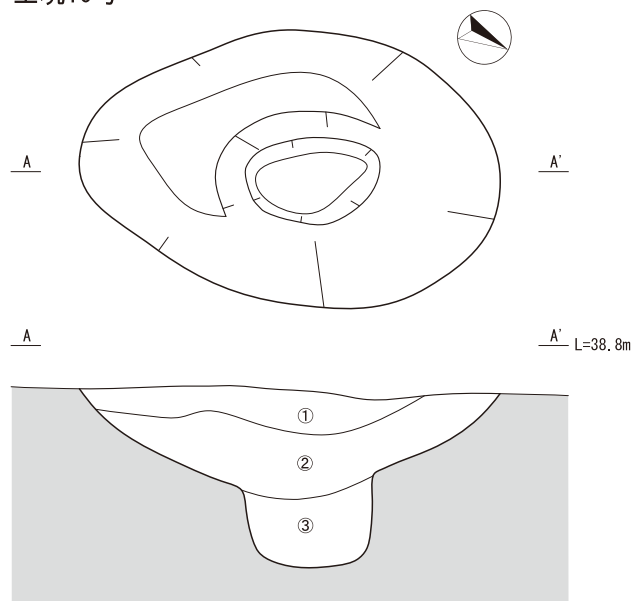
土坑 1 号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 2 号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 3 号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 4 号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 5 号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 6 号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラをわずかに含む
土坑 7 号	① 黄褐色土 (Hue 10YR5/6) しまる 粘性なし ② 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまる 粘性あり
土坑 8 号	① 褐灰色土 (Hue 10YR4/1) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 炭化物を含む 紫コラをわずかに含む

第 35 図 土坑 6 ~ 8 号

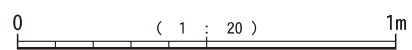
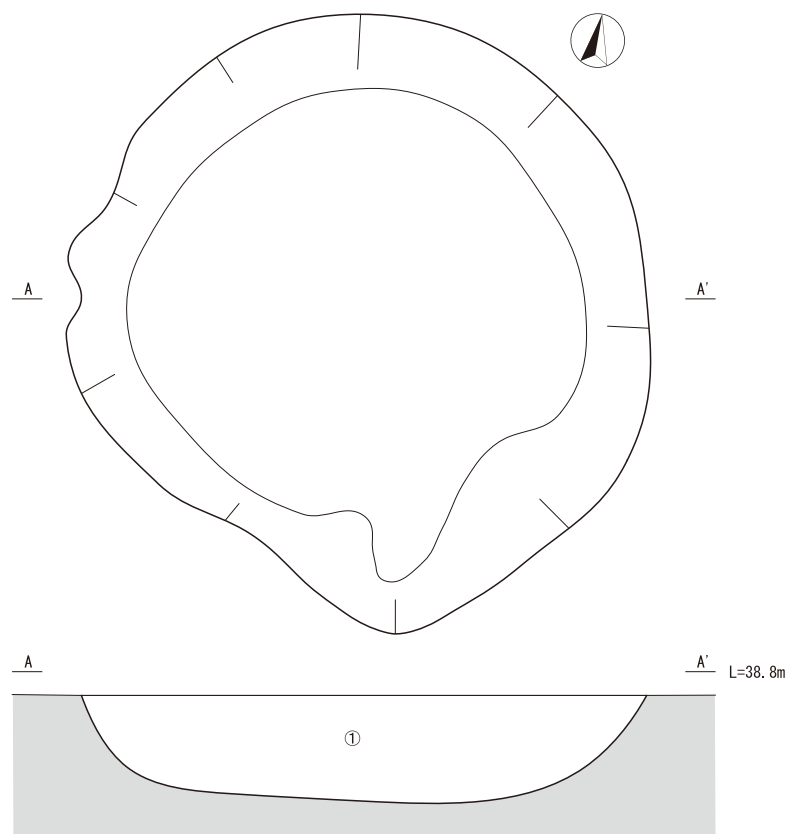
土坑 9 号



土坑 10 号

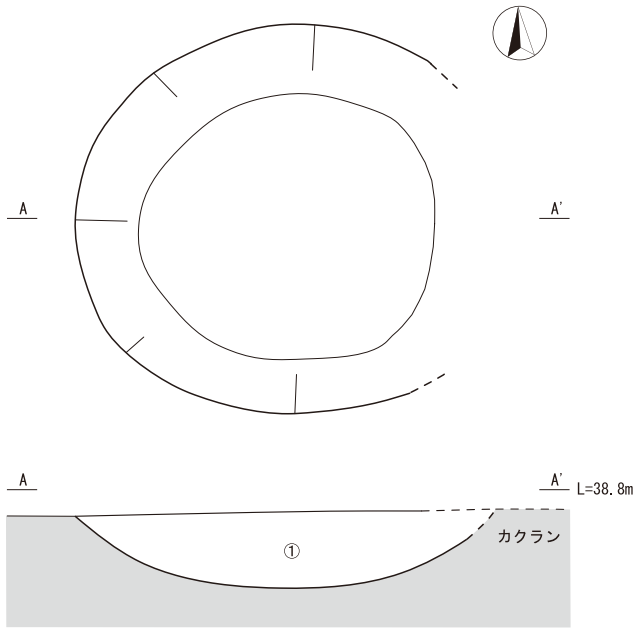


土坑 11 号

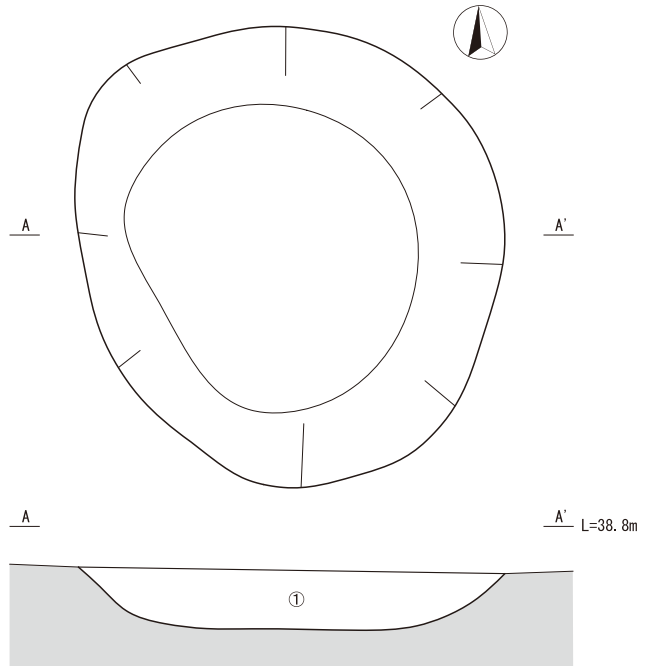


第 36 图 土坑 9 ~ 11 号

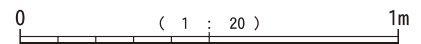
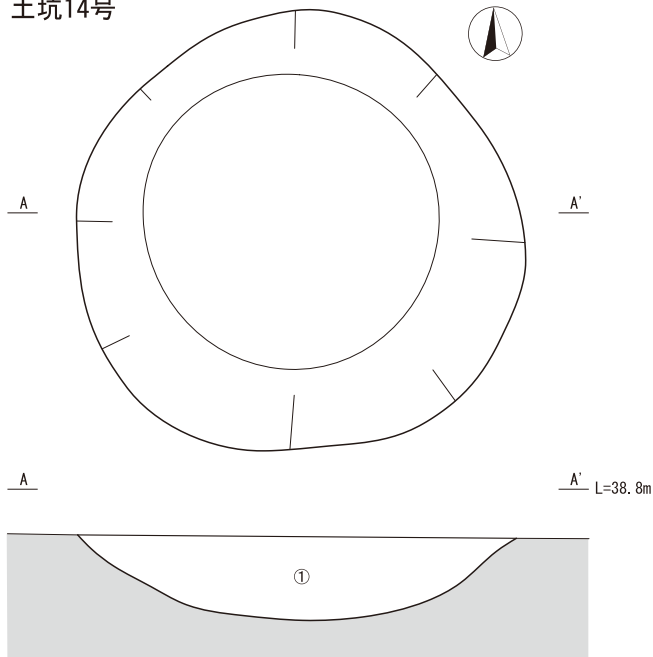
土坑12号



土坑13号



土坑14号



埋土注記

土坑9号	① 黄褐色土 (Hue 10YR5/6) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 径1cm大の池田降下軽石・紫コラをわずかに含む
土坑10号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) ややしまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラのブロック (φ1~3cm) を数個含む
	② 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/3) しまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む 紫コラを多量に含む
土坑11号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 径2~3cm大の紫コラのブロックを数個含む
土坑12号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 径2~3cm大の紫コラのブロックを数個含む
土坑13号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまりあり 粘性なし 黄橙色パミスを含む 径1cm大の紫コラのブロックを1%程度含む
土坑14号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまりあり 粘性なし 黄橙色パミスを含む 径1cm大の紫コラのブロックを1%程度含む

第37図 土坑12~14号

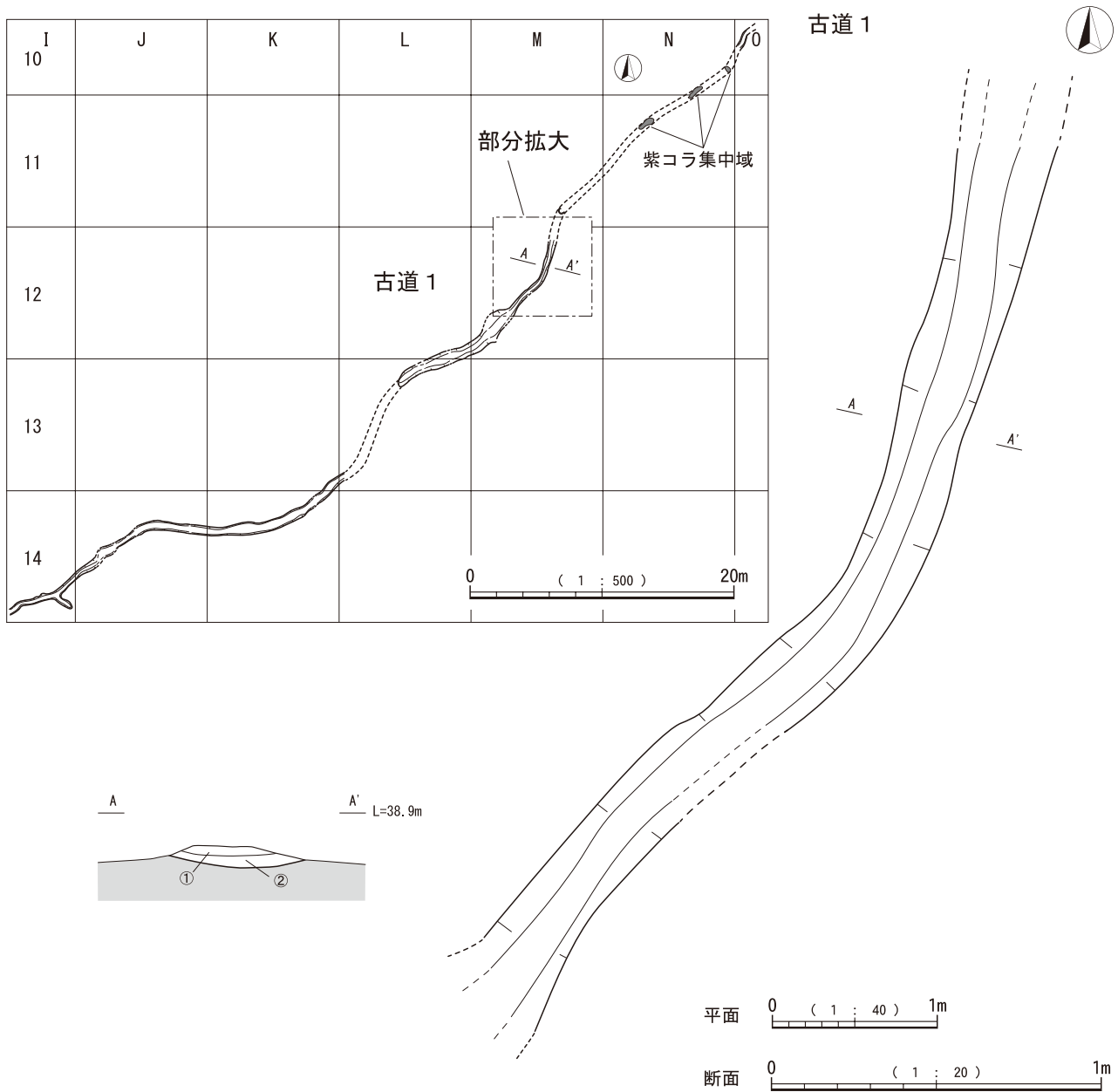
(4) 古道 (第38～40図)

古道は、全部で9条検出された。紫コラが集中して検出された部分や浅く溝状に残る部分をつないで古道とした。紫コラが路面に硬化して残存しているものは紫コラの降下前に作られ、降下後も利用されたと考えられる。埋土と切り合いの関係から、古道3と7は畝間状遺構の構築後に作られ、古道5は不明、他は構築前と考えられる。遺物は数点検出されたが、小片のため図化していない。

古道1 (第38図)

北は0-10区から南西方向にI-14区まで伸びる。推定

約90mで、北東及び南西方向に更に伸びると考えられる。全てIV層から検出されている。IV層の残存度が悪い11区以北は紫コラ集中部分のみであり、古道の底面部分に降下した紫コラが固まって一部残存したと考えられる。14区では残存度が良く、検出面の幅が2m程度あるため、全面においてその程度の幅があった可能性がある。断面を記録したM-12区においては、紫コラの一次堆積が硬化した状態で検出されている。畝間状遺構との関係において、M-12区で一部重なりがみられるが多くはその北境に位置しており、紫コラ降下前に作られ、畝間状遺構の構築後も一定の期間使用されたと考えられる。



埋土注記

古道1	① 紫コラー次堆積 硬化している 粘性なし ② 灰褐色土 (Hue 7.5YR4/2) 強くしまる 粘性あり
-----	---

第38図 古道1

古道 2 (第39図)

K・L-14区のIV～V a層で検出された。溝状の部分が5か所みられ、つながると推定される。復元できた長さは全体で約15m、幅は最大で約1mである。埋土に紫コラを多く含み、硬化した状態であるため、紫コラの降下後も利用されたと考えられる。畝間状遺構と重なりが見られず、畝間状遺構の構築後も利用されていた可能性がある。

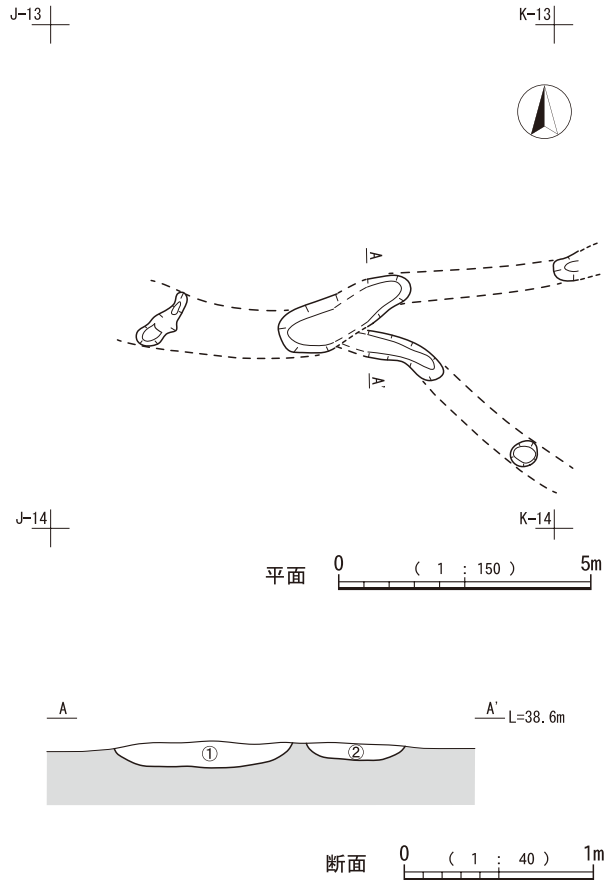
古道 3 (第39図)

J・K-17区のV a層で検出された。東西方向に伸びており、検出できた長さは約14m、幅は約50cmである。他遺構との関係は、古道 4 及び畝間状遺構を切っているため、それより新しいと考えられる。

古道 4 (第39図)

I・J-15～17区のV a層で検出された。北西方向に伸びており、検出できた長さは約17m、幅は約1～2mである。畝間状遺構の調査後に、掘立柱建物跡 1号や古道 3 に切られた状態で検出されており、それより古いと考えられる。J-16区に紫コラ集中域がみられるが、掘立柱建物跡 1号が作られ道としての機能を失った後、溝状に

古道 2



古道 3・4



埋土注記

古道 2	① にぶい黄褐色土 (Hue 10YR5/4) 硬化している 粘性なし 黄橙色パミスを含む 紫コラを多量に含む
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む

第 39 図 古道 2・3

残存していた部分に紫コラが降下し入り込んだと推測される。

**古道5 (第40図)**

M-22・23区のIV層で検出された。南北方向に伸びており、検出できた長さは約9m、幅は約60cmである。他の遺構との重なりは1基の時代不明のピットに切られているのみであり、畝間状遺構との関係は不明である。

**古道6 (第40図)**

I-26・27区のIV層で検出された。南北方向に伸びており、検出できた長さは約10m、幅は約1～2mである。古道7・8や畝間状遺構に切られている。埋土には紫コラを含まず、紫コラ降下前に作られたと考えられる。

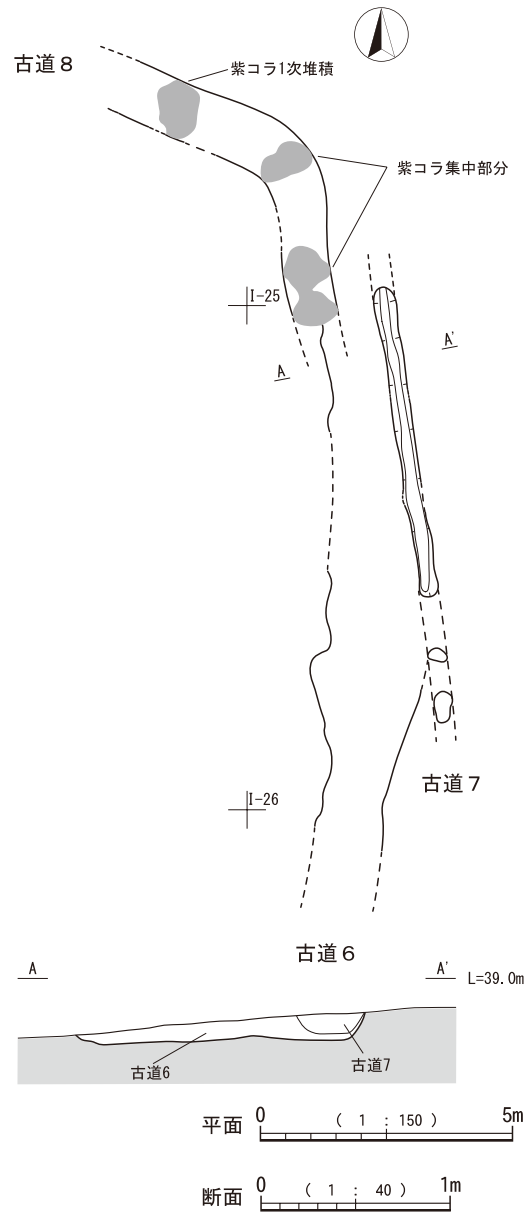
**古道7 (第40図)**

I-25・26区のIV層で検出された。ほぼ南北方向に直線的に伸びており、長さ3m程度の溝と、それと繋がると考えられる土坑状のくぼみで構成され、復元できた長さは約8mである。古道6を切っている。幅は40cm程度であり、埋土は細かい紫コラを多く含んでいる。畝間状遺構を切っており、それより新しいと考えられる。

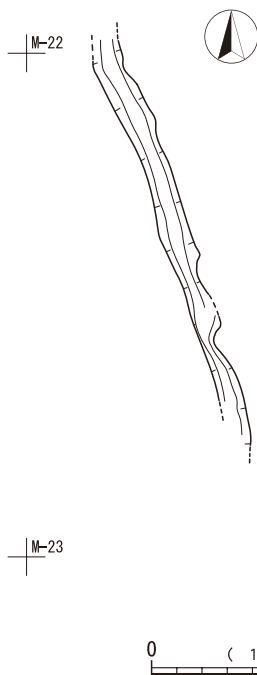
**古道8 (第40図)**

H・I-25・26区のIV層で検出された。紫コラの一次堆積と紫コラの集中部が硬化している箇所があり、そこを結ぶ部分に道があったと推定され、「く」の字に折れ曲がっている。復元できた長さは約6m、幅は約1.2mである。古道6の上部に位置し、それより新しい。畝間状遺構と重なりが無く、畑地となった後も畑境の道として利用されたと考えられる。

**古道6～8**



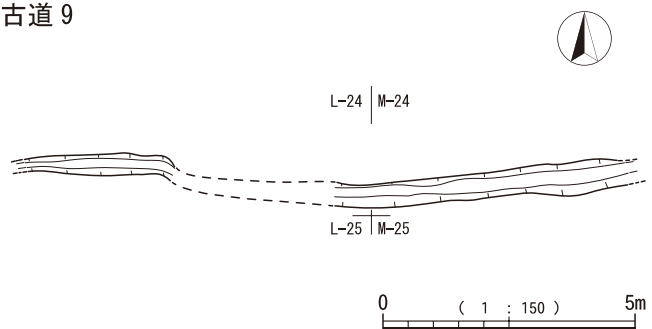
**古道5**



**埋土注記**

古道6	暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む
古道7	暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 硬化している 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 粒子状の紫コラを多く含む

**古道9**



第40図 古道5～9

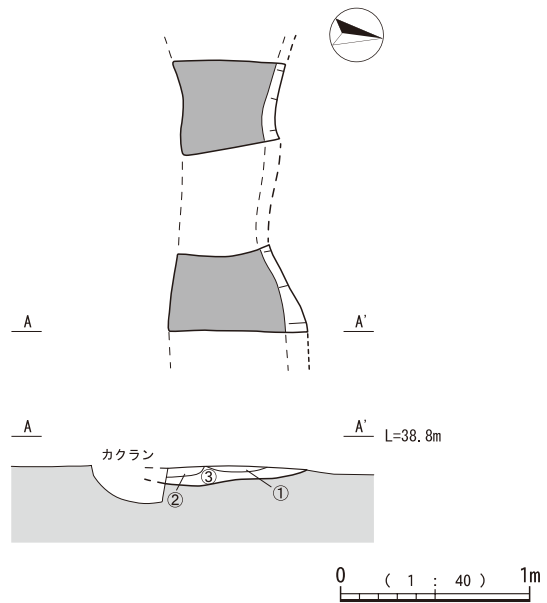
古道9 (第40図)

L・M-24区のIV層で検出された。東西方向に伸びており、復元できた長さは約12m、幅は約50cmである。中央部は攪乱を受けている。畝間状遺構に切られており、それより前に作られたと考えられる。

(5) 紫コラ集中域 (第41図)

M-10区のIV層で検出された。攪乱が多い場所であり、溝状に紫コラの集中部分が確認できた。埋土が他の古道と似ていることから、東西方向へ伸びる古道の一部である可能性が高いと考え、遺構と判断した。IV層上部の多くが削平を受けている場所であるため、つながると考えられる紫コラ集中域や硬化面は確認できなかった。

紫コラ集中域



(6) 溝状遺構 (第41・42図)

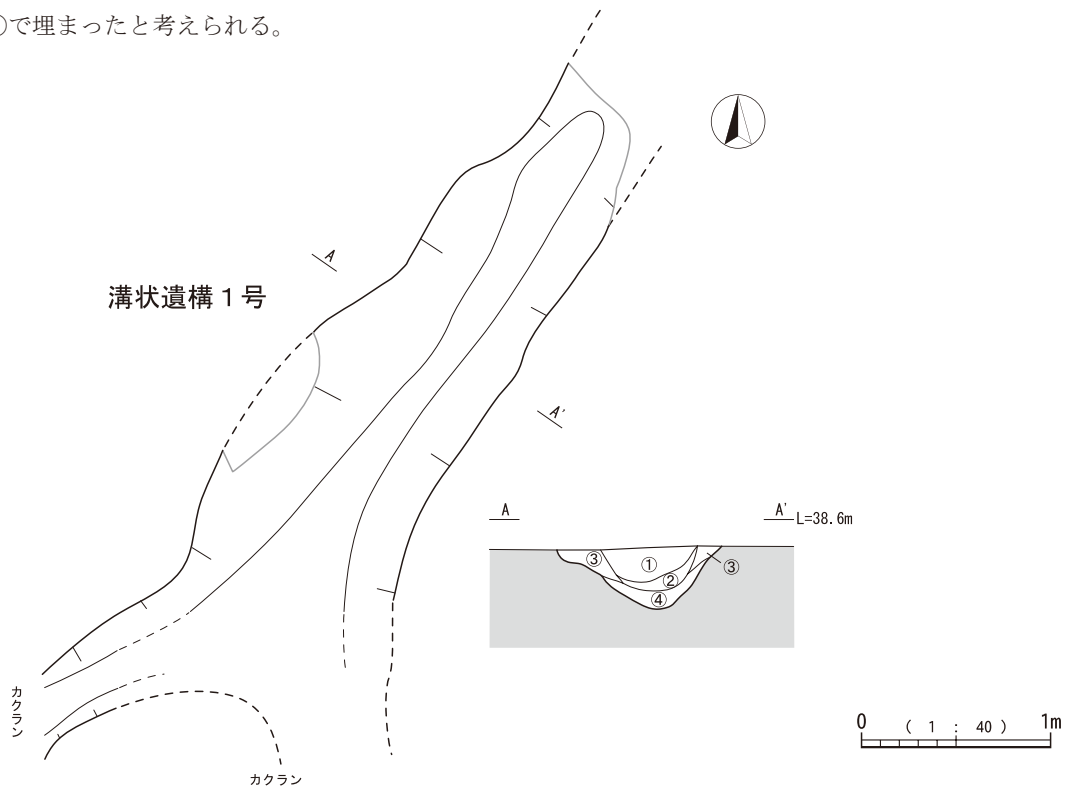
形状や深さなど、畝間状遺構と異なり、埋土に硬化面がみられないものを溝状遺構とした。遺構の用途としては排水や道等の用途が考えられるが詳細は不明である。

溝状遺構1号 (第41図)

L-15・16区のIV層で検出された。西側・南側は攪乱を受けている。検出面における幅はおよそ1m程度で、南側へ向けてやや広くなり、二方向に分かれる。埋土をみると、②が紫コラの自然堆積であり、紫コラ降下時は③④の埋土で埋まった状態で埋土②が降下し、その後黒褐色土主体の埋土①で埋まったと考えられる。

埋土注記

紫コラ集中域	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR4/2) しまる 粘性なし 黄橙色パミスをわずかに含む 紫コラブロックをわずかに含む
	② 紫コラ火山灰二次堆積 泥や土が混入
	③ 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスをわずかに含む



埋土注記

溝状遺構1号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む 径1mm以下の白色砂粒を1%程度含む シルト質
	② 紫コラ二次堆積 (上部が火山灰砂礫、下部が火山灰)
	③ 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む シルト質
	④ 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 強しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを含む シルト質

第41図 紫コラ集中域・溝状遺構1号

溝状遺構 2号 (第42図)

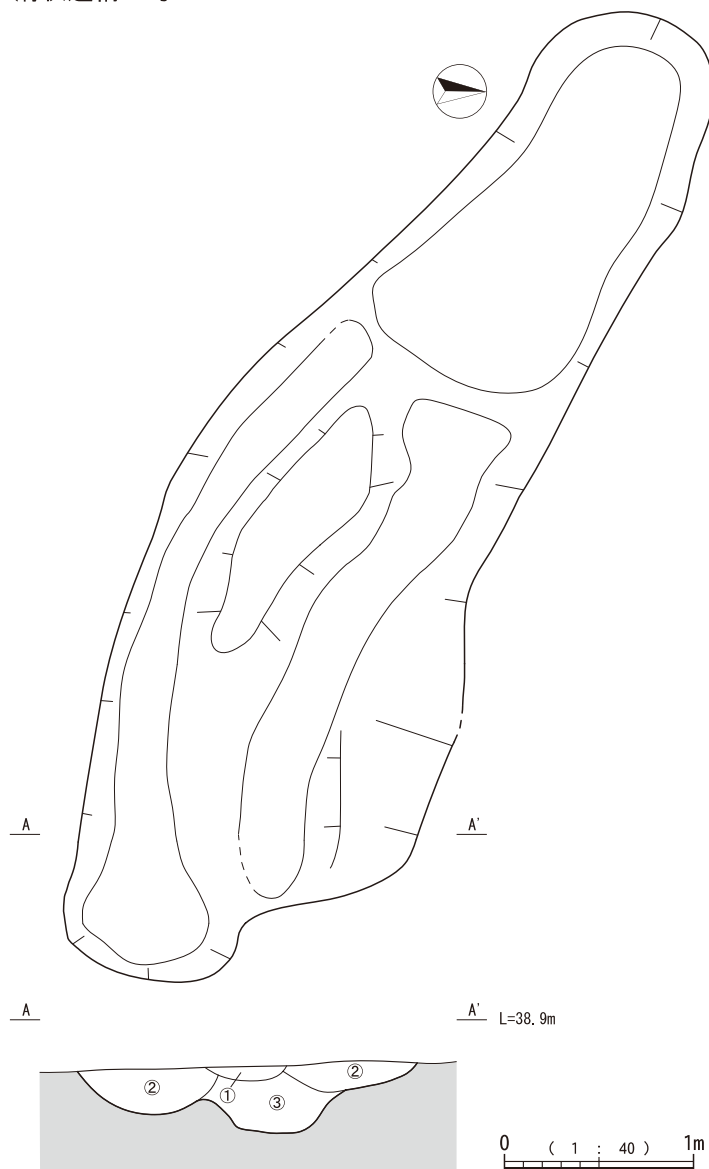
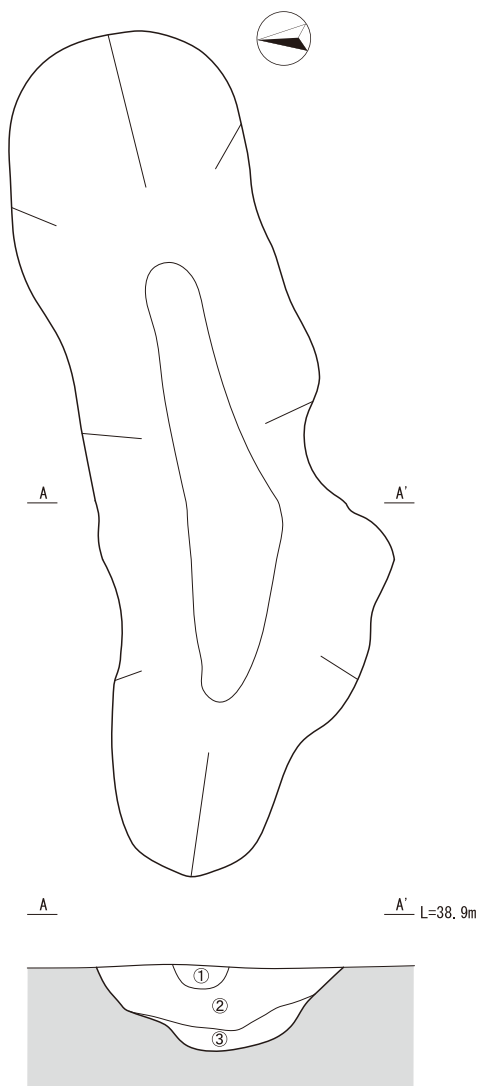
L-20区のV a層で、畝間状遺構やピットの調査後に検出された。東西方向に4 m以上の幅で広がり、深さは約40cmである。埋土②は紫コラを少量含んでおり、紫コラ降下後、一定の期間を経た後に埋まったと考えられる。

溝状遺構 3号 (第42図)

N-21区のV a層で検出された。幅は狭い所で1 m、広いところで2 m弱である。中心部にやや深い場所がみられる。埋土には紫コラが含まれないが、中央に黒色土が入るなど、他の2基と類似することから、古代の遺構と判断した。

溝状遺構 2号

溝状遺構 3号



埋土注記

溝状遺構2号	① 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまる 粘性あり 黄橙色バミスを含む シルト質
	② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる 粘性あり 径5cm以下の紫コラブロックを数個含む シルト質
	③ 黒色土 (Hue 10YR3/1) しまる 粘性あり ②が染みこむように入る シルト質
溝状遺構3号	① 黒褐色土 (Hue 7.5YR3/2) しまりが弱い 粘性なし 黄橙色バミスを含む シルト質
	② 暗褐色土 (Hue 7.5YR3/3) しまりが弱い 粘性なし 黄橙色バミスを含む シルト質
	③ 暗褐色土 (Hue 7.5YR3/3) しまりが弱い 粘性なし 黄橙色バミスを②より多く含む シルト質

第 42 図 溝状遺構 2・3号

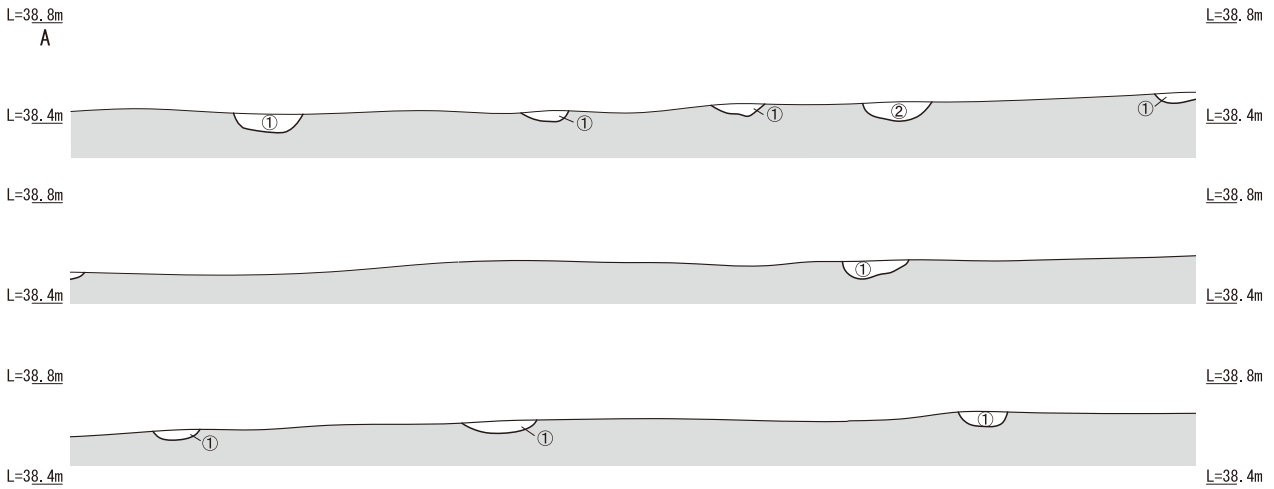
(7) 畝間状遺構 (第43～45図)

畝間状遺構は主に12～17区及び22～28区に広がっており、表土直下のIV・V a層で検出された。北側などIV層の多くが削平されている部分では消滅した可能性が高い。畝間の掘り込みは検出面から3～15cmで10cm以下のものが多く、畝部は削平されている。主にIII・IV層部分に畝、IV・V a層上部付近に溝部分が作られたと考えられる。埋土の多くは紫コラブロックが含まれている。畝間の間隔は残存度の悪い部分で約150cm、良い部分で約50～60cmである。畝間同士の切り合いはほとんどな

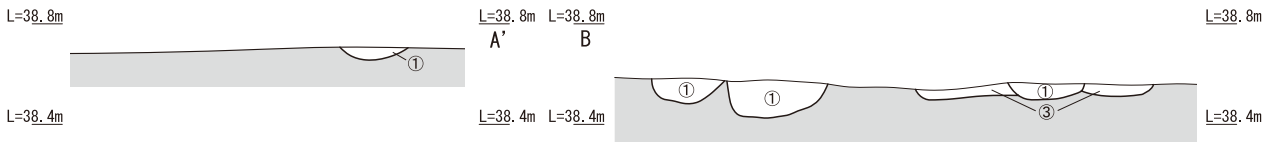
く、K-25区など一部のみである。土壌の一部について植物珪酸体分析を行っており (P91～94第5章第3節参照)、分析の結果、陸稲栽培を行っていた可能性が指摘されている。

遺物は小片等ごくわずかであったが、J-17区で出土した1点を図化した。34は土師器の坏で、J-17区の畝間部分から出土した。後述する土師器坏分類の4類に該当し口縁部の開きが小さく、体部外面は回転ナデによる凸凹が目立ち、底部ヘラ切り後、体部にはみ出した粘土が残る。

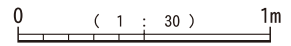
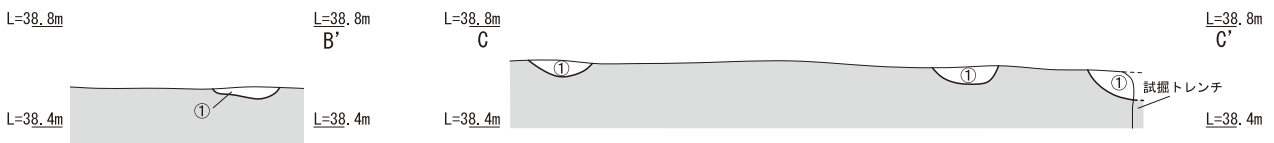
【A-A' 断面】



【B-B' 断面】

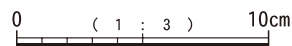
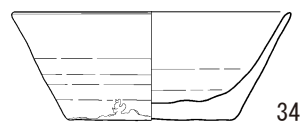


【C-C' 断面】

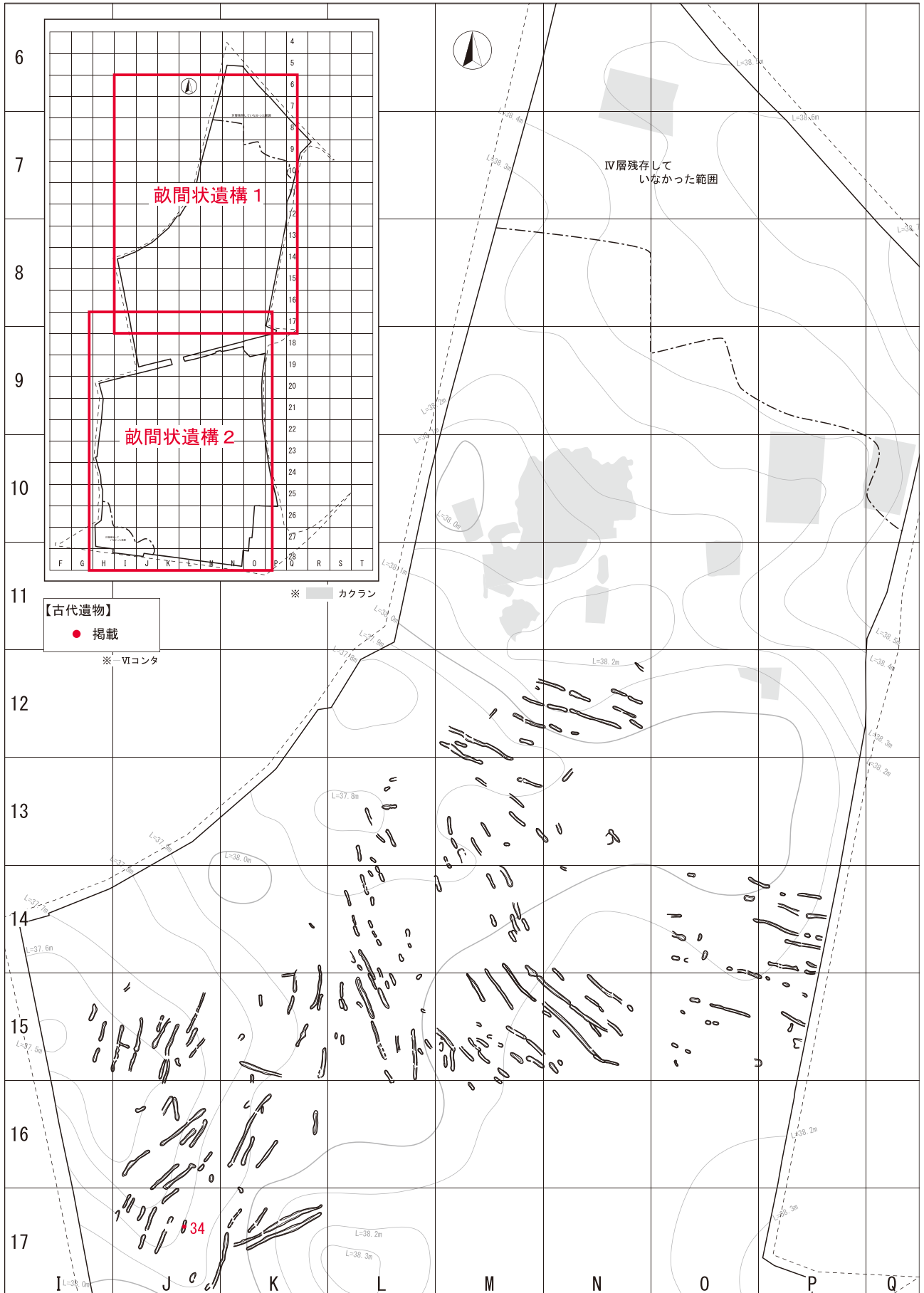


埋土注記

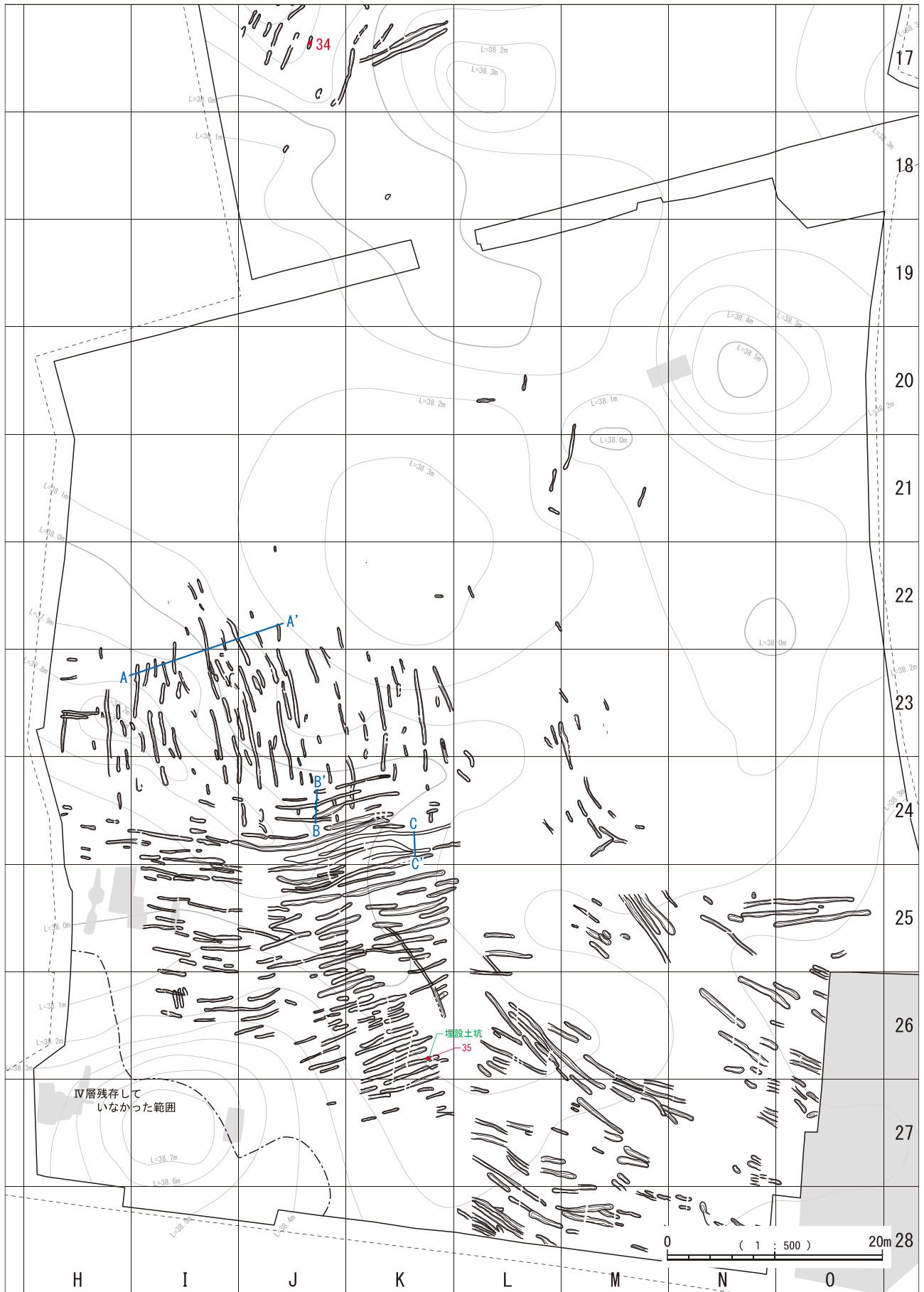
畝間状遺構	① 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) シルト質～砂質。粘性あり。しまる。紫コラブロックを少量含む。
	② 暗褐色土で紫コラを含まない。
	③ 灰黄褐色土 (Hue10YR3/3) シルト質～砂質。粘性あり。ややしまる。紫コラブロックを含む。



第43図 畝間状遺構断面図及び出土遺物



第 44 図 畝間状遺構図 1



第45図 敵間状遺構図2 (埋設土坑含む)

(8) 埋設土坑 (第46図)

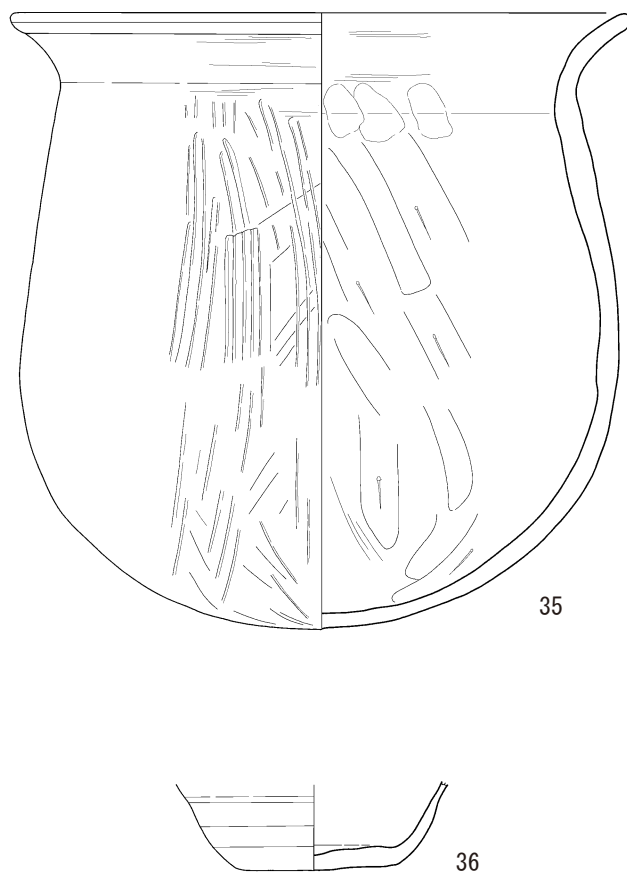
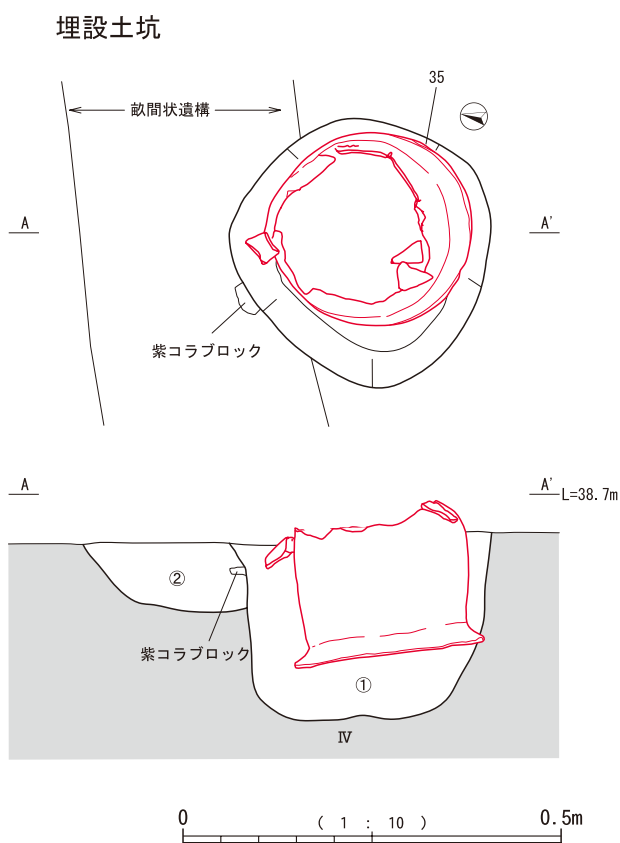
K-26区において、I層土直下のIV層で検出された。平面の直径35cm程度の不整形で、検出面からの深さは24cmと浅いが、IV層上部及びIII層が削平を受けていることを考慮すると、かなりの深さであったと推定される。

土坑の床面はIV層下面のやや固い部分となっている。畝間状遺構を切っており、畝化した後で作られたと考えられ、本遺跡の古代でも新しい方の遺構である。土坑の埋土には紫コラが含まれておらず、意図的に除去したか、埋設時の表土に紫コラがほぼなかったと推定される。

土坑からは底部の無い土師器の甕 (35) が、天地逆の状態 で出土した。甕内の埋土は黒色土で、III層土と推定される。その中より甕の底部と坏 (36) が検出された。状況より、古代の儀礼に伴い甕を埋設したのち、甕内部は空洞であったが中～近世段階で耕作等により底部が割

れ、III層土や近くにあった坏片とともに甕内部へ入り込んだと考えられる。坏及び甕底部片は原位置を留めていないと判断されたため図化していない。どちらも9世紀前半頃のものと考えられる。

35は甕である。口径約25cm、高さ約25cmで、やや胴部が張り出す。外面は縦方向の幅1.2cm程度のハケメの後部分的に横ナデを、内面はケズリを施す。頸部から口唇部にかけては回転ナデである。砂粒が部分的に付着しており、仕上げの際に、台上などで付着したと推測される。砂粒は、強く擦れば外れること、煤の付着が無いこと、底部がほぼ残存していることから、未使用の状態 で埋設されたと判断される。36は坏で、白色で口縁部を欠く。底面には焼成時に割れたと考えられる5cm程度の裂け目がみられる。欠損部が多く、甕とともに埋設されたとは考えにくい。



埋土注記

埋設土坑	① 灰黄褐色土 (Hue 10YR 4/2) しまる やや粘性あり。 黄橙色バミスを含む。
	② 灰黄褐色土 (Hue 10YR5/3) ①よりわずかに明るく、砂質感強い。 黄橙色バミスを2%程度含む。

※②は畝間状遺構埋土

第46図 埋設土坑及び出土遺物

### 3 遺物

隣接遺跡と比較し、古代の包含層と考えられるⅢ層は、近代以降の耕地整理の影響を受け、ほぼ削平を受けており、存在しない。したがって弥生時代中期から古代の包含層であるⅣ層において主に調査を実施した。調査においては、土師器（坏・椀・皿・甕・鉢・紡錘車）、須恵器（甕・坏・はそう・蓋・壺等）などが出土した。なお、全体図のみで個別に図化されなかった遺構（ピット等）から出土した分も含み記載する。土師器や須恵器等の出土数は第21表を参照されたい。出土した総数1700点の古代遺物のうち、遺構出土分を合わせて127点を掲載した。

#### 1 土師器坏（第47～49図37～87）

出土した坏は、51点を図化した。底部は丁寧なナデ仕上げで分かりにくいものも少量あるが、全てヘラ切りである。形状から次の6類に分類し、口縁部等が無く分類できないものは未分類とした。なお、1～3類は体部下部にケズリ調整が残り、4～6類は残らないものである。年代は、1類は8世紀後半から9世紀初頭、2～5類は9世紀前半、6類は9世紀代と考えられる。

1類：体部下端から底面までケズリ調整がみられるもの。ケズリの後、丁寧なナデ調整を行うものが多い。

口径と底径の差が小さいものが多い。

2類：体部下端にケズリ調整を施し、口縁部の開きが比較的小さいもの。口径と底径の差は小さい。

3類：体部下端にケズリ調整を施し、口縁部の開きが比較的大きいもの。口径と底径の差が大きいものが多い。

4類：口縁部の開きが比較的小さいもの。口径と底径の差が小さい。

5類：口縁部の開きが比較的大きいもの。口径と底径の差が大きいものが多い。

6類：器高が約5cm以上で、口縁部はラップ状に開くもの。胴部の中位あたりから外反し、口径と底径の差が大きいものが多い。

#### 1類（第47図37～42）

全て底部ヘラ切りの後、体部下端から底面までケズリ後ナデ調整を行っている。37は体部が丸みを帯び、器高4.5cmと比較的高い。内面はミガキ調整で、体部は橙色と肌色の横縞状となる。ミガキ調整を行う坏は本遺跡ではこれ1点のみである。38～42は赤褐色で色調が類似する。38は内面もケズリ及びナデ調整が見られ、外面とともにヘラ切り後に行ったと推測される。39はケズリ後、底面まで丁寧にナデで仕上げている。40は底面の仕上げが甘く、ヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。41はやや小型で、ケズリの痕跡が明瞭である。42はケズリ後、丁寧にナデを施している。

#### 2類（第47図43）

43の1点のみである。口径と底径の差が1.5倍程度と小さく、外面の体部下端にケズリ調整が見られる。底部はヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。

#### 3類（第47図44～57）

44は口縁部がやや外反し、底面切り離しの後、体部にはみ出した粘土がそのまま残る。45は口縁部が外反し、底部にヘラ状工具の跡が残る。46は内面に粘土を付け足した後、内外面にケズリを施しており、体部が薄い。47は体部外面に煤の跡が残り、見込み部にはナデによる凹みがみられる。48は回転ナデによる凹凸が深く、ナデ幅は上部ほど広くなる。49は口縁部がゆるく外反する。50は赤褐色の粘土を用いており、内面にケズリを入れ薄く仕上げている。51は体部下端付近のケズリの幅が広く、口縁部先端がやや外反する。底面はヘラ状の工具でナデで仕上げている。52は口縁部内外面が赤褐色を呈し、体部の真ん中付近からやや外反する。53は回転ナデの凹凸が深く、底面に丁寧なナデがみられる。54は体部から底面にかけて煤、底面から体部真ん中付近まで赤色の部分がみられる。55は、棒状の工具の跡が残る。56は赤褐色を呈し、見込み部分の中心が凹む。57は、口縁部がやや歪む。

#### 4類（第48図58）

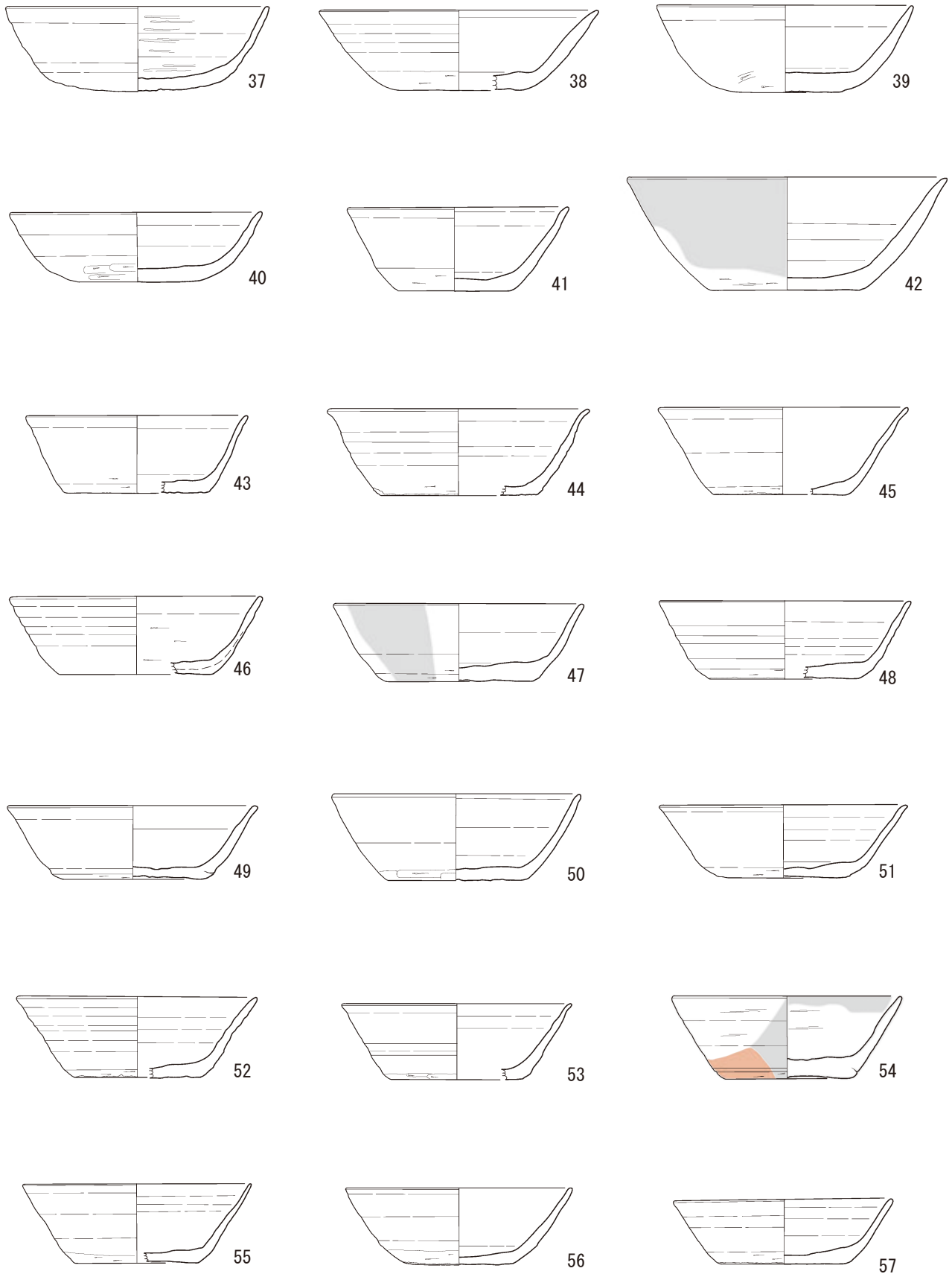
58の1点のみである。回転ナデによる凹凸が多く、内面は赤褐色で丸みを帯びる。口縁部はわずかに外反する。

#### 5類（第48図59～70）

59・60は口径約14cm、高さ約4cmで、底面はヘラ切りの後丁寧にナデを施している。61・62は回転ナデの凹凸が深く、底面はナデを施していない。63・64は回転ナデの幅が浅く細かい。65は橙色を呈し器高が4.5cmと高く、底面は、丁寧にナデを施している。66は体部下端に指押さえの跡が残る。67は内面における底部と体部の境に凹みがみられる。68は黒褐色を呈し、他にみられない色調である。69は口縁部外面に煤が付着する。70は底部が厚く、底面の調整が雑で粘土が体部に付着している。

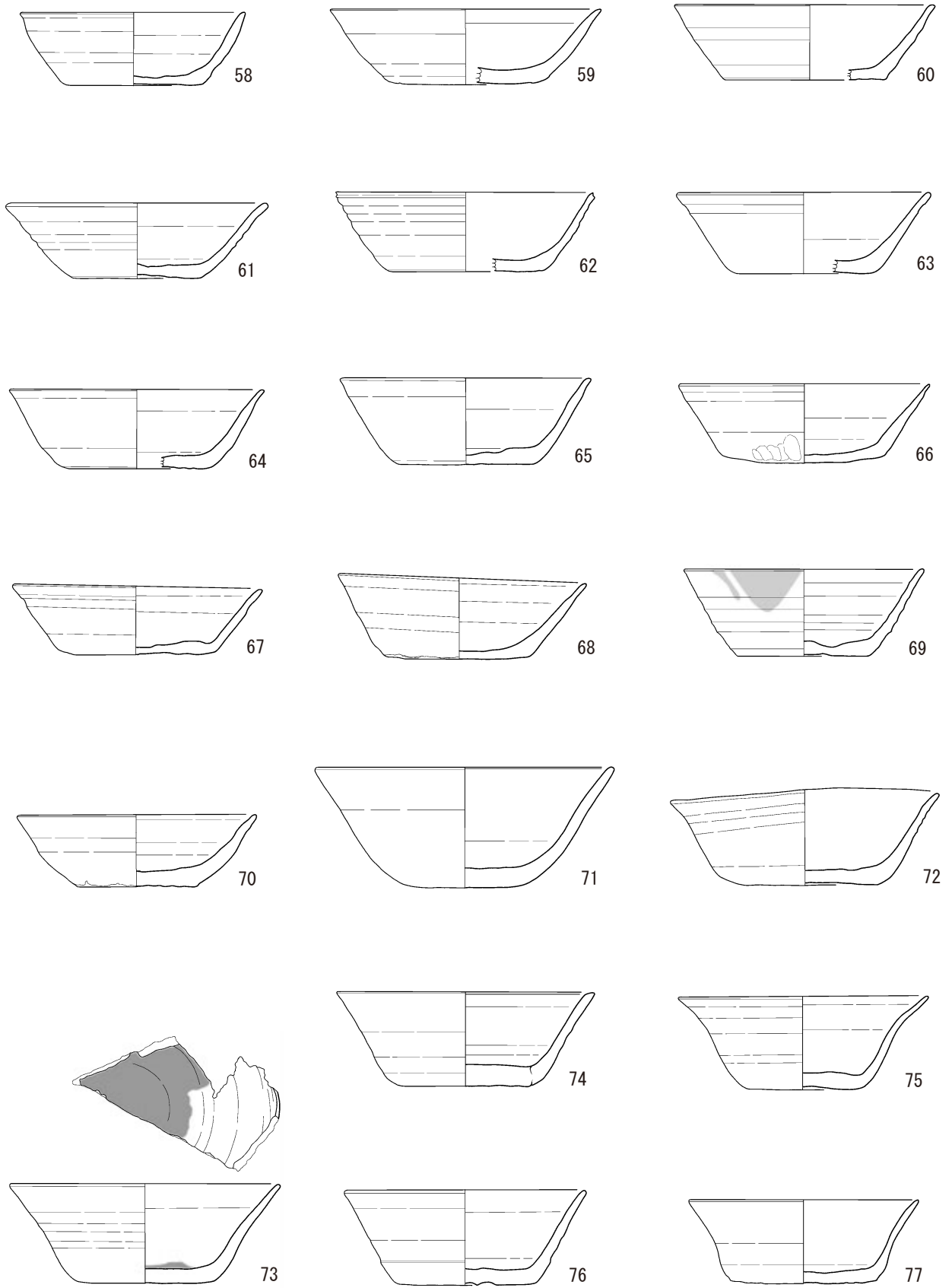
#### 6類（第48図71～77）

71は外面橙色を呈し、全坏の中で最大の器高で、底径と口径の差が大きい。72はほぼ完形で、口縁部の歪みが大きく、焼成時に割れたようで底面に大きくヒビが入る。73は見込み部分に墨の跡が残り、墨入れに使用されていたと考えられる。74は底面を皮革等とみられる工具で複数回ナデを施しており、ヘラ切りの痕跡がほぼ無くなっている。75は体部の中間の高さから強く外反する。76は外反が弱い器高が5cm近くあるため、77は器高が4.4cmしかないが体部がラップ状に大きく外反するため、どちらも本類に分類している。



0 ( 1 : 3 ) 10cm

第 47 図 土師器坏 1 ~ 3 類



第 48 図 土師器坏 4 ~ 6 類

## 未分類(第49図78～87)

口縁部等が欠けており、分類が確定できないものである。78～81は体部外面下端にケズリがみられ、体部の角度により、78・79は2類、80・81は3類と推定される。81は見込みの中心部が円状に欠けており、意図的に中心部を割って使用された可能性がある。

82～84は4類か5類に該当すると推定されるもので、82は薄い橙色、83・84は薄い黄橙色を呈す。85は体部の残存部分の上端が赤褐色を呈し、底部がやや厚い。86・87は体部のみで、傾きが大きい。坏に分類しているが椀等別の器種の可能性がある。86は口縁部内外面の一部が赤色で、顔料が塗布されていると考えられる。87は回転ナデ時の押さえの影響で、厚みが均等でない。

### 2 土師器椀 (第50図88)

椀と判別できるものは1点のみであった。88は橙色を呈し、高台は短く、体部は直線的に立ち上がる。全て丁寧に回転ナデ等で調整されている。9世紀前半頃と考えられる。

### 3 土師器皿 (第50図89～99)

皿と判別できるもののうち、11点を図化した。全て底面はヘラ切りである。色調や調整によって2類とその他に分類した。年代は8世紀末から9世紀初頭頃と考えられる。

#### 1類 (第50図89～92)

明赤褐色を呈し、見込み部分にナデによる凹みがわずかにみられ、ヘラ切り後ナデ調整しているもの。口径は13～14cm、高さは1.6～1.9cmで口縁部は外反する。91と92は色合いや調整がかなり類似する。91の内外面には煤が付着している。

#### 2類 (第50図93～97)

黄橙色を呈し、見込み部分がナデによる凹みがみられ、底面ヘラ切り後のナデが雑なもの。口縁部はやや外反し、

器高は2.0～1.6cmである。93は体部がやや垂直に立ち上がり、強く外反する。94は底部ヘラ切りの後、ほぼ無調整である。95・96は口縁部の外反はやや緩い。97は外面に煤が付着する。

#### その他 (第50図98・99)

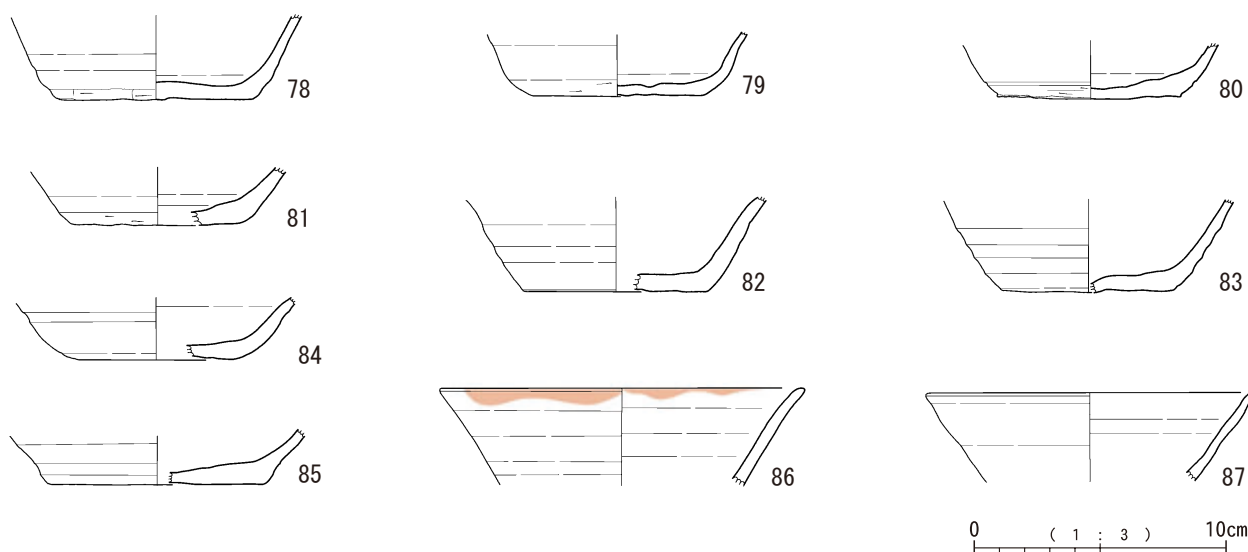
98は器高が2.5cmと最も高いもので、底面は厚みがあり、内面が剥がれているため、粘土を付け足して厚みを出したと考えられる。99は高さ1.5cm程度のラインまで墨を入れた跡が残る。体部外面において、下端以外に濃い黒色の塗料が塗布されている。

### 4 黒色土器 (第50図100～101)

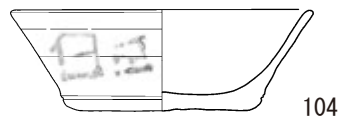
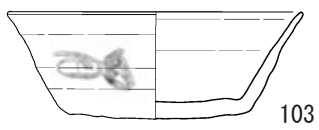
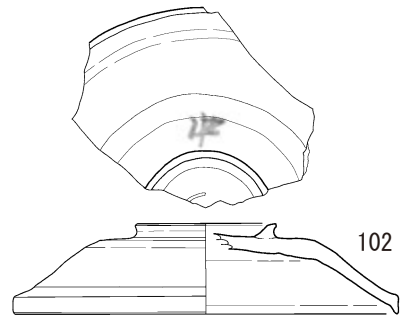
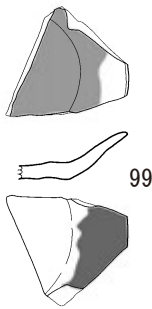
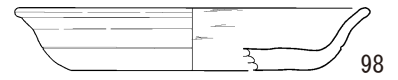
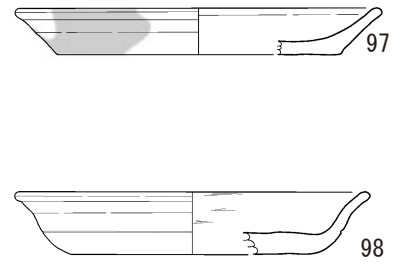
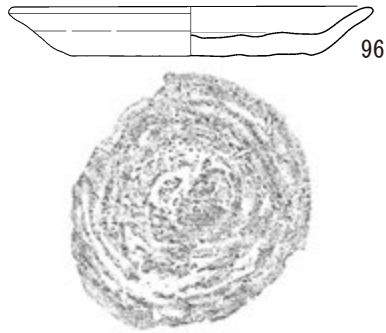
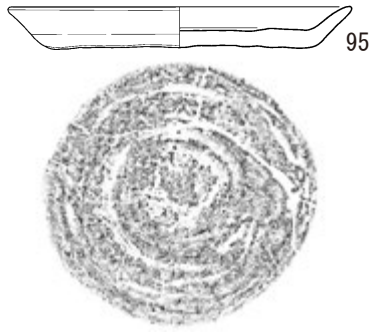
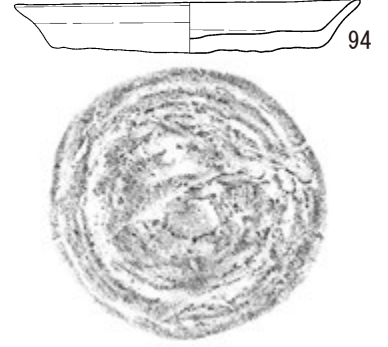
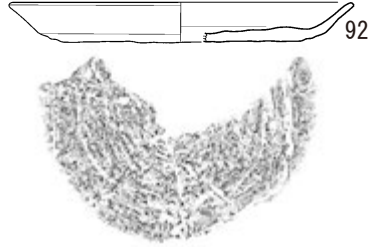
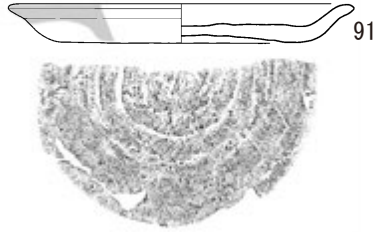
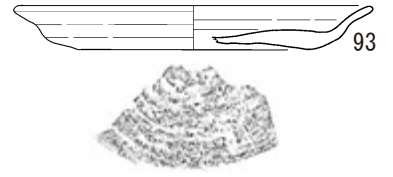
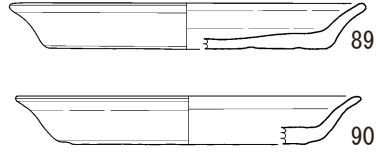
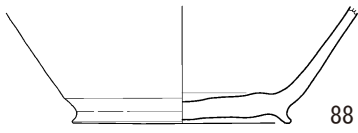
2点を図化した。100は坏と考えられるもので、外面上部はミガキ、下部はケズリ調整である。内面は黒色でミガキ調整であるが、体部と底部の境部分は調整跡を削り取っている。101は椀で、高台は短く断面三角形状となる。内面は丁寧にミガキ調整されている。どちらも9世紀前半頃と考えられる。

### 5 墨書土器 (第50図102～105)

墨書がみられるものは4点あり、IV層から出土しており全て図化した。102は蓋で、口縁端部が下方向へ屈曲し、輪高台状のつまみをもつ。つまみの外側の平坦部に「中」と文字が確認できる。103は坏で、白黄色を呈し、口径約12cmである。体部はやや外反しつつ立ち上がる。体部外面に「四月」の文字が確認できる。104も坏で、口径約12cmで体部は細く、外側へ直線的に伸びる。体部に文字がみられるが、色が薄く判別が困難であったため赤外線写真を用いて検討を行った結果、「日」もしくは「田」の文字ではと推測される。105は体部のみのため器種不明だが、坏と推測される。胴部にみられる2文字のうち1字は「曾」の一部分と推測され、もう1字は判別不明である。



第49図 土師器坏 (未分類)



0 ( 1 : 3 ) 10cm

第 50 図 土師器碗・皿・黒色土器・墨書土器

## 6 土師器甕 (第51～54図106～123)

甕は18点図化し、形状で3類に分けた。年代の判別は難しいが、1類は8世紀後半から9世紀前半、2類及び3類は9世紀代が想定される。

1類：器形が強いS字を呈するもの。胴部は大きく膨らむ。

2類：器形がゆるやかなS字を呈し、胴部が弱い張り（膨らみ）をもつもの。色調は橙色がほとんどである。

3類：胴部の張りがほとんど無く、直線的なもの。

### 1類 (第51図106・107)

106は胴径が27.8cmでほぼ口径と同じである。器壁が1.2～1.5cmと厚く、口縁部がくの字に外反する。外面に黒斑が多くみられる。外面の調整は口縁部から頸部が横ナデ、胴部はハケメの後ナデである。内面のケズリは頸部でやや不揃いである。107は口径及び胴径が14.8cmと同じで、他の甕と比較しかなり小さい。外面は茶褐色で、胴部下にタタキがみられる。

### 2類 (第52図108～114)

108は口径が約30cmの大型で、やや薄手である。口縁部は短く、約45度の角度で外反する。胴部外面はハケメの後部分的にナデ調整が施される。109は内外面とも茶褐色で外面は縦方向のハケメの後、頸部や胴部に部分的にナデ調整が施される。頸部の径は約25cmと推定される。110は口径が20cmと中型で、胴部外面の下部には横方向のハケメがみられる。内面下部はケズリ後ナデが施される。111・112は口唇部がやや肥圧する。113は胴部が1.2～1.4cm程度で厚みがあり、口縁部が短い。114は口縁部外面まで丁寧にハケメが施されている。

### 3類 (第53図115～119)

115は胴部外面のハケメの大部分が横方向にナデ消さ

れており、内面は指頭圧痕が残る。116・117は口径が約28cmで頸部付近に厚みがあり、内面を指で押さえた跡がみられる。118は外面のハケメと内面のケズリの上位を揃え、外面はハケメの後、先が1～2mm程度の工具で横方向に押し引いている。119は胴部に黒斑が多く、胴部外面は縦方向のハケメの後、横方向に工具でナデつけた跡が残る。口縁部は胴部と比較し薄い。

### 未分類 (第54図120～123)

残存する部分が少なく、形状が不明で分類が困難なものである。120・121は口径が約28cmで口縁部尖端がやや肥圧する。122は口径が17cmと小型で、残存部にハケメがみられない。123の胴部外面のハケメは横方向の後、縦方向に施している。

## 7 土師器鉢 (第54図124～127)

鉢は4点のみの出土であり、2類に分類した。

1類：平坦な底部で胴部が直線的に開くもの。

2類：口縁部が大きく開き、胴部が浅く丸みをもつもの。

### 1類 (第54図124・125)

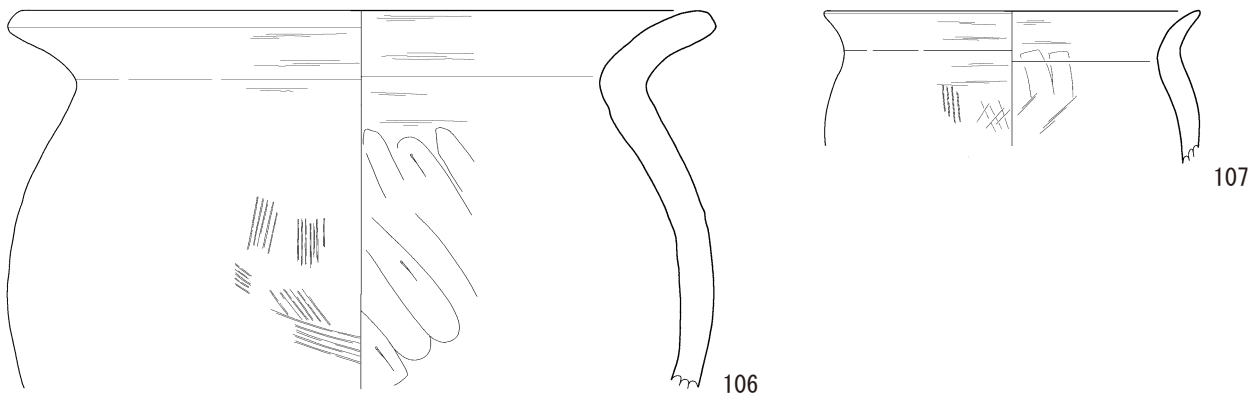
124は外面が淡い橙色で、胴部がほぼ直角に立ち上がる。調整が荒く、底部に剥離面、胴部に粘土輪積み痕が残る。125は底部外面にヘラ切りの痕跡が残り、胴部外面は棒状の工具で引かれた細い凹線がみられる。

### 2類 (第54図126・127)

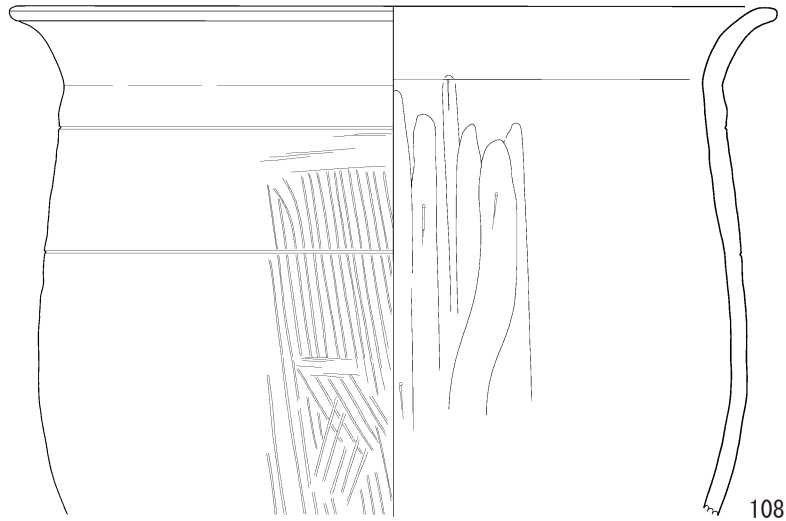
126・127とも口縁部は「く」の字に外反し、胴部下部の外面にタタキがみられる。127はケズリの後、ナデや指で押さえた痕が確認できる。

## 8 土製品 (紡錘車) (第54図128・129)

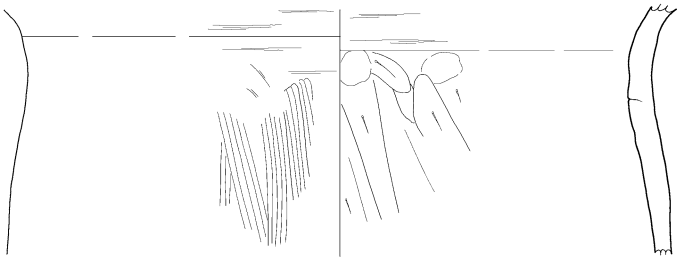
128は土師器底部の転用品と考えられ、厚みが一定で表面を丁寧に削って仕上げている。129は手捏ねで作られ孔部分が厚く、外側へ向け薄くなる。



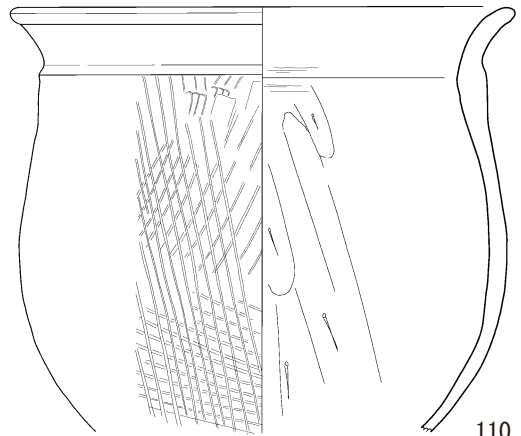
第51図 土師器甕1類



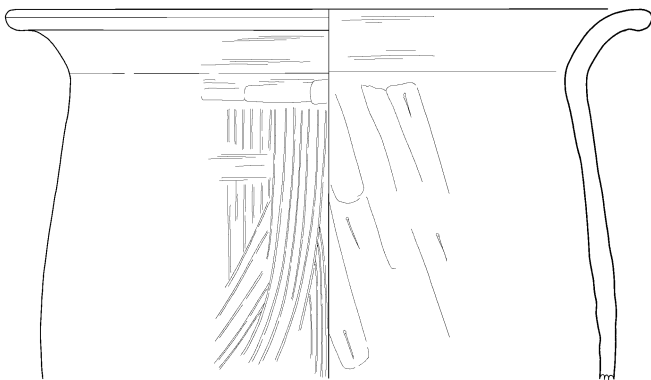
108



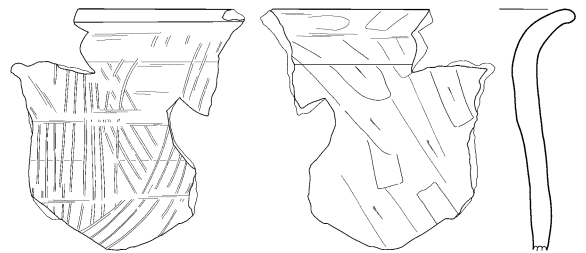
109



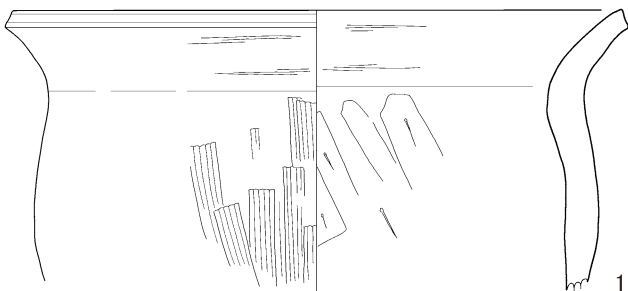
110



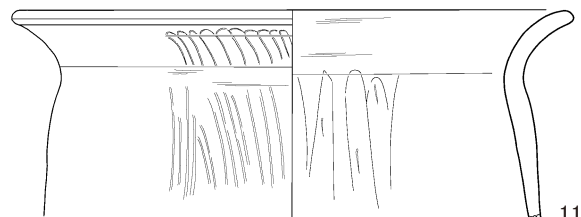
111



112



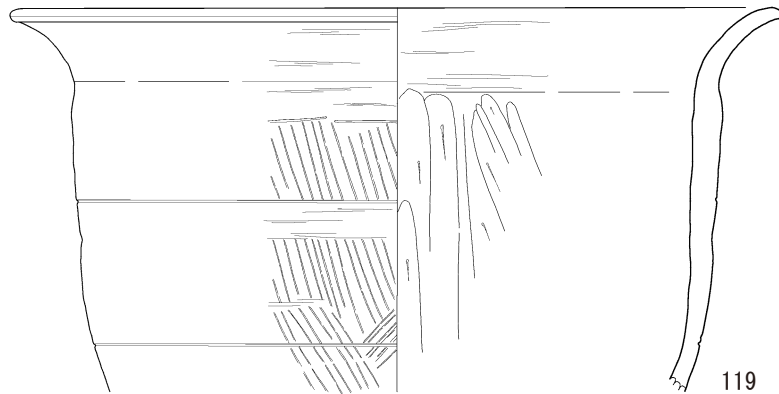
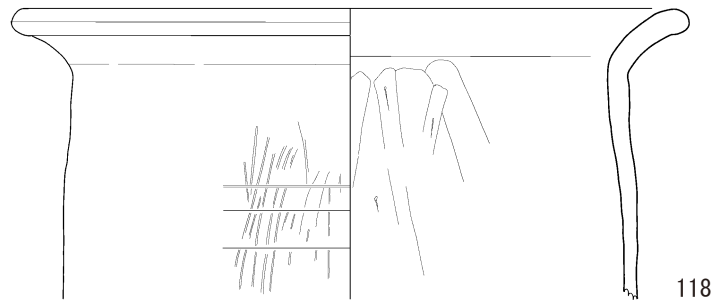
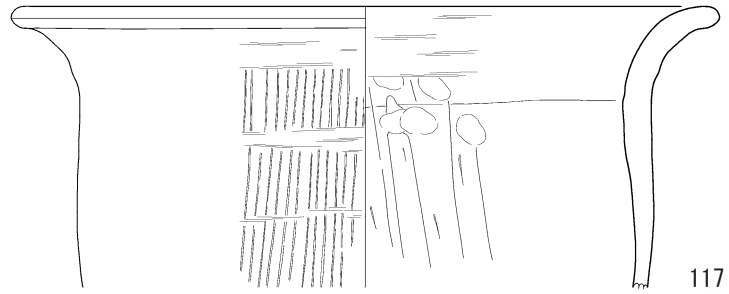
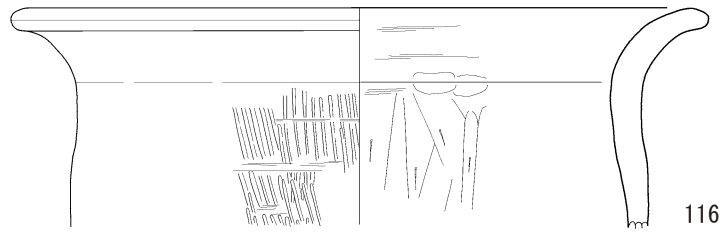
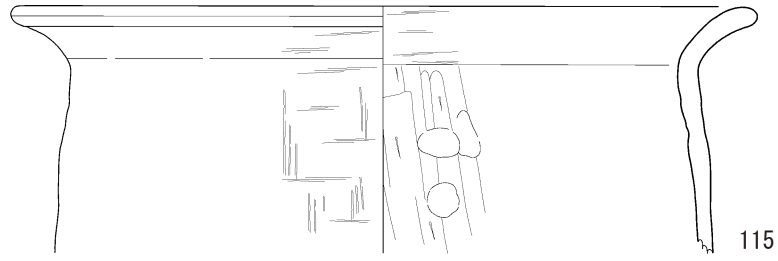
113



114

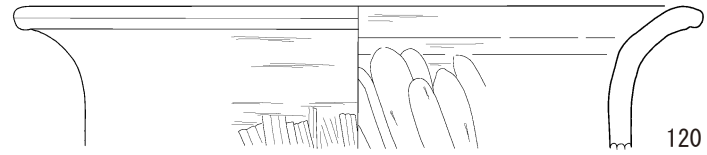
0 ( 1 : 3 ) 10cm

第 52 図 土師器甕 2 類

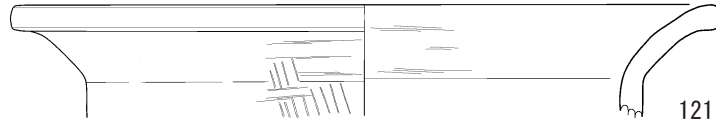


0 ( 1 : 3 ) 10cm

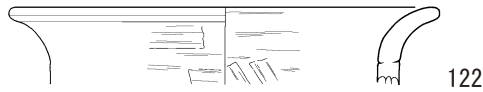
第 53 図 土師器甕 3 類



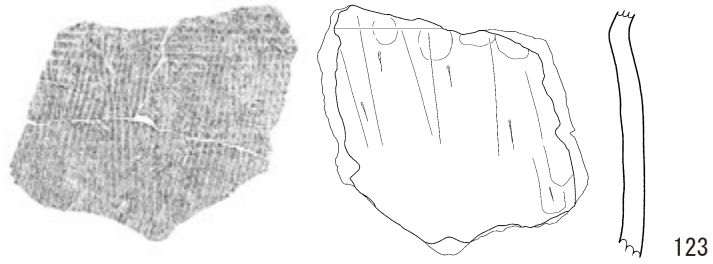
120



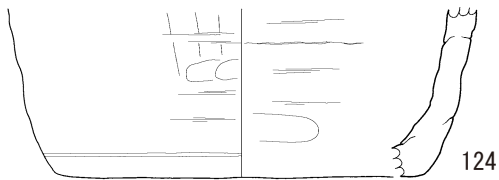
121



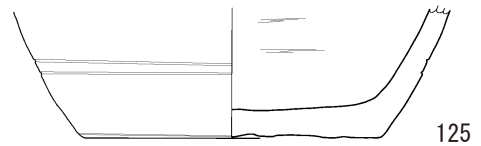
122



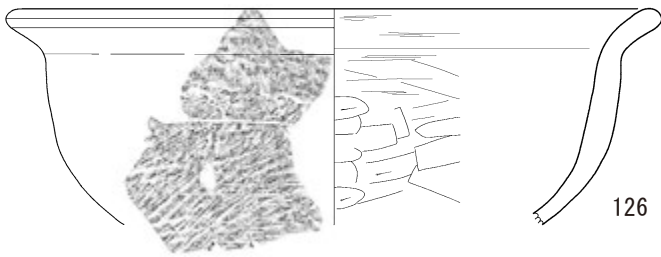
123



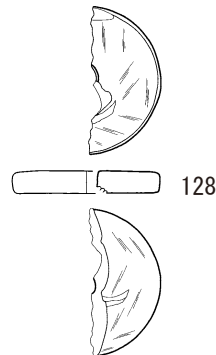
124



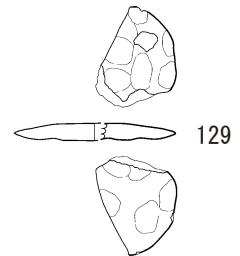
125



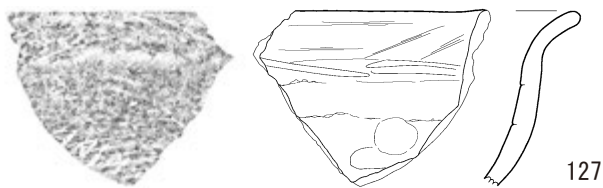
126



128



129



127

0 ( 1 : 3 ) 10cm

第54図 土師器甕(未分類)・鉢・紡錘車

9 須恵器坏 (第55図130 ~ 137)

須恵器の坏は8点を図化し、高台の有無で2類とその他に分類した。8世紀後半から9世紀前半頃のものと考えられる。

1類：高台のないもの。

2類：高台のあるもの。

1類 (第55図130 ~ 132)

130は焼成時に付いたと考えられる植物繊維状の痕(火襷痕)が内外面にみられ、底部へラ切りの際にはみ出した粘土が胴部外面に残る。131は底部外面下端が丸みを帯びる。132は底部外面が丁寧にナデ調整されている。

2類 (第55図133 ~ 135)

133は高台が8mmの高さで、貼り付けの痕が残る。内外面とも丁寧にナデ調整されている。134は底径が約7cmで、高台がほぼまっすぐに立ち上がる。135は高台が5mm程度と低く、高台上部の底部内面が厚く膨らむ。

その他 (第55図136・137)

136・137は口縁部から胴部のみで、坏の一部と考えられる。どちらも口縁部に向けて直線的に立ち上がり、口

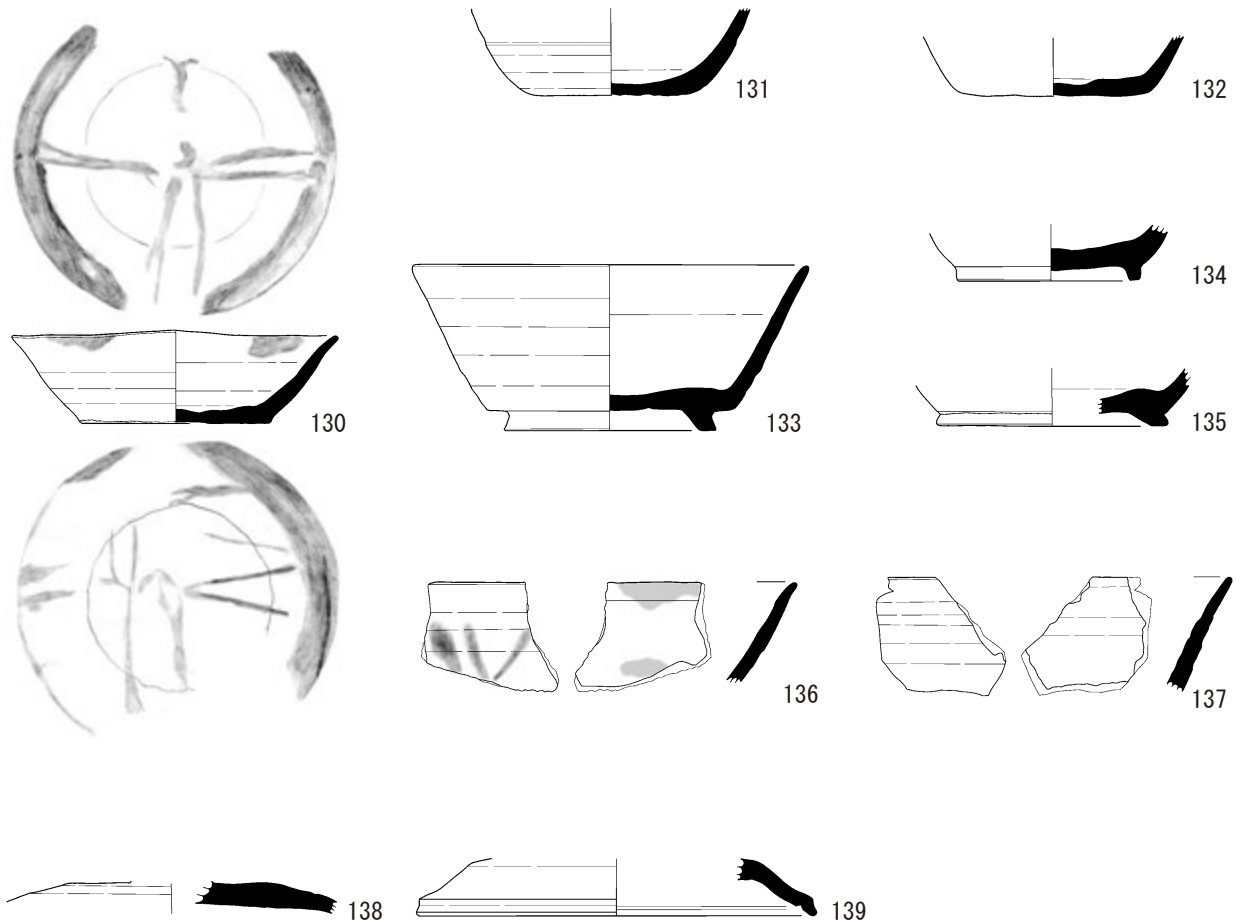
縁部がやや外反する。136は火襷痕が残る。

10 須恵器蓋 (第55図138・139)

2点のみ出土したものを図化した。8世紀後半から9世紀前半頃のものと考えられる。138はつまみ部分が外れ、端部を欠く。内面は丁寧なナデ調整で、上面のつまみ付近はケズリの痕跡を残す。139は端部を下方方向に折り曲げ、工具で丁寧にナデして仕上げている。

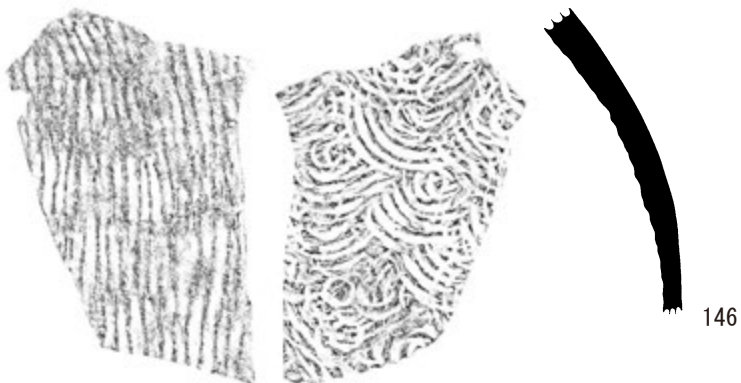
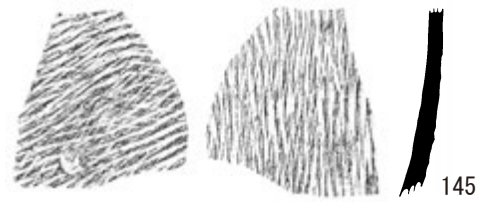
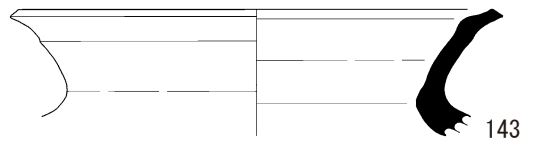
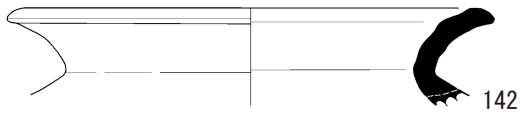
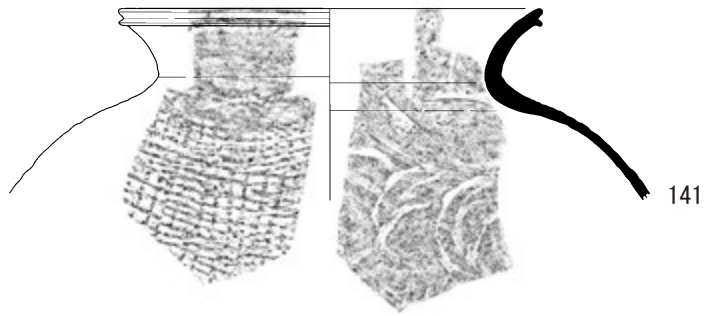
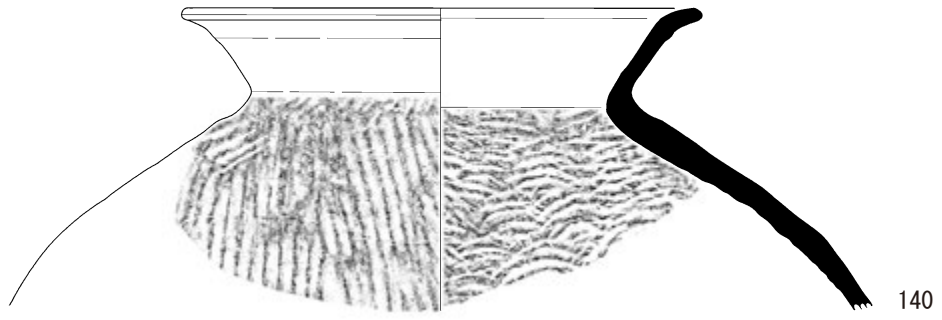
11 須恵器甕 (第56図140 ~ 147)

口縁部が残るものを中心に8点を図化した。9世紀代のものと考えられる。140は頸部がほぼ直角に外反し、口縁部内面が水平になる。内面は同心円当具痕、外面は平行文タタキである。141は短い口縁部の外面に断面三角形の突帯を1条有し、胴部は大変薄く内面は褐色である。外面は格子目タタキ、内面は同心円当具痕がみられる。142・143は口縁部から頸部で、142は口縁部が短く厚みがあり、143は口唇部が薄く平坦である。144 ~ 147は胴部で、144の平行文タタキは細かく、下部は方向を変えて叩いたため格子状に見える。146の内部は同心円文タタキで、下から上へ叩いた形跡が残る。



0 ( 1 : 3 ) 10cm

第55図 須恵器坏・蓋



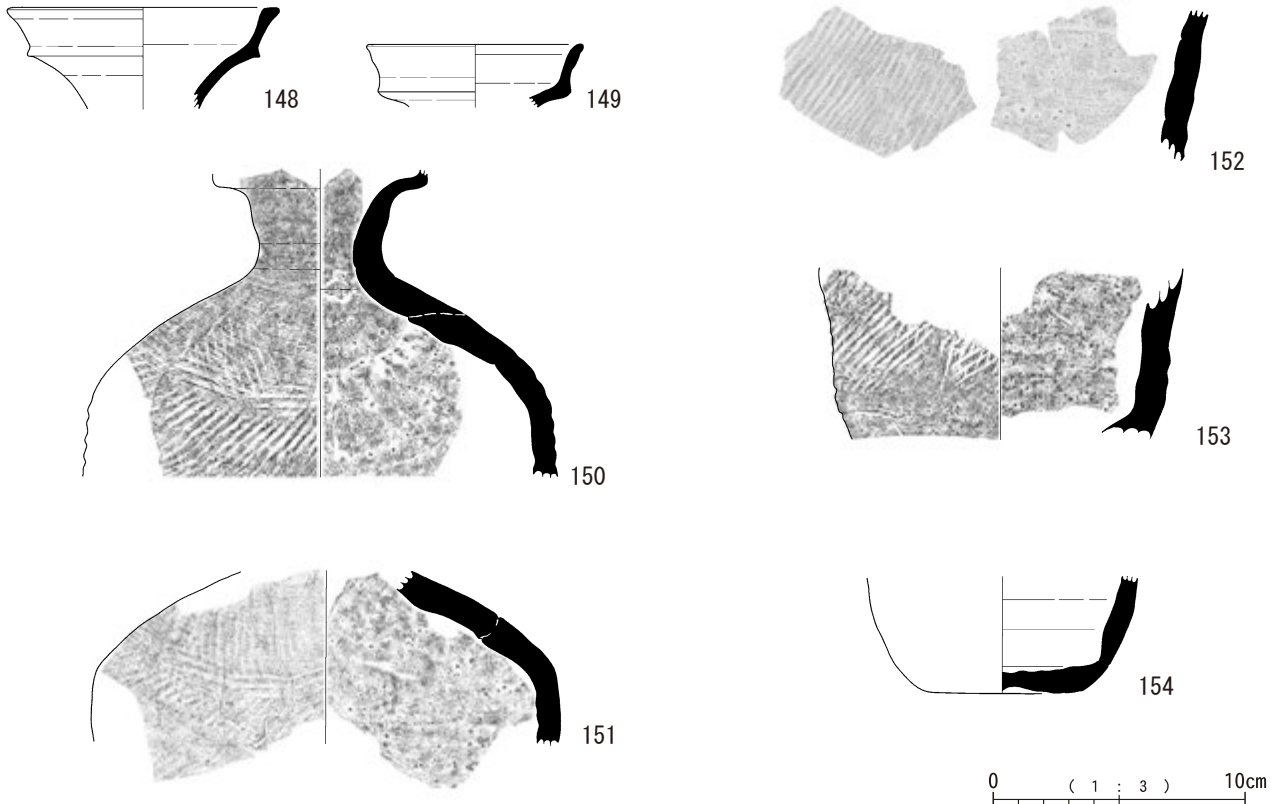
0 ( 1 : 3 ) 10cm

第 56 図 須恵器甕

12 須恵器壺 (第57図148～154)

口縁部や底部を中心に7点図化した。9世紀代のものと考えられる。148は口縁部で、断面三角形の突帯を一条有し、内外面が茶褐色を呈し、口唇部が水平で厚くなる。149～153は、ほぼ同じ地点から出土しており、内外面の色調が似ていること、2～5mmの大粒暗褐色の礫が多量に含まれること、胎土も同じであることなどから同一個体の可能性が高い。149は口縁部が上方向に直角

に曲がり、二重口縁となる。150は口唇部から屈曲部付近まで残存せず、人為的に欠けさせたとと思われる。頸部には貼り付け痕が明瞭に残る。151は150と比較し、胴部の屈曲の角度がやや鋭角になる。152・153は外面が平行文タタキである。153は底部との接着が弱かったのか、きれいに剥がれ外れている。154は作りが丁寧であるが、底面は荒く、ヘラで起こした後、無調整である。



第57図 須恵器壺

第6表 古代遺構内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整 (外)	調整 (内)	色調 (外)	色調 (内)	備考
22	28	掘立柱建物跡1号P3	SP3808-一括	土師器	坏	口縁～底部	12.2	7.8	4.3	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	墨有り
	29	掘立柱建物跡1号P3	SP3808-2一括 28419(J-16区)	土師器	壺	口縁～胴部	28.1	-	-	ハケメ・回転ナデ・ナデ	ケズリ・ナデ・回転ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
23	30	掘立柱建物跡1号P4	32075(J-16区) SP3809-1	土師器	壺	口縁～胴部	32.0	-	-	ハケメ・回転ナデ・ナデ	ケズリ・ナデ・回転ナデ	Hue7.5YR にぶい褐5/3	Hue7.5YR にぶい褐5/4	
	31	掘立柱建物跡1号P7	SP837-1	土師器	壺	口縁～胴部	25.8	-	-	ハケメ・回転ナデ・ナデ	ケズリ・ナデ・回転ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 橙6/6	
26	33	掘立柱建物跡4号P6・8・12・14	SP3003-1 SP3005-1一括 SP3006-一括 SP3007-1	土師器	坏	口縁～底部	13.2	7.2	4.4	回転ナデ	ケズリ後回転ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue5YR 橙6/6	赤色顔料有り・ヘラ切り
43	34	畝間状遺構	SD3353-一括	土師器	坏	口縁～底部	(11.0)	(6.6)	4.3	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐6/6	
46	35	埋設土坑	SP2295-1	土師器	壺	完形	24.5	-	24.4	ハケメ・ヨコナデ	ケズリ・ヨコナデ・指頭圧痕	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	
	36	埋設土坑	SP2295-一括	土師器	坏	胴～底部	-	6.3	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue2.5Y 浅黄7/4	Hue2.5Y 浅黄7/4	

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	種別	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備考
24	32	掘立柱建物跡2号P3	SP1252-一括	打製石鏃	黒曜石	1.75	1.35	0.40	0.69	尖端等破損

※( )は推定

第7表 古代遺構計測表

掘立柱建物跡1号

ピット	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向		N - 12° - E				
P 1	59	47	90							
P 2	70	52	81							
P 3	61	49	81							
P 4	63	48	67							
P 5	62	48	88							
P 6	44	39	96							
P 7	43	40	69							
P 8	45	40	82							
P 9	(55)	40	85							
P 10	57	49	79							
				桁行 (cm)		桁行柱間 (cm)				
				P10-P 7	570	P10-P 9	200	P 2-P 3	173	
				P 2-P 5	563	P 9-P 8	178	P 3-P 4	200	
						P 8-P 7	195	P 4-P 5	197	
				梁行 (cm)		梁行柱間 (cm)				
				P10-P 2	350	P10-P 1	177	P 7-P 6	176	
				P 7-P 5	357	P 1-P 2	174	P 6-P 5	181	

掘立柱建物跡2号

ピット	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向		N - 75° - E				
P 1	(47)	(40)	50							
P 2	37	34	34							
P 3	49	46	55							
P 4	43	43	59							
P 5	44	40	42							
P 6	42	40	58							
P 7	46	42	71							
P 8	49	42	57							
P 9	45	42	64							
P 10	40	38	56							
				桁行 (cm)		桁行柱間 (cm)				
				P 9-P 6	530	P 9-P 8	185	P 1-P 2	187	
				P 1-P 4	542	P 8-P 7	171	P 2-P 3	181	
						P 7-P 6	175	P 3-P 4	174	
				梁行 (cm)		梁行柱間 (cm)				
				P 9-P 1	390	P 9-P 10	196	P 6-P 5	178	
				P 6-P 4	395	P10-P 1	194	P 5-P 4	218	

掘立柱建物跡3号

ピット	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向		N - 2° - W				
P 1	47	40	43							
P 2	50	48	63							
P 3	43	40	45							
P 4	49	41	35							
P 5	54	50	71							
P 6	46	39	38							
P 7	61	43	56							
P 8	49	40	79							
P 9	40	32	38							
P 10	63	55	64							
				桁行 (cm)		桁行柱間 (cm)				
				P10-P 7	476	P10-P 9	168	P 2-P 3	157	
				P 2-P 5	458	P 9-P 8	155	P 3-P 4	147	
						P 8-P 7	153	P 4-P 5	156	
				梁行 (cm)		梁行柱間 (cm)				
				P10-P 2	346	P10-P 1	174	P 7-P 6	170	
				P 7-P 5	348	P 1-P 2	164	P 6-P 5	179	

掘立柱建物跡4号

ピット	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向		N - 2° - W				
P 1	32	29	24							
P 2	29	26	27							
P 3	34	24	22							
P 4	33	30	22							
P 5	30	27	30							
P 6	35	32	24							
P 7	30	27	43							
P 8	41	37	33							
P 9	(35)	(30)	25							
P 10	38	32	26							
P 11	35	33	34							
P 12	34	32	24							
P 13	42	34	41							
P 14	30	28	35							
				桁行 (cm)		桁行柱間 (cm)				
				P4-P 11	702	P 1-P 4	127	P 3-P 6	132	
				P 6-P 9	685	P 4-P 13	206	P 6-P 7	239	
						P13-P 12	241	P 7-P 8	214	
						P12-P 11	253	P 8-P 9	227	
						P 2-P 5	142	P14-P 10	237	
						P 5-P 14	461	P 5-P 10	696	
				梁行 (cm)		梁行柱間 (cm)				
				P 4-P 6	293	P 1-P 2	152	P12-P 14	135	
				P11-P 9	290	P 2-P 3	125	P14-P 8	155	
				P 1-P 3	277	P 4-P 5	146	P11-P 10	158	
						P 5-P 6	151	P10-P 9	133	
						P13-P 7	319	P12-P 8	287	

掘立柱建物跡5号

ピット	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向		N - 20° - E				
P 1	34	30	44							
P 2	43	32	25							
P 3	34	25	30							
P 4	31	30	38							
P 5	34	31	(45)							
P 6	31	30	30							
P 7	35	30	31							
P 8	55	45	52							
P 9	49	27	47							
P 10	35	28	31							
				桁行 (cm)		桁行柱間 (cm)				
				P 1-P 8	545	P 1-P 10	196	P 3-P 4	199	
				P 3-P 6	563	P10-P 9	196	P 4-P 5	187	
						P 9-P 8	158	P 5-P 6	177	
				梁行 (cm)		梁行柱間 (cm)				
				P 1-P 3	352	P 1-P 2	178	P 8-P 7	174	
				P 8-P 6	347	P 2-P 3	174	P 7-P 6	173	

※ ( ) は推定

ピット名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
ピット2号	32	30	45
ピット3号	(85)	-	42
ピット4号	(38)	(34)	56
ピット5号	30	30	40
ピット6号	32	29	45
ピット7号	44	41	36
ピット8号	39	28	57
ピット9号	30	26	58
ピット10号	27	26	41
ピット11号	(73)	-	74
ピット12号	31	27	66
ピット13号	30	29	49
ピット14号	35	34	46
ピット15号	34	32	134
ピット16号	42	38	36
ピット17号	22	18	47
ピット18号	(57)	40	29
ピット19号	44	39	54
ピット20号	24	23	51
ピット21号	25	19	43
ピット22号	(40)	25	67

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
溝状遺構1号	454	88	32
溝状遺構2号	450	132	44
溝状遺構3号	576	178	36

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
紫コラ集中域	114	51	10

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	区	検出面
土坑1号	95	78	8	0-10	Va層
土坑2号	130	59	5	0-10	Va層
土坑3号	90	77	6	0-10	Va層
土坑4号	102	67	8	0-P-10	Va層
土坑5号	(90)	52	5	0-10-11	Va層
土坑6号	102	76	5	P-11	Va層
土坑7号	(112)	100	27	K-13	IV層
土坑8号	104	88	24	J-14	IV層
土坑9号	80	62	13	K-17	IV層
土坑10号	105	70	45	L-22	Va層
土坑11号	163	151	28	K-27	IV層
土坑12号	(114)	102	20	K-27	IV層
土坑13号	125	112	15	K-27	Va層
土坑14号	116	116	22	K-27	Va層

遺構名	長軸	短軸	深さ	区	検出面
埋設土坑	35	34	24	K-26	IV層

第8表 古代遺物観察表 1

挿入番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整 (外)	調整 (内)	色調 (外)	色調 (内)	備考
47	37	I-15	IV	28412-28410-28409	土師器	坏	口縁～底部	(13.8)	(8.8)	4.5	回転ナデ後ケズリ・ナデ	ミガキ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	38	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(14.8)	(7.6)	4.2	回転ナデ後ケズリ・ナデ	回転ナデ後ケズリ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	39	K-28	IV	20225	土師器	坏	口縁～底部	(13.6)	(6.0)	4.6	ケズリ・丁寧なナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
	40	L-27	IV	21870	土師器	坏	口縁～底部	(13.3)	6.2	3.7	回転ナデ後ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	41	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	11.8	6.0	4.5	回転ナデ後ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	42	ハ区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(17.0)	(7.8)	6.0	回転ナデ後ケズリ・丁寧なナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue7.5YR にぶい橙6/4	外面煤付着、底面ヘラ切りかは判別不可
		K-27	IV	21153											
		K-27	V a	23598											
	43	L-27	IV	20243-20902	土師器	坏	口縁～底部	(11.8)	(7.6)	4.1	回転ナデ後ケズリ・ナデ	ケズリ後回転ナデ	Hue10YR にぶい黄橙7/4	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
	44	L-27	IV	21796-21797-20903-20572	土師器	坏	口縁～底部	(13.9)	(8.4)	4.6	回転ナデ	回転ナデ・ケズリ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
		二区	-	一括											
	45	L-26	IV	21752-21746-一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	7.0	4.6	回転ナデ後ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	46	M-27	ビット内	SP2304-5-6-8～10-12～14	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	(8.0)	4.1	ケズリ後回転ナデ・ナデ	ケズリ後回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	47	J-13	IV	29148-29149-29211	土師器	坏	口縁～底部	(13.3)	7.8	4.2	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ケズリ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	外面煤付着
	48	M-26	IV	20287	土師器	坏	口縁～底部	(13.3)	(8.0)	4.1	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	49	M-27	ビット内	SP2528-1～4	土師器	坏	口縁～底部	(13.3)	(7.6)	3.9	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐6/6	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
	50	K-27	IV	21113-20655-一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	7.4	4.6	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ケズリ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
		M-28	カクラン	一括											
	51	M-26	IV	21755-21760	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	6.8	3.9	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR にぶい黄褐5/4	Hue10YR にぶい黄褐5/4	
	52	L-26	IV	20006	土師器	坏	口縁～底部	(12.8)	(6.8)	4.3	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	53	M-25	IV	20852-20522-20524-20525-20853-20526-20353	土師器	坏	口縁～底部	(12.2)	(7.0)	4.0	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	54	L-26	ビット内	SP2307-1-2	土師器	坏	口縁～底部	(12.2)	6.8	4.4	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ	Hue10YR にぶい黄橙6/4	Hue10YR にぶい黄橙7/4	煤付着
	55	L-26	IV	20341	土師器	坏	口縁～底部	(12.2)	6.5	4.2	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	56	M-26	IV	19983	土師器	坏	口縁～底部	(12.0)	(5.6)	4.1	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
		二区	-	一括											
	57	M-28	ビット内	SP2311-1	土師器	坏	完形	11.6	6.8	3.5	回転ナデ・ケズリ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 明褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
48	58	K-26	ビット内	SP2294-1	土師器	坏	口縁～底部	(11.8)	7.0	3.8	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	59	M-27	IV	20263-20605	土師器	坏	口縁～底部	(14.1)	(7.2)	3.9	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue2.5Y 浅黄7/4	Hue2.5Y 浅黄7/4	
	60	L-27	IV	20565-20568	土師器	坏	口縁～底部	(14.0)	(8.0)	3.9	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	61	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.6)	(6.6)	3.9	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	62	M-27	IV	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	(8.0)	4.1	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
	63	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	(7.4)	4.2	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y にぶい黄6/4	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	64	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	(7.4)	4.1	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR にぶい黄橙6/4	Hue2.5Y にぶい黄6/3	
	65	M-26	IV	21339-21340-21342-21344-一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.0)	(7.0)	4.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	66	二区	-	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.0)	7.8	4.1	回転ナデ・指オサエ	回転ナデ・指ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	

第9表 古代遺物観察表2

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	備考
48	67	L-26	IV	22450	土師器	坏	口縁～底部	13.0	8.2	3.6	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue2.5Y にぶい黄6/3	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
	68	L-27	ビット内	SP2441-1 ~ 14	土師器	坏	口縁～底部	12.9	7.6	4.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR にぶい褐5/4	Hue7.5YR にぶい褐5/4	
	69	J-15	IV	29226・28438・ 28441	土師器	坏	口縁～底部	(12.5)	6.8	4.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	煤付着
	70	N-25	IV	一括	土師器	坏	口縁～底部	12.4	6.2	3.7	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
	71	K-27	IV	SP2296-1 ~5.一括	土師器	坏	口縁～底部	(15.6)	6.0	6.3	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue2.5Y にぶい黄6/4	
	72	K-26	IV	22268	土師器	坏	完形	14.0	7.2	5.0	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	
	73	二区	カクラン	一括	土師器	坏	口縁～底部	(14.0)	(7.2)	5.2	回転ナデ・ナデ 指オサエ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	見込みに墨 付着
	74	L-25	IV	20315・20849	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	(6.8)	4.9	ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	75	L-26	IV	22449	土師器	坏	口縁～底部	13.0	6.0	4.9	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR にぶい黄橙7/4	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
	76	L-25	カクラン	IV	21228	土師器	坏	口縁～底部	12.6	7.2	4.9	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR にぶい黄橙7/4	Hue10YR にぶい黄橙7/4
L-26		21744・20339 21242・21810													
	IV	一括													
L-25	IV	一括													
77	I-17	IV	5240・5241	土師器	坏	口縁～底部	(12.0)	7.6	4.4	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue2.5Y 浅黄7/4	Hue10YR 明黄褐7/6		
49	78	二区	-	一括	土師器	坏	胴～底部	-	7.8	-	回転ナデ・ケ ズリ	回転ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	79	L-26	IV	一括	土師器	坏	胴～底部	-	6.8	-	回転ナデ・ケ ズリ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
	80	M-27	IV	19969	土師器	坏	底部	-	6.8	-	回転ナデ・ケ ズリ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	
		二区	-	一括											
	81	二区	-	一括	土師器	坏	底部	-	7.4	-	回転ナデ・ケ ズリ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
	82	J-16	IV	28392	土師器	坏	胴～底部	-	6.8	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
		J・ K-16	表土	一括											
	83	ハ区	-	一括	土師器	坏	胴～底部	-	(7.2)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR にぶい黄橙7/4	Hue2.5YR にぶい黄6/3	
	84	二区	-	一括	土師器	坏	底部	-	(6.4)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR にぶい橙7/4	Hue7.5YR にぶい橙7/4	
	85	K-23	カクラン	一括	土師器	坏	底部	-	(8.6)	-	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue10YR にぶい黄橙7/4	
86	L-27	ビット内	SP2907-1	土師器	坏?	口縁部	(14.4)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR 浅黄橙8/4	Hue10YR 浅黄橙8/4	口縁部赤色 顔料	
87	M-26	IV	22249・20879	土師器	坏?	口縁～胴部	(13.0)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6		
50	88	K-24	IV	6803	土師器	椀	胴～底部	-	8.8	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 橙7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
		I-24		5169											
		K-23	-	一括											
	89	M-27	IV	19970・19971	土師器	皿	口縁～底部	(14.2)	(11.2)	1.8	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	90	M-26	IV	19958・19961	土師器	皿	口縁～底部	(13.7)	(9.2)	1.9	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 明褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	91	L-27	IV	21860・21818 21819・21859	土師器	皿	口縁～底部	13.6	(9.8)	1.6	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	煤付着
	92	K-26	IV	21111・20082	土師器	皿	口縁～底部	13.4	9.6	1.6	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	93	M-25	IV	20357	土師器	皿	口縁～底部	(14.2)	(9.3)	1.8	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue10YR にぶい黄橙6/4	Hue7.5YR にぶい褐5/4	
	94	M-25	IV	20359・20360・ 20361.一括	土師器	皿	口縁～底部	13.7	10.6	2.0	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	95	M-26	IV	一括	土師器	皿	口縁～底部	13.6	10.4	1.6	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
96	K-26	IV	22269	土師器	皿	口縁～底部	(14.4)	(9.6)	2.0	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6		
97	I-16	IV	28288・28289	土師器	皿	口縁～底部	(14.4)	(11.0)	1.8	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	煤付着	
98	M-26	ビット内	SP2422- 1・2・4・6・7・8	土師器	皿	口縁～底部	(14.0)	(9.4)	2.5	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6		

第10表 古代遺物観察表 3

挿入 番号	掲載 番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	備考
50	99	K-23	IV	6501	土師器	皿	口縁～底部	-	-	1.9	回転ナデ	回転ナデ	Hue10YR にぶい黄橙6/4	Hue10YR 明黄褐7/6	墨付着・外 面黒色
	100	I-17	V a	SP874-一括	土師器	坏?	胴～底部	-	(8.0)	-	ケズリ・ミガキ	ミガキ	Hue2.5Y 浅黄7/4	Hue2.5Y にぶい黄6/4	黒色土器
	101	J・ K-16	表土	一括	土師器	椀	底部	-	(10.0)	-	回転ナデ	ミガキ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue7.5Y 黒2/1	黒色土器
	102	J-17	IV	2841・2845・28141	土師器	蓋	口縁～底部	(15.2)	(5.6)	3.6	回転ナデ・ナ デ	回転ナデ・ナ デ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	墨書土器
	103	L-26	IV	2270・22834・22426	土師器	坏	口縁～底部	11.8	7.4	4.2	回転ナデ	回転ナデ	Hue2.5Y 浅黄7/4	Hue2.5Y 浅黄7/4	墨書土器
	104	J-25 J-26	IV	20101・ 20100・21031 一括	土師器	坏	口縁～胴部	(12.0)	7.4	4.0	回転ナデ	回転ナデ・ナ デ	Hue10YR 明黄褐7/6	Hue10YR 明黄褐7/6	墨書土器
	105	M-27	IV	20602	土師器	坏?	胴部	-	-	-	回転ナデ・ナ デ	回転ナデ・ナ デ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 明褐5/6	墨書土器
51	106	L-25 L-26	IV	21316 20309・20313 22244・20517 一括 20340・21811 21271・21809 21231・21745	土師器	壺	口縁～胴部	(28.0)	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue5YR にぶい赤褐5/4	
	107	L-27 M-27	IV	20916・20599 20600	土師器	壺	口縁～胴部	(14.8)	-	-	横ナデ・ハケ メ・タタキ	ケズリ・横ナ デ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	108	K-26 L-26 ハ区	IV -	20189・20190 20081・一括 一括	土師器	壺	口縁～胴部	(30.4)	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
52	109	二区	-	一括	土師器	壺	頸部	-	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ 指オサエ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	
	110	L-26	IV	22618・22619 22620・22635 22661・23298 22629	土師器	壺	口縁～胴部	20.0	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・ナデ・ 横ナデ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	
	111	J-16	IV	28397・28352 28351・28356 28398・28353	土師器	壺	口縁～胴部	(25.6)	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue2.5YR 明赤褐5/6	
	112	I-16	IV	5212・5210	土師器	壺	口縁～胴部	-	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 明赤褐5/6	
	113	J-16	IV	28385・28406	土師器	壺	口縁～胴部	(24.8)	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	114	K-25 J-25	IV	20628 20106	土師器	壺	口縁～胴部	(22.2)	-	-	横ナデ・ハケ メ・ナデ	ケズリ・横ナ デ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	115	M-28 二区	IV -	20000 一括	土師器	壺	口縁～胴部	(29.6)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ 指オサエ	Hue5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
53	116	L-26 M-26 二区	IV -	19946・19951 19963 一括	土師器	壺	口縁～胴部	(27.6)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ 指オサエ	Hue10YR にぶい黄橙6/4	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	117	M-26 M-27	IV	19964 19972	土師器	壺	口縁～胴部	(28.0)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ 指オサエ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	118	K-25	IV	25560	土師器	壺	口縁～胴部	(26.8)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue7.5YR 明褐5/6	
	119	K-26 M-26	IV	20191 20880	土師器	壺	口縁～胴部	(30.4)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	
	120	J-16	表土	一括	土師器	壺	口縁～胴部	(27.2)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナデ・ケズ リ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue5YR 橙6/6	
54	121	M-27 二区	IV -	19991 一括	土師器	壺	口縁部	(28.0)	-	-	横ナデ・ハケ メ	横ナ デ	Hue5YR 明赤褐5/6	Hue10YR 明黄褐7/6	
	122	I-17	ビット内	SP874-一括	土師器	壺	口縁部	(17.0)	-	-	横ナデ・ナ デ	横ナデ・ケズ リ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue7.5YR 橙7/6	
	123	L-27 二区	IV -	19978・19979 一括	土師器	壺	胴部	-	-	-	ハケメ・ナ デ	ケズリ・指オ サエ	Hue7.5YR にぶい橙6/4	Hue7.5YR にぶい褐6/3	
	124	I-17	IV	5005・5007	土師器	鉢	底部	-	(14.0)	-	横ナデ・指 オサエ	横ナ デ 指オサエ	Hue7.5YR 橙7/6	Hue10YR にぶい黄橙6/4	
	125	J-16	IV	28300	土師器	鉢	胴～底部	-	11.8	-	ケズリ後横 ナ デ	ナ デ	Hue7.5YR 橙6/6	Hue7.5YR 橙6/6	底部へラ切 り
	126	二区	-	一括	土師器	鉢	口縁～胴部	(26.0)	-	-	タタキ・横 ナ デ	ケズリ・横 ナ デ	Hue7.5YR にぶい褐5/4	Hue7.5YR にぶい褐5/4	

第11表 古代遺物観察表 4

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	備考
54	127	二区	-	一括	土師器	鉢	口縁~胴部	-	-	-	タタキ・横ナ デ	ケズリ後ナデ・ 指オサエ	Hue5YR 橙6/8	Hue7. 5YR 橙6/6	
	128	I-16	IV	5208	土製品	紡錘 車	-	直径約6cm・厚さ9mm			削痕	削痕	Hue5YR 橙6/6	Hue5YR 橙6/6	土師器 底部転用
	129	二区	-	一括	土製品	紡錘 車	-	直径6.4cm・最大厚7mm			指オサエ	指オサエ	Hue7. 5YR 橙6/6	Hue7. 5YR 橙6/6	
55	130	J-17	IV	28180	須恵器	坏	口縁~底部	13.0	7.5	3.7	回転ナデ	回転ナデ	Hue2. 5Y 灰黄6/2	Hue2. 5Y 灰黄6/2	火瘻痕・底部 ヘラ切り
	131	H-24	IV	一括	須恵器	坏	胴~底部	-	(6.4)	-	ケズリ後ナデ	回転ナデ	Hue5Y 灰オリーブ6/2	Hue5Y オリーブ黄6/3	
	132	I-23	IV	5141	須恵器	坏	底部	-	(7.2)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5Y オリーブ黄6/3	Hue5Y オリーブ黄6/3	
	133	L-26	IV	21268・22242・21267	須恵器	坏	口縁~底部	(15.6)	8.4	6.6	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5Y 灰白7/2	Hue5Y 灰白7/2	
	134	I-17	IV	5273	須恵器	坏	底部	-	7.2	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue5Y 灰オリーブ6/2	Hue5Y オリーブ黄6/3	
	135	L-25	IV	20327	須恵器	坏	底部	-	(9.2)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	Hue2. 5Y にぶい黄6/4	Hue2. 5Y にぶい黄6/3	
	136	二区	-	一括	須恵器	坏	口縁~胴部	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue2. 5Y 灰黄6/2	Hue2. 5Y 灰黄6/2	火瘻痕
	137	K-24	IV	6806	須恵器	坏	口縁~胴部	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue2. 5Y にぶい黄6/3	Hue2. 5Y にぶい黄6/3	
	138	I-14	IV	一括	須恵器	蓋	坏部	-	-	-	ケズリ・回転 ナデ	ナデ	Hue2. 5Y にぶい黄6/3	Hue2. 5Y にぶい黄6/3	
	139	K-17	V a	32129	須恵器	蓋	口縁部	(15.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue5Y 灰オリーブ6/2	Hue5Y 灰6/1	
56	140	K-16	IV	31654・30457 28402・32097	須恵器	壺	口縁~胴部	(20.6)	-	-	平行文タタキ	同心円当具痕	Hue5Y 灰オリーブ6/2	Hue2. 5Y 黄灰5/1	
		J-17		31557											
	141	J-16	IV	28334・28332 28333・28271	須恵器	壺	口縁~胴部	16.8	-	-	格子目タタキ	同心円当具痕	Hue5Y 灰6/1	Hue7. 5YR 褐4/4	
		J・ K-16		表土											
	142	N-25	IV	21490	須恵器	壺	口縁~頸部	(19.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue10Y 灰5/1	Hue7. 5Y 灰5/1	
	143	J-17	IV	28142・28143	須恵器	壺	口縁~頸部	(19.4)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue5Y 灰6/1	Hue5Y 灰6/1	
	144	L-27	IV	20005・20933	須恵器	壺	胴部	-	-	-	平行文タタキ	平行当具痕	Hue7. 5Y 灰6/1	Hue10YR 灰黄褐5/2	
		二区		-											
	145	I-14	IV	一括	須恵器	壺	胴部	-	-	-	平行文タタキ	平行当具痕	Hue2. 5Y 黄褐5/3	Hue2. 5Y 暗灰黄5/2	
146	J-16	IV	28319	須恵器	壺	胴部	-	-	-	平行文タタキ	同心円当具痕	Hue5Y 灰オリーブ6/2	Hue5Y 灰オリーブ6/2		
147	K-27	カクラン	一括	須恵器	壺	胴部	-	-	-	格子目タタキ	平行当具痕	Hue7. 5YR 灰褐4/2	Hue10YR にぶい黄褐5/4		
57	148	K-16	IV	28400	須恵器	壺	口縁部	(10.6)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue7. 5YR にぶい褐5/4	Hue7. 5YR にぶい褐5/4	
	149	L-26	IV	20563・20564	須恵器	壺	口縁部	(9.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	Hue2. 5Y 黄褐5/3	Hue2. 5Y 暗灰黄5/2	
	150	L-26	IV	20002	須恵器	壺	口縁~胴部	-	-	-	回転ナデ・ 平行タタキ	指オサエ・ナデ	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	
		二区		-											
	151	L-26	IV	19952・20342	須恵器	壺	胴部	-	-	-	回転ナデ・ 平行タタキ	指オサエ・ナデ	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	
	152	L-26	IV	19949	須恵器	壺	胴部	-	-	-	平行タタキ	指オサエ・ナデ	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	
		二区		-											
	153	L-26	IV	19950	須恵器	壺	胴~底部	-	-	-	平行タタキ	指オサエ・ナデ	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	Hue2. 5Y 暗灰黄4/2	
154	I-17	IV	5018・5004	須恵器	壺	胴~底部	-	(6.2)	-	ナデ	回転ナデ	Hue5Y 灰4/1	Hue5Y 灰4/1	ヘラ起こし	

※( )は推定

### 第3節 近世の調査成果

#### 1 調査の概要

I層や攪乱を受けた部分から遺物が319点出土した。IV層からも少量出土しているが、近代以降の耕作や、II・III層土の削平時にIV層上部に入り込んだものと推測される。攪乱部分ではあるが、遺物の出土が多い場所（第58図）は、図のようによろそ3か所に分かれる。

#### 2 遺構

遺構は検出されなかった。耕地整理による上部の削平に伴い消滅したか、時代不明のピットなどの一部と考えられる。

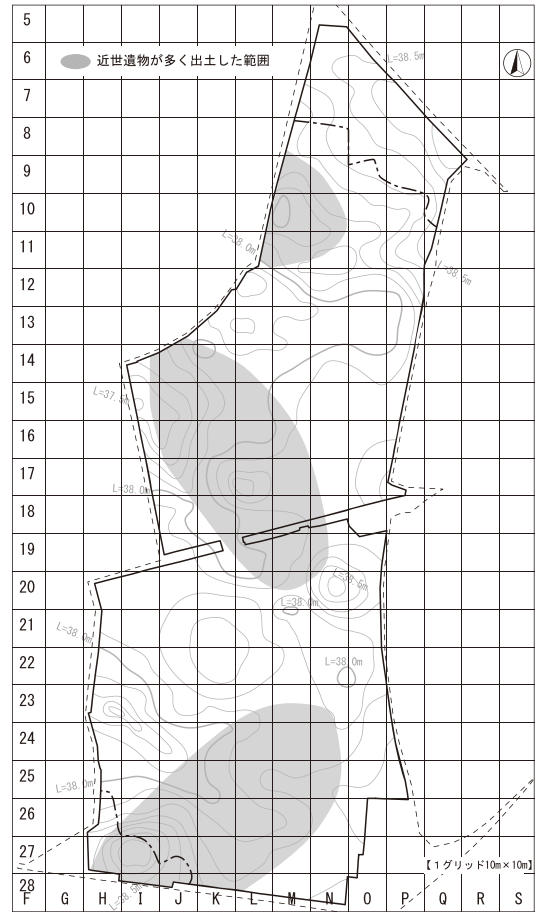
#### 3 遺物（第59図 155～166）

出土した遺物のうち12点を図化した。155～159は薩摩焼の陶器で、155～157は苗代川、158・159は龍門司系である。155～157は口縁部で、口唇部以外の内外面に釉が施される。155は甕で、口唇部に釜詰めの際の目跡が残る。156は鉢で、口縁部がL字状を呈する。157は植木鉢で、口縁部外面に三段の稜を付け、上段と下段を中段側へ押さえて装飾を施している。158・159は碗で、158は飴釉、159は褐釉が残存部全面にかかる。

160～162は、肥前系の磁器である。160・161は筒形碗で、160は胴部外面に雪持笹文、底部外面に折れ松葉文が、161は外面に雪輪文が施される。162は碗の底部で、見込み中央に文様が施される。

163は肥前内野山系の碗で、見込み部分に蛇の目釉剥ぎ、高台及びその内部は無釉である。164は煎じ碗で、胴部外面に鉄絵の一部が残り、全面に施釉される。

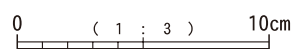
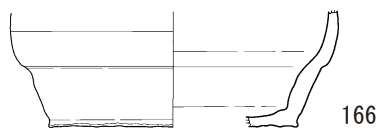
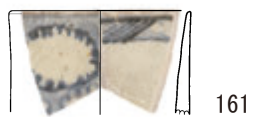
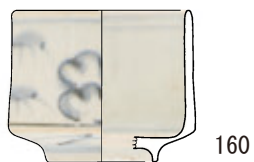
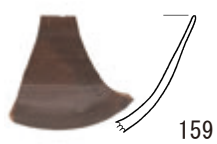
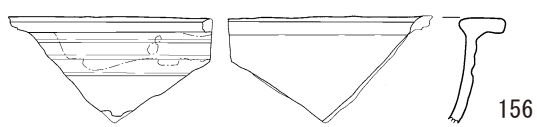
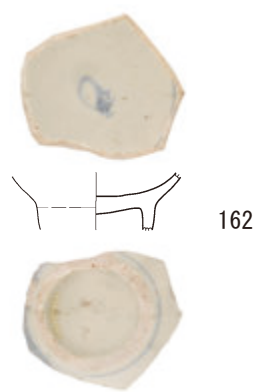
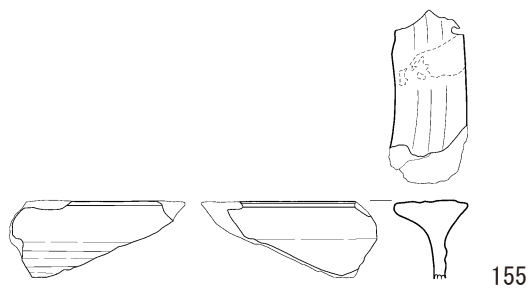
165は外国産の器種不明の胴部で、中国南部から東南アジアにかけてのものと考えられる。166は産地や器種不明で、胴部に段が付き、上部で膨らむ。



第58図 近世遺物分布図

第12表 近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層	種別	分類	産地	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土の色調	釉薬の色調・種類	施釉部位	時期	備考
59	155	—	O-15	攪乱	陶器	甕	薩摩苗代川	—	—	—	褐灰	黒褐	口唇部釉剥ぎ・目跡	17c 後半～18c 前半	
	156	—	M-11	攪乱	陶器	鉢	薩摩苗代川	—	—	—	暗灰黄	黒褐	口唇部及び口縁外面一部釉剥ぎ	18c 頃	
	157	20366	N-25	IV	陶器	植木鉢	薩摩苗代川	—	—	—	暗褐	黒褐	口縁部釉剥ぎ	19c 頃	
	158	—	N-13	攪乱	陶器	碗	薩摩龍門司	—	—	—	橙	飴釉	残存部全面施釉	18c 後半	
	159	—	J-20	攪乱	陶器	碗	薩摩龍門司	—	—	—	にぶい褐	褐釉	残存部全面施釉	19c 後半～19c 前半	
	160	—	O-24	攪乱	磁器	筒形碗	肥前系	7	4.4	6	灰白	透明釉	残存部全面施釉・畳付き釉剥ぎ	18c 末～19c 初頭	
	161	—	M-24	攪乱	磁器	筒形碗	肥前系	7.2	—	—	灰白	透明釉	残存部全面施釉	—	
	162	—	B区	攪乱	磁器	碗	肥前系	—	—	—	灰白	透明釉	残存部全面施釉	18c 後半	
	163	—	L-15	攪乱	陶器	碗	肥前（内野山系）	—	5	—	灰黄	緑釉	高台から内底面露胎蛇の目釉剥ぎ	17c 後半	外面は透明釉
	164	—	I-14	攪乱	陶器	煎じ碗	肥前？	—	—	—	灰黄	透明釉	残存部全面施釉	17c 頃	鉄絵
	165	—	I区	攪乱	陶器	不明	中国南部～東南アジア？	—	—	—	暗灰黄	褐釉	残存部全面施釉	—	
	166	—	K-20	攪乱	陶器	不明	薩摩苗代川？	—	9.8	—	灰黄褐	—	残存部無釉	—	

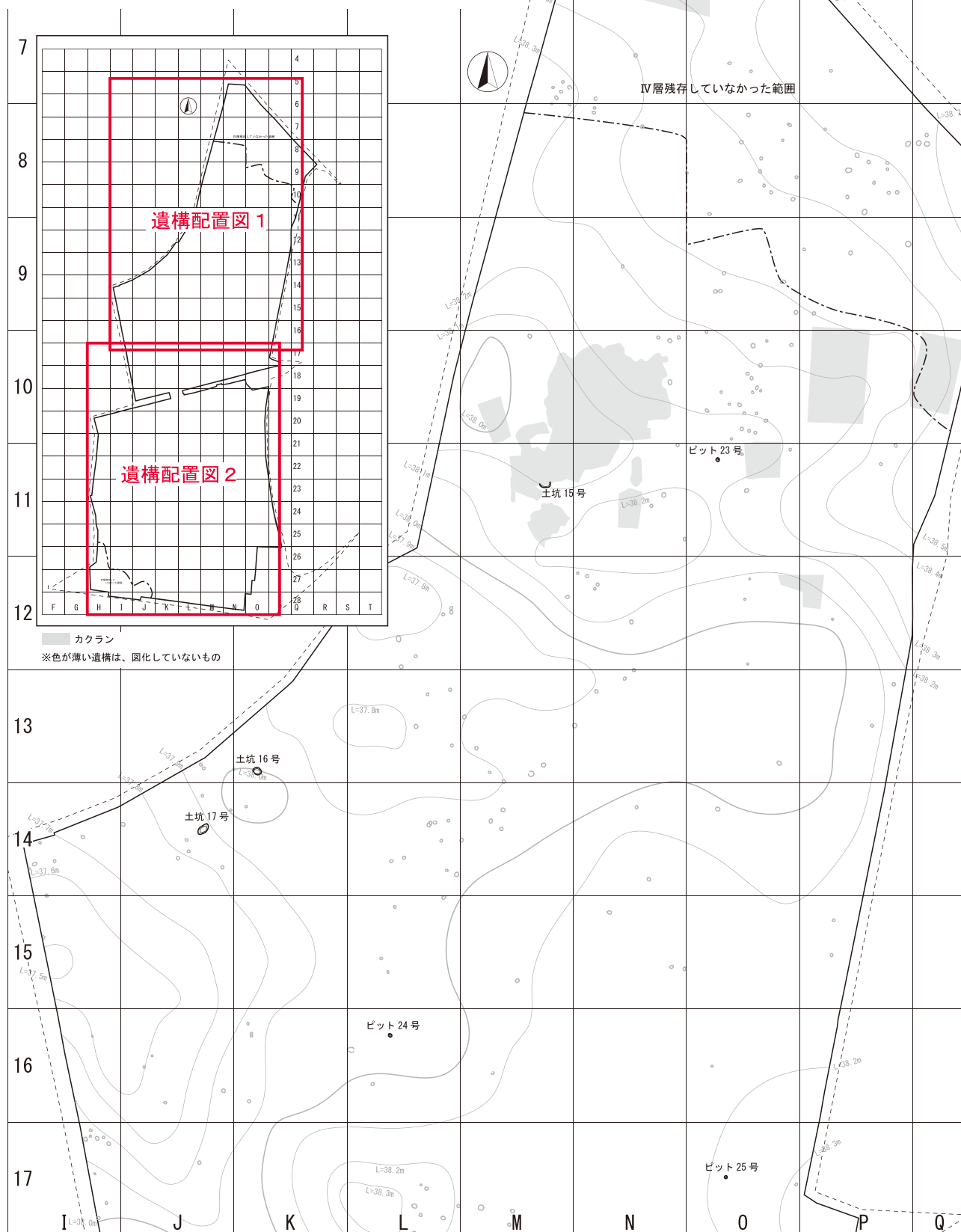


第 59 图 近世遺物

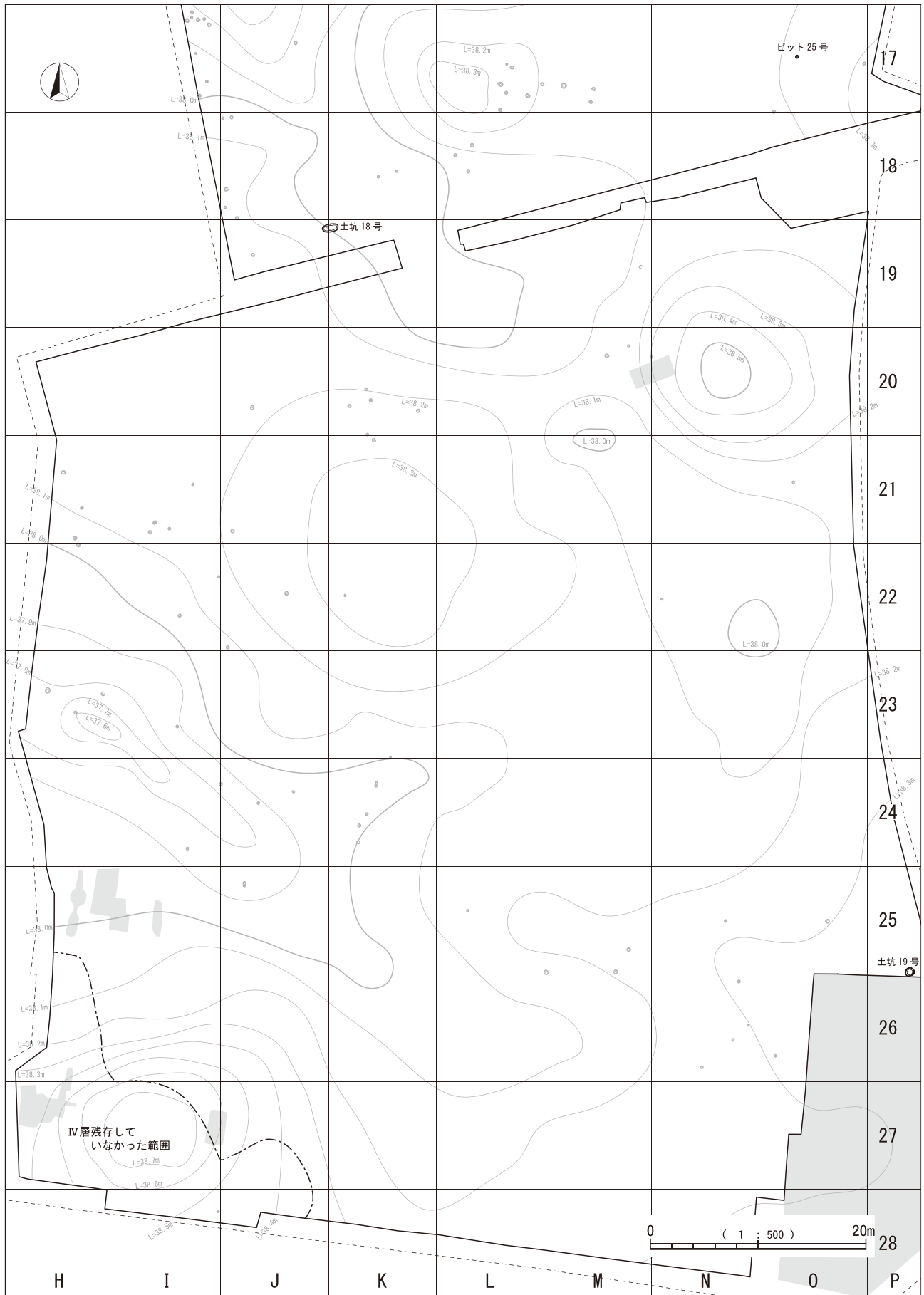
## 第4節 時代不明の遺構

### 1 調査の概要

遺構内埋土において紫コラを含まず、遺物も無く埋土のみで判別が困難な遺構については、時代不明の遺構とした。総数は、土坑5基、ピット（柱穴）3基である。



第60図 時代不明の遺構配置図1



第 61 図 時代不明の遺構配置図 2

## 2 遺構

### (1) 土坑

#### 土坑15号 (第62図)

M-11区のV a層において検出された。北側は攪乱を受けている。平面は楕円形と推定され、底面は平坦である。

#### 土坑16号 (第62図)

K-13区のIV層において検出された。南西側は攪乱を受けている。平面はほぼ円形で、深さは20cm程度である。

#### 土坑17号 (第62図)

J-14区のV a層において検出された。平面は横長で楕円形に近い。中心部が深く、ねばりの強い埋土である。

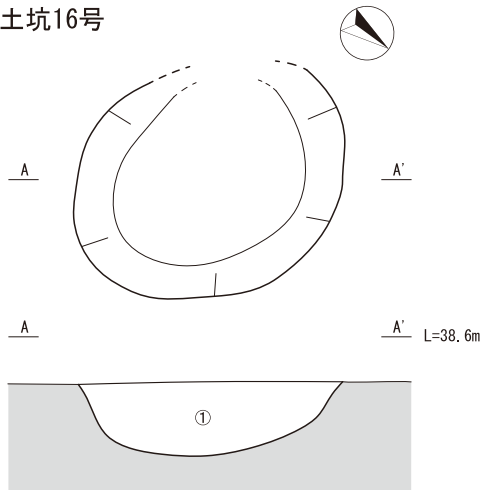
#### 土坑18号 (第62図)

J・K-19区のV a層において検出された。平面は横長の楕円形でV b層を掘り込んでいる。最深部でも7cm程度であるが、より上位から掘り込まれた可能性もある。

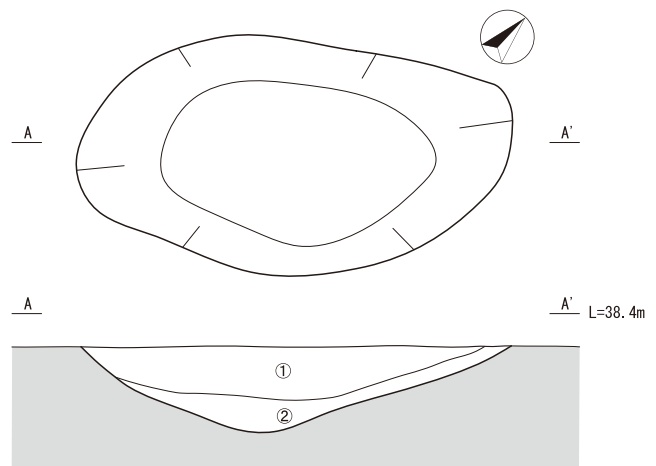
#### 土坑19号 (第63図)

P-25・26区のIV層において検出された。埋土中に細かな炭化物を含む。直径約80cmで平面は円形に近い。

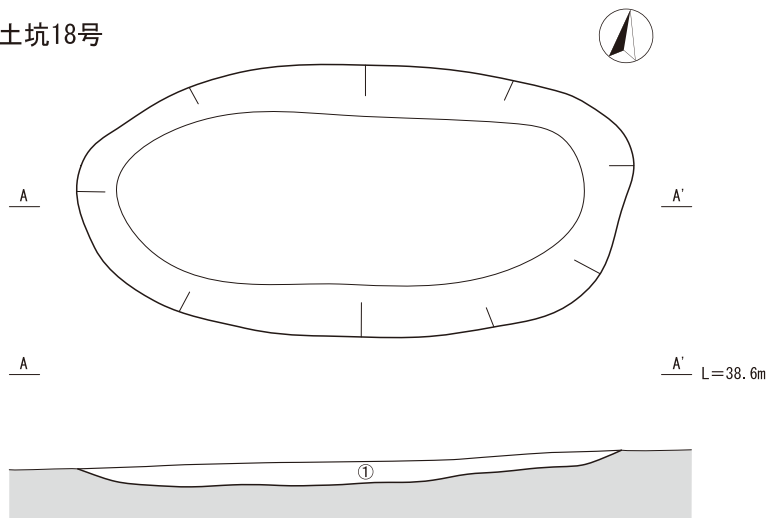
土坑16号



土坑17号



土坑18号



0 ( 1 : 20 ) 1m

第62図 土坑15～18号

(2) ピット

ピット23号 (第63図)

0-11区のV a層において検出された。平面は円形に近く、検出面からの深さは約40cmである。埋土①が柱穴の可能性ある。

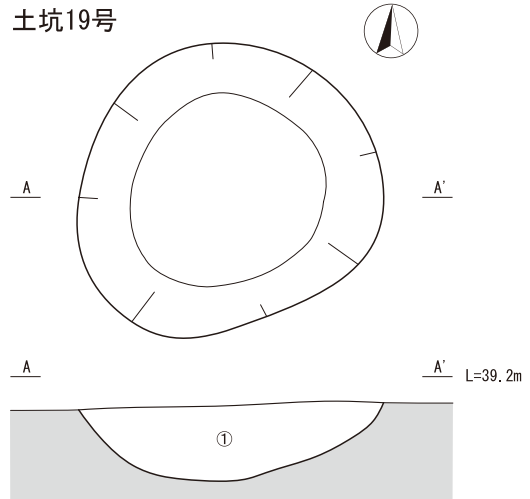
ピット24号 (第63図)

L-16区のIV層において検出された。平面はやや南北に長い円形で、検出面からの深さは約40cmである。埋土は単一でしまりがある。

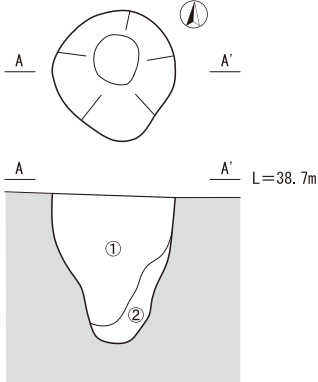
ピット25号 (第63図)

0-17区のV a層において検出された。平面は円形で、断面はV字形で検出面からの深さは約30cmである。

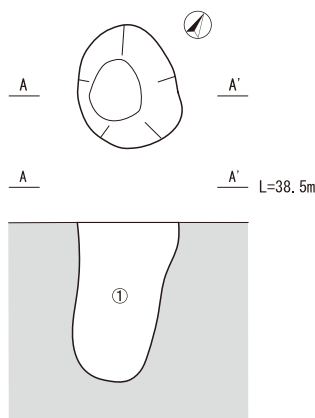
土坑19号



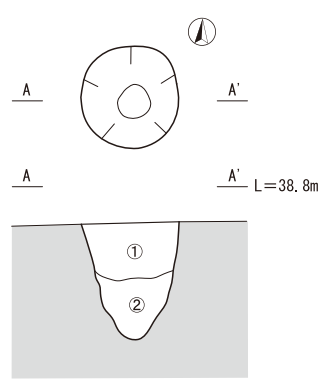
ピット23号



ピット24号



ピット25号



埋土注記

土坑15号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) 強くしまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む
土坑16号	① 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりが弱い 粘性なし 黄橙色パミスを含む
土坑17号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む ② 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる やや粘性あり 黄橙色パミスを①より少量含む
土坑18号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) 強くしまる 粘性あり 黄橙色パミスを含む
土坑19号	① 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) しまる 粘性なし 径1~2mm大の炭化物を多量に含む
ピット23号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 池田降下軽石をわずかに含む 砂質 ② 黒褐色土 (Hue 10YR6/2) しまりが弱い やや粘性あり シルト質
ピット24号	① 暗褐色土 (Hue 10YR3/4) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 砂質
ピット25号	① 黒褐色土 (Hue 7.5YR3/1) しまる 粘性なし 黄橙色パミスを含む 砂質 ② 黒褐色土 (Hue 7.5YR1.7/1) しまる 粘性なし 砂質

第13表 時代不明遺構計測表

遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
土坑15号	90	(50)	15
土坑16号	70	(62)	20
土坑17号	114	63	23
土坑18号	144	72	7
土坑19号	80	76	20
ピット23号	35	32	39
ピット24号	32	27	42
ピット25号	27	26	30

( )は、復元推定

第63図 土坑19号・ピット23~25号

第14表 遺構番号新旧対応表

旧(現場検出時)	新(掲載時)	時代
SP 2293	ピット1号	古墳
SH 993	掘立柱建物跡1号	古代
SP 3806	P 1	古代
SP 3807	P 2	古代
SP 3808	P 3	古代
SP 3809	P 4	古代
SP 3810	P 5	古代
SP 826	P 6	古代
SP 837	P 7	古代
SP 838	P 8	古代
SP 840	P 9	古代
SP 841	P 10	古代
SH 1242	掘立柱建物跡2号	古代
SP 1250	P 1	古代
SP 1251	P 2	古代
SP 1252	P 3	古代
SP 1243	P 4	古代
SP 1244	P 5	古代
SP 1245	P 6	古代
SP 1246	P 7	古代
SP 1247	P 8	古代
SP 1248	P 9	古代
SP 1249	P 10	古代
SH 1799	掘立柱建物跡3号	古代
SP 1801	P 1	古代
SP 1599	P 2	古代
SP 1802	P 3	古代
SP 1803	P 4	古代
SP 1804	P 5	古代
SP 1805	P 6	古代
SP 1287	P 7	古代
SP 1286	P 8	古代
SP 1285	P 9	古代
SP 1284	P 10	古代
SH 3000	掘立柱建物跡4号	古代
SP 3009	P 1	古代
SP 3010	P 2	古代
SP 3011	P 3	古代
SP 3001	P 4	古代
SP 3002	P 5	古代
SP 3003	P 6	古代
SP 3004	P 7	古代
SP 3005	P 8	古代
SP 2997	P 9	古代
SP 2998	P 10	古代
SP 2999	P 11	古代
SP 3007	P 12	古代
SP 3008	P 13	古代
SP 3006	P 14	古代
SH 2846	掘立柱建物跡5号	古代
SP 2850	P 1	古代
SP 2851	P 2	古代
SP 2852	P 3	古代
SP 2853	P 4	古代
SP 2854	P 5	古代
SP 2855	P 6	古代
SP 2857	P 7	古代
SP 2847	P 8	古代
SP 2848	P 9	古代
SP 2849	P 10	古代

旧(現場検出時)	新(掲載時)	時代
SP 1034	ピット2号	古代
SP 992	ピット3号	古代
SP 1160	ピット4号	古代
SP 135	ピット5号	古代
SP 83	ピット6号	古代
SP 85	ピット7号	古代
SP 187	ピット8号	古代
SP 89	ピット9号	古代
SP 186	ピット10号	古代
SP 1061	ピット11号	古代
SP 1161	ピット12号	古代
SP 104	ピット13号	古代
SP 105	ピット14号	古代
SP 282	ピット15号	古代
SP 3250	ピット16号	古代
SP 3360	ピット17号	古代
SP 3366	ピット18号	古代
SP 3335	ピット19号	古代
SP 3338	ピット20号	古代
SP 313	ピット21号	古代
SP 3475	ピット22号	古代
SK 261	土坑1号	古代
SK 262	土坑2号	古代
SK 264	土坑3号	古代
SK 263	土坑4号	古代
SK 129	土坑5号	古代
SK 210	土坑6号	古代
SK 3285	土坑7号	古代
SK 3444	土坑8号	古代
SK 3390	土坑9号	古代
SK 3584	土坑10号	古代
SK 2590	土坑11号	古代
SK 2591	土坑12号	古代
SK 2915	土坑13号	古代
SK 2916	土坑14号	古代
SP 2295	埋設土坑	古代
SX 875	古道1	古代
SX 989	古道1	古代
SX 991	古道1	古代
SX 1040	古道1	古代
SX 1041	古道1	古代
SX 1042	古道1	古代
SX 1043	古道1	古代
SX 1044	古道1	古代
SX 1045	古道1	古代
SX 3218	古道1	古代
SX 3287	古道2	古代
SX 3290	古道2	古代
SX 3811	古道2	古代
SX 3812	古道2	古代
SX 古道1	古道3	古代
SX 3731	古道4	古代
SX 2576	古道5	古代
SX 2302	古道6~8	古代
SX 2677	古道9	古代
SX 1071	紫コラ集中域	古代
SX 959	溝状遺構1号	古代
SX 3638	溝状遺構2号	古代
SX 3639	溝状遺構3号	古代

旧(現場検出時)	新(掲載時)	時代
SK 1403	土坑15号	不明
SK 3284	土坑16号	不明
SK 3859	土坑17号	不明
SK 3526	土坑18号	不明
SK 2370	土坑19号	不明
SP 271	ピット23号	不明
SP 56	ピット24号	不明
SP 67	ピット25号	不明

## 第5章 自然科学分析

### はじめに

立塚遺跡から採取された試料について、自然科学分析を実施した。分析内容は①調査区内のⅢ～Ⅴ層の火山灰（テフラ）分析、②土器付着炭化物の放射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体比分析、③畝間状遺構の畝部及び畝間底部と基本土層断面の植物珪酸体分析である。

### 第1節 火山灰分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### 1 はじめに

鹿屋市に所在する立塚遺跡は、いわゆるシラス台地の南東端部付近の台地平坦面上に位置する。これまでの発掘調査では、縄文時代晩期を中心とする土器の出土が確認されている。本報告では、調査区内で分層された各土層における火山灰（テフラ）の産状を確認し、層序対比のための資料を作成する。

#### 2 試料

試料は3点が採取された。発掘調査所見による分層がなされており、立塚遺跡では紫コラを含む土層はⅢ層とされ、下位の土層はⅣ層、Ⅴa層、Ⅴb層、Ⅴc層に分層されている。

試料は、D区から採取されたⅣ層とⅤa層およびP-12区より採取されたⅢ層の合計3点の砂質の火山灰土である。

#### 3 分析方法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉍物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉍物」とする。「不透明鉍物」以外の不透明粒および変質等で同定不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉍物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉍物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉍物粒子および風化変質粒など）である。

さらに本分析では、火山ガラスと重鉍物から抽出した斜方輝石を対象として屈折率の測定を行う。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

### 4 結果

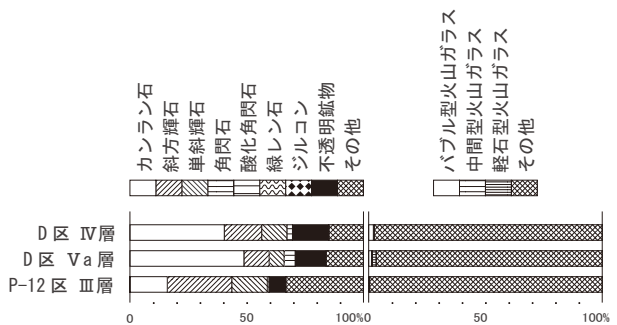
結果を第15表、第64図に示す。重鉍物組成は、Ⅲ層以外の2点の試料では、カンラン石が最も多く、次いで斜方輝石と不透明鉍物が互に同量程度含まれ、他に少量の単斜輝石と微量の角閃石が含まれる。Ⅲ層の試料では、斜方輝石が最も多く、次いでカンラン石と単斜輝石が同量程度含まれ、他に少量の不透明鉍物と極めて微量の角閃石が含まれる。

火山ガラス比では、3点の試料ともに極めて微量の火山ガラスしか含まれない。なお、3点の試料ともに、篩別した1/4mm以上の粗粒碎屑物と火山ガラス比において「その他」とした砂分の実体顕微鏡による観察では、多量のスコリアが確認された。それらの中で、Ⅲ層のスコリアは、最大径約8mm、黒色で発泡不良のものが多く、少量の灰褐色で発泡不良のスコリアや微量の赤色で発泡不良のスコリアが混在する。Ⅲ層以外の試料のスコリアは、最大径3mm程度であり、色調や発泡度は立塚遺跡Ⅲ層のスコリアに認められるものに加えて、表面が橙色に風化した黒褐色の発泡やや不良のスコリアも認められる。なお、いずれの試料のスコリアも全体的に斜長石の斑晶の包有が少ない。

火山ガラスの屈折率を第65図、斜方輝石の屈折率を第66図に示す。火山ガラスの屈折率は、Ⅲ層以外の2点の

第15表 重鉍物・火山ガラス比分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑閃石	ジルコン	不透明鉍物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
D区Ⅳ層	101	40	27	6	0	0	0	39	37	250	5	0	1	244	250
D区Ⅴa層	122	27	16	12	0	0	0	33	40	250	3	1	4	242	250
P-12区Ⅲ層	40	69	38	2	0	0	0	18	83	250	0	0	1	249	250



第64図 重鉍物組成および火山ガラス比



の屈折率では、V a層において低屈折率と高屈折率の2つのレンジに比較的明瞭に分かれたが、低屈折率の斜方輝石は開聞岳のテフラに由来し、高屈折率の斜方輝石は、その値から、池田湖テフラに由来すると考えられる。IV層における斜方輝石の屈折率からは、開聞岳のテフラと池田湖テフラに加えてK-Ahに由来する斜方輝石も混在していることが窺える。

IV層やV層は、出土遺物の状況から縄文時代晩期という年代的所見が示されているが、今回の分析では、上位の紫コラの攪乱の影響により、例えば縄文時代晩期に噴出したとされる灰コラに由来する碎屑物を見出すことはできなかった。今後、周辺域における開聞岳のテフラの産状も確認した上で、層序の検討をする必要があると考えられる。



1. D区 IV層

2. D区 Va層



3. P-12区 III層

第 68 図 スコリア

### 【引用文献】

- 藤野直樹・小林哲夫, 1992, 開聞岳起源のコラ層の噴火・堆積様式. 鹿児島大学紀要(地学・生物学), 25, 69-83.
- 藤野直樹・小林哲夫, 1997, 開聞岳火山の噴火史. 火山, 42, 195-211.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.

## 第 2 節 土器附着炭化物の放射性炭素年代測定及び炭素・窒素安定同位体比分析

株式会社 古環境研究センター

### 分析の概要

立塚遺跡から出土した土器に付着した炭化物について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定、

炭素・窒素安定同位体比分析である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

## I 放射性炭素年代測定

### 1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約 5 万年前までの年代測定が可能である (中村, 2003)。

### 2 試料

試料は、立塚遺跡から出土した土器付着炭化物 (No. 131, 本報告書遺物番号 6) の計 1 点である。試料は土器の外面から採取されたものである。第 16 表に試料の詳細を示し、第 69 図に試料の写真を示す。

第 16 表 放射性炭素年代測定結果

試料 No.	測定 No. PED-	試料詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代: 年 BP (暦年校正用)	暦年代(校正年代): cal-	
							1 $\sigma$ (68.27% 確率)	2 $\sigma$ (95.45% 確率)
131	51797	土器付着 (外側)	炭化物	AAA 処理 AMS 法	-29.28 $\pm 0.15$	1830 $\pm 20$ (1830 $\pm 20$ )	AD 207-244 (68.27%)	AD 129-146 (4.19%) AD 153-250 (87.80%) AD 296-308 (3.46%)



第 69 図 試料

### 3 方法

放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法 (AMS: Accelerator Mass Spectrometry) により、次の手順で行った。1) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を除去, 2) 試料を燃焼させて二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を精製, 3) 水素で還元してグラフアイト化, 4) AMS 装置で炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) および  $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定。

### 4 測定結果

AMS 法によって得られた  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代および暦年

代（較正年代）を算出した。第16表にこれらの結果を示し、第70図に試料の暦年較正結果（較正曲線）を示す。

### (1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25$ （‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

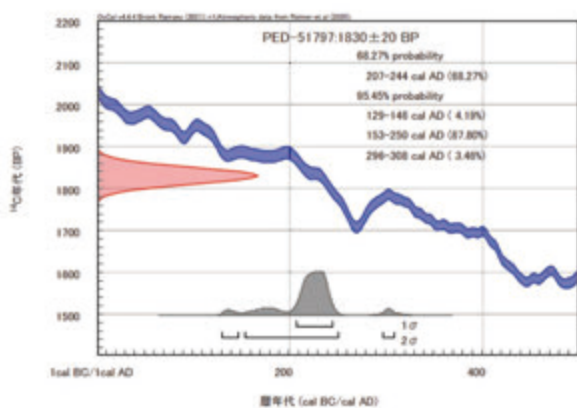
### (2) 放射性炭素（ $^{14}\text{C}$ ）年代測定値（BP : Before Physics）

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在（AD 1950年基点）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を使用している。付記した統計誤差（±）は $1\sigma$ （68.27%確率）である。 $^{14}\text{C}$ 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

### (3) 暦年代（Calendar Years : cal BC / AD, cal : calibrated の略）

放射性炭素年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正した値。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値などから作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。

暦年代（較正年代）は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により $1\sigma$ （68.27%確率）と $2\sigma$ （95.45%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第70図 暦年較正結果

## 5 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.131では $1830 \pm 20$ 年 BP の年代値が得られた。

暦年較正年代結果（第70図）によると、No.131は西暦3世紀頃となっている。

## 【参考文献】

今村峯雄（2001）縄文～弥生時代移行期の年代を考える－問題と展望．第四紀研究．40(6)，p. 509-516.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」．日本第四紀学会，p. 3-20.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p. 301-322.

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), p. 337-360.

Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). Radiocarbon, 62(4), p. 725-757.

## II 土器付着炭化物の炭素・窒素安定同位体比分析

### 1 はじめに

土器付着炭化物は、一般的に食材を煮炊きした後の残渣（おこげ）や吹きこぼれと考えられている。食材から土器付着炭化物が生成される際の同位体分別を正確に把握するのは困難であるが、大きな続成作用を受けていなければ、付着炭化物の炭素および窒素の安定同位体比は、給源となった食材（海産動物、海産魚貝類、草食動物、 $\text{C}_3$ 植物、 $\text{C}_4$ 植物など）の同位体比を保持していると考えられる（吉田，2006など）。

### 2 試料

分析試料は、土器付着炭化物（試料No.131、本報告書遺物番号6）の1点である。試料は土器の外側から採取されたものである。第17表に試料の詳細を示す。

第17表 炭素・窒素安定同位体比分析結果

試料 No.	試料の詳細	種類	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比 (モル比)
131	土器付着（外側）	炭化物	-26.0	9.08	43.0	2.46	20.3

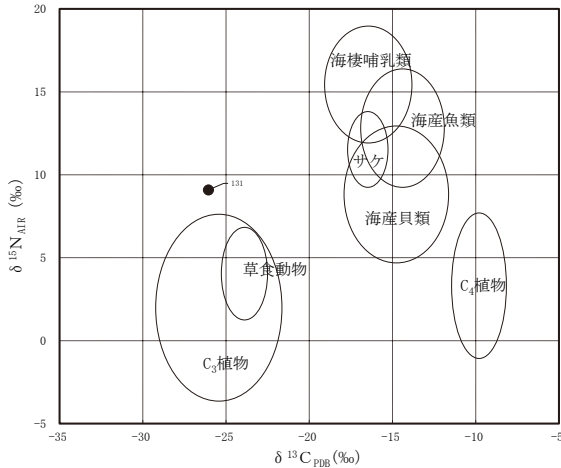
### 3 測定方法

試料を粉末乾燥して正確に秤量した後、スズカプセルに封入して装置内の燃焼管に入れ、酸素を含むヘリウム（キャリアーガス）気流中で燃焼させた。生成したガスを酸化触媒で完全酸化させて $\text{CO}_2$ 、 $\text{NO}_x$ 、 $\text{H}_2\text{O}$ とした後、還元管を通過させた還元銅によって $\text{NO}_x$ を $\text{N}_2$ に還元し、 $\text{Mg}(\text{ClO}_4)_2$ トラップで $\text{H}_2\text{O}$ を除去した。燃焼ガスを均一化した後、分離カラムに通して成分分離し、分離した $\text{CO}_2$ および $\text{N}_2$ ガスを質量分析計に導入して炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}$ ）を測定した。また、得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比（モル比）を算出した。

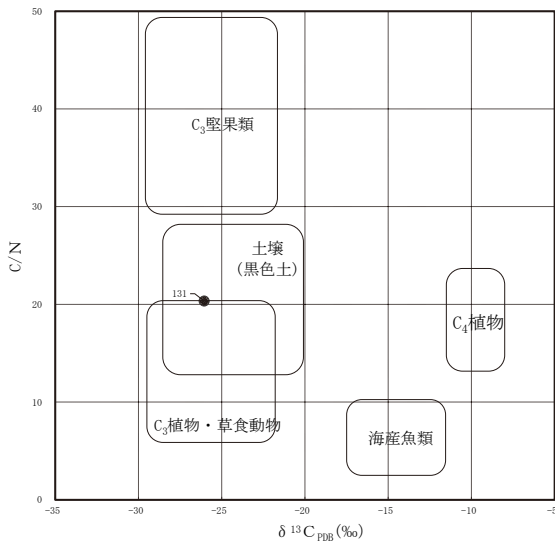
#### 4 結果

第17表に、試料の詳細、炭素・窒素安定同位体比、炭素・窒素含有量、C/N比（モル比）を示す。また、第71図におもな食材の炭素・窒素安定同位体比、第72図に炭素安定同位体比とC/N比の関係を示し、試料の測定結果をプロットした。

炭素・窒素安定同位体比（第71図）では、試料がC<sub>3</sub>植物の領域の上位にプロットされた。



第71図 炭素・窒素安定同位体比  
吉田・西田（2009）に基づく



第72図 炭素安定同位体比とC/N比の関係  
吉田・西田（2009）に基づく

#### 5 考察

炭素・窒素安定同位体比分析により、土器付着炭化物（試料No.131）について給源の推定を試みた。試料は、土壌（黒色土）の影響を受けていると考えられるが、炭化により窒素安定同位体比の値が高くなる事例もあることから（吉田，2008）、C<sub>3</sub>植物・草食動物に由来する可能性が考えられる。土壌（黒色土）による影響の有無については、植物珪酸体分析による検証が有効と考えられる。

#### 【参考文献】

- 南川雅男（2003）炭素・窒素同位体分析による食性解析．環境考古学マニュアル．松井章編．同成社，p. 283-291．
- 吉田邦夫（2006）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析．新潟県立歴史博物館研究紀要7，p. 51-58．
- 吉田邦夫（2008）越後新潟に咲いた縄文の華．東京大学アイソトープ総合センターニュース vol. 39，p. 2-7．
- 米田穰（2004）炭素・窒素同位体による古食性復元．環境考古学ハンドブック．朝倉書店，p. 411-418．
- 米田穰・井上貴央（2019）青谷上寺地遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体と放射性炭素年代．青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報2019，p. 45-55．

### 第3節 植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究センター

#### 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO<sub>2</sub>）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000，2009）。

#### 2 試料

分析試料は、古代の畑跡とされる畝間状遺構（上部は削平で消滅している）の畝部（No.0）と畝間底部（No.1～No.15）から採取された計16点、および基本土層断面（I層，IV層，V a層）から採取された3点である。試料採取箇所を写真図版（第73図）および分析結果図（第18表）に示す。



第73図 試料採取箇所



### 3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

### 4 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第18表および第74図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を第75図に示す。

[イネ科]

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヨシ属、シバ属型、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Aタイプ（くさび型）

[イネ科－タケ亜科]

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

[イネ科－その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

### 5 考察

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり、1,000～2,000個/g程度である場合が多い。

#### (1) 畝間状遺構

畝間状遺構では、畝部（No.0）と畝間底部（No.1～No.15）から採取された計16点について分析を行った。その結果、畝部（No.0）の1点からイネが検出されたが、密度は1,100個/gと低い値である。また、畝間底部（No.13）ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が検出された。密度は500個/gと低い値であるが、穎（籾殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。これらのことから、畝間状遺構では部分的に稲作が行われていた可能性が考えられる。

イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、稲藁が耕作地外に持ち出されていたこと、および上層や他所からの混入などが考えられるが、ここでは陸稲栽培による影響が示唆される。

#### (2) 基本土層断面

I層（表土）、IV層、Va層について分析を行った。その結果、I層からイネが検出された。密度は3,500個/gと比較的高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### (3) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがあるが、今回の試料ではいずれの分類群も検出されなかった。

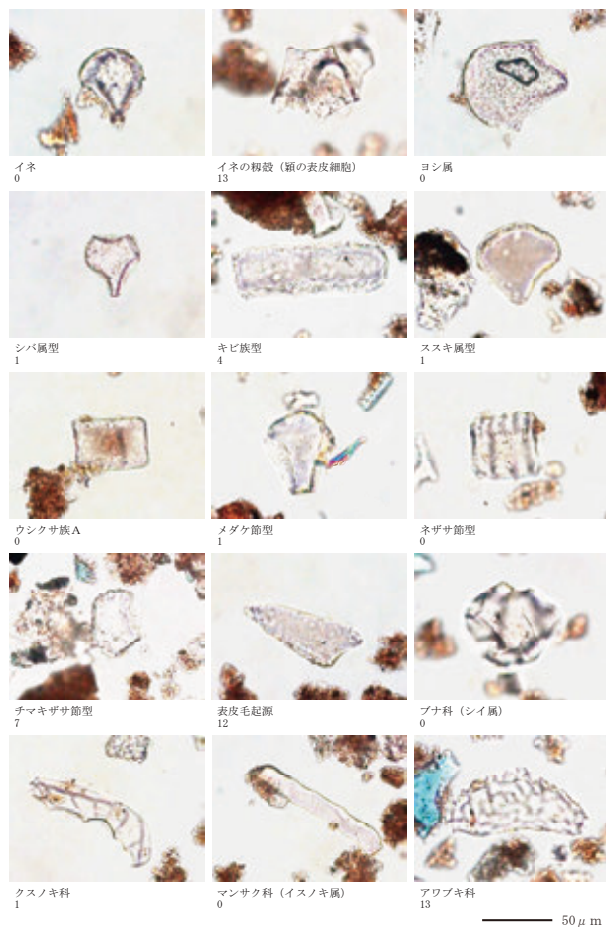
イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、すべての試料から検出されたキビ族型には、ヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定さ

れるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

#### (4) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、畝間状遺構の各試料ともススキ属型、ウシクサ族A、ネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族B、メダケ節型、および樹木(照葉樹)のブナ科(シイ属)、ブナ科(アカガシ亜属)、クスノキ科、マンサク科(イスノキ属)、アワブキ科なども認められた。また、部分的にヨシ属、シバ属型なども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねススキ属型が優勢であり、部分的にネザサ節型も多くなっている。

以上の結果から、畝間状遺構の土壌の堆積当時は、ススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)をはじめ、メダケ属(おもにネザサ節)なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、周辺にはヨシ属が生育するような湿潤なところも存在していたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属、カシ類(アカガシ亜属)、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられる。



第 75 図 植物珪酸体(プラント・オパール)

## 6 まとめ

植物珪酸体分析の結果、古代の畑跡とされる畝間状遺構では、一部の試料から少量のイネ(籾殻由来を含む)が検出され、部分的に稲作が行われていた可能性が認められた。また、基本土層断面のI層(表土)ではイネが比較的多く検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。遺跡の立地や周辺の植生などから、ここで行われた稲作は畑作の系統(陸稲栽培)であった可能性が考えられる。

畝間状遺構の土壌の堆積当時は、ススキ属やウシクサ族(チガヤ属など)をはじめ、メダケ属(おもにネザサ節)なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属、カシ類、クスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

## 【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p.109-123.
- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 杉山真二(2009)植物珪酸体と古生態。人と植物の関わりあい④。大地と森の中で—縄文時代の古生態系—。縄文の考古学Ⅲ。小杉康ほか編。同成社, p.105-114.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

## 第6章 総括

### 第1節 古墳時代

#### 1 遺構

##### (1) 遺構の検出

遺構は、ピット1基のみの検出にとどまった。前述のように、遺構埋土はⅢ層土に近いと考えられ、Ⅴ層土の色調と似ているため検出が困難であったこと、現代の耕地整理等による削平を受けたこと、古代の畝地化などで攪乱を受けたこと等が遺構検出の少なさの原因として考えられる。

遺物分布（第13図）をみると、遺物No.4～6のように東原式段階の甕が1か所に集まる箇所が見受けられ、こういった部分は遺構であった可能性がある。

##### (2) ピット1号（第14図）

東原式段階と考えられる大甕もしくは壺の底部から胴部下部にかけての部分か天地逆の状態が入っており、出土した状態から、ピット内に埋められた後、埋土の土圧で潰されたと考えられる。蓋状に使用して何かを被せた可能性もある。東原式段階においては脚台を外した甕を用いた祭祀遺構の例があるが、出土した甕は脚台が元々無く、ほぼ底部付近のみであることなど、異なる点が多い。

#### 2 遺物

##### (1) 土地の利用・生活

遺物の器種をみると、甕・高坏・坏・鉢・壺及び紡錘車の可能性のあるものや須恵器の坏蓋が出土している。また、生活に用いる器種がみられ、甕の多くに煤が付着している。このことから、建物跡は検出されていないが、遺物が多くみられた場所等の一部は、居住に利用された可能性がある。遺物No.6の甕に付着する煤の炭素・窒素安定同位体比分析においては、 $C_3$ 植物・草食動物由来の可能性が指摘されている。 $C_3$ 植物はイネ・コムギ・ダイズ・樹木等で、草食動物は身近なものではウサギ・シカ等がある。甕を用い、イネ等の植物もしくは $C_3$ 植物を食した草食動物の調理を行った可能性がある。

##### (2) 年代

遺物の形式による年代は前期から中期が多いが、ほぼ同時代全体を通してみられる。遺物No.6の東原式段階の甕の外面に付着する煤は、放射性炭素年代測定を行っており、西暦3世紀頃の結果が出ている。これは古墳時代前期前半頃に該当する。東原式段階は近年の研究では前期後半から中期初頭と考えられており、遺物の年代観と比較してやや古い結果となっている。原因として、古墳時代前期の年代は古く出る傾向があること、土壌の影響を受けた可能性があること等が挙げられる。

##### (3) 丸底甕

丸底甕は可能性があるものも含めて、4点出土している。近年大隅地方でも類例が増えており、持留川流域の大崎町荒園遺跡や肝属川水系の前下川流域にある肝付町の後田山下遺跡において出土している。荒園遺跡では底部が残るものが3点出土しており、全て高さが20cm程度の小型で、突帯が無く長胴型である。後田山下遺跡では7点出土しており、大きさはおよそ25～30cm程度で立塚遺跡のものに近く、突帯がないものが6点、あるものが1点である。そのうち立塚遺跡の遺物No.11に類似するものとして、突帯は無いが胴部の膨らみや高さ、頸部の径が近いものが1点、突帯があり口縁部が弱く内湾するものが1点確認できる。南に隣接する久保田牧遺跡においても出土しており、詳細は令和6年度刊行の報告書を参照されたい。

##### (4) その他遺物

遺物No.24の鉢は胴部外面がケズリ後回転ナデ、底部外面がケズリ調整を施すなど、土師器の坏に極めて技法が似ている。遺物No.26は用途不明であるが、外面は丁寧なミガキが施されており、紡錘車の可能性がある。いずれも色調や胎土、調整など在地の土器にみられないものであり、外部からの搬入品と考えられる。

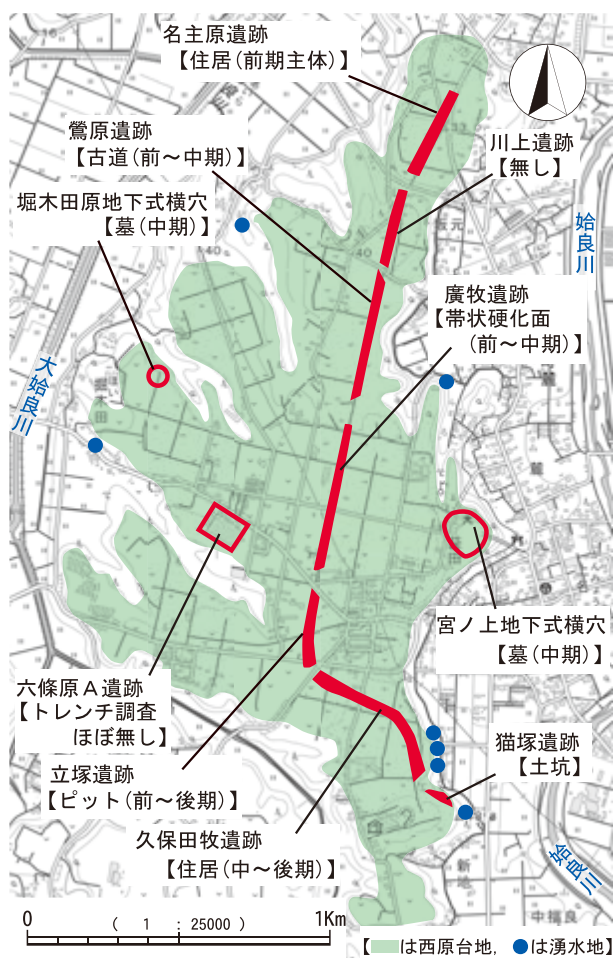
### 3 西原台地（立塚遺跡と同台地内）における様相

西原台地上に位置する遺跡は、近年発掘調査が進み、多くの成果が上がっている（第2章第2・3節参照）。それ以前の調査も含め、古墳時代における同台地上の様相について第76図にまとめた。前期を中心に、北側の名主原遺跡で大規模な集落が、その南の鶯原・廣牧遺跡では前期～中期頃に比定される古道が作られ往来に使われるようになり、台地の東西端部の掘木田原・宮ノ上では中期頃に地下式横穴墓が作られるなど墓域として利用された。立塚遺跡では前期～中期の遺物が多器種・複数出土しており、遺跡付近において居住等、何らかの利用があった可能性がある。

中期から後期頃は南の久保田牧遺跡で居住が行われるようになり、立塚遺跡はその縁辺部として何らかの利用がなされ、遺物が出土している。台地の利用は大観すると、居住の主体が名主原遺跡から久保田牧遺跡へと北から南へ移り、台地中央部では古道が作られ、低地や台地上での往来等に使われたようである。

台地上における居住地選択の理由として、名主原遺跡は標高が低く低地への傾斜がなだらかなため、河岸などの低地へ移動しやすいこと、東西に河川が位置し比較的近いこと、久保田牧遺跡は湧水帯が台地東側に豊富で距

離が近いなど（湧水位置は『町誌』参照）、共に水利の良さが集落の立地理由として考えられる。



第76図 西原台地における古墳時代調査部分と主な遺構・時期

## 第2節 古代

### 1 遺構の時期区分及び年代

古代と認定した遺構については、紫コラを埋土にもつものを中心に認定している。埋土内の紫コラは量や入り方に差があり、基本的に量が多いものが紫コラの降下前の構築で、量が少なくなるとつれ他の土との混合が進んで新しくなると考えられる。また、遺構の多くは畝間状遺構の下より検出されており、畝間状遺構は紫コラの量が少ないこと、地表から取り除いたと考えられる紫コラの塊を人為的に入れたピットが検出されていることから紫コラの降下後に紫コラを除去し、畝間状遺構を構築したと考えられる。また遺構の切り合い関係も加味して、「紫コラ降下の前後」「畝間状遺構の前後」を基準に4つの時期に分け、その概要や年代観、類例等について記述する。詳細は第19表及び第77・78図に記載している。

### (1) 遺構の4期区分

#### 1期：紫コラ降下前

埋土に紫コラが多く含まれており、紫コラの降下前には作られていたと考えられる遺構。ピット（柱穴）内には塊等で入るなど人為的に入れられたものや、中には自然堆積したとみられるものもある。古道の埋土は、コラ無しの埋土の上に紫コラが硬化して入っていることが多い。

#### 2期：紫コラ降下後～畝間状遺構構築前

紫コラの降下後に作られ、畝間状遺構が広がる、畝地化する前に作られた遺構。基本、地表から紫コラを除去したと考えられる時期であり、紫コラの量は1期より少なく、粒状で入る3期より多くなる。

#### 3期：畝間状遺構構築期

畝間状遺構及びほぼ同時期と考えられる遺構。埋土中の紫コラは粒状に入るなど、量が少ない。土坑（埋設土坑除く）に関しては、畝間状遺構と切り合いがほとんど無く、埋土中に紫コラがわずかであるなど畝間状遺構に近い時期と考えられることから、全て3期と判断している。

#### 4期：畝間状遺構後

畝間状遺構を切る遺構。基本、畝間状遺構の利用終了後の構築と考えられる。

### (2) 4期の概要

1期は土地利用が始まった頃から、紫コラの降下直後までである。掘立柱建物跡1・4・5号や古道など多くの遺構がみられ、調査範囲外にも遺構が広がると推測される。M区以東は遺物や遺構も少なく不明であるが、農地等として利用された可能性がある。なお遺物が集中する部分（第77図参照）は、掘立柱建物跡1号及び4・5号付近であるため、これらの遺構に伴うものと考えられ、多くの遺物は1期に該当すると思われる。

2期は紫コラの除去を行い、畝間状遺構が作られる直前までである。埋土より、掘立柱建物跡1号はしばらく残った後、掘立柱建物跡4・5号は紫コラ降下直後に柱を抜いて撤去したと考えられる。新たに掘立柱建物跡2・3号が作られており、周辺遺物が大変少ないことから、紫コラ除去のための短期間の居住であったと推測される。各古道には紫コラが硬化して残っており、紫コラ降下後もそのまま利用されたようだ。一部ピットもみられるが、活用の仕方は不明である。

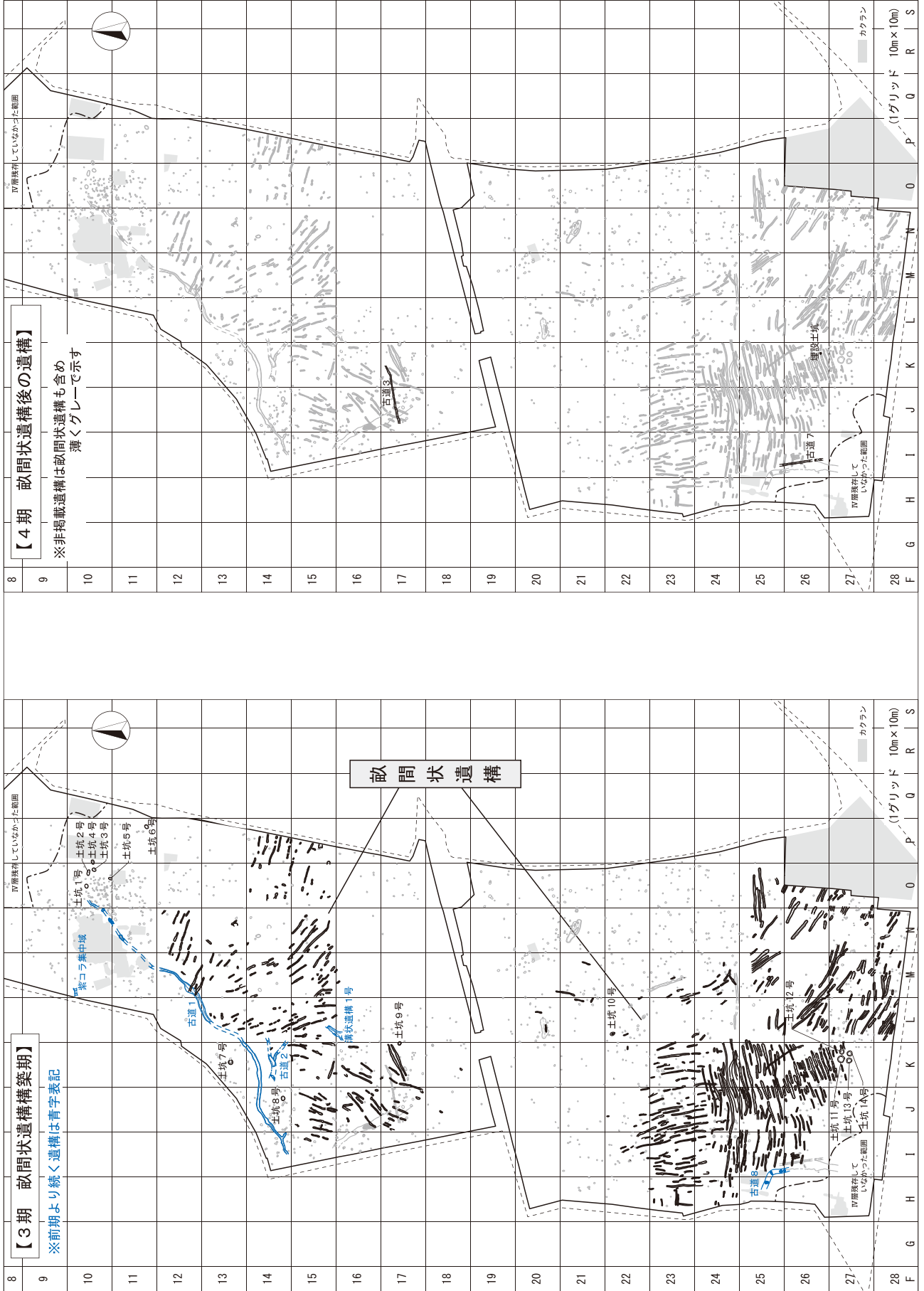
3期は紫コラの除去が終わり、畝間状遺構を構築した、一帯の多くが畝地化したと考えられる時期である。畝間状遺構は古道1と少し重なる部分がみられるが、古道1を挟んで反対の北西側には全くみられず、畝の区画境界として大部分は存続したと想定される。0・P-13区以北やM・0-16～20区付近は、畝間があったが上部の削平によって消滅した可能性がある。

第19表 古代遺構の推定時期

遺構	構築時期	終了時期	時期判断の理由	遺構内の紫コラ	備考及び遺構内遺物等
古道4	1期	1期中	掘立柱建物跡1号に切られており、それ以前。道としての機能を失った後、凹み部分に紫コラが入ったと考えられる。	紫コラ集中域にのみ多量。	
古道6	1期	1期中	古道7・8と畝間状遺構に切られており、それ以前。埋土に紫コラは無く、1期中に古道8など別な道へ作り替えられたと考えられる。	含まれず。	
掘立柱建物跡4・5号	1期	2期初頭	紫コラが埋土中に多く、紫コラ降下前に建築、降下後すぐに撤去したと考えられる。畝間状遺構の下より検出。	ブロックを多く含む。	土師器坏 (No.33) ※9c前半
ピット3・10号	1期	2期初頭	紫コラが層序を保った状態で埋土中に入る。紫コラ降下時、穴が空いており、すぐに埋まったと考えられる。	ピット中で1次堆積。	紫コラ降下時、穴の中で堆積。
ピット4・7・16・18・19・22号	1期?	2期初頭	紫コラが塊の状態では埋土中に入る。表土の紫コラを割り、入れたと考えられる。降下後に掘り込み、すぐに埋めた可能性もある。	層序(堆積順)を保った塊状で他の埋土と混入。	
ピット2・5・6・8・11～15・20・21号	1期?	2期初頭	紫コラが他の土と混合して入っている。量は多く、紫コラ降下からあまり時期を経ず埋めたと考えられる。構築時期は降下後の可能性もある。	層序は崩れているが、まとまった状態で入る。	住居の柱穴であった可能性がある。
ピット9・17号	1期?	2期初頭	紫コラが多く入る。自然堆積の可能性もある。量は多く、紫コラ降下からあまり時期を経ず埋めたと考えられる。構築時期は降下後の可能性もある。	埋土に多く入る。	
掘立柱建物跡1号	1期	2期中頃	住居範囲に土師器坏1類が出土していることから、8世紀後半から9世紀初頭に建築されたと考えられる。埋土のブロック量から、紫コラが降下した後、しばらく継続してから撤去したと考えられる。	柱穴部分にブロック等。掘立柱建物跡4・5号と比較し少ない。	土師器坏 (No.28) ※9c前半 土師器壺 (No.29・30・31) ※9c代
古道1	1期	3期	埋土において、硬化した紫コラ1次堆積土があり、紫コラが降下する前に作られていたと考えられる。畝間状遺構と重なりが無く、3期頃まで継続したと推測される。	1次堆積の硬化面あり。	
古道2	1期	3期	紫コラが硬化した状態で入っており、紫コラ降下時には作られていたと考えられる。畝間状遺構と重なりが無く、3期頃まで継続したと推測される。	多量に含む。	通路及び畝間状遺構の区切り(畝境)として3期頃まで利用されたと考えられる。
古道8	1期	3期	紫コラの1次堆積がみられることから、紫コラ降下前に作られたと考えられる。畝間状遺構に極めて近い重なりが無く、3期頃まで継続したと推測される。	1次堆積の硬化面あり。	
紫コラ集中域	1期	3期	紫コラを含まない埋土の上に、紫コラが厚く堆積しており、紫コラ降下前に作られたと考えられる。古道1とつながる道の可能性が高く、3期頃まで継続したと推測される。	埋土の上に紫コラが厚く堆積。	古道の可能性高い。
溝状遺構1号	1期	4期	紫コラ1次堆積の下に埋土があり、紫コラが降下する前に作られていたと考えられる。畝間状遺構と重なりが無いこと、紫コラの上部の埋土は黒色土で紫コラが含まれないことから、完全に埋まった時期は紫コラの撤去がほぼ終わった4期頃と推測される。	1次堆積含む。	畑や排水用として利用された可能性あり。
古道9	2期?	2期	畝間状遺構に切られており、2期頃と考えられる。構築時期は1期の可能性もある。	—	
溝状遺構2号	2期中	2期中	紫コラを混合した埋土中において、紫コラの量が少なく、コラ降下中には構築されていなかったと考えられる。畝間状遺構の下で検出されており、3期には埋まっていたと推定される。	少量含む。	
溝状遺構3号	2期中	2期中	溝状遺構2号と埋土が似ており、ほぼ同様の時期と考えられる。	含まない。	
ピット6号	2期	2期末	柱の抜き取り痕に紫コラが入っており、柱を埋めた時期は紫コラの降下後と判断される。紫コラの量は畝間状遺構より多く、3期前に埋まったと考えられる。	柱の抜き取り痕・柱痕跡の下・柱痕跡に入る。	住居の柱穴であった可能性がある。
掘立柱建物跡2・3号	2期	2期末	柱の抜き取り痕など、柱を入れる前の埋土及び柱痕跡に紫コラが含まれており、紫コラ降下前の構築と考えられる。畝間状遺構の下より検出されており、3期前に撤去されたと考えられる。	柱の抜き取り痕や柱痕跡に入る。量は少ない。	畝間状遺構調査後に検出。周辺遺物少ない。
土坑1～14号	3期頃	3期頃	紫コラの量が少ないものがほとんどで、畝間状遺構と前後するものはあるが、さほど時期差がないと判断される。	わずかに含むのが多数。	
畝間状遺構	3期	3期	多くの遺構の上より検出されている。埋土中に紫コラは少なく、紫コラの除去が進んでから作られたと考えられる。	少量含む。	土師器坏 (No.34) ※9c前半
埋設土坑	4期	不明	畝間状遺構を切っている。畝の利用時に一部を破壊し構築か、終了時に構築したと考えられる。	紫コラ含まず。	土師器壺 (No.35) ※9c前半
古道3	4期	不明	古道4及び畝間状遺構を切っている。終了時期は不明。	—	
古道7	4期	不明	古道6及び畝間状遺構を切っている。終了時期は不明だが、埋土に紫コラが含まれており、すぐに埋まった可能性もある。	粒子状で多く含む。	

※古道5は判別困難の為、未記載。





第78図 古代3・4期

4期は畝間状遺構の利用終了後であり、埋設土坑と古道2条が該当する。古道3・7は畝間状遺構と大きく重なり、畝間状遺構の利用が終了した後と判断されるが、埋設土坑は畝間状遺構とごく一部分の重なりであること及び遺物の年代観から、畝間状遺構と同時期の可能性がある。

### (3) 4期の年代

4つの期の年代についての案を第20表に示した。1期の土地利用の始まりが、出土した遺物より8世紀後半以降からで、活動が最も活発になったのは遺物量から9世紀前半であろう。そして終わりの紫コラの降下した年は、ここでは『日本三代実録』に記載されている貞観16年(874年)とする。紫コラを除去した2期は、紫コラの降下後から9世紀第4四半期頃、畝間状遺構が広がった3期は9世紀第4四半期～9世紀末頃、畝間状遺構後の4期については9世紀末～10世紀初頭頃とする。

3期の畝間状遺構の遺物は9世紀前半頃のものであるが、これは畝間状遺構の遺物は遺棄された古い遺物片が入ったと考えられる。4期の古道3・7に関しては、3期の終了後であること以外の判断は難しい。

### (4) 紫コラ降下の年代

現在、紫コラ降下の年代については『日本三代実録』に示された年代と、指宿市敷領遺跡の須恵器等との年代観や遺構内炭化物における年代測定結果との齟齬が課題となっており、近年では、西暦800年前後の可能性が指摘されている(柴畑2022)。

本遺跡においては、紫コラが降下する前の1期において作られた掘立柱建物跡1・4・5号に8世紀後半から9世紀中頃の多くの遺物が伴うことから、1期はこの頃と想定される。よって紫コラの降下を『日本三代実録』に示された874年と考えても齟齬は生じない。ただし、埋設土坑内の土師器甕(No.35)の年代は9世紀前半頃と考えられるが、埋設土坑の年代は4期の9世紀末～10世紀初頭頃と、遺構と遺物の年代が合わない。この場合、土師器甕は焼成前に付着した砂粒が残るなど、使用された痕跡が全く無く、祭祀用として作られたと考えられる

ことから、古くから長期間保管した後に埋設土坑に入れられたと考えることもできる。もしくは畝間状遺構の利用時に、畝のこの部分のみ埋設土坑として活用したと考ええると、3期頃となり、年代のズレは小さくなる。

本遺跡における紫コラの降下年代を西暦800年頃と想定すると、1期は8世紀後半、2期は9世紀初頭、3期は9世紀第1四半期、4期は9世紀第2四半期頃となり、9世紀中頃には遺跡の利用が終了したこととなる。この場合、埋設土坑の甕の年代観は正しくなるが、1期の多くの遺物の年代を8世紀後半内に収める必要がある。本遺跡の重要な課題であり、本稿では874年と考え記述していくが、今後における遺物の編年や紫コラ年代等の研究結果と照合し、再度検討を行っていく必要がある。

### (5) 他遺跡の類似例

古代における集落形成の過程について、本遺跡でみられた建物を除去して畝地を広げる行為は都城市の星原遺跡において類似がみられ、9世紀第3四半期から10世紀初頭に該当しており、時期も極めて近い。また都城盆地における集落形成は、8世紀後半以降に南九州各地に律令諸原則が適用される状況となり、開墾集落が出現し始め、9世紀中頃から10世紀前半にかけては役人等とのつながりが想定される富豪層によって開発が顕著となっていき、各集落が出現や消滅を繰り返し、10世紀後半になると自然環境の激変に対応できず、衰退・廃絶するとされる(柴畑2022)。

立塚遺跡は8世紀後半以降に集落が出現し、9世紀前半に繁栄、9世紀後半に自然災害を受け、そこから復旧を試み、10世紀初頭頃には消滅している。こうした過程は都城盆地の例と近く、立塚遺跡においても富豪層による開発など、同様であった可能性がある。

### (6) 自然災害の影響

自然環境の変化について、9世紀後半～11世紀初頭にかけて激しい気候変動が起こり、水害・干害などの気象災害が頻発したようである(中塚2024)。10世紀後半～11世紀になると、大隅地域においても遺跡数は極めて少なくなり、都城盆地も同様の傾向がうかがえる。こ

第20表 各期の年代案

	出来事	年代案	年代案の理由	備考
1期	土地利用の始まり	8世紀後半～	8世紀後半遺物の出土(少量)	
	土地利用の最盛期	9世紀前半～中頃	9世紀前半(9世紀代)遺物の出土(多量)	
	紫コラの降下	9世紀後半(西暦874年)	874年 開聞岳噴火(紫コラ降下)『日本三代実録』	
2期	紫コラの除去	9世紀第4四半期頃		
3期	畝間状遺構(畝)の構築	9世紀第4四半期～9世紀末頃	10世紀以降の遺物が無く、同地の利用終了が10世紀初頭頃と考えられることから、2期～4期を874年～10世紀初頭頃と推定。	畝間状遺構内の土師器坏は9世紀前半であるが、古いものが入ったと考えられる。
4期	畝間状遺構(畝)の後の遺構	9世紀末～10世紀初頭		

うした自然災害が、立塚遺跡も含めた南九州全体において10世紀後半に集落が衰退していった要因の一つと考えられる。

## 2 遺物

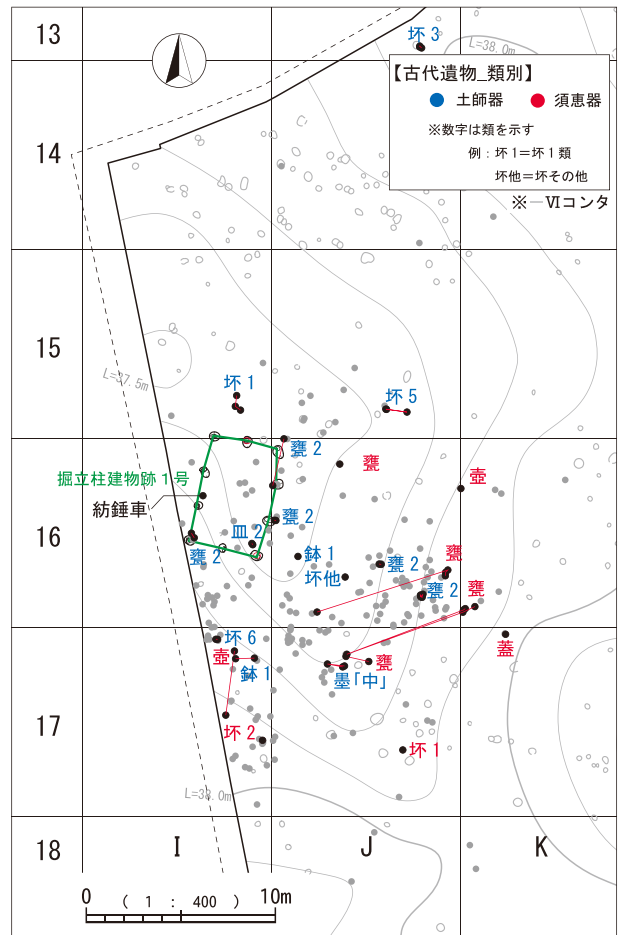
### (1) 墨書土器

墨書土器は4点出土しており、1点は蓋の上面、3点は坯の胴部外面に書かれている。解読できる文字は、蓋の「中」と坯1点の「四月」で、他2点は判別が困難であるが、「日」「田」及び「曾」の可能性があるのである。墨を入れた形跡がある坯は遺物No.73・99の2点であり、遺跡内で文字等の記入を行った可能性がある。隣接する久保田牧遺跡では17点出土しており、多くは「万か石」で、本遺跡と共通する文字が書かれた遺物は出土していない。

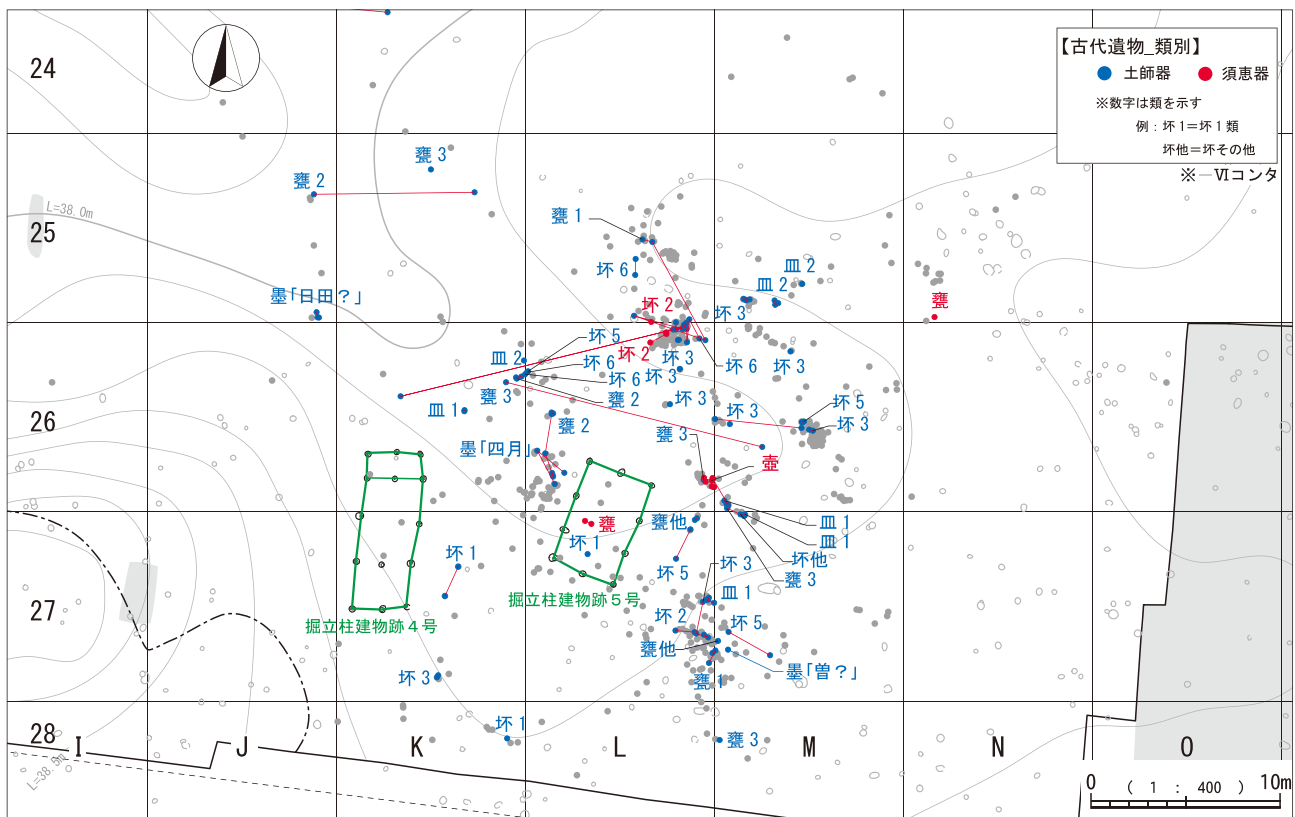
### (2) 掘立柱建物跡付近の出土遺物の位置関係

多くの遺物が集中して出土している掘立柱建物跡1号付近のI～K-15～17区及び掘立柱建物跡4・5号付近のI～N-25～28区の出土遺物を器種及び類別に第79図に示した（以下、掘立柱建物跡は○号で示す）。

1号付近においては、周辺には土師器類が多く、坯・甕・皿・鉢・紡錘車と器種も豊富である。墨書土器の蓋「中」もこの付近で出土している。4・5号付近においては、特に5号を囲むように集中して出土しており、器種も1号同様豊富である。墨書土器の「四月」「曾？」の2点の出土地点は5号に近く、それに伴うものと推測



※ ● は非掲載遺物、非掲載ピットはグレーで示している



第79図 建物跡付近の遺物分布・器種・類

される。どちらも土師器坏1類など8世紀後半頃から9世紀代にかけての遺物が出土していることなどから、建物跡及びその周辺は約1世紀程度の期間、存続したと考えられる。

なお、1・5号の周辺に遺物が集中しており、4号周辺には少ない。また建物全体の桁行・梁行及び形状・主軸方向について、1・5号は極めて近く、4号は比較的細長い形状で庇をもつなど、違いが大きい。よって1・5号と4号は性格が異なる建物であると考えられ、1・5号は住居、4号は居住を伴わない建物（倉庫等）である可能性がある。

### 3 畝間状遺構

#### (1) 畝の間隔・方向

畝の相互の間隔は場所により異なるが、残存度の良いK-26区付近を参考にすると10mあたり12条であり、平均して約80～90cmと推定される。南隣の久保田牧遺跡においても同遺構は多数検出されており、残存度の良い北端部分では約70～100cmであり、ほぼ同じである。畝の方角については、南北あるいは東西方向に近いものが増えており、遺跡南端部は東西方向に近いものが多い。久保田牧遺跡の北端の畝の方向は本遺跡南端部のものと近く、間の現道部分も含め、一連の畝であった可能性が高い。また北側の廣牧遺跡においても3か所から検出されている。

#### (2) 栽培作物

畝において栽培された作物を調べるため、畝間状遺構の畝部や畝間底部等の植物珪酸体分析を行っており（第5章第3節）、稲作が行われていた可能性が高いと判断されている。稲作は、年によっては不作や凶作の場合があるが、この地で作付けが行われた理由として、多雨時に始良川流域の低地で氾濫が発生し、収量が減少しても台地上では一定の収量が見込まれることから、低地での稲作を補完する関係であったと推測される。

なお、南側に隣接する久保田牧遺跡の畝間状遺構においても稲作の可能性が指摘されており、台地上における同時代の主な栽培作物は稲であったと考えられる。

### 4 古代における西原台地上の様相

古代において、立塚遺跡が位置する西原台地上がどのように利用されたか、報告書が刊行されている鶯原遺跡以南の遺跡における古代遺構について、古道・畝間状遺構・掘立柱建物跡の位置を第80図中に示した。なお、廣牧遺跡に関しては、古代以降として取り扱った遺構については古代か中世か不明である。しかし、廣牧遺跡の位置する台地上の遺跡で検出された畝間状遺構は古代であることから、ここでも古代の以降として扱う。

西原台地上を利用の仕方によって、3つのエリアに分けた。1つめが久保田牧遺跡の南側である。この地は低地との境の湧水地が近く、水を得やすい上、湧水地付近に水田を作りやすいこと（第2章第1節参照）、始良川が比較的近い（河川改修前の明治期でも距離は大きな変化なし。第2図参照）、水運の利用や漁労も行いやすいこと（久保田牧遺跡では土錘が多数出土）、建物跡が集中しており、収穫した作物を集め、保管する「倉」と想定できる大型の掘立柱建物跡も検出されていることなどから、この地が台地の中心となるエリアと考えられる。2つめが中心となるエリアから約800m北西側付近までの範囲である。主に畝間状遺構や掘立柱建物跡が検出されているエリアで、畝間状遺構が検出されている北限付近が境と推定される。広く農地として耕作し、耕作者が近隣に建物を作って居住したと推測される。3つめが農地エリアの北西側である。古道跡のみの検出で、畝間状遺構や建物跡がみられないエリアである。廣牧遺跡北側及び鶯原遺跡が該当するこの部分では古代の出土遺物は少なく、中心地から距離があるため、土地利用がなされなかったと推測される。

同台地上においては、水利など地理的条件が良い久保田牧遺跡南側に多くの建物や倉を作り、その地を中心に農地（畠）を広げ、耕作者が近くに居住したと想定される。立塚遺跡付近は農地エリアとして活用されており、8世紀後半頃から利用が開始され、農地やそれに伴う建物が増加していったと推測される。終焉は9世紀末～10世紀初頭頃と考えられ、久保田牧遺跡や廣牧遺跡でも遺物の年代観に大きな違いはみられず、古代における台地上の利用は、10世紀初頭には終了したと考えられる。

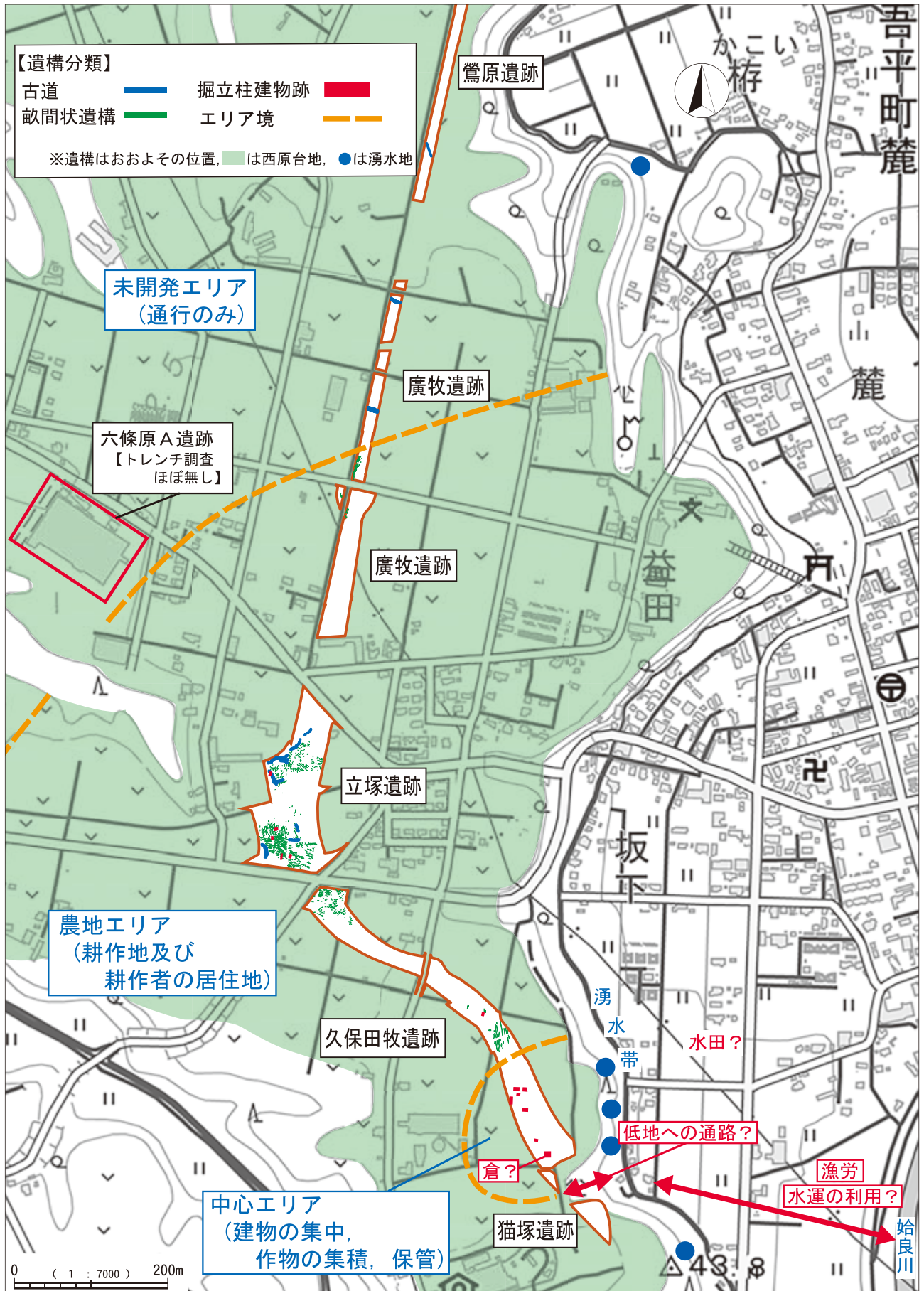
その後について、立塚遺跡では中世の遺物はほぼ出土していない。上位層が削平を受けており、存在した可能性もあるが、攪乱部分でも出土していないことから、同遺跡内では中世において、土地の利用はなされなかったと考えられる。久保田牧遺跡の南側においては、中世の建物跡や遺物が多数出土しており、前述のとおり利便性の高い場所であるため、中世においても利用されたようである。

### 第3節 近世

#### 1 遺構

近世の遺構は検出できなかったが、上位層が大きく削平を受けていること、遺物の中に瓦片が含まれること、碗や鉢・甕など、生活に関連する遺物が出土することから、住居が存在した可能性が高い。その位置は第58図に示したように、遺物が多く出土した3か所付近と推定される。

吾平町における台地上の開発は、第2章第2節で記述したように藩政時代より行われており、麓の郷土を中心



第 80 図 古代における西原台地の利用

として畑地の開拓が行われた。肥料等の運搬の困難さから、台地上では低地からの道路に近い部分の開発が早かったようである。立塚遺跡周辺は麓地区に極めて近いため、藩政時代においても早くから開発が行われたと考えられる。開発の労力として、藩内でも多くの人の移動があったようである。遺跡付近には開発に携わった人々の住居があったと推定され、時期は遺物年代より、17世紀後半から19世紀前半頃と考えられる。

## 2 遺物

薩摩焼では苗代川系の甕や土瓶・鉢、龍門司系の碗などが、肥前系では碗が出土している。東南アジア等の可能性がある陶器も一部みられるが、一般的な庶民の道具の様相を呈す。総数は他時代も含め、第21表に記載している。

## 参考文献

吾平町教育委員会

1989『六篠原A遺跡』(6)

1990『名主原遺跡・荷掛原遺跡』(7)

2008『名主原遺跡』(84)

吾平町誌編纂委員会1911『吾平町誌上巻・下巻』

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2022『川上遺跡・鶯原遺跡・猫塚遺跡』(213)

2023『久保田牧遺跡1』(221)

2024『廣牧遺跡』(223)

都城市教育委員会

2006『星原遺跡』(72)

下山寛2000「九州地方のはたけ研究の現状と課題」日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集第1集

栗畑光博2022「都城盆地における8世紀後半から10世紀の集落動態とその背景」国立歴史民俗博物館研究報告232

栗畑光博2022「南九州における火山災害史研究の諸問題」第1回日本災害・防災考古学会研究会資料

松崎大嗣2018「開聞岳貞観噴火による火山災害とその後」『隼人文化研究会第500回記念例会資料集』

松崎大嗣・大西智和・中村直2024「日本三代実録に記載された開聞岳噴火についての課題」2024年度 鹿児島県考古学会資料

中塚武2024「律令制の成立と解体の背景としての気候変動」

『シリーズ古代史をひらくⅡ『天変地異と病-災害とどう向き合ったのか』

第21表 出土遺物累計

### 古墳時代

分類	器種	分類	掲載数	非掲載数	計
土器	甕	脚有	9	0	9
土器	甕	丸底	4	0	4
土器	甕か壺	—	1	72	73
土器	高坏	—	6	0	6
土器	蓋	—	2	0	2
土器	鉢	—	3	1	4
土器	壺	—	1	0	1
土器	不明	—	1	0	1
総計			27	73	100

### 古代

分類	器種	分類	掲載数	非掲載数	計
土師器	坏	1類	6	—	6
土師器	坏	2類	1	—	1
土師器	坏	3類	14	—	14
土師器	坏	4類	3	—	3
土師器	坏	5類	14	—	14
土師器	坏	6類	7	—	7
土師器	坏	不明	11	186	197
土師器	椀	—	1	0	1
土師器	坏か椀	—	—	443	443
土師器	皿	1類	4	20	24
土師器	皿	2類	5	1	6
土師器	皿	不明	2	0	2
土師器	黒色土器	—	2	1	3
土師器	墨書土器	—	4	0	4
土師器	甕	1類	2	9	11
土師器	甕	2類	9	18	27
土師器	甕	3類	6	17	23
土師器	甕	不明	4	783	787
土師器	鉢	1類	2	4	6
土師器	鉢	2類	2	1	3
土師器	紡錘車	—	2	0	2
須恵器	坏	1類	3	7	10
須恵器	坏	2類	3	2	5
須恵器	坏	不明	2	24	26
須恵器	蓋	—	2	2	4
須恵器	甕	—	7	37	44
須恵器	壺	—	8	18	26
石器	石鏃	縄文時代	1	0	1
総計			127	1573	1700

### 近世

分類	分類		掲載数	非掲載数	計
陶器	薩摩焼	苗代川系	3	79	82
陶器	薩摩焼	龍門司系	2	8	10
陶磁器	肥前系	—	4	5	9
陶磁器等	その他(不明)	—	3	4	7
陶器	摺鉢	—	0	21	21
瓦	平瓦	—	0	27	27
総計			12	144	156

# 写 真 图 版

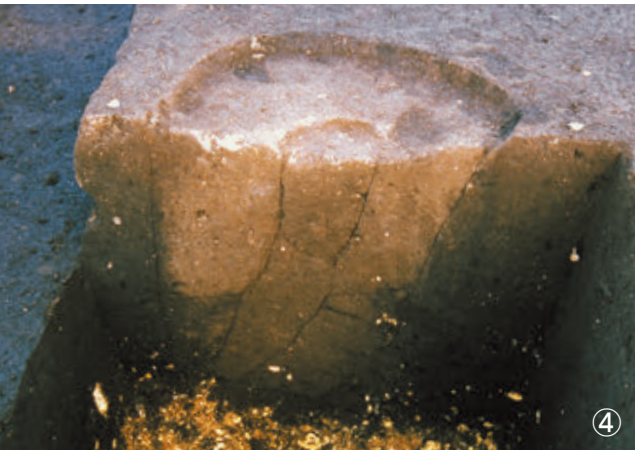




①ピット1号 遺物出土状況及び埋土 ②ピット1号 完掘 ③甕 (No.2) 出土状況  
④甕 (No.11) 出土状況 ⑤鉢 (No.24) 出土状況



①完掘 西から ②P 2埋土断面 ③P 3内遺物出土 (No.28) ④P 4埋土断面 ⑤P 6埋土断面



①検出 北から ②P 4埋土断面 ③P 5埋土断面 ④P 6埋土断面 ⑤P 9埋土断面



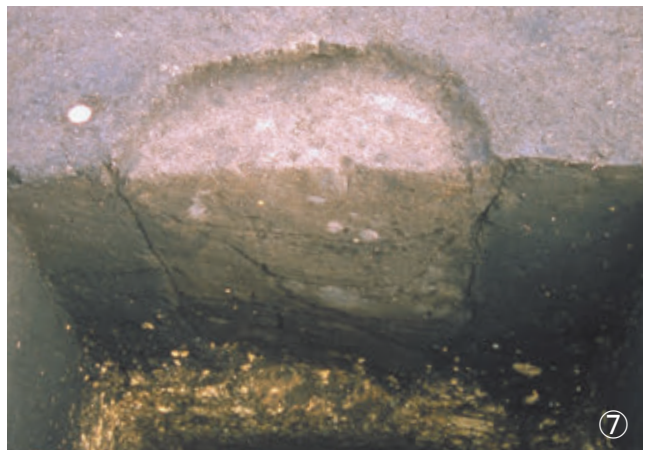
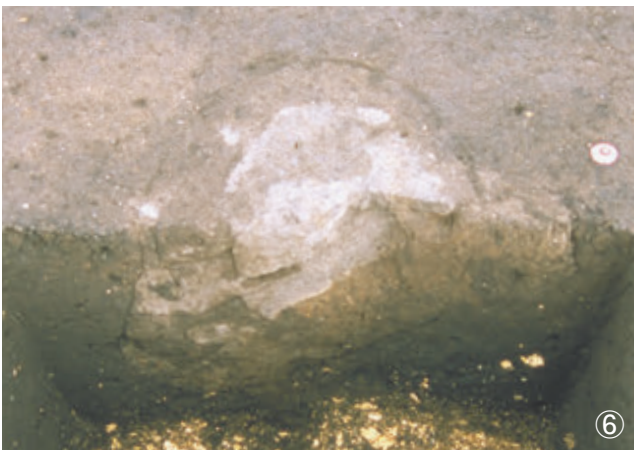
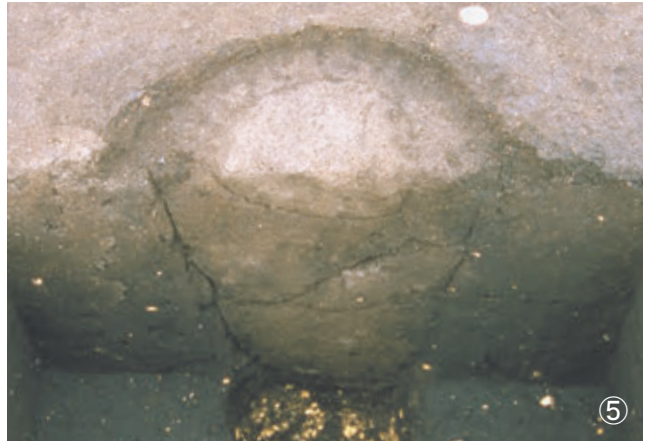
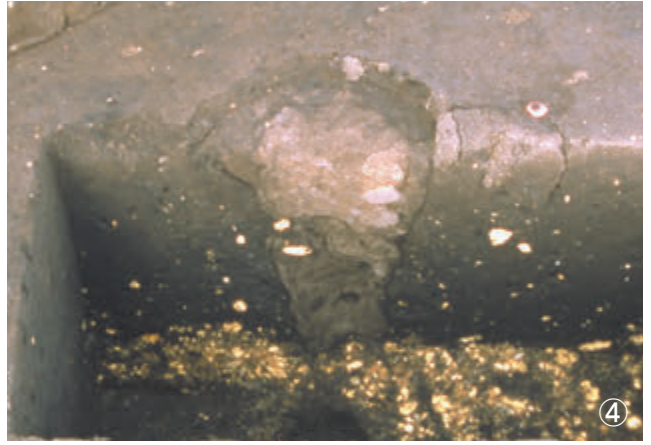
①検出 西から ②P 1埋土断面 ③P 3埋土断面 ④P 6埋土断面 ⑤P 8埋土断面



①完掘 北から ②P 2埋土断面 ③P 4埋土断面 ④P 5埋土断面  
⑤P 8遺物出土状況 (No.33) ⑥P 11埋土断面 ⑦P 12遺物出土状況 (No.33)

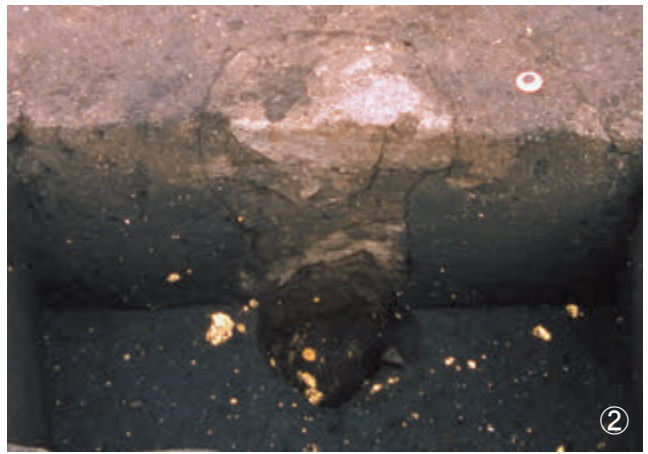


①検出 北から ②完掘 北から ③P3埋土断面 ④P6埋土断面

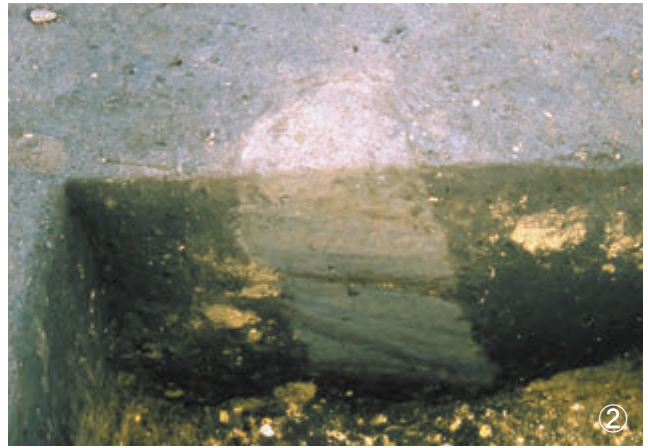


①ピット2号 ②ピット3号 ③ピット4号 ④ピット5号 ⑤ピット6号 ⑥ピット7号 ⑦ピット8号

図版8 古代ピット(埋土断面)



①ピット9号 ②ピット10号 ③ピット14号 ④ピット16号 ⑤ピット15号 ⑥ピット18号 ⑦ピット19号



①ピット21号 ②ピット22号 ③土坑1号半掘 ④土坑2号半掘 ⑤土坑3号半掘 ⑥土坑4号半掘  
⑦土坑5号検出 ⑧土坑6号検出

图版10  
古代  
土坑7、14号



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

①土坑7号半掘 ②土坑8号完掘 ③土坑10号半掘 ④土坑10号完掘 ⑤土坑11号完掘 ⑥土坑12号完掘  
⑦土坑13号半掘 ⑧土坑14号半掘



①



②



③



④



⑤

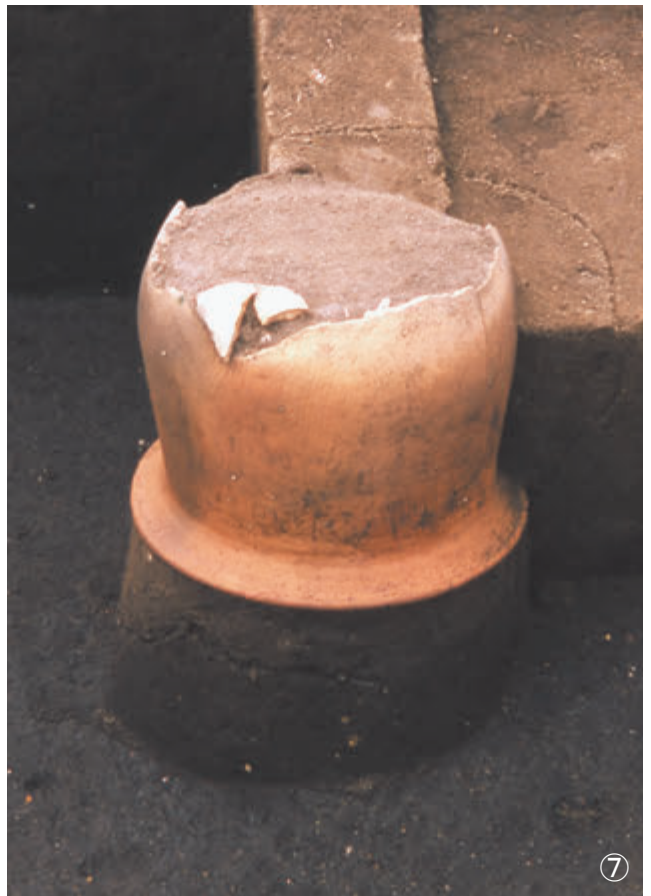


⑥

①古道1 M-12区 埋土断面 ②古道1 0-10区 紫コラ堆積状況 南西から ③古道1 L・M-12・13区完掘 北から  
④古道1 K・J-14区完掘 北東から ⑤古道2 検出 東から ⑥古道2 完掘 西から



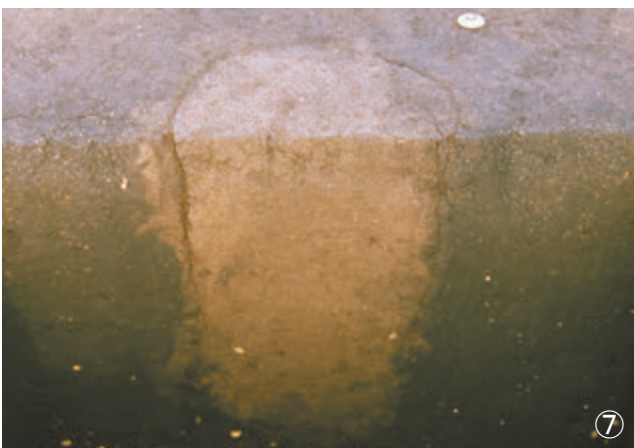
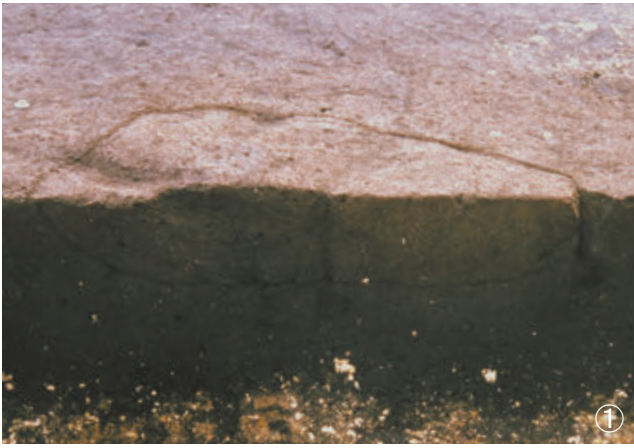
①古道5検出 北から ②古道9検出 西から ③古道9完掘 西から ④古道6～8 検出 南から ⑤古道8 完掘 南から



①紫コラ集中域検出 ②溝状遺構1号埋土断面 ③溝状遺構2号検出 ④溝状遺構3号検出 西から  
⑤溝状遺構3号埋土断面 東から ⑥溝状遺構3号完掘 東から ⑦埋設土坑 遺物検出(No.35)



① H～K-22～24区（イ区） 検出状況 南から ② J-23区付近 完掘 南から ③ 埋土断面 拡大  
④ 25区以南（ハ・ニ区） 検出状況

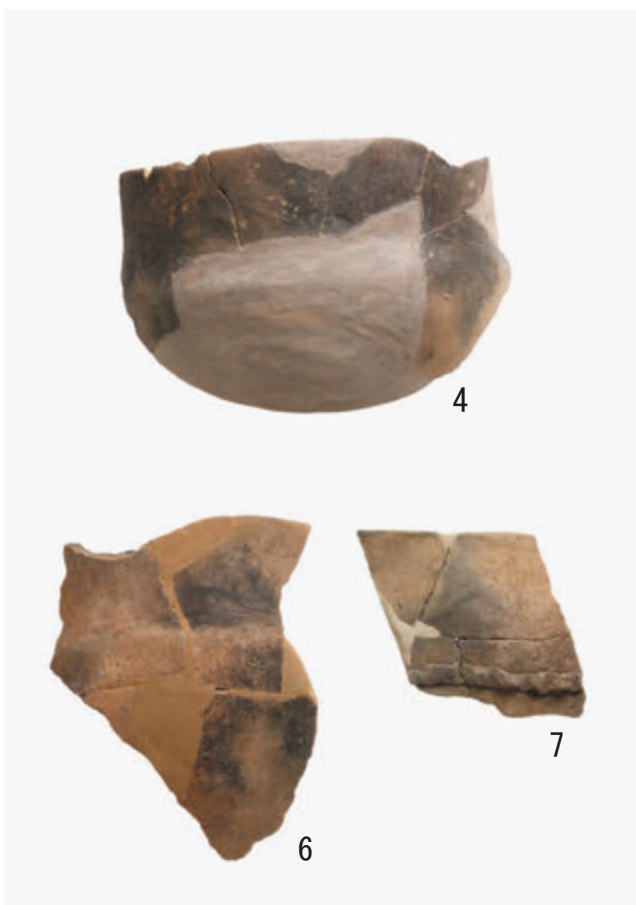


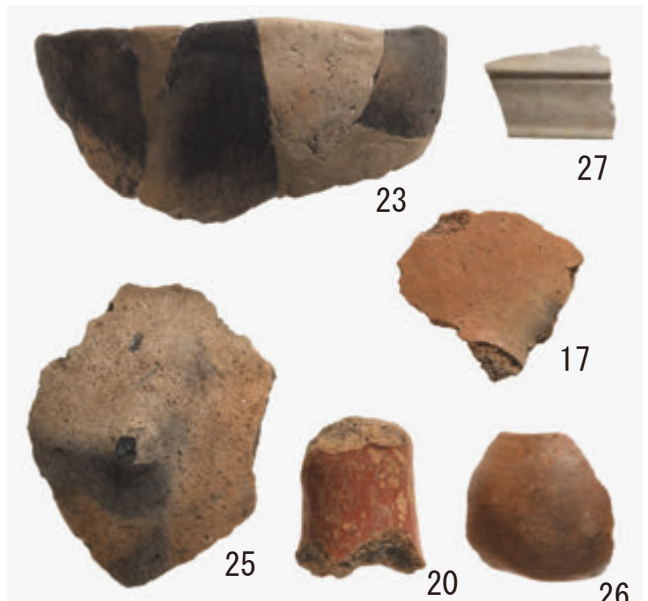
①土坑15号検出 ②土坑16号完掘 ③土坑17号半掘 ④土坑18号半掘 ⑤土坑19号半掘  
⑥ピット23号 埋土断面 ⑦ピット24号 埋土断面 ⑧ピット25号 完掘



図版17 古墳時代の遺物（甕）







圖版20 古代 遺構內遺物



30



31



28



33



29



32



34



35



35



36





50



52



53



54



56



57



58



59



61



63



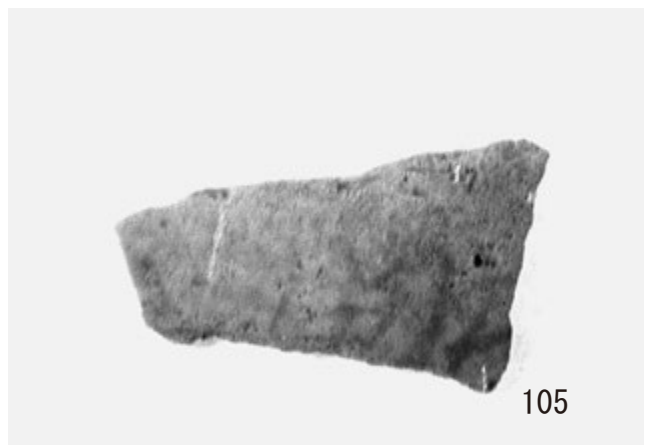
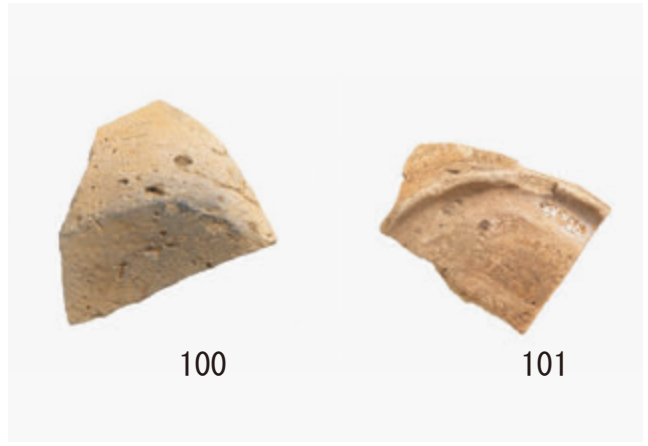
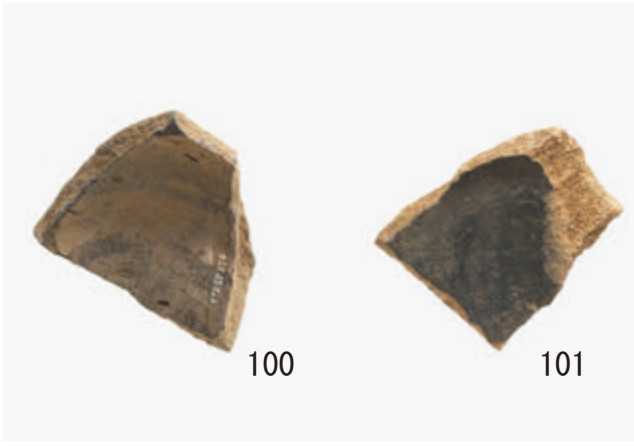
64



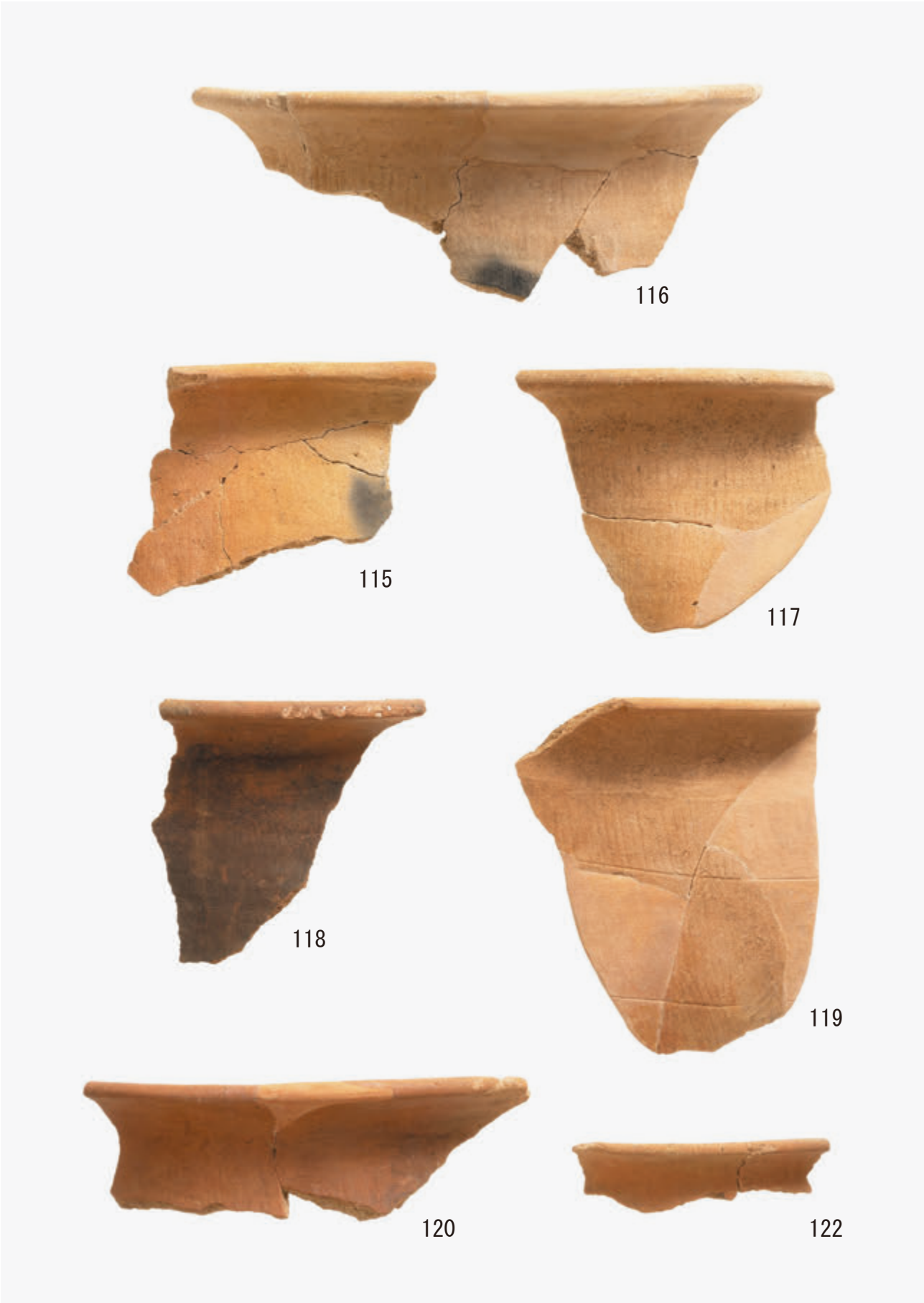
65













121



123



125



124



127



126



128



129









155



156



157



158



166



159



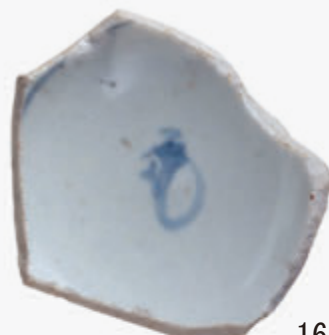
165



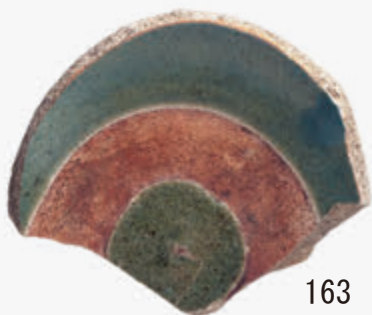
161



160



162



163



164



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（228）  
主要地方道鹿屋吾平佐多線（吾平道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

# 立塚遺跡 2

## 古墳時代以降編

発行年月 2025年2月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811 FAX 0995-58-5821

印刷 株式会社 あすなろ印刷

〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36

TEL 099-214-3757 FAX 099-214-3758





鹿児島県